新潟県埋蔵文化財調査報告書　第154集

一般国道253号

上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅲ

三 角 田 遺 跡

２００６

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道253号

上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅲ

三角田（みつまた）遺跡

２００６

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

上越三和道路は、上越市と上越市三和区（旧三和村）を結ぶ地域高規格道路（自動車専用道路）で、上越市から南魚沼市に至る延長約60kmの一般国道253号上越魚沼地域振興快速道路の一部です。この地域高規格道路は、地域の活性化と他地域との交流を促進することを目的として建設される道路です。上越地域においては、高規格幹線道路である北陸自動車道と併せ、信頼度のある循環型ネットワークの形成を目指し、経済・文化の交流と発展が促進されるものと期待されています。

本書は、この上越三和道路建設に先立ち、平成16年度に実施した三角田遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、2枚の生活面が検出されました。下層からは奈良時代前半、上層からは奈良時代後半・平安時代から中世の遺跡が発見されました。下層遺跡には、洪水層に覆われて遺構が良好に残っており、奈良時代前半の掘立柱建物を中心とする集落跡を調査しました。また、上層の調査では、大規模な奈良時代後半の畑跡、平安時代・中世の建物跡や井戸跡など古代から中世の遺構・遺物を確認しました。このように三角田遺跡では、奈良時代から中世に至る遺構・遺物が発見され、この場所が奈良時代以降、継続的に人々によって利用されてきたことがわかりました。

今回の調査成果が、地域の歴史を解明するための研究資料として広く活用されるとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な御協力と御援助を賜った上越市教育委員会、並びに地元の方々、また、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別の御高配を賜った国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所に対し厚く御礼申し上げます。

平成18年3月

新潟県教育委員会

教育長　武藤　克己

例　　言

1　本報告書は、新潟県上越市下野田字三角田161－1ほかに所在する三角田遺跡の発掘調査記録である。

2　本書は、上越三和道路の建設に伴い、国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所（以下「国交省」）から新潟県教育委員会（以下、「県教委」）が受託したもので、発掘調査は調査主体である県教委が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」）に委託し、平成16年4月14日から12月17日に実施した。また、整理作業・報告書作成に係わる作業は、平成16年12月16日から平成17年3月31日の間に株式会社吉田建設整理棟で埋文事業団が行った。

3　出土遺物および調査・整理・自然科学分析に係わる各種資料データ類は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。

4　遺物の注記は三角田遺跡の略記号「三マタ」とし、出土地点や層位を続けて記した。

5　本書の図中で示す方位は、すべて真北である。ただし、ここでいう「真北」は、日本平面国家座標のＸ軸方向を示す。

6　報告書掲載遺物は掲載順に通し番号を付した。本文および観察表・図面図版・写真図版の番号は一致させた。

7　引用文献は著者および発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。

8　調査成果の一部は現地説明会（平成16年10月2日）、遺跡発掘調査報告会（平成17年3月6日）などで公表しているが、本報告書の記述をもって正式な報告とする。

9　本文中の敬称は省略した。

10　本報告書の作成にあたり、航空写真撮影・遺構の図化・自然科学分析は、以下の機関に委託した。

航空写真撮影……株式会社イビソク

遺構の図化……有限会社東北測量設計社

自然科学分析……株式会社パリノ・サーヴェイ

11　遺構図のトレースおよび各種図版作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託した。遺物写真撮影はデジタルカメラ（ニコンD100）で撮影し、デジタル化した遺構写真と合わせて編集した。なお、図版作成・編集作業に係わり、支給した資料は以下のとおりである。

本文・挿図：テキスト形式・Excel形式のデータ、トレース原図・貼り込み版下

遺構図面図版：トレース図（個別）・拓影・レイアウト図

写真図版：デジタルデータ（CD）・レイアウト図

12　本報告書の執筆は、沢田　敦（埋文事業団調査課 班長）、大島通夫（埋文事業団調査課　主任調査員）、小菅敏彦（埋文事業団調査課　主任調査員）、奥村伸男（埋文事業団調査課　主任調査員）、田中一穂（埋文事業団調査課嘱託員）、細井佳浩（株式会社吉田建設埋蔵文化財調査部　調査員）、矢部英生（株式会社吉田建設埋蔵文化財調査部）がこれにあたり、編集は沢田が担当した。執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅰ章2B、第Ⅲ章・第Ⅳ章1A・B、第Ⅴ章1A・B・2、第Ⅶ章2・3…沢田

第Ⅰ章1・2A・C、第Ⅱ章2、第Ⅳ章1C…大島　　第Ⅱ章1、第Ⅴ章2B1）・2）珠洲焼・土師質土器…矢部　第Ⅳ章1C・2、第Ⅶ章1…細井　　第Ⅴ章1B…小菅・奥村　　第Ⅵ章…株式会社パリノ・サーヴェイ　　第Ⅶ章1C…田中一穂

13　発掘調査から本報告書の作成に至るまで、下記の方々および機関から多くのご教示・ご協力を賜った。ここに記して厚くお礼申し上げる。

相羽重徳　　大平理恵　　小島幸雄　　笹澤正史　　舘野和己　　鶴巻康志　　平川　南　　水沢幸一

野村忠司　　吉井雅勇　　吉川俊久　　山田昌久　　国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所

上越市教育委員会

目　　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査と整理作業 …… 1

A　試掘確認調査 …… 1

B　本発掘調査 …… 2

C　調 査 体 制 …… 3

D　整 理 作 業 …… 4

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 5

1　遺跡周辺の地理的環境 …… 5

2　歴史的環境 …… 6

A　周辺の遺跡 …… 6

第Ⅲ章　調査の概要 …… 10

1　グリッドの設定 …… 10

2　基 本 層 序 …… 10

第Ⅳ章　C区下層の調査 …… 12

1　遺　　構 …… 12

A　遺構の概要 …… 12

B　記 述 方 法 …… 12

C　各　　説 …… 13

2　遺　　物 …… 19

A　土　　器 …… 19

B　石　製　品 …… 26

C　木　製　品 …… 26

D　掘立柱建物部材 …… 27

第Ⅴ章　上層の調査 …… 28

1　遺　　構 …… 28

A　概　　要 …… 28

B　各　　説 …… 28

2　遺　　物 …… 37

A　古代の土器 …… 37

B　中世の土器 …… 42

C　木　製　品 …… 44

D　金 属 製 品 …… 45

E　掘立柱建物部材 …… 45

第Ⅵ章　自然科学分析 …… 46

1　はじめに …… 46

2　試　　料 …… 46
A　古環境変遷 …… 46
B　植物資源利用 …… 46
C　栽培植物 …… 47

3　分析方法 …… 47
A　珪藻分析 …… 47
B　花粉分析 …… 47
C　植物珪酸体分析 …… 48
D　種実同定 …… 48
E　樹種同定 …… 48

4　結　　果 …… 48
A　珪藻分析 …… 48
B　花粉分析 …… 49
C　植物珪酸体分析 …… 52
D　種実同定 …… 53
E　樹種同定 …… 54

5　考　　察 …… 57
A　堆積環境 …… 57
B　古植生 …… 57
C　植物資源利用 …… 59
D　栽培植物の検討 …… 60

第Ⅶ章　ま　と　め …… 63

1　C区下層の調査 …… 63
A　出土土器の編年 …… 63
B　集落の構造と変遷 …… 65
C　SB5出土木簡について …… 67

2　上層の調査 …… 71
A　出土遺物からみた遺構の時期について …… 71

3　総　　括 …… 73
A　C区下層遺跡 …… 73
B　上層遺跡 …… 73

《要　　約》 …… 75

《引用・参考文献》 …… 76

《観　察　表》 …… 79

挿図目次

第１図　試掘調査トレンチ位置図 ……2
第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡 ……7
第３図　グリッド設定および土層柱状図 ……11
第４図　遺構の平面形態と断面形態の分類 ……13
第５図　遺構埋土の堆積形状の分類 ……13
第６図　古代の土器分類図 ……21
第７図　C区下層出土土器分布図 ……23
第８図　主要珪藻化石群集の層位分布 ……49
第９図　産出した珪藻化石の顕微鏡写真 ……49
第10図　主要花粉の層位分布 ……51
第11図　産出した花粉化石の顕微鏡写真 ……52
第12図　植物珪酸体群集の層位分布と珪化組織片の産状 ……52
第13図　産出した植物珪酸体の顕微鏡写真 ……53
第14図　主要樹種同定試料の顕微鏡写真 ……56
第15図　主要樹種・種実同定試料の顕微鏡写真 …56
第16図　C区下層の土器編年表 ……64

表　目　次

第１表　周辺の遺跡 ……6
第２表　C区下層出土須恵器・土師器グリッド別重量 ……23
第３表　珪藻分析結果 ……50
第４表　花粉分析結果 ……51
第５表　植物珪酸体分析結果 ……53
第６表　種実同定結果 ……54
第７表　樹種同定結果 ……55
第８表　器種別樹種別構成表 ……56
第９表　C区下層出土土器口縁部残存率計測表 …63
第10表　編年対照表 ……66

図版目次

【図面図版】

図版１　遺構全体配置図
図版２　遺構分割図１
図版３　遺構分割図１土層断面図
図版４　遺構分割図２
図版５　遺構分割図２土層断面図１
図版６　遺構分割図２土層断面図２
図版７　遺構個別図１
図版８　遺構個別図２
図版９　遺構個別図３
図版10　遺構個別図４
図版11　遺構個別図５
図版12　遺構個別図６
図版13　遺構個別図７
図版14　遺構個別図８
図版15　遺構個別図９
図版16　遺構分割図３
図版17　遺構分割図３土層断面図
図版18　遺構分割図４
図版19　遺構分割図４土層断面図
図版20　遺構分割図５
図版21　遺構分割図５土層断面図
図版22　遺構分割図６
図版23　遺構分割図６土層断面図
図版24　遺構分割図７
図版25　遺構分割図７土層断面図
図版26　遺構分割図８
図版27　遺構分割図８土層断面図
図版28　遺構分割図９
図版29　遺構分割図９土層断面図
図版30　遺構分割図10
図版31　遺構個別図10
図版32　遺構個別図11
図版33　遺構個別図12
図版34　遺構個別図13
図版35　遺構個別図14
図版36　遺構個別図15
図版37　遺構個別図16
図版38　遺構個別図17
図版39　SD53追加調査平面図・土層断面図
図版40　C区下層出土土器１
図版41　C区下層出土土器２
図版42　C区下層出土土器３
図版43　C区下層出土土器４
図版44　C区下層出土石製品・木製品１
図版45　C区下層出土木製品２
図版46　C区下層出土木製品３
図版47　C区下層出土木製品４

図版48　上層出土土器1
図版49　上層出土土器2
図版50　上層出土土器3
図版51　上層出土土器4
図版52　上層出土土器5
図版53　上層出土土器6
図版54　上層出土土器7
図版55　上層出土土器8・木製品・金属製品

【写真図版】

図版56　調査区全景、C区下層遺構全景、C区25B杭基本層序、B区畑跡土層断面SD261・SD469・16CP10
図版57　調査区全景
図版58　C区下層掘立柱建物跡SB3・SB4全景、SB4完掘
図版59　C区下層SB3・SB4全景、C区下層SB5・SB6全景
図版60　B区全景、B区畑跡3全景
図版61　SB3完掘、SB3・SK631・SB4完掘、SB3・24CP1土層断面、SB3・25CP12土層断面、SB3・25CP25土層断面、SB3・24CP40土層断面、SB3・24CP41土層断面、SB3・25CP26土層断面
図版62　SB4・SC91・SC92検出状況、SC91遺物出土状況、SB4・26BP7土層断面、SB4・26CP4・P8土層断面、SB4・25BP6土層断面、SB4・26CP6土層断面、SB4・26BP4完掘、SB4・26BP6完掘
図版63　SB5完掘、SB6完掘、SB5・P3土層断面、SB5・P4土層断面、SB5・P6土層断面、SB6・25FP1土層断面、SD117遺物出土状況、SB5・P1木簡出土状況
図版64　24・25Dグリッド柱穴群完掘、24DP11土層断面、24DP12・P13土層断面、24DP4土層断面、24DP6土層断面、SD170土層断面、SC49遺物出土状況
図版65　SC119遺物出土状況、SC93遺物出土状況、SD113完掘、SD113土層断面、SD113遺物出土状況、SD113土器出土状況、SD113槽出土状況、SD113上面鎌柄出土状況
図版66　SD615完掘、SD614完掘、畑跡1完掘、畑跡2完掘、SC95遺物出土状況、SC94遺物出土状況、SD170遺物出土状況、SK631完掘
図版67　SK118完掘、SC90検出状況、SC90土層断面、SC120検出状況、調査風景、C区上層全景、C区上層25CP1完掘、C区上層SD1完掘
図版68　SB1完掘、SB1・12CP3土層断面、SB1・12CP4土層断面、SB1・13CP4土層断面、SB1・13CP9土層断面、SB1・13CP10土層断面、SB7完掘、SB7・9BP8完掘、
図版69　SB7・10BP1検出状況、SB7・10BP1土層断面、SB7・9AP1検出状況、SB7・9BP5土層断面、SB7・9BP15完掘、SB7・9BP9土層断面、SB1・SB2・SB8・SB9完掘、SB2完掘
図版70　SB2・13CP22土層断面、SB2・13CP41土層断面、SB2・13CP41完掘、SB2・13CP43土層断面、SB2・13DP4土層断面、SB8完掘、SB8・13CP40検出状況、SB8・13CP40土層断面
図版71　B区畑跡3完掘、B区畑跡3検出状況、B区畑跡3・SD279・281・287・290・Dライン土層断面、SK22土層断面、SK37土層断面、SK29土層断面、SK29完掘
図版72　SK30土層断面、SK30完掘、SK47土層断面、SK47完掘、SK54土層断面、SK54完掘、SK55土層断面、SK55完掘
図版73　SK56土層断面、SK56完掘、SK553土層断面北半、SK553土層断面南半、SK554土層断面、SK553・SK554完掘、SK44土層断面、SK44完掘
図版74　SK45土層断面、SK45完掘、SK71土層断面、SK71完掘、SK47・1～3層遺物出土状況、SK553・SK554遺物出土状況、SK554遺物出土状況、SK483遺物出土状況
図版75　SD6・SD13完掘、SD13北ベルト土層断面、B区8・9列完掘、SD68土層断面、SD18完掘、河川跡1T岸検出、河川跡2T岸検出、河川跡4T土層断面
図版76　SD58完掘、SD58・SD61土層断面、SD58椀出土状況、A区完掘、B区調査風景
図版77　下層出土土器1
図版78　下層出土土器2
図版79　下層出土土器3・石製品
図版80　下層出土木製品1
図版81　下層出土木製品2
図版82　上層出土土器1
図版83　上層出土土器2
図版84　上層出土土器3
図版85　上層出土土器4・金属製品・木製品

第1章　序　　説

1　調査に至る経緯

上越三和道路は、上越魚沼地域振興快速道路（一般国道253号）の一部区間を構成する上越市寺から上越市三和区（旧三和村）本郷に至る延長約7.4km区間を指す。上越地方拠点都市の連携強化を図り、地域の活性化を促進することを目的として計画され、平成10（1998）年12月に整備区間として国土交通省の指定を受けた。また、上越魚沼地域振興快速道路（一般国道253号）は、現国道253号の南側をほぼ平行して走り、上越市と南魚沼市（旧六日町）を結ぶ延長約60kmの自動車専用の地域高規格道路として計画され、完成すれば上越地方と首都圏を結ぶ最短経路として広域的な交流が促進されることが期待されている。

国交省は、上新バイパスにつながる上越三和道路の着工に向けて、県教委に計画予定地内における埋蔵文化財の分布調査を平成14年3月29日に依頼した。調査の結果県教委は、中世以前の遺物が採集されたのは19か所であったが、当該地は沖積平野で、多くの遺跡が地中に埋没している可能性があり、遺跡の有無を判断することが困難であることから計画法線のほぼ全域を調査対象とした。平成15年度、国交省の委託を受けて県教委は、埋文事業団に下割遺跡以西の167,000m^{2}を対象とする試掘調査を委託し、埋文事業団は平成15年5月～7月にかけて試掘調査を実施した。三角田遺跡周辺の調査対象範囲については、工事が優先する本線部分について試掘調査依頼が国交省からあったが、次年度以降に試掘未了部分が本線の両端に細長く残ることと、本線部分に遺跡が確認されず、本線工事が着工された場合、重機等の走行による未試掘範囲への撹乱等の影響も懸念されたため、協議により、用地全幅を対象として調査を行うこととした。調査は平成15年5月6日～6月17日・7月15日に実施された。調査の結果、清水田遺跡・延命寺遺跡・三角田遺跡の3遺跡が新たに発見され、県教委は三角田遺跡について9,050m^{2}で本発掘調査が必要と判断したが、用地未買収地周辺の3,500m^{2}で判断を保留とした。その後、平成15年12月8日に用地未買収地であった2,100m^{2}の試掘調査を実施し、柱穴等の遺構と平安時代の土器を検出した。この結果を受けて県教委は、第1回試掘調査の9,050m^{2}に第2回調査2,100m^{2}と判断を保留していた3,500m^{2}を加えた14,650m^{2}を三角田遺跡の本発掘調査必要範囲とした。その後、側道部分は本発掘調査を要しない構造であることが判明したため、これを除いた12,950m^{2}が本発掘調査実施範囲となった。

2　調査と整理作業

A　試掘確認調査

調査は埋文事業団が行った。第1回調査は平成15（2003）年5月6日～6月17日・7月15日に上越市戸野目～北田中地区の167,000m^{2}を対象とし、第2回は12月18・19日に第1回調査時に未買収であった戸野目地区の2,100m^{2}で実施した。調査は任意にトレンチを設定し、重機と人力を併用して掘削を行い、遺構・遺物の有無を確認した後、トレンチの位置、土層堆積状況、遺構・遺物の検出状況等を図面および写真に記録して行った。

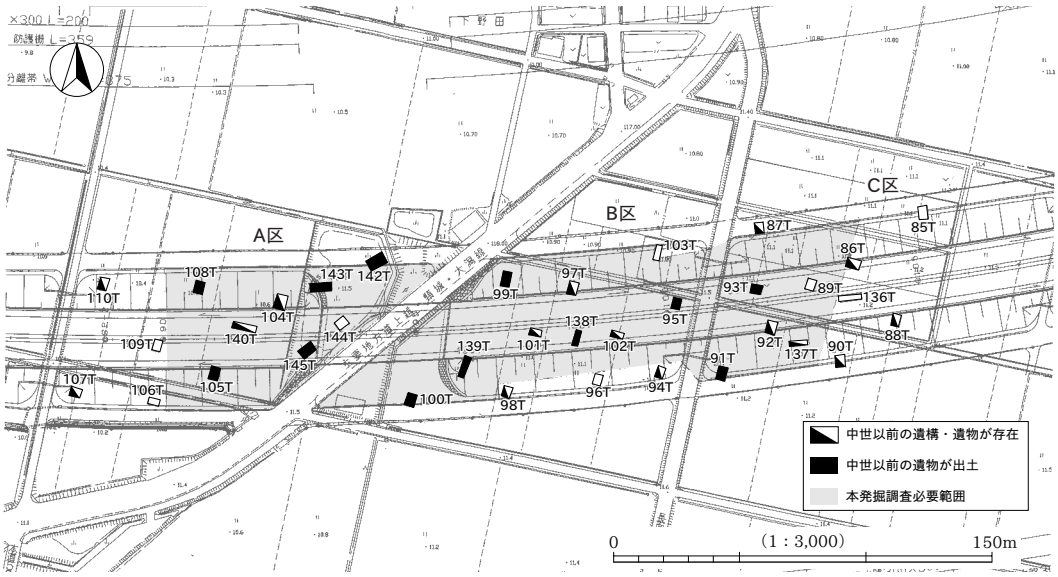
調査の結果、三角田遺跡周辺では91～93・95・97・99・100～102・138・139Tにおいて遺

物包含層が確認された。包含層の深さは約20cm、層厚約20cmである。遺物は特に91・92・97・101・100・139Tで多く、遺構は91・93・95・97・99・100Tで確認され、93Tの柱根を持つピット、97Tの井戸跡と思われる土坑２基が注目された。100Tでは地表下1.8mから古墳時代の可能性のある土師器が３点出土したが、摩耗が著しく、流れ込みの可能性が高いと考えられた。第２回調査では、４か所のトレンチのうち３か所から溝跡や炭化物が集中した柱穴等の遺構と平安時代の土器が発見された。調査結果の報告を受けて県教委は、14,650m^{2}について本発掘調査が必要である旨を国交省に通知した（第１図）。

B　本発掘調査

平成16年４月14日～平成16年12月17日

遺跡調査区は、南北に横断する県道上越・頸城・大潟線（以下、県道）、市道長面下野田線（以下、市道）によって三分割されていることから、県道以西をＡ区、県道から市道までをＢ区、市道より東をＣ区とした。調査着手前の４月13日に農道、水路等の取り扱いの地元説明を行い、翌14日に暗渠排水工事に着手した。この際、土層堆積、遺物、遺構の状況などを確認するため、調査員が工事に立ち会った。表土除去は４月28日に着手し、B、C、Ａ区の順に進めた。暗渠工事立会および表土掘削、包含層の部分掘削で遺物出土量が少ないことが判明したため、Ｂ区南側16列以東は重機で包含層を掘削した。作業員による発掘は５月19日に開始し、まずＢ区に着手して西から東に向かって調査を進め、Ｂ区の包含層掘削を６月23日に終了した。Ｂ区の遺構確認は６月９日に着手し、12B～15Cグリッドで柱穴跡と井戸跡と思われる遺構を確認した。また、16A～18Dグリッドでは多数の小溝が密集しており、大規模な畑跡の存在が予想された。Ｂ区の遺構発掘は６月23日に８・９列から開始し、12列以東には６月28日に着手した。Ｂ区の遺構発掘は当初９月末に終了予定であったが、畑跡の調査などで予想以上の時間を費やし、11月中旬頃にほぼ発掘を終了したものの、最終確認等すべての遺構発掘が終了したのは12月初旬であった。また、Ｂ区では12F～20Aグリッドで蛇行する河川跡があったため、遺構発掘終了後重機によるトレンチ掘削を行い、河川跡は上層遺構の地山であるⅣ層堆積時にはほぼ埋まっていたが、埋土の上部から



第１図　試掘調査トレンチ位置図

須恵器・土師器などの土器が出土することを確認した。しかし、県教委と協議した結果、遺物出土量が少ないことから全面調査不要となった。

一方、C区では5月中旬頃暗渠工事で深さ1mほどの黒褐色土から土師器がまとまって出土し、下層包含層の存在が明らかとなり、さらに調査区東側に延びる可能性が生じた。そこで、5月20日に国交省と協議し、調査範囲東側でトレンチ発掘を行い、遺跡の分布状況を確認することとした。この調査は6月2日～10日に行い、出土遺物が少量で遺構も確認できなかったため、当初のC区本発掘調査範囲で2層調査を行うこととなった。C区上層の表土除去は6月7日に着手し、重機で表土と包含層を掘削し、これを6月15日に終了した。翌日には作業員による発掘調査に着手し、上層の遺構確認、遺構発掘を行い、7月14・15日に終了写真を撮影した。7月17日から間層掘削を開始したが、重機と人力を併用して包含層を同時に掘削した。ただし、遺物が多く出土することが判明した場合には、それ以上重機による掘削を行わないこととし、東側半分では柱跡根と思われる木が並んで検出され遺物も多量に出土したため人力で包含層を掘削することとした。7月27日には北側の間層除去を終了し、28日から遺構確認と包含層掘削に着手した。間層は層厚約70cmにおよび、C区全体の間層除去が終了したのは、夏季休業後の8月16日であった。遺構確認および包含層掘削は9月中旬に終了した。遺構発掘が本格化したのは9月10日頃からである。この頃、遺構が発掘調査区の東に延びることが確実となり、県教委と対応を検討した後、9月23日に国交省を含めた3者で協議して、調査範囲を東に15m拡張した。あわせて市道下は、上越三和道路工事による市道切り回し後、本線工事着手までの間に工程を調整して調査することとなった。したがって、平成16年度の三角田遺跡の本調査面積は、当初予定の12,950m^{2}にC区下層の2,660m^{2}を加え、市道下810m^{2}を減じた14,800m^{2}となった。C区の遺構発掘が終了したのは11月下旬である。

A区の表土除去は6月19日に着手した。A区では当初より6A～5Fグリッドに位置する水路の西側では重機で包含層を掘削する計画であったが、C区下層の包含層除去同様、人力を併用して遺物出土状況を確認しながらすべて重機で掘削して、7月6日にこれを終了した。人力による発掘調査は8月5日に開始した。その結果、西側では溝を主体とし、東側では掘立柱建物跡や溝、土坑などの遺構が調査された。こうした中で、A区南側をほぼ東西に走るSD58が調査区西の道路法線内に延びることが判明したため、文化行政課と協議し、『新潟県における発掘調査等の要否の判断基準』に基づき、当初の本発掘調査範囲外の法線内についてはトレンチによる部分的な調査で対応することとし、国交省高田事務所の了承を得て調査した。A区の遺構発掘が終了したのは、11月末である。

こうした調査の進行にあわせ、11月24日に空撮による全体写真撮影を行い、12月10日に撤収した。その後、12月14日に遺構平面図の現地での校正作業、16・17日にSD58の追加調査を行い、すべての現場作業を終了した。

C　調査体制

試掘調査（平成15年度）

調査期間　平成15年5月6日～6月17日・7月15日・12月18日～19日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　板屋越麟一）

調　　査　財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

総　　括　黒井　幸一　（財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団事務局長）

管　　理　長谷川二三夫（　　同　　総務課長）

庶　　務　高野　正司　（　　同　　班長）
調査総括　藤巻　正信　（　　同　　調査課長）
調査指導　田海　義正　（　　同　　国土交通省担当課長代理）
調査担当　尾崎　高宏　（　　同　　班長）
調査職員　田中　一穂　（　　同　　嘱託員）

本発掘調査（平成16年度）

発掘業務を委託した業者から調査員１名が参加し、調査を行った。

調査期間　平成16年４月14日～12月17日
調査主体　新潟県教育委員会（教育長　板屋越麟一）
調　　査　財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括　黒井　幸一　（財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団事務局長）
管　　理　長谷川二三夫（　　同　　総務課長）
庶　　務　高野　正司　（　　同　　班長）
調査総括　藤巻　正信　（　　同　　調査課長）
調査指導　田海　義正　（　　同　　本発掘調査担当課長代理）
調査担当　沢田　　敦　（　　同　　班長）
調査職員　大島　通夫　（　　同　　主任調査員）
　　小菅　敏彦　（　　同　　主任調査員）
　　奥村　伸男　（　　同　　主任調査員）
調 査 員　細井　佳浩　（株式会社吉田建設埋蔵文化財事業部　調査員）

D　整理作業

遺構図面の基礎整理および出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業は、調査現場で発掘調査と並行して行った。報告書掲載遺物の復元、遺物の写真撮影、図版編集・作成、原稿の執筆は、平成16年12月７日～平成17年３月31日に巻町の株式会社吉田建設作業所において実施した。整理体制は、本発掘調査と同じである。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　遺跡周辺の地理的環境

三角田遺跡の所在する高田平野は、新潟県の南西部に位置する沖積平野である。その背後には、東に米山（993m）や尾神岳（757m）をはじめとする米山山地、南に菱ヶ岳（1,129m）や鍋倉山（1,289m）などからなる関田山脈、西に火打山（2,462m）や南葉山（949m）などからなる西頸城山地が連なっている。平野の南西部には、標高2,454m[1]の妙高山によって代表される妙高火山がそびえる。周囲の山地や山脈の裾には丘陵や台地状の地形が発達し、高田平野と接している。

これらの山々や丘陵からは数多くの河川が流れだしている。平野の北東部には、黒川や吉川を合流する柿崎川が流入し、柿崎で日本海に注いでいる。平野の中央部から西部にかけては、長野県境に源流を持つ関川が、櫛池川・別所川・大熊川・矢代川・青田川を合流しながら平野を北流している。関川は、さらに河口域で保倉川・飯田川を合流し、直江津で日本海に注いでいる。平野の南東の山麓には、関川や矢代川をはじめとして、大熊川・別所川・櫛池川などによって形成された扇状地が発達している。

平野には沖積段丘が発達し、これらは上位から高田面と関川面の２面に区分されている［高田平野地盤沈下団体研究会1973；高田平野団体研究グループ1981］。三角田遺跡をのせる高田面は主に礫・砂・シルトの互層からなる高田層によって形成された堆積面であり、その分布は平野の大部分を占める。平野の中央部において高田面の表層地質やその珪藻遺骸について検討した結果、この地域にはかつて沼沢地のような環境が広がっていたことが明らかになった［高田平原団体グループ1962］。一方、関川面は、関川とその支流に沿って分布する氾濫原堆積物である関川層からなっている。平野に分布する遺跡の時代を検討した結果、高田面は古墳時代初頭から段丘化しはじめ、数回におよぶ洪水性堆積物によって覆われながら平安時代には完全に段丘化したものと考えられている。また、関川面の遺跡は数が少ないものの、その段丘化の時期は中世以降であると考えられている［高田平野団体研究グループ1981；岡本1999］。

平野の前面には、海岸線に沿うかたちで潟町砂丘が分布している［高田平原団体研究グループ1965］。砂丘の規模は延長約20kmで最大幅約2.5kmにおよび、その形は中央部で内陸側に広くなり両端で狭くなっている。潟町砂丘は「古砂丘型砂丘」と呼ばれ、下末吉期末の海退に伴って形成された古砂丘の潟町砂層と、現世の砂丘を構成する新期砂丘砂層に区分されている［新潟古砂丘研究グループ1976］。砂丘の内側には、朝日池・鵜ノ池・天ヶ池・蜘ヶ池など多数の湖沼がみられるのが特徴である。

なお、三角田遺跡は、飯田川と戸野目川に挟まれた水田地帯にあり、微高地である下野田集落の南端に立地している。周辺の水田面の標高は10.3～11.2m程度であり、西へ次第に低くなるがその勾配は極めて緩やかである。上層遺構は水田面から約20～50cm下に検出された。その標高はＢ区でもっとも高く10.6～10.8mに達し、Ａ区ではおおよそ10.1～10.3m、Ｃ区では10.5～10.6mであった。さらに、Ｃ区では、上層遺構から50～60cmの厚さの間層を挟んで下層遺構が検出された。下層遺構の標高はおおよそ10.0～9.7mで、東へ次第に低くなる傾向が認められた。

ところで、高田平野には、飯田川をはじめ、繰り返し洪水を起こしてきた河川が数多く知られている。

1）妙高山の標高は、一等三角点をもって2,446mとされることもあるが、ここでは最高地点の値である2,454mとした。

今回の調査では、三角田遺跡の上層と下層の間に洪水によってもたらされたと推定される砂層が挟在していた。明治24年の土地更正図によると、周辺には水田や畑が広がり、北側には宅地が点在していた様子が見てとれることから、すでにその頃には現在と同じような景観が広がっていたものと考えられる。

2　歴史的環境

A　周辺の遺跡

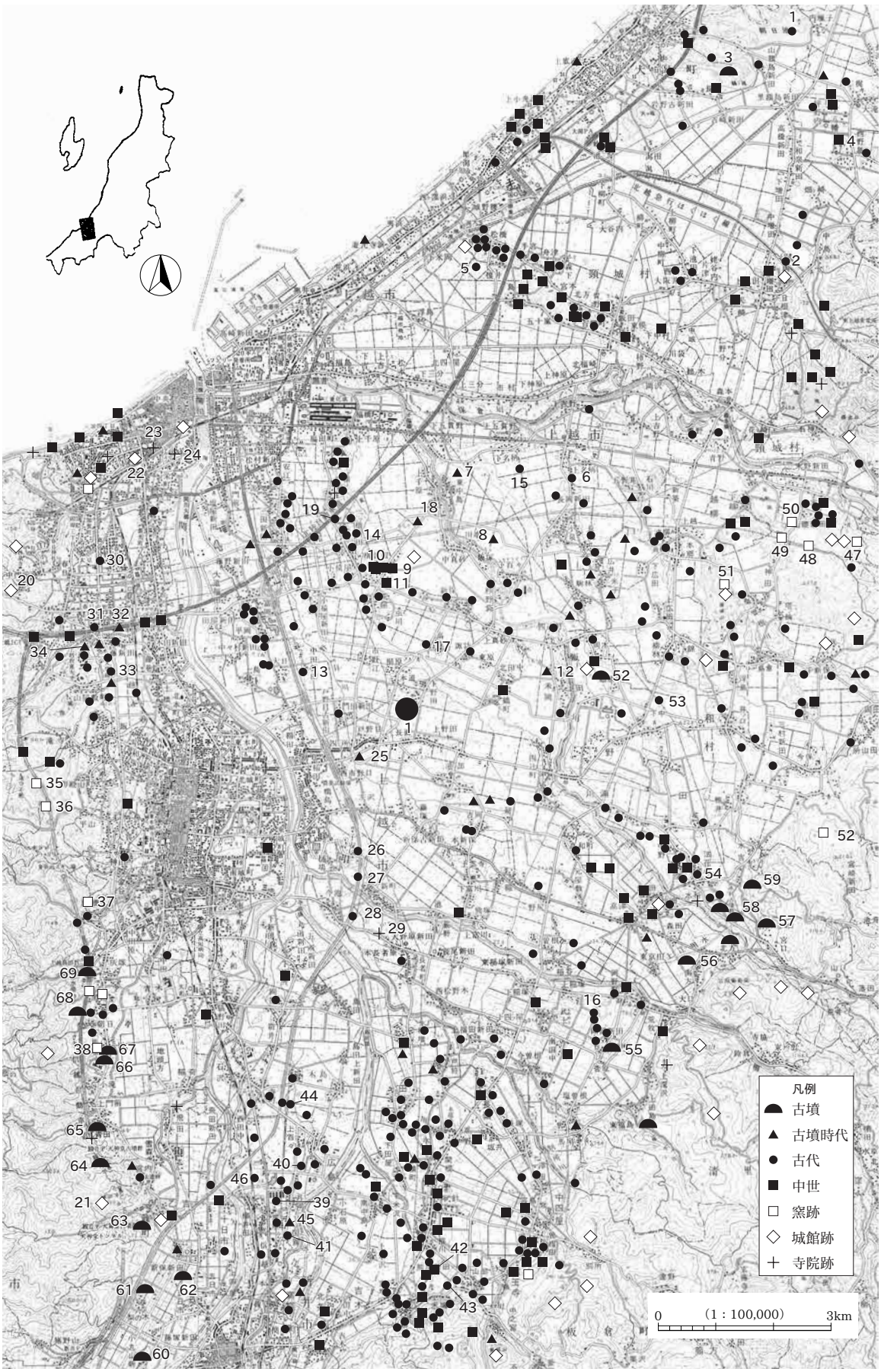
高田平野とその周辺に広がる古墳時代・古代・中世の遺跡分布は、第2図に示すとおりである。当該地の遺跡は、上越市教育委員会が昭和に実施した詳細分布調査［上越市教育委員会1981］や開発に伴う発掘調査により、遺跡の存在、範囲や内容が次第に明らかになってきた。しかし、ここに示したものがすべてではなく、多くの遺跡が未だ発見されず地中に埋没していると考えられる。

古墳時代　遺跡には古墳と遺物包含地がある。古墳は中～後期の群集墳が中心で、高田平野の南東部と南西部に位置する。南東部には飯田川・櫛池川によって形成された扇状地を中心に、全長約30mの菅原神社古墳（県指定史跡）を最大とする菅原古墳群（55）をはじめ高士（56）・宮口（国指定史跡）（57）・水科（国指定史跡）（58）・水吉（59）などの古墳群がある。主な出土品は武具、装身具、馬具などで、水科古墳群最大の21号墳では金環・銀環・勾玉・ガラス小玉・直刀など［秦・金子ほか1979］、宮口古墳群11号墳では金銅装円頭太刀など、同26号墳では馬具などが出土した［秦・関・戸根1976］。西南部古墳群は矢代川左岸に位置し、南葉山麓の先端部や丘陵に立地する。古墳群は、小丸山（60）・梨ノ木（61）・谷地林（62）・天神堂（国指定史跡）（63）・観音平（国指定史跡）（64）・青田（65）・稲荷山（66）・南山（67）・黒田（68）［尾崎2002］・灰塚（69）と南北に連続して分布している。

三角田遺跡の周辺に分布する遺跡には、前期の北割遺跡（7）・子安遺跡（26）・中島廻り遺跡（25）・津倉田遺跡（18）と中期の前田遺跡（8）や2km東にある下割遺跡（12）などがある。中島廻り遺跡では、前期の古墳が2基検出されている［小島1991・2003］。後期と考えられる集落遺跡は少ないが、一之口遺跡（32）・山畑遺跡（34）は竪穴住居を主体とした集落である。津倉田遺跡は古墳時代初頭、7世紀中葉～8世紀初頭を中心とし、竪穴・平地式・掘立柱の各種建物跡が確認され、沖積平野における住居形態が把握できた［笹澤・小島1999］。峪ノ上遺跡（44）でも竪穴住居が検出され［渡邉2005］、板倉町の仲田遺跡（42）［加藤・高階・沢田2003］からも7世紀末～8世紀前半の竪穴住居跡が検出されている。

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	三角田遺跡	古代	19	宮野遺跡	平安	37	向橋古窯跡群	古代	55	菅原古墳群	古墳後期
2	水久保遺跡	中世	20	春日山城跡	中世	38	下馬場古窯跡群	古代	56	高士古墳群	古墳後期
3	丸山古墳	古墳前期	21	鮫ヶ尾城跡	中世	39	栗原遺跡	古代	57	宮口古墳群	古墳後期
4	樋田遺跡	中世	22	御館跡	中世	40	倉田遺跡	古代	58	水科古墳群	古墳後期
5	榎井A遺跡	古代	23	安国寺跡	中世	41	杉明遺跡	古代	59	水吉古墳群	古墳後期
6	前田割遺跡	古代	24	伝至徳寺跡	中世	42	仲田遺跡	古代・中世	60	小丸山古墳群	古墳後期
7	北割遺跡	古墳	25	中島廻り遺跡	古墳・奈良	43	五反田遺跡	古代	61	梨ノ木古墳群	古墳後期
8	前田遺跡	古墳・古代	26	子安遺跡	弥生～中世	44	峪ノ上遺跡	古墳・古代	62	谷地林古墳群	古墳後期
9	横曽根Ⅰ遺跡	中世	27	下新町遺跡	弥生～古代	45	月岡遺跡	古墳・古代	63	天神堂古墳群	古墳中期
10	横曽根Ⅱ遺跡	中世	28	今池遺跡	古墳・古代	46	東沖遺跡	古代	64	観音平古墳群	古墳中期
11	横曽根Ⅲ遺跡	中世	29	本長者原廃寺	古代	47	今熊2号古窯跡	平安	65	青田古墳群	古墳後期
12	下割遺跡	古墳～中世	30	四ツ屋遺跡	古代	48	神田長峰1号古窯跡	平安	66	稲荷山古墳群	古墳後期
13	越前遺跡	古代	31	八反田遺跡	古墳～中世	49	末野古窯跡	平安	67	南山古墳群	古墳後期
14	岡原・大野遺跡	古代	32	一之口遺跡	古墳～中世	50	神田長峰2号古窯跡	奈良・平安	68	黒田古墳群	古墳中期
15	下名柄古屋敷遺跡	古墳～中世	33	江向遺跡	古代・中世	51	本郷新溜池古窯跡	奈良	69	灰塚古墳群	古墳後期
16	等仙寺遺跡	古代	34	山畑遺跡	古代	52	日向古窯跡	奈良			
17	保坂遺跡	古代・中世	35	滝寺古窯跡群	古代	53	大野古墳群	古墳中期			
18	津倉田遺跡	古墳・奈良	36	大貫古窯跡群	古代	54	法花寺遺跡	古代			

第1表　周辺の遺跡（番号は第2図と一致）



第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡

（国土地理院発行 平成13年「高田西部」平成11年「高田東部」平成10年「柿崎」1:50,000原図）

古　代　古代には、新潟県一帯は越国の一部であった。「日本書紀」持統６（692）年９月の条に「越前国司」の記述があることから、この頃には、越国は越前・越中・越後に分割されていたと見られている。この頃の越後国は阿賀野川以北を指しており、頸城郡は越中国に属していたと考えられている。「続日本紀」大宝２（702）年３月の条に越中国の４郡を越後国に分割したことが記され、その４郡とは、頸城郡・古志郡・蒲原郡・魚沼郡と推定されている。さらに、和銅元（708）年越後国に新しく設置した出羽郡を和銅５（712）年に出羽国として分立したことにより、佐渡を除く現在の新潟県の領域が定まった。「和妙類聚抄」には「国府在頸城郡」とあり、頸城郡内に越後国府があったようだ。また、頸城郡の郷として10郷が記され、このうち沼川が西頸城で、ほか９郷は高田平野にあったと推定される。相沢央は郷名記載の順序と高田平野の遺跡分布の傾向から、宇津郷を関川・戸野目川下流域、栗原郷は栗原遺跡を含む矢代川と関川中流の左岸、荒木郷を大熊川流域、板倉郷を別所川流域、高津郷を飯田川中流域、物部郷を櫛池川中流域、五十公郷を保倉川上流域、夷守郷を旧保倉川の自然堤防上の遺跡集中域、佐味郷を柿崎川流域を含む旧大潟以北に比定している［相沢2004］。これによれば、三角田遺跡は宇津郷に含まれる。

関川右岸の沖積段丘高田面縁辺に位置する今池遺跡（28）は８世紀前葉～９世紀後半の遺跡で、掘立柱建物跡・柵・竪穴住居・井戸・土坑・溝などが検出された。掘立柱建物は100棟以上確認され、大半が東西棟である。最大規模の建物は桁行８間、梁間３間で、桁行５間以上の建物が十数棟存在する。出土遺物では円面硯・瓦塔や畿内からの搬入土器などが注目される。地方官衙ないしは地方官人層の住宅と考えられるものの、国府の政庁域とは断定できず、隣接する本長者原廃寺と有機的な関係を持つと考えられている［坂井ほか1984］。近接する子安遺跡は古墳時代～中世の大遺跡であるが、今池遺跡の衰退後遺構が増加し、この地域の中核の遺跡となる。施釉陶器や二彩陶器・瓦塔・海獣葡萄境が出土した［笹澤2003］。今池遺跡の東には本長者原廃寺（29）があり、基壇跡と思われる遺構が検出され、瓦が出土している［小島ほか1984］。国府および国分二寺の位置は今日まで先学によって論じられてきた。上越市善光寺浜・長者原・旧三和村法花寺・旧板倉町田井・国川、旧新井市堂庭・国賀・栗原・旧妙高村今府など諸説があるが決着を見ていない。近年、考古学的には今池遺跡、本長者原廃寺の周辺に国府と国分寺が存在した可能性が高いとされている［坂井ほか1984前掲］。

三角田遺跡の北2kmの保坂遺跡（17）は９世紀後半～10世紀前半を主体とし、総柱の掘立柱建物跡群が道路状遺構もしくは区画溝と考えられる遺構を基準に整然と配置され、溝に一括廃棄された土師器や大型瓶・三足盤など特異な器形の緑釉陶器が出土した［笹澤・中村・大居1997］。本遺跡の南西1kmの中島廻り遺跡では、掘立柱建物跡などから８世紀前半の土器が多く出土した［小島1991］。宮野遺跡（19）では掘立柱建物跡３棟、布掘りの建物跡などが検出され、転用硯・石鈴・施釉陶器が出土した。荘園関連遺跡と考えられている［戸根ほか1985］。榎井Ａ遺跡では、「北館」、「北」、「荘」等の墨書土器、農事における荘園労働の大規模な役夫動員の様子がうかがわれる。「以四月五日御田阿□夫事」と書かれた木簡が出土し、古代荘園の可能性が高いと推定された［秦・小林・草野・高野・小林1998；小林1998］。寺院としては、旧三和村法花寺遺跡（54）がある。礎石や石敷遺構が発見されており、桁行６間、梁行３間の建物は基壇を持つが瓦はなく板葺の建物と思われ、平安末期のものと推定されている［秦・坂井1990］。

春日山山麓の沖積地にある古代の遺跡には一之口遺跡、八反田遺跡（31）などがある。一之口遺跡は西地区と東地区があり、西地区は９世紀後半～10世紀前半の遺跡で、掘立柱建物跡、井戸跡、畑跡などが検出された集落で、東地区では溝や井戸跡が検出され、木製の祭祀具や灯明皿として使用された土師器が多数出土した。八反田遺跡では平安時代の掘立柱建物跡５棟などが検出された。

旧板倉町五反田遺跡（43）では平安時代の緑釉陶器と中国製白磁椀が出土し［渡邊2005］、旧清里村等仙寺遺跡（16）では竪穴式住居９棟、掘立柱建物６棟などが検出されている［秦ほか1999］。９世紀後半の江向遺跡（33）からは県内初の古代青銅印が出土し［北野2003b］、四ツ屋遺跡（30）からは大型庇付掘立柱建物跡が検出され、石帯や多量の施釉陶器が出土した［四ツ屋遺跡調査団1988］。古代の窯跡は高田平野周縁の丘陵に立地する。西頸城丘陵では下馬場（38）・向橋（37）・大貫（36）・滝寺（35)などの窯跡群が確認されている。向橋窯跡群は８世紀前葉の瓦陶兼業窯跡で、本長者原廃寺出土瓦の産地と推定されている。また、東頸城丘陵裾部は高田平野周辺部最大の窯業産地であり、旧三和村末野から旧浦川原村今熊にかけて窯跡群（47～52）が展開する［笹澤2002］。肉眼観察では三角田遺跡出土須恵器は東縁丘陵産が主体であると推定される。

関川と矢代川に挟まれた河岸段丘や微高地上には、栗原遺跡（39）・月岡遺跡（45）・倉田遺跡（40）・杉明（すいみょう）遺跡（41）・東沖遺跡（46）などがある。栗原遺跡は、塔の可能性のある基壇、大型の掘立柱建物跡などが検出され、郡衙に関連する遺跡と考えられている［坂井1983］。月岡遺跡は奈良時代の後半から平安時代の集落で、当該期の中核となる集落と考えられている［高橋1985］。東沖遺跡は栗原遺跡とほぼ同じ８世紀初頭～中頃の集落で、竪穴住居と掘立柱建物からなる。桁行16mを超える掘立柱建物跡などが検出された［新井市教育委員会2000］。杉明遺跡は栗原遺跡の北に隣接する７世紀前葉～末頃の集落遺跡で、洪水で埋没した竪穴住居跡、焼失住居跡が検出されており、一括土器が多い。その衰退と前後して栗原遺跡が成立したと推定されている［笹澤2003］。倉田遺跡は、栗原遺跡と同じ軒丸瓦や円面硯が出土しており、官衙関連機能を栗原遺跡と分有していた可能性も推察されている［高橋1996］。

中　世　高田平野に分布する城館跡以外の中世遺跡の多くは、自然堤防や扇状地に立地するが、この傾向は古代の遺跡分布とほぼ一致する。城館跡は、その構造から戦国時代に築城や改修されたものが主体と考えられている。中でも春日山城跡（20）は、西頸城丘陵北端の標高180mにあって、山頂の主郭部を中心に東西約2.5km・南北約2.5kmの範囲に屋敷地群が展開する。春日山城跡は上杉氏（謙信）の段階に整備され、地域支配の拠点として機能した山城であるが、最近の発掘調査等の結果、上杉景勝もしくは慶長３（1598）年の上杉氏の会津転封後に堀秀治によって現在の姿となったことが判明した。周囲にある沖見砦跡などは砦的性格を持ち、春日山城跡と一体となって機能していたと考えられている［新潟県教育委員会1987］。

中世都市として発展した直江津には、上杉氏の居館である御館跡（22）や安国寺跡（23）・伝至徳寺跡（24）などがある。伝至徳寺跡では、11～13世紀前半と14世紀末～16世紀初頭の遺構群が検出された。御館跡は多くの土坑から饗宴に用いられたと考えられる大量の土師質土器が出土した。安国寺跡は、幅６～8m・方250mの堀が検出され、質量とも卓越した中国製陶磁器が出土し、守護所に想定されているが、至徳寺との関係は不明確な点が多い。16世紀に入ると上杉氏の居城である春日山城が整備され、政治的中心は府中から春日山に移り、林泉寺やその周辺の広範囲に城下集落が形成された。

本遺跡の北東約11kmには13～15世紀の集落である樋田遺跡（4）がある。掘立柱建物や井戸が伴う一辺60～70mの方形の区画が集まり集落を形成している［室岡ほか1989；室岡・戸根・小池1990］。水久保遺跡（2）では屋敷地と考えられる東西45m、南北37mの方形区画溝の中から掘立柱建物跡・井戸跡などが検出された。遺物は13～15世紀の珠洲焼・中国製陶磁器などが出土している［高橋ほか1996］。本遺跡の北西約3.5kmにある横曽根Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡（9～11）から幅３～6mの溝が40～50mの規模で巡り、居館跡と推定されている［上越市教育委員会1994・1996］。

第Ⅲ章　調査の概要

1　グリッドの設定

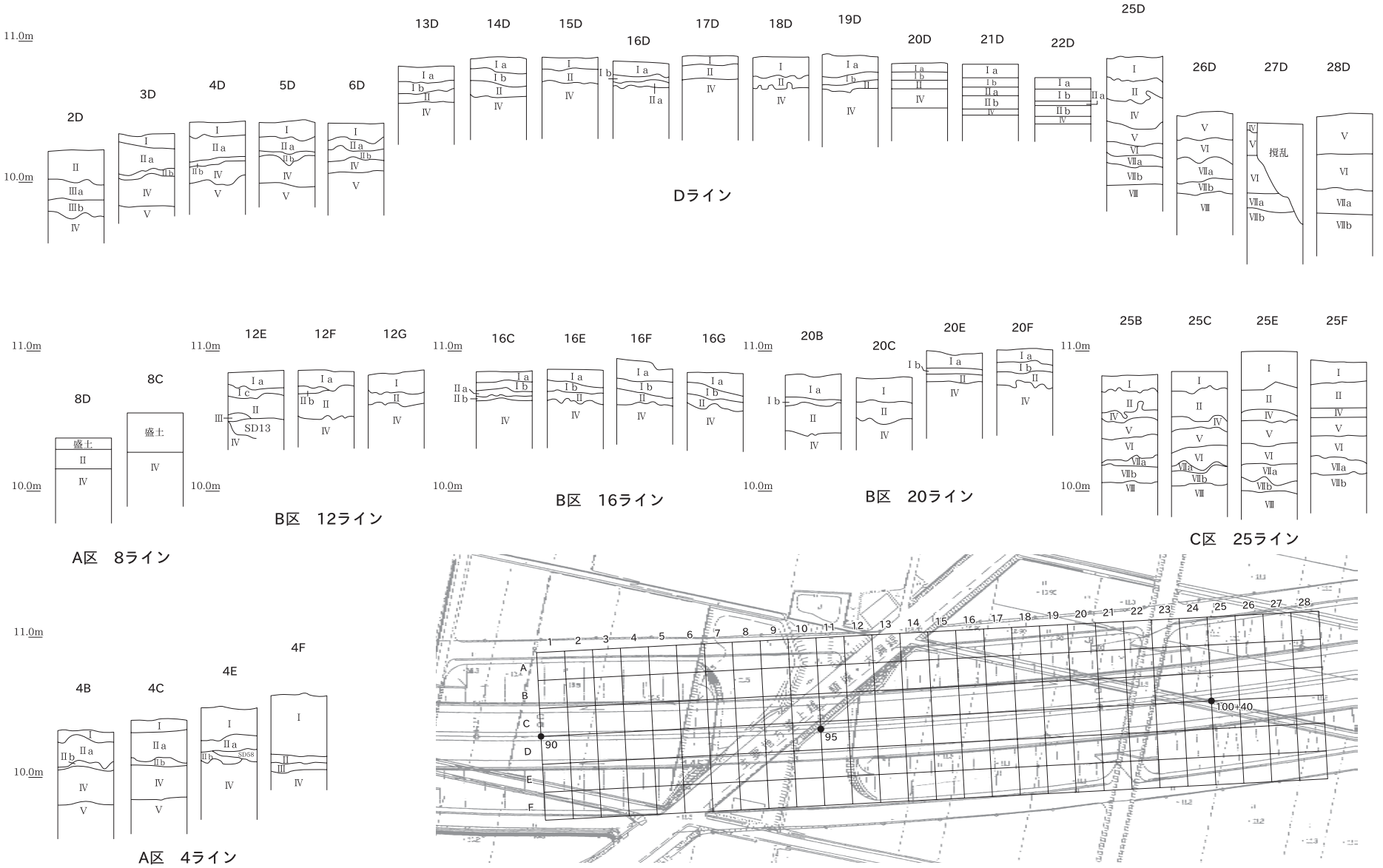
三角田遺跡の本発掘調査範囲となる上越三和道路法線は緩くカーブしており、国土座標の基準線を使用した場合、調査区境界線とずれが生じ、調査効率が落ちる恐れがあった。そこで、調査範囲西端付近の道路センター杭No.90＋00を起点（以下、起点杭）とし、10mを単位として調査区東端付近のNo.100＋40を結んだ線（以下、東西基準線）とこれに直交する線（以下、南北基準線）をグリッド基準線とした（第3図）。グリッド基準線の方位は、南北基準線が真北から3.92°西偏している。

グリッドの名称は、東西基準線は算用数字を使用して起点杭のある基準線から東に向かって「1、2、3、4…」、南北基準線は起点杭のある基準線がDとなるよう北から南に「A、B、C、D…」とし、基準線の交点を「1A、1B、1C…」と呼称した。調査においては大小2種類のグリッドを使用し、基準線に囲まれた10m四方を大グリッドとし、これを2m四方に25分割したものを小グリッドとした。大グリッドは北西隅の基準線交点の名称をグリッド名とし、小グリッドは北西隅が1、北東隅が5、南西隅が21、南東隅が25となるよう番号を付し、「1A15」のように大グリッド名と連名で呼称した。

2　基 本 層 序

調査範囲は東西260m、南北60mにおよぶが、Ⅰ・Ⅱ層は調査範囲内で共通する。Ⅰ層は現水田の耕作土、Ⅱ層が8世紀中頃以降の遺物包含層で、Ⅲ層はB区西側に限定される。Ⅳ層上面が8世紀中頃以降の遺構確認面で、中世の遺構もこの面で確認した。Ⅴ層以下はC区で確認された。Ⅴ・Ⅵ層は砂・シルトの混じった無遺物層で洪水堆積物と考えられる。この土層は洪水本流周縁部の比較的流れの遅い環境下での堆積物の可能性があるという（新潟大学積雪地域災害研究センター高濱信行教授の御教示）。Ⅶ層は8世紀初頭から前半の遺物包含層で、色調から2分されるが、遺物の大半はⅦb層から出土する。Ⅷ層上面がこの時期の遺構確認面で、西から東に緩く傾斜している。C区とB区の対応関係は、B区内ではⅤ～Ⅶ層が確認できず、下層と上層の遺構確認面はほぼ一致する可能性が高い。ただし、市道下が未調査なため確実ではない上、B区遺構地山は層相からいえばⅣ層である。基本層の特徴は以下のとおり。

Ⅰ層　：暗青灰色粘土。現水田耕作土。
Ⅱ層　：暗青灰色粘土。古代、中世の遺物包含層。Ⅳ層との境界は凹凸があり明瞭である。
Ⅲ層　：黒褐色粘土。B区西側の低所に限定して堆積している。上層遺物包含層。
Ⅳ層　：灰色粘土質シルト。
Ⅴ層　：浅黄色細粒砂。上部が粗粒化し、葉理構造は見られない。
Ⅵ層　：浅黄色シルト。Ⅴ層からの変化は漸移的である。
Ⅶa層：灰白色粘土。1～3mmの炭化物をごくまれに含む。下層遺物包含層。
Ⅶb層：暗青灰色粘土。1～5mmの炭化物多量。下層遺物包含層で、遺物の多い場所では黒褐色を呈する。
Ⅷ層　：青灰色粘土。Ⅶb層からの変化は漸移的である。



第３図　グリッド設定および土層柱状図

第Ⅳ章　C区下層の調査

1　遺　　構

A　遺構の概要

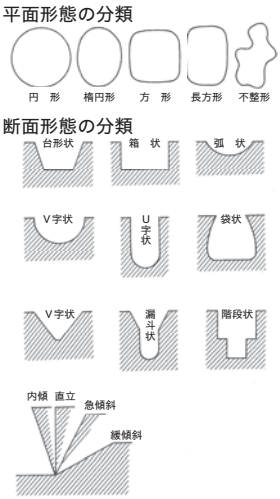
下層では掘立柱建物跡４棟、建物跡と推定される溝に囲まれたピット群１、土坑８、畑跡２、土器・炭化物集中部８、溝、ピット（掘立柱建物跡柱穴を除く）などの遺構を検出した。これらの遺構はすべて洪水層のⅤ・Ⅵに覆われており、土器様相から８世紀初頭～中頃のものと考えられる。調査区北側の24・25Cグリッドではsb3、25・26B・Cグリッドではsb4の掘立柱建物跡を確認した。これら２棟の掘立柱建物跡は建物全体の規模や柱穴の大きさが同程度であり、同じ性格の建物と考えられる。sb4には土器・炭化物集中部が重複しており、建物の床面を示している可能性がある。23・24C・Dにはピット群があり、ピットの配置から確定できないものの建物跡の可能性が高い。sb3・４を含むこれら３か所の遺構は、いずれも溝が周囲を巡り、長軸方向が平行しており、同時期に存在していたと考えられる。sb3とピット群の南側は比較的遺構が少なく、その周囲を約20m×18mの方形に溝sd113a・sd607が巡る。sb3の北、sb4の西に隣接して大型の土坑sk631があり、さらにその西側の24・25A～Cグリッドにかけて小規模なピットが散在している。また、調査区北縁の25・26Aグリッドには平行する溝があり、北側調査区外を中心とする畑跡の可能性がある。

調査区南側の23・24E・Fにはsb5・６の掘立柱建物跡がある。この２棟の建物跡はいずれも２間×２間で建物方向も一致して隣接しており、同時に存在していたのであろう。西側のsb5にはコ字状に溝が巡るが、sb6では溝は確認できなかった。北側のsb3・４よりは平面積・柱穴規模が小さく、方向も一致しないため、北側の建物群と同時に存在していたかどうかは不明である。ただし、sb5・６とsd113aの間には畑跡と考えられる溝群があり、溝、畑跡、sb5・６がお互いに重複せずに隣り合っていることから、これらの遺構が有機的な関係を持って配置された可能性を想定できる。調査区南側ではこのほか、土坑や平面形が不定形の性格不明遺構などが確認できたが、建物以外のピットや畑以外の溝は少なく、遺跡の端付近と考えられる。また、sd113a以東も遺構遺物とも少なく、試掘調査の結果を考え合わせると、東側に遺跡が広がらないと考えられる。したがって、C区下層で調査された遺構群は、北側調査区外に畑跡などが存在する可能性はあるものの、当時の集落の主要部を調査したと思われる。

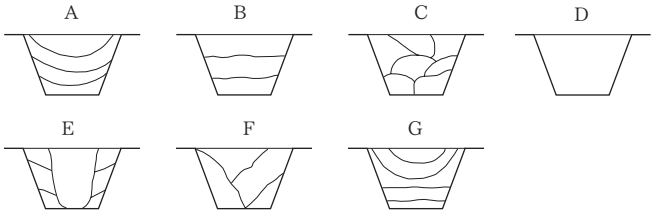
B　記 述 方 法

発掘調査では遺構確認段階で遺構番号を付すこととした。遺構番号はピットを除いて種別・層位に関係なく通し番号とした。ピットは大グリッドごとの通し番号とし、「1AP1」のように大グリッド名とあわせて呼称した。土坑とピットについてはおおむね長径1m以上のものを土坑、1m未満のものをピットとしたが、井戸跡と思われるものは長径1m未満であっても土坑とした。また、井戸跡はすべて素掘りで土坑との識別に問題を残すものもあるため、遺構略号で区別せず、SKを使用した。遺構種別の略号は、掘立柱建物跡SB、土坑・井戸跡SK、溝SD、土器・炭化物集中部SC、ピットP、性格不明遺構SXである。

本書では、本文・観察表・図面図版・写真図版を使用して遺構を説明する。本文では主要な遺構を個別



第４図　遺構の平面形態と断面形態の分類［加藤・荒川1999］



A レンズ状	複数層がレンズ状に堆積する。
B 水平	複数層が水平に堆積する。
C ブロック状	ブロック状に堆積する。
D 単層	埋土が単一層のもの。
E 柱痕	柱痕と思われる土層が堆積するもの。
F 斜位	斜めに堆積するもの。
G 水平-レンズ	埋土下位は水平に、上位はレンズ状に堆積するもの。

第５図　遺構埋土の堆積形状の分類［荒川ほか2004を一部改変］

に各説し、遺構のサイズ、形態など観察表で記載した属性のほか、観察表で表現できない情報や調査時の所見を記述した。観察表は遺構種別ごとに掘立柱建物跡・土坑はすべて記載し、溝・ピットは主要なものを記載した。観察項目は原則として仲田遺跡［加藤ほか2003］にしたがったが、平面・断面形態の分類基準は和泉Ａ遺跡［加藤・荒川1999］、埋土堆積状況の分類基準は青田遺跡［荒川ほか2004］による（第4・5図）。観察表には索引の機能を持たせるため、図面図版番号、報告遺物番号を記載した。図面図版は平面図を１／600の全体図、１／200の分割図で調査区全域を提示したほか、すべての掘立柱建物跡を１／100、その他の遺構の主要なものを１／60、１／40の個別図で提示した。断面図は、個別図で提示された遺構は個別図と組み合わせて、個別図で提示されない遺構のうち主要なものは分割図と対照する構成で掲載した。断面図は１／40を基本とするが、掘立柱建物跡のエレベーション図など個別平面図と組み合わせたものは平面図にあわせた。写真図版は、重要な遺構、遺存状態の良好な遺構・遺構の特徴をよく捉えたものを選択して掲載した。

C　各　　説

1）掘立柱建物跡

SB3　付SD604・SD607（図版2・3・7・8・58・59・61）

SB3は24B・C、25B・Cグリッドに位置する庇付側柱建物跡である。身舎の桁行３間（5.8m）、梁行２間（4.5m）、庇の出が１間（1.9m）、平面形は長方形で面積は34.8m^{2}である。主軸方向はＮ－64°－Ｗで、柱間寸法は桁行方向で1.84～1.88m、梁間方向で2.12～2.44mである。柱掘形は円形が半数でほかに楕円形や長楕円形があり、長径44～80cm、深さは33～69cm、埋土は炭化物を含む暗灰色系の土である。24CP1・25CP12・25CP11・25CP25・24CP40・25CP5・24CP19・24CP41・25CP21・25CP26には柱根が遺存していた。柱根は直径20cm前後のものが主体で、長さは75～90cmである。建物の方向からSB4と同時期のものと思われる。

SD604は25C21付近からSB3西側をコ字状にを巡る溝で、25C3・4でSD607と接している。断面形は台形状もしくは弧状である。幅28～120cm、深さは最大で28cmである。埋土は暗灰褐色粘土を基本とし、最大で３層に分層可能で、レンズ状に堆積していた。SD607は25・26Cグリッドに位置し、

SB3の北東隅付近から東に延びSD601と交わった後、26C25グリッドで試掘トレンチと重複する溝である。試掘トレンチに壊されているため、不明ではあるが、SD113aと合流していた可能性が高い。

SB4　付SD601・SC91・SC92（図版2・3・9・10・58・59・62）

SB4は25B、26B・Cグリッドに位置する側柱建物跡である。桁行3間（5.5m）、梁行2間（4.6m）、平面形は長方形で面積は25.3m^{2}である。主軸方向はN－66°－Wで、柱間寸法は桁行方向で1.54～1.98m、梁間方向で1.7～2.12mである。梁間方向の柱は、西辺で3本であるが、東辺は5本並んでいる。建物跡を巡るSD601が南東隅でとぎれていることを考慮すると、東辺側に入口と関係する施設があった可能性がある。柱掘形の平面形は楕円形が大半でほかに不整形、長楕円、円形や方形もあり、円形のものは径64～68cmにまとまる。深さは34～74cmとばらつきがある。埋土は炭化物を含む暗灰色系土であり、26BP7・26BP6・26CP6・26CP5・26CP4・26BP8には柱根が遺存していた。柱根は直径15～25cmで、20cmのものが主体となり、長さは55～100cmである。立て替えの跡はみられなかった。建物の方向からSB3と同時期のものと思われる。

SD601はSB3の周囲を巡り、SD607と交わる溝である。南東隅が陸橋状にとぎれている。平面形は北辺・東辺で不整形となる。断面形は弧状で、深さは最大で約20cmである。埋土は2層に分層され、レンズ状に堆積しており、1層は灰色もしくは暗灰色の粘土で、2層はシルト質である。

SB4にはSC91とSC92の2か所の炭化物集中部が重複する。両者とも柱穴掘形確認面のⅧ層上面から20cmほど上位で検出された。SC91は建物の南辺26CP6の北に位置し、平面形は長径72cm、短径52cmの隅丸方形である。SC92は建物跡の北東隅に位置し、長径72cm、短径44cmの不定形である。いずれも炭化物層の厚さは5cm程度であった。遺物はSC92の遺構上面付近から多量の土師器・須恵器がつぶれた状態で出土した。柱穴掘形確認面とはレベル差があるものの、柱根上端はSC91・SC92埋土2層相当レベルにあり、調査においては、両者はほぼ同時に確認されている。炭化物集中部が柱穴と重複せずに建物の範囲内にあることから、建物の床面の痕跡の可能性がある。

SB5　付SD117・SD164（図版4・10・11・59・63）

23E・F、24E・Fに位置する側柱建物跡である。桁行2間（3.88m）×梁行2間（3.84m）で、面積は14.9m^{2}を測る。方向はN－7°－Eを向く。柱間寸法は1.6～2.2mとばらつきがある。構成する柱穴8基のうち6基に柱根が残っていた。柱穴の平面形は柱根の残らないP6は楕円形、それ以外は円形を呈する。断面形はP6が片側に段のある階段状、それ以外はU字状である。規模はP6が長径76cm、短径56cm、それ以外は径38～52cm、深さは53～75cmである。埋土はP6で8層、それ以外で3～7層に分層され、青灰色粘土、灰色粘土、灰色砂、あるいはこれらが混在するものが堆積する。柱根はいずれも柱穴の底面よりわずかに低くなっているが、この建物のある場所は基本土層Ⅷ層の下が今も水が流れる砂地になっており、長い年月の経過により沈んだ可能性もある。SD164はP4につながる細く浅い溝で、SB5に付随するものかは不明である。

遺物はP1から木簡が出土した。柱穴中央のやや南、確認面から11～27cm下の埋土2層中から、「献進下…」記載の面が反対、かつ下向きとなりわずかに南に傾く立位で出土した。埋土1～3層は柱痕状の堆積を示すが、土質は地山と同じ青灰色粘土である。SB5では柱穴8基中6基で柱根が残っていたにもかかわらず、P1では柱根が検出されなかったことを考え合わせると、P1では柱が抜きとられ埋土1～3層は抜きとり穴に堆積した土と推定する。したがって、木簡は抜きとり穴の埋土出土ということになる。P1からはほかには遺物の出土はなかった。柱根6本はオニグルミの割材を加工し、断面を長方形や楕円

形に仕上げたもので、下端部は片側に偏った逆三角形を呈する。

SD117はSB5を囲む溝で、東側が開くコの字状を呈する。西・南辺のL字の溝SD117aと北辺のSD117bからなりSD117aの方が新しい。幅は30～80cm、深さは最大で20cmで、断面は台形状である。北西隅では南北の溝がさらに北へ延びている。SD117aは南西隅から北東に傾斜し、SD117bは東から西に傾斜している。遺物はSD117aの南西から南側で土師器、須恵器の破片が10点ほど出土した。

SB6（図版4・10・11・59・63）

24Fに位置する側柱建物である。桁行2間（4.32m）×梁行2間（3.49m）で、面積は15.8m^{2}を測る。方向はN－6°－Eを向く。柱間寸法は1.5～2.2mとばらつきがある。構成する柱穴8基のうち3基に柱根が残っていたが、P10の柱根は腐植が著しい。柱穴の平面形は円形、ないし楕円形を呈し、断面形はU字状、あるいは階段状である。規模は長径32～70cm、短径30～56cm、深さ38～80cmである。埋土はP1で1層、それ以外で3～8層に分層され、青灰色粘土、灰色粘土、灰色砂、あるいはこれらが混在するものが堆積する。P9・P1の柱根は柱穴の底面より50cmほど低くなっている。

P1・P6の柱根はトネリコ属の丸材を使用しており、下端部は加工により逆三角形や平坦に仕上げている。土器は南西隅のP3から内外面にハケ目を残す土師器甕の胴部片が出土した。SB5とSB6の関係は使用材が異なるものの、重複せず、軸もそろっていることから、同時に存在した可能性が高い。

24FP5はSB6の南西隅から0.6mほど南にあるものである。平面形は楕円形、断面形は台形状である。規模は長径61cm、短径45cm、深さは10cmである。埋土は3層に分層され、1層は多量の炭化物などを含むしまりの弱い黒褐色土、2層は暗褐色土、3層は青灰色粘土である。本建物に関連する遺構と考えられる。

2）柱穴群と溝

23・24C・D柱穴群（図版4・12・13・58・64～66）

23C・D、24C・Dにかけて位置するもので、24DP2～13などの多くのピットやSK196・SK168とこれらを囲むか縦断するSD113・SD141・SD142・SD170・SD172から構成される遺構群で、東西方向の暗渠2本により各遺構の一部が破壊されている。SB3～6のような建物の配置を明らかにできなかったが、以下に説明する柱穴のいくつかと発見できなかった柱穴から建物が構成される可能性がある。なお、図面上重複するSC49・SC119とは層位差があり、わずかに時期差があるものと考えられる。

ピットは40基ほど検出された。平面形は円形・楕円形・溝状・不整形、深さは5～55cmとさまざまである。埋土は24DP3～13が複数層で、それ以外のほとんどは暗灰色粘土の単層である。24DP3～P5・P7・P9・P12・P13は平面形が円形、断面形がU字状を呈する。規模は径33～57cm、深さ26～55cmである。埋土は3～5層に分層され、概して炭化物粒子を多く含む暗灰色粘土、灰色粘土がレンズ状に堆積する。24DP6・P8は平面形が楕円形、断面形が弧状・漏斗状を呈する。規模は長径80cm前後、短径50cm前後、深さ21～25cmである。埋土は2～3層に分層され、炭化物粒子を多く含む暗灰色粘土、灰色粘土がレンズ状に堆積する。24DP10は径27cmの円形を呈し、断面形はU字状で深さは31cmを測り、埋土は2層に分層される。24DP11は平面形が楕円形、断面形が漏斗状を呈し、規模は長径55cm、短径43cm、深さ35cmで、埋土は3層に分層される。柱根が残存しており、樹種はオニグルミであった。24DP2はSD172の中にあり、SD113aと接する。径70cmほどの円形で、深さはSD172の底面から36cmを測る。土器は24DP2・P3・P7・P9・P22で少量出土した。そのうち

24DP2からは須恵器無台杯・土師器鉢、24DP7からは須恵器杯蓋が出土した。

SK196は24C22・23に位置する。北側を暗渠に壊されており、全体の規模は明らかでない。長径1.5m、深さは10cmほどで、内部のほぼ全体に炭化物が薄く堆積していた。遺物は須恵器の有台杯が1点出土した。SK168はSD141・142に接する土坑である。長さ80cm、幅54cm、深さ7cmで、断面形は弧状を呈する。

SD113は本柱穴群の北側・西側・南側を囲んだのち、西から東へ緩やかに傾斜し、26Eで北に向きを変え、27Dに至る溝で、全長約70m、幅35～150cm、深さ6～20cmほどである。23Dでａ・ｂに分けられ、ａが新しい。また、24Eで極端に浅くなるところがあり、ここでSD113aがさらに二分される可能性がある。断面形は概して弧状であり、埋土は1層ないし2層に分層される。24Eでは窪みや張り出しが複数設けられ、雨水が貯まる構造となっている。遺物は須恵器杯蓋・有台杯・無台杯・壺蓋・広口瓶・長頸瓶、土師器無台杯・鉢・甕、木製品鎌柄・槽・曲物底板等が多く出土した。

SD141は24Dに位置する南北方向の溝で、南側でSD142に切られる。長さ6.2m、幅50～80cm、深さ12cmほどで、断面形は弧状を呈する。遺物は須恵器有台杯や土師器甕の破片などが10点ほど出土した。SD142は24Dの東側でSD141と平行し、南側で向きを西に変え、SD113aと交わる。平面形や土層堆積からSD141より新しそうであるが、同時に存在した可能性もある。全長11.5m、幅40～90cm、深さ14～26cmほどで、断面は概して弧状を呈する。南側には楕円形の窪みがあり、また南端部が浅くなっている。遺物は土師器の甕などの破片20点ほどが出土した。SD170は長さ6m、幅50～150cm、深さ14～28cmほどで、断面形は弧状を呈する。北側には長径122cm、短径60cm、深さ29cmの窪みがあり、南側には埋土上面に長さ180cm、幅80cmの範囲に炭化物が薄く堆積していた。SD113aと接する南端部では、SD142と同様に底面が浅い。遺物は須恵器有台杯・長頸瓶・土師器甕などがやや多く出土した。SD172は長さ2.7m、幅140～190cm、深さ16cmほどの断面形が弧状の溝で、南側はSD113aに切られる。北側は暗渠に壊されていて様相が判然としないが、埋土下部から底面にかけて炭化物が薄く堆積していた。遺物は須恵器無台杯や土師器甕などの破片が少量出土した。

3）土　　坑

SK118（図版4・14・67）　23Eに位置する土坑で、方向はＮ－59°－Ｅを向く。平面形は隅丸長方形、断面形は弧状を呈する。規模は長さ485cm、幅194～246cm、深さ20cmである。埋土は2層に分層され、1層は塊状の灰色粘土を多量に含む青灰色粘土で、2層の青灰色粘土と明瞭に分けられる。遺物は棒状の木製品が2点（図版45－123・124）と土師器甕など破片が少量出土した。

SK157（図版4・13）　24E4に位置する土坑で、平面形は楕円形で、断面形は階段状である。規模は長径104cm、短径80cm、深さは41cmである。埋土は3層に分層され、3層の暗褐色土には植物遺体が含まれる。遺物は3層から木製品（図版45－127）が出土した。

SK162（図版4・6）　24E1・2に位置する土坑で、北側にSD113aが近接する。平面形は不整円形、断面形は弧状を呈する。規模は南北118cm、東西118cm、深さ5cmである。埋土は単層で、炭化物粒子を多く含む暗灰色粘土が堆積する。須恵器杯蓋・土師器甕などの破片が少量出土した。

SK163（図版4・6）　24E8・9に位置するピット状の遺構で、SD113aと接する。平面形は楕円形、断面形は半円状を呈する。規模は、長径71cm、短径34cm、深さ21cmである。埋土は4層に分層される。

SK179（図版4・6）　24E9・10に位置する土坑状の遺構で、南側がSD113に接する。平面形は楕円

形で、断面は弧状である。規模は東西158cm、南北78cm、深さ16cmである。埋土は3層で、1層は炭粒が密集する灰色粘土、2層は灰色砂を多く含む灰色土、3層は青灰色粘土である。遺物は土師器小片がわずかに出土した。

4）畑　　跡

畑跡1（図版4・5・66）　25E・Fに位置する畝状小溝で、SD96～104・121・122の11条から構成される。SD96～104はほぼ平行しており、長さは短いものがSD96で184cm、長いものでSD101の732cmである。幅は10～32cm、深さは1～6cmで、溝間の距離は25～60cmである。断面形はいずれも弧状、埋土は単層で、灰色粘土をブロック状に含む青灰色粘土が堆積する。遺物はSD98からSD113出土と接合する須恵器杯蓋が出土した。埋土の特徴から耕作痕と考えられる。

畑跡2（図版4・6・66）　23E・24Eに位置する畝状小溝で、SD124～139・143～145・154～156・159～161・166・180・181がある。長軸の異なる複数の小溝から構成され、切り合い関係にあるものが多い。長さは短いものでSD127の68cm、長いものでSD124の356cmである。幅は16～52cm、深さ2～13cm、断面形はいずれも弧状で、埋土はSD133・145・181が2層となり、残りは単層で、灰釉色粘土ブロックを多く含む。遺物はSD159から土師器甕の小片が1点出土した。埋土の特徴から耕作痕と考えられる。

5）溝

SD114（図版4・5）　25D・26Dに位置する溝で、東側はSC94を切っている。長さ5.7m、幅74cm、深さ7cmほどで、断面形は弧状を呈する。埋土は単層で、炭化物が密集する暗灰色土が堆積する。遺物は須恵器無台杯、土師器甕等の破片が少量出土した。

SD115（図版4・5）　25D10・15に位置する溝で、北側を暗渠に切られている。長さ94cm、幅71cm、深さ5cmで、断面形は弧状を呈する。埋土は単層、青灰色粘土が堆積する。

SD116（図版4・5）　25E・26Eに位置し、南側でSD113aに接する溝で、暗渠により大部分が壊されている。長さ5.4m、幅171cm、深さ16cmで、断面形は弧状を呈する。埋土は2層に分層され、レンズ状に堆積する。遺物は土師器甕などの破片がわずかに出土した。

SD158（図版4・5）　24Eに位置する溝で、北側はSD113aに、南側はSD167につながる。長さ5.6m、幅39～81cm、深さ8～18cmで、断面形は弧状を呈する。埋土は1～3層に分層される。南から北へ緩やかに傾斜しているが、南西部の24E8には窪みがある。遺物は須恵器杯蓋や土師器甕などの破片が少量出土した。

SD167（図版4・5）　23E・24Eに位置する溝で、南側はSB5に近接し、西側はSD145を、東側はSD158を切っている。長さ4.7m、幅108～123cm、深さ21cmで、断面形は台形状を呈する。埋土は3層に分層される。

SD173（図版4・5）　26Eに位置する南北方向の溝で、南側にSX176が近接する。長さ3.7m、幅25cm、深さ6cmで、断面形は弧状を呈する。埋土は単層で、灰色粘土が堆積する。

SD178（図版4・5）　26Eに位置する溝で、長さ4.3cm、幅38cm、深さ5cmで、断面形は弧状を呈する。埋土は単層で、灰色粘土が堆積する。SD113aの方が新しい。

SD200（図版4）　SD200は24Eに位置し、SD113a・SK179に接する溝で、切り合いはSK179が

新しい。長さ196cm、幅16cmで、北から南へ傾斜する。

SD555（図版２・３）　27Cに位置する溝で、北側を試掘トレンチに切られている。長さ3m、幅28cm、深さ11cmで、断面形は弧状を呈する。埋土は単層で、灰色粘土が堆積する。

SD556（図版２・３）　27B8・９に位置する溝である。長さ1.6m、幅23cm、深さ6cmで、断面形は台形状を呈する。埋土は単層で、灰色粘質シルトが堆積する。

SD613（図版２・３）　25A21に位置する。長さ2m、幅80cm、深さ20cmの溝である。方向は北西～南東である。断面形は台形状で、埋土は２層に分層される。１層は暗灰色土で、２層は白色土ブロックが混入する灰色粘土である。SD613・SD612・SD614・SD617・SD626は並行しており、畑跡の可能性がある。

SD612（図版２・３）　25Aに位置し、SD613と並行する溝である。方向は、北西～南東方向である。北西側から南東側へ向かって傾斜し、北側は、調査区外へ延びている。幅20cm、深さ10cmである。断面形は弧状で、埋土は暗灰色粘土である。

SD615（図版２・３）　24B・25Bに位置する溝で、長さ11.8cm、幅45cm、深さ9cmである。北東～南西方向にほぼ直線的に走る。断面形は台形もしくは弧状で、埋土は灰色粘土の単層である。

SD620（図版２・３）　26A・B、27Bに位置する溝で、長さ8m、最大幅1.1mの溝である。断面形は弧状で、深さ約15cm、埋土は３層に分層され、レンズ状に堆積していた。北西側は不整形の性格不明の落ち込みであるSX625に合流している。

6）土器・炭化物集中部

SC49（図版４・12・13・64）　23D・24Dに位置する東西約4m、南北約3.7mの円形の範囲で土器・炭化物が集中する遺構で、掘り込みはない。埋土は４層に分層したが、土器の多くは１層から出土した。完形の須恵器有台杯（図版42－65）が正位の状態で出土した以外は、土器の多くは細かく割れた状態で散在していた。土器は須恵器有台杯・土師器甕・鍋など平箱でおよそ１箱分出土した。なお、土器を多く出土した１層は、図面上重複するSD170・172やピット群の確認面となるⅧ層上面より約20cm上位にあり、これらの遺構を覆っていた。本遺構とSD170・172等出土の土器には接合関係がないことから、両者には時期差がある可能性がある。

SC90（図版４・13）　24E24・25に位置する炭化物集中遺構で、約2.4m南にSB6がある。東西171cm、南北93cmの不整楕円形である。埋土は２層に分層される。１層が炭化物の堆積する層で、焼土、小礫を多く含んでいる。遺物は須恵器有台杯や土師器甕などの小片がわずかに出土した。１層から出土した計測可能な小礫は1,831点で、総重量は約330gである。重さと点数の割合は遺構図中の表に示した。

SC94（図版４・６）　25D・26Dに位置し、北側をSD114に、南側を暗渠に壊されている。現存する規模は南北270cm、東西310cmで、平面形は長方形を呈する。厚さ9cmの埋土は２層からなり、１層の暗灰色粘土に炭化物粒子が多く含まれる。遺物は須恵器杯蓋・有台杯・土師器甕や無台椀などの破片が多く出土した。

SC95（図版４・６）　25Eに位置し、南側にSD113が近接する。規模は南北4.8m、東西4.0mで、平面形は長方形である。埋土は厚さ10cmで２層からなり、１層の暗灰色土に炭化物が密集していた。遺物は須恵器杯蓋・無台杯・土師器甕などの破片が多く出土した。

SC119（図版４・12・13）　24Dに位置する南北3.3m、東西4.3mの不整形の範囲から土器片が集中

して出土した遺構で、掘り込みはなかった。暗渠を挟んだ北側にあるSC49とは同一の遺構であった可能性がある。埋土は2層に分層したが、土器の多くは1層から出土した。土器の多くは細かく割れた状態で散在していた。土器は土師器甕などの破片が多い。なお、土器を多く出土する1層と図面上重複するSD170の上面となる炭化物集中範囲とは約10cmの標高差があり、土器の接合関係はほとんどない。

SC93（図版4・14）　25Dに位置する南北約4.9m、東西約2.2mの範囲から土器片が集中して出土した遺構である。埋土は4層に分層したが、1層とした炭粒が多量に含まれる青灰色粘土から土器のほとんどが出土した。完形の無台杯（図版42－76）が逆位で出土した以外は、土器の多くは細かく割れた状態で散在していた。土器は須恵器杯蓋・有台杯・無台杯、土師器無台杯・甕など平箱でおよそ1箱分出土した。

7）その他の遺構

SX169（図版4・6）　23Fに位置する遺構で、東側にSB5が近接する。平面形は不整形で、規模は南北260cm、東西179cm、深さ3～9cmを測る。埋土は2層で、不整な堆積である。

SX171（図版4・6）　24Fに位置する遺構で、西側にSB6が近接する。平面形は不整形で、断面形は波状である。規模は幅190cm、深さ5～10cmを測る。埋土は単層である。遺物は土師器小片がわずかに出土した。

SX175（図版4・6）　26・27Eに位置する溝状の遺構で、東側は調査区外へ延びている。規模は長さ495cm、幅72cm、深さ35cmである。断面は台形状を呈し、埋土は腐植土を含む灰色粘土や腐植土がブロック状に12層堆積する。

SX176（図版4・5）　26Eに位置する遺構で、SD113aに接する。平面形は不整形で、断面は台形状である。規模は南北327cm、東西98cm、深さ16cmで、内部に溝状の窪みが2本ある。埋土は3層に分層され、1層は炭粒・腐植土を多く含む灰色粘土、2層は腐植土を多量に含む黒褐色土である。

SX177（図版4）　24・25Dに位置する遺構で、SD142と西側で接する。平面形は南北約5m、東西3mの不整形を呈し、深さは2～8cmで、下場は明瞭でなかった。埋土は単層で、炭化物を多く含む青灰色粘土である。遺物は土師器の小破片がわずかに出土した。

2　遺　　物

A　土　　器

1）C区下層出土土器の分類（第6図）

三角田遺跡から出土した古代土器の分類を第6図に示した。このうちC区下層から出土した器種は須恵器が杯蓋・有台杯・無台杯・壺蓋・広口瓶・長頸瓶・甕、土師器が無台杯・椀・鉢・甕・鍋等で、口縁部残存率計測によれば、食膳具が58.8％で大半が須恵器で占められており、煮炊具は37％ですべて土師器であり、須恵器の甕・瓶等からなる貯蔵具が4.2％である。C区下層出土の各器種の概要は以下のとおりである。

須　恵　器

杯　蓋（1～4）　有台杯に伴うもので、法量からA・Bに分類する。

杯蓋A（1～3）　杯蓋Aは口径が15～16cmのもので、天井部に平坦面を持つものをAⅠa（1）、山

笠状となるものをＡＩｂ（2）、体部外面に沈線を巡らすものをＡⅡ（3）とした。

杯蓋Ｂ（4）　口径が14cmのもので、Ａより明らかに小ぶりである。

有台杯（5～9）　法量、形態からＡ・Ｂ・Ｃに分類したが、下層にはＢ類が存在しない。

有台杯Ａ（5～7）　およそ口径が10～15cm、器高が3～5cmのもので、法量によりＩ・Ⅱに分けられる。ＡＩ（5・6）は口径13～15cm、器高3～5cmのもの、ＡⅡ（7）は口径が10～12cm、器高が3cmのものである。ＡＩは丸底の底部が高台と同レベル、あるいは突出するものをＡＩａ（5）、底部が水平なものをＡＩｂ（6）とした。

有台杯Ｃ（9）　体部外面に1本、ないし2本沈線を巡らすもので、金属器の模作品とされるタイプ。口径14～15.5cm、器高5.5cm前後である。

無台杯（10～13）　形態からＡ・Ｂに分類した。

無台杯Ａ（10～12）　口径が12～15cm、器高3～4cmのもので、法量からＩ・Ⅱに分類した。ＡＩ（10）は計測可能なものは1点のみの出土で、口径15.3cm、器高4.3cmである。ＡⅡ（11・12）は多く、口径12～14cm、器高3～4cmのものである。ＡⅡはさらに丸底状のものをＡⅡａ（11）、平底状のものをＡⅡｂ（12）に細分した。

無台杯Ｂ（13）　口径が14cm前後、器高が5cm前後の深みのある大きいものである。

壺・瓶・甕（16・19・20・26）　須恵器の貯蔵具で、上述のとおり、出土量は少ない。

壺蓋（16）　かろうじて器形の把握ができるものは1点のみである。体部外面に沈線が2本巡る。

広口瓶（20）　口縁部が大きく外反する広口の瓶で、1点のみ出土した。

長頸瓶（19）　口頸部の長い細口の瓶で、口頸部のみ（19）が1点、体部のみのものが1点出土した。

甕（26）　外反する長い口縁部で、口縁部上端付近に突帯が巡っていたと考えられるもの。口縁部外面には1本、ないし2本の沈線が3段、6本1単位の波状文が2段、交互に施文されている。

土　師　器

無台杯（28）　須恵器の無台杯を模倣したと考えられるもの。生焼けの須恵器との区別が明瞭でないものがあるが、主に胎土・色調から分類した。

無台椀（29）　29は甕の転用の可能性がある。

手づくね土器（32）　小型の鉢形土器で、1点のみ出土した。

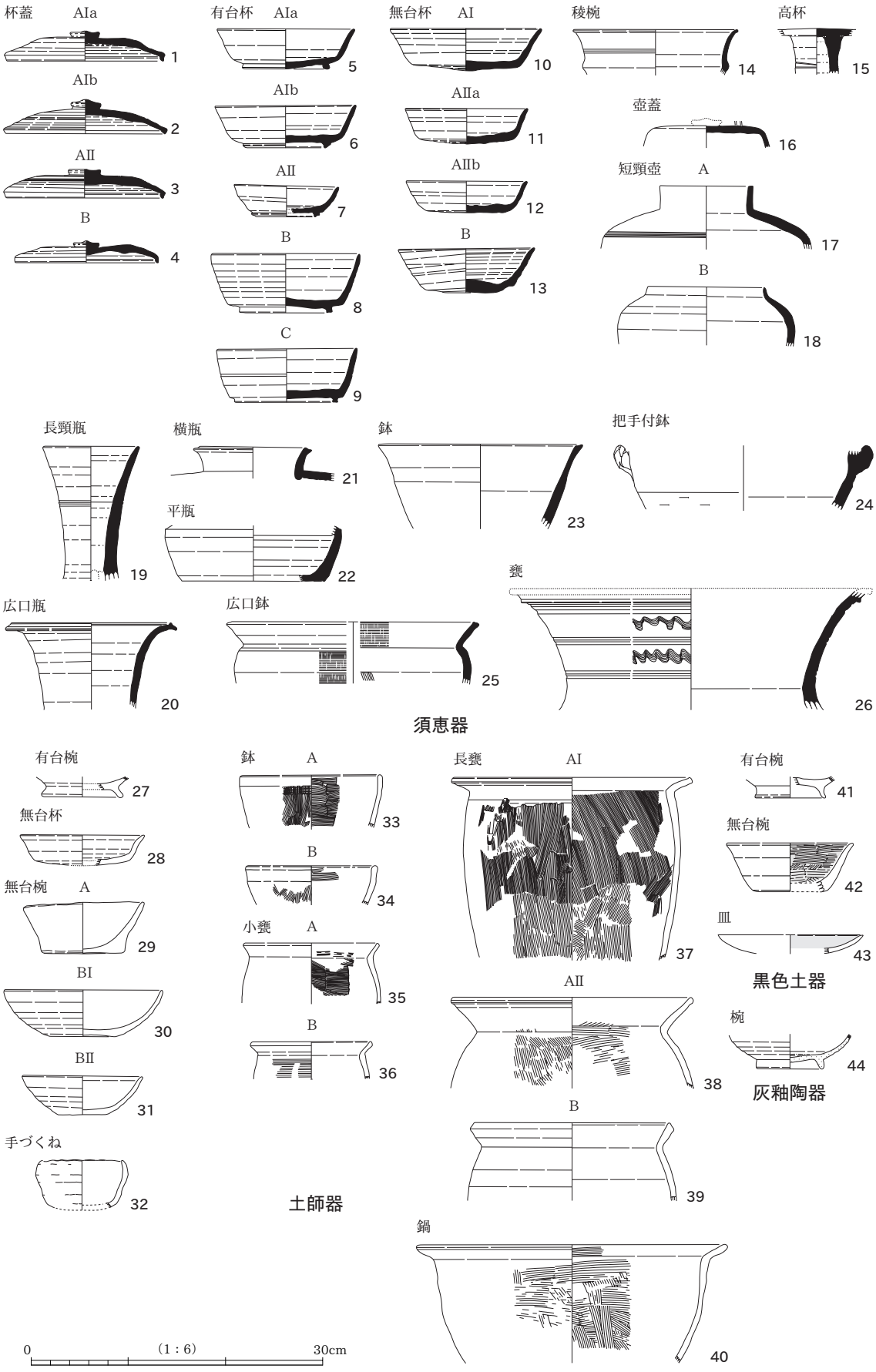
鉢（33・34）　破片資料のみであるが、口縁部が直線的に立ち上がるＡ（33）、内湾気味に開く浅いＢ（34）に分けた。

小　甕（35・36）　非ロクロ成形のものをＡ（35）、ロクロ成形のものをＢ（36）としたが、ほとんどが非ロクロ成形である。

長　甕（37・38）　非ロクロ成形のものをA、ロクロ成形のものをＢとしたが、下層ではロクロ成形のものは判然としなかった。非ロクロ成形のものは、最大径が口縁部にあり、体部があまり膨らまないＡＩ（37）、口縁部が「く」の字状で、体部が膨らむＡⅡ（38）に分類した。

鍋（40）　非ロクロ成形のみで、器形がある程度わかるものは1点だけである。

甑　ここに図を示さなかったが、底部片が1点（図版43－110）出土した。



第６図　古代の土器分類図

2）分布状況（第7図・第2表）

C区下層の土器は整理箱で13箱出土した。重量は約56kgで土師器が約89％を占める。これらは洪水性堆積物と考えられるⅣ～Ⅵ層に覆われて出土し、土器様相からは時期が8世紀初頭～中葉に限定されている。また、調査区内全体から均一に出土するのではなく、偏りを持って出土した。出土量の多いところを見ると、24DにはSC49とSC119が、25DにはSC93が、24Eから25Eにかけては SD113が、26Bから26CにかけてはSB4に伴うと考えられるSC91があり、それぞれ多くの土器が出土した。一方、27A～F以東は遺物量が極端に少なく、集落の東への広がりがないことが予想される。

3）遺構出土土器

SD113（図版40－1～23、図版77）

1～11・13～17は須恵器である。1・2は杯蓋ＡⅠａである。1の天井部はロクロケズリが施されない。つまみは扁平で、中央が突出する。また、器面の膨らみが顕著である。2は広い天井部にロクロケズリを施す。口縁端部は外反気味に垂直に落ちる。つまみは扁平で、中央はわずかに突出する。内面に墨痕と摩耗痕が認められる転用硯である。破片の一部はSD98から出土している。

3・4は有台杯Ｃである。3は体部から口縁部へ直立気味に開く器形で、体部外面に沈線が1本巡る。全体に丁寧なつくりで、体部外面と底部にロクロケズリを施す。破片の一部はSC91から出土している。4は口縁部がわずかに外反し、高台は外端接地する。体部外面の沈線は1本で、同下部と底部にロクロケズリを施す。胎土・焼成等から1とセット関係となる。破片の一部はSD609・SC49から出土している。5は有台杯ＡⅠａである。高台は内端接地で、体部下部に稜を持たない。7・8は有台杯の底部片で、高台は内端接地である。

9は無台杯Ｂである。にぶい褐色を呈するもので、ロクロナデによる凹凸が顕著である。10・11は無台杯ＡⅡである。10は生焼けのもの、11は器厚が全体に厚く、胎土に砂粒を多量に含む。13・14は無台杯ＡⅡａである。14は内面全体と外面の一部に漆膜が付着している。6は杯の口縁部片である。

15は壺蓋と考えられるもので、つまみと口縁部が残存しない。広い天井部には沈線が2本巡っている。16は広口瓶の口頸部、17は長頸瓶の体部と考えられる。

12・18～22は土師器である。12は無台杯で、器面の剥落が著しく調整等判然としない。18～21は長甕・小甕の口縁部片で、18は長甕ＡⅠ、19は長甕ＡⅡ、20は小甕A、21は小甕Ｂである。22は小甕と考えられる底部である。23は無台椀で、甕の体部下部を転用した可能性がある。

SD114（図版40－26、図版77）

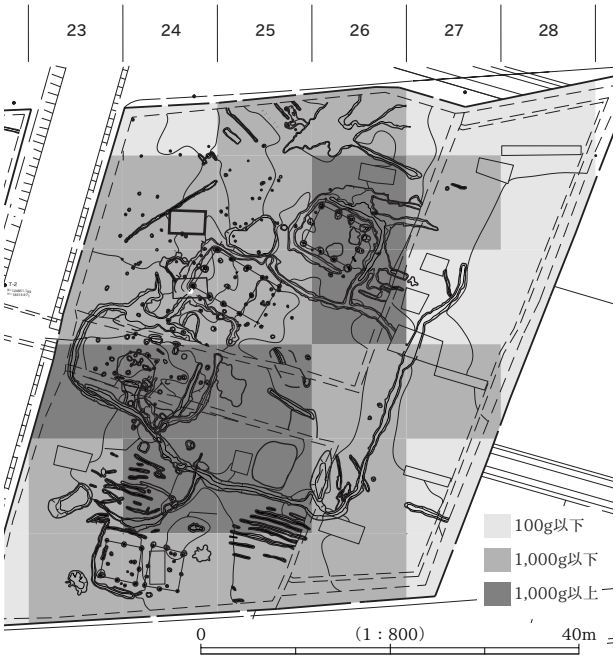
26は生焼けの須恵器無台杯で、深みのある大きいタイプである。

SD117（図版40－24・25、図版77）

24・25は須恵器である。24は杯蓋ＡⅠａの口縁部～体部片で、つまみが残存しない。垂直に落ちる端部の突出は小さい。焼成が良く、淡い褐色を呈するのが特徴である。25は有台杯ＡⅠｂで、高台は内端接地である。

SD141（図版40－27、図版77）

27は須恵器の有台杯ＡⅠｂである。台形状を呈する高台は内端接地である。



第７図　C区下層出土土器分布図

須恵器

	22	23	24	25	26	27	28
A							
B		140			623		27
C		64	100	7	151		
D		227	1,794	1,024	6		
E		41	434	972	16		12
F		187	149	89			

合計　6,063 g

土師器

	22	23	24	25	26	27	28
A		29	30	184	117		
B		41	958	183	2,582	176	
C		395	648	626	1,956	4	
D		1,718	17,481	11,343	977	179	
E	4	683	2,294	4,521	621	60	
F		35	1,553	454	164		

合計　50,016 g

第２表　C区下層出土須恵器・土師器
グリッド別重量（g）

SD158（図版40－34、図版77）

34は須恵器の杯蓋ＡⅠである。水平な天井部から屈曲がなく口縁部へ至る器形で、口縁端部の突出は小さく、三角形状を呈する。つまみは扁平で、中央部はわずかに突出する。

SD170（図版40－28～33、図版77）

28～30は須恵器である。28は有台杯ＡⅠｂで、上述の25とつくりが良く似る。また、破片の一部はSC119からも出土している。29は有台杯ＡⅠａの底部片である。30は長頸瓶の口頸部で、端部を丸くおさめる。外面中央に２本の沈線が巡る。

31～33は土師器である。31は小型鉢形の手づくね土器、32は甕の底部、33は小型の鉢の底部片である。

SD172（図版40－38～40、図版77）

38は須恵器無台杯ＡⅡａの底部片である。39・40は土師器である。39は長甕ＡⅠの口縁部片で、端部は丸くおさめる。40は土師器甕の底部片である。

SD601（図版40－37、図版77）

37は土師器小甕Ａの口縁部～体部片である。口縁端部内側はヨコナデにより弱く突出する。

SD606（図版40－36、図版77）

36は土師器小甕Ａの口縁部片である。口縁端部は広く面取りされる。

SD629（図版40－35、図版77）

35は須恵器の無台杯ＡⅡｂで、口縁端部はわずかに外側へ屈折する。焼成が良く硬質で、淡褐色を呈する。

SC90（図版41－53・54、図版78）

53は須恵器の有台杯ＡⅠａである。54は土師器の甕の底部片である。

SC91（図版41－41～48、図版77・78）

41～44は須恵器である。41・42は杯蓋Ｂで、本遺構のみからの出土である。41は天井部に平坦面を

持つもので、端部の突出は小さい。つまみは扁平で小さく、中央がわずかに突出する。42は断面が山笠状のもので、端部の突出は小さく、三角形状を呈する。つまみは扁平で、中央が突出する。転用硯である。43は無台杯Ｂである。破片の一部はSD607からも出土した。ロクロナデによる凹凸が顕著で、色調が赤褐色を呈するのが特徴である。44は有台杯の底部片で、高台の接地面はほぼ平坦である。

45～48は土師器である。45～47は長甕である。45は最大径が体部にあり、口縁部は端部近くから外側へ強く屈曲する。胎土には粗い砂粒が多量に含まれ、器面に表出する。46・47は口縁部片で、46はくの字状に屈曲し、端部は面取り、47は緩やかに外反し、端部は丸くおさめる。48は小甕と考えられる。

SC94（図版41－49～52、図版78）

49・50は須恵器である。49は杯蓋Ａで、内面に墨痕と摩耗痕が認められる転用硯である。50は深みのある小型の有台杯と考えられる。51は黒色土器の無台椀である。広い底部から体部は開き、端部近くで弱く外反する。52は土師器の鉢と考えられる底部片である。

SC95（図版41－56～60、図版78）

56～60は須恵器である。56・57は杯蓋ＡⅠａで、つくりが良く似る。口縁部外面にはロクロナデによる窪みが3本あり、端部の突出は小さく三角形状を呈する。焼成は良く、胎土には比較的多く砂粒を含む。57は内面に墨痕と摩耗痕がある転用硯である。

58は無台杯ＡⅠである。口径・底径ともに大きく深みのあるもので、底部外面が突出する。破片の一部はSC49から出土している。59は無台杯ＡⅡａで、ロクロナデによる凹凸が口縁部～体部外面で顕著である。60は杯の口縁部片である。

SK162（図版41－55、図版78）

55は土師器の甕と考えられる底部片で、外面が煤けている。

SK196（図版41－62、図版78）

62は須恵器の有台杯ＡⅠで、高台は内端接地である。

24DP2（図版41－63・64、図版78）

63は須恵器の無台杯ＡⅠと考えられる底部片である。底部の器形・調整が上述の58に似る。64は土師器鉢の口縁部片である。外面がヨコナデ、内面がヨコ方向のハケ目調整で、端部は丸くおさめる。

24DP7（図版41－61、図版78）

61は須恵器の杯蓋ＡⅠである。天井部にロクロケズリを施し、口縁端部は外反気味に内側に落ちる。つまみは扁平で、中央が突出する。内面に墨痕と摩耗痕が認められる転用硯である。

SC49（図版42－65～70、図版78）

65・66は須恵器で、65は体部外面に2本1組の沈線が2条巡る杯蓋ＡⅡ、66は杯蓋ＡⅠａである。65の体部外面はつまみ付近が未調整、2条の沈線間はロクロケズリを施す。比較的厚い口縁端部は内側に落ちる。つまみは扁平で、中央がごくわずかに突出する。66は口縁端部が外反気味に内側に落ち、つまみは扁平で、中央がやや突出する。

67～70は土師器で、67は長甕ＡⅡ、68は鍋、69は小甕Ａ、70は甕と考えられる底部である。

SC119（図版42－71・72、図版78）

71・72は土師器である。71は長甕の口縁部片で、端部は屈折して立ち上がる。72は長甕ＡⅠで、胎土には粗い砂粒を多量に含む。

SC93（図版42－73～84、図版78・79）

73・74・76～81は須恵器である。73は杯蓋ＡⅠａで、口縁部内面にロクロケズリを施す。つまみは扁平で、中央はわずかに突出する。胎土には粗い砂粒を多く含む。74は有台杯Ｃである。体部から口縁部へ直立気味に開く器形で、体部外面に沈線が2本巡る。全体に丁寧なつくりで、体部外面と底部にロクロケズリを施す。口縁端部はわずかに肥厚し、高台は外端接地する。79は有台杯ＡⅠｂで、焼成良く硬質である。80は有台杯ＡⅡである。底部は水平で、高台は内端接地である。また、破片の一部はSC119から出土した。

76～78は無台杯ＡⅡｂである。76は底部と体部の境が比較的明瞭で、口縁部が外反し、内面底部が渦巻き状である。焼成が良く硬質で、胎土に粗い砂粒を多量に含む。76・77は法量が近似し、つくりも共通する。81は杯の口縁部片で、79につくりが似る。

75・82～84は土師器である。75は無台杯で、底部は丸底状である。83は甕ＡⅠで、口縁端部は面取り、口縁部外面は突帯状となる。84は甕ＡⅡで、口縁端部は丸くおさめる。82は甕の底部片である。

4）包含層出土土器

須　恵　器（図版42－85・図版43－86～102、図版79）

85は甕の口縁部片である。外反する長い口縁部で、口縁部上端付近に突帯が巡っていたと考えられる。口縁部外面には1本、ないし2本の沈線3段、6本1単位の波状文が2段、交互に施文されている。文様施文はロクロナデののちに行われている。

86・87は杯蓋ＡⅠｂである。87は口縁端部の突出が小さく、三角形状を呈し、つまみは中央部が突出する。SD158出土34につくりが良く似る。内面に墨痕と摩耗痕が認められる転用硯である。

88～94は有台杯である。88はＡⅠｂ、89はＡⅠａで、高台は内端接地する。90はＡⅠで、比較的小さい高台は内端接地する。91はＡⅠａで、底部が高台より極端に突出する。色調は褐灰色を呈し、砂質の胎土には砂粒を多量に含む。胎土・調整等、SD113出土の11と近似する。92は底部が残存しないがＡⅡと考えられる。内面には自然釉がかかり、体部は黒色を呈する。93はＡⅠａ、94はＡⅠｂの底部片である。

95～100・102は無台杯である。95・97・98はＡⅡａ、96・100はＡⅡｂである。95の色調は青灰色で、口縁部外面のみ重ね焼き由来の濃青灰色を呈する。98は底径と口径の差が少なく、器高の低いタイプである。99は95と色調、胎土、調整がよく似る。100は胎土に多量の砂粒を含む。102は生焼けである。

土　師　器（図版43－103～110、図版79）

103は無台杯で、口縁端部付近で外側へ屈折する。104は長甕ＡⅠで、口縁端部は面取りする。105は長甕ＡⅡで、口縁端部の面取りは弱い。106は小甕Ａである。107は甕の底部片で、外面に木葉痕が残る。108は鉢で、口縁部は外反し、端部は尖っている。109は鉢Ａである。外面はタテ方向のハケ目ののち端部付近をヨコナデ、内面はヨコ方向のハケ目で、端部は面取りする。110は甑の底部片である。

古式土師器（図版43－111、図版79）

111は壺の口縁部片で、古式土師器の出土はこの1点のみである。27D出土であり、流れ込んだ遺物の可能性が高い。

B 石 製 品

砥　石（図版44－112～114、図版79）

112は24D3より出土した。一方が肉厚で、他方が細い直方体である。砥面は4面で、正面と両側面に細く浅い溝が複数あり、特に左側面に鋭利で深い溝がある。長さ11.9cm、幅5.1cm、厚さ4.5cm、重さ353g、石材は砂岩である。113は24D5から出土した。断面が方形を呈する直方体である。砥面は4面で、右側面の砥磨が顕著である。裏面に細く浅い溝が複数ある。長さ8.0cm、幅3.4cm、重さ185g、石材は凝灰岩である。114は26E1より出土した。砥面は4面ある。上端部に断面が箱型の浅い溝状の工具痕が認められる。長さ5.9cm、幅2.5cm、厚さ1.4cm、重さ242g、石材は砂岩である。

C 木 製 品

ここでは柱根を除く木製品について説明する。なお、木簡については第Ⅶ章1Cで、考察も含めて詳しくふれることとする。

1）遺構出土の木製品

SD113（図版44－115～121、図版80）

115は完形の鎌の柄で、遺存状態も良好である。整形は全体に粗い。側面は幅広の柄元から、背面側が開く弱い弧状となり、柄尻に山形の突起をつくる。着装部分は孔でなく上に開いており、また釘孔がない。長さ42cm、幅1.8cm、厚さ1.7cm、着装部の長さ10.6cm、幅0.6cmである。樹種はコナラ亜属である。

116は刳物の長方形槽である。薄く平坦な底部から厚い口縁部が斜めに立ち上がる。117は楕円形、あるいは小判形をした曲物の底板である。120は円板の中心に方形の孔をあけたもので半分を欠損する。蓋板と考えられる。121は曲物の底板と考えられる。118はヘラ状、119は長方形を呈するが使途不明である。

SD165（図版44－122、図版80）

122は棒状のものに3か所孔が穿たれている。何かを装着するための孔ではなさそうである。

SK118（図版45－123・124、図版80）

123は完形と思われる棒状のもので、一面はとくに丁寧に整形されている。一方の先端を尖らせていて、もう一方には1孔が穿たれている。長さ37.6cm、幅、厚さが1.6～1.7cm、樹種はスギである。柄杓等の柄にも見えるが、断定できない。124も一方の先端を尖らせている。

SK157（図版45－127、図版80）

127は割材を断面三角形に切り、一方の先端を尖らせ、もう一方を斜めに切断している。尖らせた側の先端は焼けこげている。樹種のオニグルミはC区下層の掘立柱建物に多用されているものである。

SK631（図版45－125、図版80）

125は棒状のもので、一方の先端をわずかに尖らせ、もう一方に1孔が穿たれている。

2）包含層出土の木製品（図版45－126・128、図版80）

126は建築部材と考えられる。断面形は先端部で方形、基部で長方形を呈する。

128は組み合わせ式のヤスの部品と考えられる。断面形が楕円ないし円形を呈し、一方が反り、両端がわずかに尖っている。中央からやや下側は抉れており、紐がかけられるようになっている。長さ19.3cm、幅1.5cm、厚さ0.9cm、樹種はスギである。

D　掘立柱建物部材

掘立柱建物部材の説明における用語は主に青田遺跡報告書［加藤・猪狩2004］の記載にしたがった。

SB3（図版45－129・130・図版46－131～134、図版80）

129は丸材を楕円形に加工したもので、下端部の側面は二面加工により逆台形を呈する。先端に向かって加工痕が並び、先端は切断後未加工である。130は丸材を使用したもので、下端部の側面は二面加工により逆台形を呈する。下端部側面の片側は先端に向かって加工痕が並ぶ。もう片側の側面と先端面は加工痕が判然としない。131は確認調査で発見されたもので、本調査で取り上げた。樹芯部からの割材を円形に仕上げたもので、下端部の側面は二面加工によりやや偏った逆三角形となる。先端に向かって加工痕が並ぶ。132は丸材を使用したもので、下端部はほぼ平坦に仕上げられている。縁辺部に加工痕が並ぶ。133は樹芯部からの割材を楕円形に加工したもので、下端部の側面は二面加工により逆台形を呈する。先端に向かって加工痕が並び、先端は切断後未加工である。側面にも先端に向かう加工が見られる。134は樹芯部からの割材を円形に加工したものである。下端部の加工面は1面であるが、側面観は逆台形になる。また、下端部付近の側面にも1か所加工痕がある。報告外のものとしては、24CP1は割材を断面楕円形に加工。二面加工で、下端部はやや偏った逆三角形である。25CP11は丸材を使用したもの。一面加工で、下端部はやや偏った逆三角形である。24CP40は割材を断面楕円形に加工。二面加工で、下端部は逆台形、先端は切断後未加工である。

SB4（図版46－135～138、図版81）

135は今回の調査で出土した中でもっとも重いもので、丸材を楕円形に加工している。下端部の側面は先端部が広い逆台形を呈する。先端部は明瞭でない二分する稜線に向かって加工痕が並ぶ。先端側面にも加工がみられる。136は丸材を楕円形に加工したもので、下端部の側面は先丸の三角形を呈する。137は割材を円形に加工したもので、下端部の側面観は二面加工により逆三角形となる。先端に向かって加工痕が並ぶ。138は割材を丁寧に楕円形に仕上げたもので、下端部の側面はやや偏った台形状を呈する。報告外のものとしては、26CP5は丸材を断面楕円形に加工したもので、下端部側面は二面加工で逆台形となり、先端は切断後未加工である。26CP6は丸材を使用したもので、下端部側面は二面加工で逆三角形を呈する。

SB5（図版47－139～144、図版81）

139・142・143は割材を丁寧に加工し、断面を長方形状に仕上げたものである。先端が縁辺部に位置するので、下端部は片側に偏った逆三角形を呈する。先端の加工は断面長軸に沿った一方向から施されている。

140・141・144は割材を加工し、断面を楕円形状に仕上げたものである。下端部の側面は二面加工によりやや偏った逆三角形となる。先端に向かって加工痕が並ぶ。

SB6（図版47－145・146、図版81）

145は丸材を使用し、下端部の側面は二面加工により逆三角形となる。146も丸材を使用したもので、下端部はほぼ平坦に仕上げられている。145・146ともトネリコ属の細い丸材である。

第Ⅴ章　上層の調査

ここではＡ区、Ｂ区およびＣ区上層で調査した遺構遺物を上層の調査として報告する。上層では８世紀中頃以降、古代、中世、近世にわたる遺構遺物を調査した。

１　遺　　構

Ａ　概　　要

上層では掘立柱建物跡５棟、土坑26基、井戸跡10基、畑跡２か所のほか溝、ピットなどを調査した。これらは古代から近世にわたると考えられるが、遺物を伴わず時期の明らかでないものが大半である。Ｂ区北側の17～18・Ａ～Ｂグリッドでは多量の土器が出土する土坑が５基検出された。居住域に伴う廃棄土坑と思われ、時期は出土土器から８世紀中頃～後半であろう。南側には畑跡と推定される溝群があり、この土坑群が伴う居住域は調査区の北側に展開しているものと思われる。畑跡は、16～18・Ａ～Ｄグリッドの30m四方ほどの範囲で300本を超える溝が密集して検出された。溝はほぼ東西・南北方向に直交しており、複雑に切り合っている。出土遺物から８世紀後半のものと思われるが、北側の土坑群出土土器と一部時期が重なる。切り合い関係から北側の土坑群より畑跡の方が新しい。

溝跡の西側12～15・Ｂ～Ｃグリッドでは柱穴と思われるピット多数と井戸跡などの土坑が検出された。出土遺物は９世紀以降のものが目立つようになり、前述の土坑群や畑跡よりも新しい集落と思われる。ここでは掘立柱建物跡が４棟検出されているが、主軸方向・柱穴埋土の違いから少なくとも２時期の変遷がうかがえる。この範囲からは中世の遺物も出土している。県道を挟んだＡ区東側で検出されたピット、溝なども一連の遺構と考えられる。Ｂ地区８～13列南側ではSD3・SD6・SD13等の大型の溝を中心として遺構が検出された。SD6は昭和の区画整理前まで機能していた水路である。SD13からは中世の土器がまとまって出土している。SD6とSD13は、一部が平行し、一部は重複しており、連続して構築された可能性がある。Ａ地区西側では溝を中心として遺構が検出された。Ａ区のSD58はSD13と一連の溝と考えられ漆塗りの椀が出土した。

Ｂ　各　　説

上層で調査された遺構は古代から近世にわたるものと思われるが、遺物を出土せず時期が明確でないものが大半である。したがって、種別ごとに報告することとし、出土遺物などから時期の判明したものについては個別に記すこととする。また、記述方法はＣ区下層に準ずるため、ここでは記述方法の説明は省略し、概要と各説を記述する。なお、上層の遺構各説はＡ区、Ｂ区の順に掘立柱建物跡、土坑、井戸跡、畑跡、溝の種別ごとに主要なものについて行う。

１）Ａ　　区

掘立柱建物跡

SB7（図版20・31・68・69）　9A・B、10Bグリッドに位置する側柱建物跡である。南東側が県道下

調査区外になるため、規模は不明であるが、桁行４間（7.4m）以上、梁間２間（6.1m）で、平面形は長方形になると推定される。主軸方向はＮ－68°－Ｗで、柱間寸法は桁行方向2.22～2.7m、梁間方向2.8mである。北西隅柱穴と9BP10上半が撹乱により壊されている。柱掘形は平面形が方形、長方形もしくは長楕円形で、長径52～84cm、深さ28～51cm、埋土は灰色～暗灰色粘土（粘質シルト）である。9AP1、9BP9では柱痕が確認できた。10BP1、9BP8では柱根が遺存しており、樹種はカツラとトネリコ属であった。出土遺物が少ないため時期は不明であるが、柱穴掘方の形状、周辺の包含層などから出土した遺物をみると９世紀代頃の古代のものの可能性が高い。建物方向からSB1と同時期と思われる。

土　　坑

SK189（図版16・17）　4C12に位置する。平面形は不整形で、長径1.4m、短径0.9cm、深さ28cm、断面形は台形状である。埋土は単層で、褐色シルトで砂が混じりⅣ層に類似する。

SK181（図版18・19）　5F1に位置する。平面形は長方形で、長径1.0m、短径0.7m、深さ15cm、断面形は弧状である。埋土は２層に分層され、レンズ状に堆積している。暗褐色シルトで、２層は炭化物が多い。

SK575（図版20・21）　8C25に位置する。平面形は楕円形で、長径1.1m、短径0.7m、深さ30cmである。断面形は弧状で、５層に分層される。埋土は砂質シルトがレンズ状に堆積する。

SK576（図版18・19）　7D23に位置する。平面形は円形で、長径1.1m、短径0.9m、深さ18cmである。断面形は台形状で、底面中央がやや凸となる。埋土は単層である。

SX65（図版16・17）　1D4から1D10に位置し、長径2.1m、短径1.7m、深さ17cmで、不整形な平面形の遺構である。断面形は円弧状で埋土は２層に分層されたが、１層の厚さは非常に薄い。埋土はⅣ層に由来する明灰色シルトで、遺構確認が非常に難しかった。SX65周辺にはSX64、SX66、SX75、SX76、SX710など、SX65に類似する遺構がある。これらは埋土がⅣ層に類似し、遺構確認がきわめて難しいが、Ⅳ層に比べて砂を多く含んでおり、認識することができた。側壁の傾斜が緩く人為的な遺構でない可能性もあるが、埋土が認識可能で土坑状の落ち込みとして掘り上げることができたことから性格不明遺構としておく。

畑　　跡（図版20・21）

８・9A、７～9Bグリッドでは、幅0.2m前後、深さ20cm以下の溝、SD556・557・559・561・562・563・565・567・568・571・572・573・574が東南東方向に平行している。これらはいわゆる畝状小溝と呼ばれるもので、畑跡と考えられる。埋土は粘質シルトの単層のものが大半である。耕作痕跡と考えられる底面の凹凸などは確認できなかった。ほかの遺構との新旧関係ではSB7やピットより古い。

溝

SD58（図版16・17・18・39・76）　1D22～7D21に位置する東西方向の溝で、位置関係や出土遺物などからSD13と同一の溝の可能性がある。幅は約1mであるがもっとも広いか所では1.6mほどになる。断面形Ｕ字状もしくはＶ字状で、深さ約40cmである。埋土は暗灰色粘土で単層を基本とする。西方向の調査区外に法線に沿って延びたため、調査区西側にＡ～Ｉの９か所のトレンチを設定して追加調査

を行った。その結果、Ａ～ＣのトレンチではSD58を確認できたが、その先のトレンチでは検出できなかった（図版39）。この結果、調査区から西に約35m延びることは確実であるが、その先は、途中で溝がとぎれるのか、トレンチの間を抜けているのかは不明である。あるいは現在の農道の下に沿って西に続くのかもしれない。ほかの遺構との新旧関係は、SD60・63・85・184・185・186より新しく、SD61より古い。遺構からは中世の漆塗り椀が出土しており、中世の溝と考えられるが、周囲の包含層から混入したと思われる古代の遺物も出土している。

SD60（図版16・17）　調査区北西端1A13に発し調査区内を南北に走るが、徐々に浅くなり2E25以南では検出できなかった。幅約1.2mで、断面形は台形状である。埋土は明灰色土で２層に分層され、自然埋没と思われる。SX76、SD85より新しく、SD58・61より古い。

SD61（図版16・17・76）　1D17から2E5に位置する。全長16m、幅0.7m、深さ80cmで、断面形は弧状である。埋土は２層に分かれる。1D25内でSD58を切ることがSD58の断面から確認されたが、周辺が撹乱されていたため、平面の確認ができないまま掘り進めてしまい、結果的にSD58内で確認することができなかった。SD58・60・86より新しい。

SD62（図版16・17）　1E2から2E7に位置する。全長10.8m、幅0.8m、深さ7cmである。断面形は浅い台形状で、埋土は単層である。調査区西端の1E2から東に向け進むが、徐々に浅くなり撹乱以東では確認できなかった。SD63より古い。

SD63（図版16・17）　1E7から1E5に位置する。全長10m、幅0.6m、深さ15cmで、断面形は弧状である。埋土は２層に分層され、レンズ状に堆積する自然埋没土である。調査区西端の1E7から東に向け進むが1E10内で北に方向を変え1E5に至りSD58によって切られる。SD58より古くSD62・89より新しい。

SD81（図版16・17）　1A14から2A16に位置する。全長4.5m、幅0.7m、深さ8cmで、断面形は弧状である。埋土の上部は一部撹乱され、底は凹凸が激しい。SD82・146・147・151・192は方向が同じで、遺構の規模・形状・埋土が類似しており、一連の溝の可能性が高い。

SD152（図版18・19）　5B6から4C4に位置する。全長10m、幅0.5m、深さ25cmで、断面形は箱形である。埋土は単層である。

SD184（図版18・19）　4E3から5E7に位置する。全長7.7m、幅0.7mで、埋土は単層である。底面は凹凸が激しい。5E7でSD58と重複し、本溝の方が古い。

SD186（図版18・19）　4D19からほぼ東西にSD58と平行し、5D24でSD58と重複する。全長9.2m、幅0.46mで、断面形は台形状で、埋土は単層である。底面には凹凸が認められる。SD58より古い。

SD188（図版16・17）　4C13から4C18に位置する。全長4.4m、幅0.4m、深さ10cmである。埋土は褐色シルトの単層で、地山であるⅣ層に類似している。

SD191（図版18・19）　5A25から6C6に位置する。6C6で暗渠に壊され、その先は検出できなかった。全長12.4m、幅0.5mで、断面形はＵ字状で、埋土は単層である。SD192・SD149より古い。

SD558（図版20・21）　9B14から10B1に位置する全長5.32m、幅40cm、深さ6cmの溝である。断面形は弧状で、埋土は単層となる。北端はSD569と重複し、本溝の方が古い。南端は撹乱で壊されている。

SD560（図版18・19・20）　6A23から9B9に位置し、東西方向に延びる溝である。途中7B3で東北東に屈曲し、8A22で南東方向に約90°屈曲する。さらに8B9で真東に向きを変える。規模は全長

32.9m、幅0.3～0.8mである。深さは西側で38cmであるが、東に行くほど浅くなり、9B6では14cmとなる。断面形は西側が箱状、東側が半円状で、埋土は単層である。SD563とSD568より新しい。

SD564（図版18・19・20）　7A16から9B13に位置し、東南東方向に延びる全長24.5m、幅48cm、深さ14cmの溝である。断面形は弧状で、埋土は単層となる。西端は暗渠、東端は撹乱で壊されている。SD560とSD570より新しい。

SD569（図版20・21）　9A25から10B1に位置し、南南東方向に延びる全長4.7m以上、幅0.6m、深さ5cmの溝である。北端は試掘坑に壊されており、南端は県道下へ延びる。断面形は弧状で、埋土は単層である。SD558より新しい。

2）B　　区

掘立柱建物跡

SB1（図版24・32・68・69）　12・13Cグリッドに位置する側柱建物跡である。北西側が県道下調査区外になるため、規模は不明であるが、桁行4間（6.5m）以上、梁間2間（5.5m）、平面形は長方形になると推定される。主軸方向はN－60°－Wで、柱間寸法は桁行方向2.06～2.48m、梁間方向2.58、2.76mである。柱掘形の平面形は円形もしくは楕円形が多く、長径34～60cm、深さ30～60cm、埋土は明灰色～灰色粘土である。12CP4、12CP5では柱痕が確認でき、13CP9、13CP4では柱根が遺存しており、13CP9の樹種はスギであった。出土遺物は小破片のみで時期は不明であるが、建物方向と柱穴埋土からA区のSB7と同時期のものと思われる。

SB2（図版24・33・69・70）　13C・Dグリッドに位置する総柱建物跡である。桁行3間（7.0m）、梁間2間（3.9m）、平面形は長方形で面積27.7m^{2}である。主軸方向はN－10°－Wで、柱間寸法は桁行方向で2.18～2.46m、梁間方向で1.82～2.04mである。柱掘形の平面形は円形が多く、ほかに楕円形・不整形がる。長径32～48cmで、13CP5を除いて32～40cmにおさまるが、深さは15～63cmとばらつきがある。土層断面を記録した8基の柱穴のうち7基で柱痕を確認した。柱穴の埋土には灰色・黒褐色粘土粒を多量に含むⅣ層由来の土が、柱痕の周囲に充填されていた。13CP41では柱根が遺存しており、樹種はキハダであった。出土遺物は小破片のみで時期は不明であるが、SB1に比べ柱掘形が小さく、埋土も違うことから、時期が異なると考えられる。

SB8（図版24・34・69・70）　13C・Dグリッドに位置する総柱建物跡である。桁行2間（4.8m）、梁間2間（3.5m）、平面形は長方形で面積17.1m^{2}である。主軸方向はN－5°－Wで、柱間寸法は桁行方向で2.26～2.4m、梁間方向1.66～2.02mである。柱掘形の平面形は円形が多いが楕円形、方形もあり、円形のものは径24～26cmにまとまる。柱掘形は概してSB2よりも小さく、深さも9～39cmと浅い。土層断面を記録した5基の柱穴すべてで柱痕を確認でき、埋土は柱痕の周囲にⅣ層由来の土が充填されておりSB2に似る。出土遺物は小破片のみで時期は不明である。SB2と重複し、建物方向もほぼ一致することから、SB2と連続して構築されたと考えられるが、切り合いがないことから新旧関係は不明である。

SB9（図版24・34）　13B・Cグリッドに位置する庇付建物跡で、身舎の桁行3間（4.4m）、梁間1間（1.8m）、庇の出が0.9mである。平面形は長方形で庇を含め面積は11.9m^{2}である。主軸方向はN－85°－Wで、柱間寸法は桁行方向で0.95～1.74m、梁間方向で1.8mである。柱掘形は概して小規模で、平面形は円形が大半で、径22～35cm、深さ0.03～0.4mである。土層断面を記録した5基の柱穴すべてで

柱痕を確認でき、埋土は柱痕の周囲にⅣ層由来の土が充填されていた。出土遺物は小破片のみで時期は不明であるが、SB2・SB8と柱穴埋土が類似しており、同時期の可能性がある。

土　　坑

SK31（図版24・37）　14C9に位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状で、長径140cm、短径95cm、深さ35cmである。埋土は4層に分層され、Ⅳ層由来の明褐色粘質シルト、青灰色粘土を基本とするが、Ⅱ層に由来すると考えられる灰色粘土をブロック状に含んでいる。レンズ状堆積を基本とし、自然埋没と考えられる。

SK41（図版26・36）　16E22・23に位置する。平面形は楕円形で、長径144cm、短径112cm、深さ33cmである。断面形は弧状であるが途中に弱い段がある。東側をSK42に切られる。埋土は3層に分層され、レンズ状堆積で自然埋没であろう。2・3層は炭化物を少量含む。

SK42（図版26・36）　16E23に位置する。平面形は楕円形で、長径104cm、短径74cm、深さ34cmである。断面形は弧状で、南側壁は急角度で立ち上がり、北側壁は緩やかに立ち上がる。西側でSK41と重複し、本土坑の方が新しい。埋土は暗灰色粘土の単層である。

SK44（図版26・36・73）　17F1・7に位置する。平面形は楕円形で、長径184cm、短径124cm、深さ36cmである。底面はほぼ平坦で、壁面は急角度で立ち上がる。埋土は6層に分層され、ほぼ水平に堆積する。3・6層の炭化物純層と2・4層の粘土層がきれいな互層をなしており、埋土は人為的に形成されたものの可能性がある。3・4・6層には焼土が少量含まれるが、焼面は検出されなかった。また1層は重複するピットの可能性がある。埋土の状況が隣接するSK45と類似しており、同じ性格の土坑であろう。

SK45（図版26・36・74）　17E22に位置する。平面形は楕円形で、長径全長174cm、短径118cm、深さ36cmである。底面は平坦で、壁面がほぼ垂直に立ち上がる。埋土は3層に分層され、ほぼ水平に堆積する。3層は黒色炭化物層で、1・2層の粘土に覆われる。2・3層には焼土が少量含まれるが、焼面は確認できなかった。SK44と同じ性格の土坑であろう。

SK70（図版26・36）　17F15・18F17に位置する。平面形は不整形で、長径420cm、短径265cm、深さ36cmである。底面はほぼ平坦で、壁面が階段状に立ち上がる。埋土は2層に分層され、ほぼ水平に堆積する。1層は炭化物を多量に含み、2層は炭化物を少量含む。

SK71（図版28・36・74）　19D13・19に位置する。平面形は楕円形で、長径144cm、短径108cm、深さ63cmである。断面形は台形状で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は灰色粘質シルトの単層で、暗灰色粘土ブロックを多く含み、人為的に埋め戻されたと考えられる。

SK73（図版26・36）　16B7に位置し、北側を暗渠によって切られる。平面形は方形（推定）で、長径102cm、短径98cm以上、深さ31cmである。底面は平坦で、壁面がほぼ垂直に立ち上がる。埋土は3層に分層され、レンズ状に堆積し、自然埋没と考えられる。

SK77（図版26・36）　16B13に位置し、北側壁を暗渠によって切られる。平面形は円形（推定）で、長径158cm以上、短径152cm、深さ24cmである。断面形は台形状で、西側壁より東側壁のほうが立ち上がりは緩やかで、段がある。埋土は3層に分層され、レンズ状に堆積する。2層は炭化物を非常に多く含み、遺物（191～193）も多く出土した。

SK108（図版28・36）　22A1・22B2に位置する。平面形は楕円形で、長径200cm、短径150cm、

深さ20cmである。断面形は弧状で、埋土は3層に分層される。埋土は粘土がレンズ状に堆積し、1層には炭化物が多く含まれる。遺物（195）が出土している。

SK438（図版26・35・74）　18A21に位置し、西側がSD433と重複し、本土坑の方が古い。平面形は円形（推定）で、長径125（推定）cm、短径115cm、深さ18cmである。断面形は台形状で、3層に分層される。埋土はレンズ状で、1層は炭化物を含む。底面直上から完形の須恵器有台杯（197）が出土した。

SK439（図版26・35）　18A21・18B1に位置する。南側がSD400に、西側がSD433と重複し、いずれも本土坑の方が古い。平面形は楕円形（推定）で、長径200（推定）cm、短径130（推定）cm、深さ14cmである。断面形は台形状で、2層に分層され、レンズ状に堆積している。1層は炭化物をごく少量含む。

SK453（図版26・35）　17A23・24に位置する。南側を撹乱により失い、北側は調査区外へ延びている。平面形は方形（推定）で、長径200（推定）cm、短径180cm、深さ22cmである。断面形は台形状で、2層に分層される。埋土はレンズ状で、各層に炭化物が少量含まれ、1層は焼土も含む。遺物（194）が出土している。

SK544（図版26・35）　16A23・24に位置する。北側がSD375に、東側がSD692と重複し、いずれも本土坑の方が古い。平面形は円形（推定）で、深さ11cmである。断面は台形状で、埋土は単層である。

SK553（図版26・35・73・74）　17A24～17B5に位置する。遺構のほぼ中央を東西に撹乱が入り、東側がSK453、南側がSD383・385・386・398・399・400・413・416・432と重複しており、いずれも本土坑の方が古い。平面形は不整形で、長径550（推定）cm、短径450（推定）cm、深さ35cmである。断面形は台形状である。埋土は5層に分層され、レンズ状に堆積する。4層は炭化物を多く含む。2・3層を中心に遺物が多数出土していることから、遺物を投棄した土坑と推定される。SK553とSK554は隣接する土坑であるが、遺構確認作業においては両者を識別することが困難であった。これは、炭化物を多く含み遺物を大量に出土する土層が両者を覆って堆積していたためである。この土層を掘り上げた段階で、SK553とSK554を区別して調査した。

SK554（図版26・35・73・74）　17A19～17A25に位置する。遺構の大部分は北側の調査区外へ延びているため、平面形と規模は不明である。深さは30cmである。断面形は台形状と思われ、西側をSK453に、東側をSD521およびSD551に切られる。埋土は4層に分層され、レンズ状に堆積する。1層は炭化物を多量に含む。遺物が集中して多数出土していることから、遺物を投棄した土坑と推定される。

井　戸　跡

SK22（図版24・37・71）　14B3・4に位置する素掘りの井戸跡である。平面形が円形、断面形が台形状で、長径85cm、短径75cm、深さ70cmである。埋土は上半が黒褐色土、下半が灰色粘土を基調として7層に分層され、レンズ状堆積で自然埋没と考えられる。

SK29（図版24・37・71）　14B21に位置する素掘りの井戸跡である。平面形が円形、断面形がU字状で、長径105cm、短径95cm、深さ80cmである。埋土は黒褐色土を基調とし、4層に分層された。1～3層はレンズ状堆積で自然埋没と考えられるが、最下層の4層は土坑の下半分を埋める厚い埋土で、人為的に埋め戻された可能性がある。

SK30（図版24・37・72）　14B22に位置する素掘りの井戸跡である。平面形が不整形、断面形が台形状で、長径100cm、短径90cm、深さ70cmである。埋土は黒褐色土を基調とし9層に分層され、基本的にレンズ状堆積であるが、8層は厚く人為的に埋め戻された可能性がある。

SK37（図版24・37・71）　15C7に位置する素掘りの井戸跡である。平面形が円形、断面形がU字状である。平面は長径50cm、短径50cmと小型で、深さ80cmである。埋土は上半を黒褐色土、下半が灰色粘土を基調とし、6層に分層された。レンズ状堆積で自然埋没と考えられる。3・4層は地山由来のブロックを多く含む崩落土である。

SK46（図版24・38）　15C13・18に位置する素掘りの井戸跡である。平面形が円形、断面形が台形状で、長径80cm、短径75cm、深さ90cmである。埋土は黒褐色土を基調とし、5層に分層された。レンズ状堆積で自然埋没と考えられる。

SK47（図版24・37・72・74）　14B19・20・24・25に位置する素掘りの井戸跡である。平面形が円形、断面形が台形状で、長径200cm、短径175cm、深さ130cmである。埋土は23層に分層され、基本的にレンズ状堆積で自然埋没と考えられるが、20層以下は水平堆積である。20層は腐植層である。16層より上位は地山崩落土と暗青灰色粘土の互層となることから、自然埋没であることが確実である。埋土の傾きから東から埋まったものと思われる。

SK54（図版22・38・72）　12F22・23に位置する素掘りの井戸跡である。平面形が円形、断面形が箱状で、長径170cm、短径165cm、深さ140cmである。埋土は基本的に水平堆積であるが、黒褐色粘土と地山崩落土と考えられる明（赤）褐色粘土の互層を呈すことから、自然に埋没した可能性が高い。14層に分層された。12・13層は腐植土層で植物遺体を多く含み、木製品（370～372）が出土した。ただし、調査途中に遺構側壁が崩落したため、詳細な調査を行うことができなかったため、埋土はさらに細分可能だった可能性がある。

SK55（図版24・38・72）　13D8・13に位置する素掘りの井戸跡である。平面形が不整形、断面形が箱状で、長径95cm、短径90cm、深さ105cmである。埋土は暗灰色もしくは灰色の粘土を基調とし、12層に分層された。レンズ状堆積で自然埋没を原則とすると考えられるが、12層は水平堆積で土器や礫を含み人為的に埋め戻された可能性がある。また、7層は8～11層を貫くように堆積しており、水だめの痕跡の可能性がある。

SK56（図版24・38・73）　13D5・10、14D1・6に位置する素掘りの井戸跡である。平面形が円形、断面形が半円状で、長径210cm、短径195cm、深さ90cmである。埋土は黒褐色粘土と地山崩落土の赤褐色粘土の互層を基調とし、自然埋没と考えられる。井戸跡とするには深さの割に径が大きいが、埋土に地山崩落土が多いことを考えると、側壁が崩落しながら埋まった結果、このような形態になったと考えられる。

SK59（図版24・38）　15C11に位置する素掘りの井戸跡である。平面形が円形、断面形が箱状で、長径75cm、短径65cm、深さ80cmである。埋土は暗灰色粘土を基調とし、レンズ状堆積であることから自然埋没と考えられる。

畑　　跡（図版24・26～28、図版56・60・71）

15列東半～19列、調査区北縁～E列に位置し、300本を超える多数の溝が密集する。これらの溝は幅10～50cm、深さ5～25cmで、ほぼ東西・南北の2方向に平行して走っている。いわゆる畝状小溝が密集した状態であり、溝は形状から畑の耕作痕と考えられる。溝の断面形は台形状もしくはU字状のものが大半である。溝の分布密度は西端～17列西半まではやや薄いが、17列東半～18列は極めて濃い。また、東西方向の溝は17列西半以西に多く分布する傾向が見られる。溝の切り合い関係は非常に複雑で、

切り合いに矛盾のあるものも認められ、同一の溝が度重なる耕作の結果形成された可能性を考慮する必要がある。ただし、東西方向と南北方向の切り合いは東西方向が新しい傾向がある。溝の埋土は粘質シルトを基本として大半が単層で、まれに２層に分層できたが、色調にはバラエティがある。この層相のちがいは遺構地山のⅣ層の地下水の影響に起因すると思われる色調の変化に対応しており、基本的に同質の埋土であると考えている。分層可能な埋土はレンズ状に堆積している。埋土には、黒褐色ブロックやマンガン粒を多く含むものもあったが、均質な堆積を示すものも多かった。

17ラインとＤラインで土層断面図を作成した（図版27）。特にＤラインでは表土から地山まで通した断面図を作成することができ、溝の確認面や耕作土の可能性のある土層に関する情報を得ることができた。断面では溝は古代以降の遺物包含層であるⅡ層の下面を確認面とすることができるが、溝の上部が削平され確認面が失われているか所もあった。また、Ⅳａ層とした溝の地山であるⅣ層に由来する褐色粘質シルトが確認できた。この土層は畑跡の範囲以外では確認できず、畑耕作土の可能性があるが、大部分は削平されており、断面で部分的に確認できたにすぎない。Ⅳａ層に完全に覆われている溝もあり、こうした状況から溝は畑の耕作痕と考えられる。ただし、埋土が比較的均質で、底面に凹凸等がなく耕作痕跡が確認されなかった点が問題点として残る。出土遺物は破片資料が多く時期が正確にわからないものも多いが、中世の土器と思われるものはなかった。

溝

SD3（図版20・21・75）　8F25から9E23に位置する全長12m、幅1.0mの溝である。断面形は台形状で、埋土は２層に分層でき、自然堆積層と考えられる。北側を撹乱、南側は暗渠により壊されている。SD35と平行して重複しており、本溝の方が新しい。

SD4（図版20・21・75）　9E15から9E19に位置する全長3.9m、幅1.6mの溝で、断面形は円弧状である。南側を撹乱に壊されている。埋土が共通で、形状・規模も類似していることから、SD3と同一の溝であると考えられる。

SD7（図版20・21・75）　9F18から9F23に位置する全長3.2m、幅0.9mの南北に延びる溝で、断面形は台形状である。埋土は単層である。調査区南側に延びる。

SD28（図版20・21・75）　9E23から9F14に位置する全長5.2m、幅0.8mの南北に延びる溝である。北側を撹乱によって壊されている。

SD35（図版20・21・75）　8F24から8F5・9F1に位置する全長13.2m、幅2.8mの溝である。断面形は円弧状で、埋土は２層に分層でき、自然堆積と考えられる。北端を撹乱に壊されている。SD3と平行する浅い溝である。東側上端はSD3によって切られており、SD3より古い。

SD6・SD13（図版22～24・75）　SD6は12G5～10D23に位置する溝である。埋土から古代・中世の遺物とともにプラスチック製品やビニールが出土したことから現代まで水路として機能していたことがわかる。SD6の埋土は７～８層に分層されたが、層相から大半は現代まで機能していた水路の際に堆積したものと思われる。SD13は13G1～３から北西にSD6と平行し、12E6・11でSD6と交わる溝である。断面形は弧状で、埋土は６層に分層された。埋土は砂を多く含むシルトおよび粘土層がレンズ状に堆積し、水路であったと考えられる。SD13からは新しい遺物は出土せず、立ち上がりおよび底部からは土師器皿を中心とする遺物（122～124・138～147）が出土しており、中世の溝と考えられる。10E6グリッド付近のSD6埋土最下層からは古代や中世の遺物が比較的まとまって出土したことから、この付近で

はSD6とSD13が重複している可能性が高い。このことから、SD13は中世には存在した水路で、その埋没後に平行してSD6が掘削され、現代まで機能していたと考えられる。また、これらの溝は12・13Gグリッドで調査区外南側に出るが、その先、調査区に沿って東に延びる様子が、航空写真のソイルマークで確認できる（図版56・57）。西側は県道下に延びるがSD13はA区のSD58に続いている可能性が高い。SD58では現代の遺物は全く出土していないことから、SD6は方向を変えて県道下沿いに調査区外に抜けていったのであろう。

SD9（図版22・23）　10E14から12F2に位置する全長16.4m、幅0.9mの溝である。断面形は弧状で、埋土は単層である。SD6より新しい。

SD14（図版22・23）　12F11から12G3に位置し、SD6にほぼ平行して走る溝である。全長6.9m以上、幅0.3～0.6m、深さ12cmで、南側は調査区外へ延びる。また12F22でSK54によって切られる。断面形は半円状で、埋土は単層である。古代・中世の土器（276・299・300）が出土しており、中世の溝と思われる。

SD24（図版22・23）　11D8から12E8に位置し、SD6とほぼ平行して、北西から南東の方向に走る溝である。規模は全長15.2m、幅0.6cm、深さ10cmである。断面形は台形状で、埋土は単層である。

SD18（図版24・25・75）　14A25～13F25に位置する。調査区を南北に縦断する溝で、全長53.0m以上、幅0.5～2.1m、深さ0.1～0.5mである。南側はさらに調査区外へ延びる。断面形は14C19を境に南側が弧状、北側が箱状となり、2～3層に分層される。埋土は粘質シルト層が南側でレンズ状、北側で水平に堆積する。SD32・14BP3より新しく、SK47より古い。

SD26（図版24～26）　15F16から17F16に位置し、東西方向に延びる全長19.1m、幅0.3m、深さ6cmの溝である。断面形は弧状で、埋土は単層となる。SD702と一連の溝と考えられ、SD27・701より新しい。

SD32（図版24～26）　13B22から16D19に位置する全長40.4m以上、幅0.3～0.8m、深さ12cmの溝である。ほぼ東西方向に延び、16D2で南へ約55°屈曲する。東端は撹乱で壊されている。断面形は弧状で、埋土は単層となる。土層断面を作成したか所では、溝の両側に板状の木が打ち込まれていた。SD39・462・464・465・476・478～482より新しい。

SD27（図版26・29）　16D23から16F17に位置し、南北方向に延びる全長18.6m、幅0.2～0.8m、深さ30cmの溝である。断面形は箱状で、埋土は単層となる。埋土は明褐色シルトで、マンガン粒を多量に含み、酸化鉄の沈着も多い。須恵器甕（200）が出土している。

SD43（図版26・29）　17D25から17G3に位置し、南北に延びる全長22.6m以上、幅0.3～1.0m、深さ34cmの溝である。南端は調査区外へ延びる。断面形は箱状で、埋土は単層となる。埋土はSD27と同様に明褐色シルトで、マンガン粒を多量に含み、酸化鉄の沈着も多い。

SD50（図版26・29）　18D15から18E15に位置する全長8.72m、幅0.5～1.0m、深さ34cmの溝である。断面形は箱状で、埋土は単層となる。埋土はSD27と同様に明褐色シルトで、マンガン粒を多量に含み、酸化鉄の沈着も多い。SD27・39・43・50は同じ規模の溝がほぼ等間隔で平行しており、何らかの関係のあった可能性がある。

SD68（図版26・29・75）　18A20から19D21に位置し、南北に延びる全長31.4m以上、幅1.3～2.4m、深さ60cmの大型の溝である。北端は調査区外に延び、南端は試掘トレンチで壊されているが、その先は確認できず、終わっていると考えられる。西側に畑跡があることから、これを区画する溝と考え

られる。断面形は箱状で、埋土は粘質シルトの水平堆積で、４層に分層され、２層はマンガン粒を多く含む。須恵器杯蓋・土師器甕が出土している。

SD51（図版28・29）　19F5から19F19に位置する全長8.0m、幅0.8m、深さ8cmの浅く不連続な溝である。断面形は弧状で、埋土は単層となる。SD72と平行する。

SD69（図版28・29）　21A20から21E24に位置し、南北に延びる全長43.8m以上、幅0.9～1.4m、深さ48cmの溝である。北端は調査区外へ延び、南端は21E3で25°屈曲し、市道下へ延びる。断面形は箱状で、埋土は2層に分層され、青灰色粘土が水平に堆積し、各層でマンガン粒を含み、酸化鉄の沈着も多い。

SD72（図版28・29）　19F25から20F1に位置する全長8.9m、幅0.6～1.1m、深さ18cmの溝である。断面形は弧状で、埋土は単層である。SD51と平行する。

SD107（図版28・29）　19B14から21B11に位置する全長15.1m、幅0.3m、深さ12cmの溝である。断面形は台形状で、埋土は単層である。SD106より新しく、SD355より古い。

SD109（図版28・29）　22B2から22B4に位置する。全長は東西方向が3.9m、南北方向が0.9m、幅は東西方向が22～42cm、南北方向が28cm、深さ8cmの規模である。断面形は台形状で、埋土は単層となる。須恵器無台杯（196）が出土した。

2　遺　　物

上層からは古代～近世の遺物が出土している。以下、古代の土器、中世の土器、木製品、金属製品、掘立柱建物跡部材の順で上層出土遺物を報告する。

A　古代の土器

1）概要と分類

上層から出土した古代の土器は約20箱である。上層出土の古代土器は調査区の主にA区・B区から出土し、C区における出土量は極めて少ない。土器の様相から上層出土古代土器は8世紀中頃～11世紀の年代幅がある。B区では調査区北側の17・18A・Bグリッド付近でもっとも遺物量が多く、掘立柱建物跡、井戸跡などの遺構が多かった14・15列がこれに続き、調査区南側では少なかった。また、10～12列では比較的時期の新しい遺物が目についた。A区はB区に比べると遺物量は少ないが、短頸壺などの須恵器貯蔵具が多い。また、8・9列は遺構が比較的多く、A区の中では遺物出土量も多いといえるが、撹乱を受けていたこともありB区に比べると少ない。

古代土器の分類はすでに第Ⅳ章第6図に示した。このうち上層から出土した器種は、須恵器が杯蓋、有台杯、無台杯、稜椀、高杯、壺蓋、短頸壺、長頸瓶、横瓶、平瓶、鉢、広口鉢、把手付鉢、甕、土師器が有台椀、無台椀、小甕、長甕、黒色土器が有台椀、皿、灰釉陶器が椀である。上層出土土器の各器種の概要は以下のとおりである。

須　恵　器

杯蓋（第6図1～4）　杯蓋の分類は基本的に下層と同じである。ただし、下層に比べると全体に小振りで、14cm以上をA類、14cm未満をB類とした。

有台杯（5～9）　下層同様、A・B・Cに分類した。

有台杯A（5～7）　口径が10～15cm、器高が3～5cmのもので、口径が13～15cmのAⅠ類と口径約10～12cmのAⅡに分類した。

有台杯B（8）　器高が6cmを超える深身のもので、1点だけ出土した。

有台杯C（9）　体部外面に1ないし2条の沈線が巡るもので、金属器模倣品とされている。

無台杯（10～13）　上層から出土したものはすべてAⅡ類で、口径12～14cm、器高3～4cmである。さらに丸底状のものをAⅡa（11）、平底状のものをAⅡb（12）に細分した。

稜椀（14）　1点出土したのみである。体部上半の破片資料で全体の器形は不明である。体部中程で稜を持って屈曲し、その上に沈線が巡っている。

高杯（15）　1点出土したのみである。杯部と脚の接合部付近の破片で全体の器形は不明である。脚外面に沈線が巡っている。

壺蓋（16）　3点出土した。いずれも破片資料である。

短頸壺（17・18）　口頸部の短い壺で、口頸部が直立するA類と口頸部の短いB類に分類した。

長頸瓶（19）　口頸部の長い細口の瓶で、口頸部のみが1点、体部のみのものが2点出土した。

横瓶・平瓶・鉢・把手付鉢・広口鉢（21～25）　須恵器貯蔵具で、横瓶が2点出土したほかは、いずれも図示した1点だけの出土である。

甕（26）　大半が体部破片で、全体の器形のわかるものはなかった。

土　師　器

有台椀（27）　2点出土した。いずれも高台が比較的高いものであった。

椀（30・31）　上層出土の椀はすべてロクロ土師器のB類である。口径15cm以上のBⅠ類と、15cm未満のBⅡ類に分類した。

長甕（39）　上層から出土した長甕はすべてロクロ成形の長甕Bであった。器形は口縁部が「く」の字状で、体部の膨らまないものであった。

小甕（36）　上層出土の小甕はすべてロクロ成形の小甕Bであった。

黒 色 土 器

有台椀（41）　高台部分の破片2点だけの出土であった。

皿（43）　皿は口縁から体部上半の破片1点だけの出土であった。

灰 釉 陶 器

椀（44）　灰釉陶器は椀の口縁部のみの破片1点と高台部のみの破片2点の出土であった。

2）遺構出土土器

遺構出土土器について遺物が多く出土した主要な遺構、畑跡を構成する遺構、その他の遺構（A区を含む）の順で報告する。

SK553（図版48－148～164、図版82）

SK533と隣接するSK554は炭化物を多く含んだ土層に覆われていたため、遺構確認の段階で両者を識

別することができなかった。この土層から出土した土器はSK553・554のどちらに帰属するのか判断できないため、SK553・554－1層出土土器として別に報告する。SK553の埋土はレンズ状で自然に堆積したと考えられ、出土遺物については若干時期幅がある可能性がある。遺物は埋土上部から多く出土し、土師器長甕の破片が特に多かったが、接合する破片は少なく図化したもの以外で器形が判明したものはなかった。148・149は須恵器無台杯でいずれも体部下半が丸いもので、148は底部が丸く、149は底部が平坦である。150～154は須恵器有台杯で、150は浅身で口径の小さいAⅡ類、154は底部を欠損するが深身で大型のC類で金属器模倣土器である。全体に体部下半が丸い器形のものが多い。152は高台が剥落しており、浅身で体部下半が膨らむが、ロクロ目や底部と体部の境界が明瞭である。SK533出土土器の中では形態と製作技法が特徴的で、202・233・234なども同じ特徴の土器である。155は稜椀で体部上半に沈線が巡らされている。土師器はいずれもロクロ土師器で、158・159は椀、160・161は小甕、162～164は長甕である。須恵器杯類は8世紀中葉頃の様相を示すと思われるが、ロクロ土師器の椀は9世紀以降出現する器種であり、出土土器には若干時期幅があると思われる。

SK554（図版48－165・166、図版82）

SK554は大型の土坑でその大半は北側調査区外になる。埋土は3層に分層され、レンズ状堆積である。SK554出土土器は土坑の東端からまとまって出土しており、一括性は高い。図示したもののほかに有台杯の底部が出土している（図版74）。図示した2点はいずれも須恵器無台杯で、底部が丸く、体部と底部の境界が不明瞭な器形である。器壁が比較的薄く、口径は12cmと小型である。

SK553・SK554－1層（図版48－167～176、図版82）

167～173は須恵器である。167・168は無台杯、169は有台杯である。168は糸切り底である。169は体部下半が丸く、体部と底部の境界が不明瞭である。170は横瓶、171は短頸壺、172は鉢、173は広口鉢である。170は頸部が外傾し、口縁が丸い。171は頸部が直立し、口縁が角ばり、肩に沈線が巡らされている。166・171・172はSK554西端の上でまとまって出土した。174は土師器小甕、175・176は土師器長甕である。175は頸部が短く、体部上半が外に膨らむ器形であろう。

SK47（図版49－177～187、図版82）

SK47は深さ約1.3mの井戸跡で、埋土はレンズ状に堆積している。遺物は、埋土の上層から中層にかけて出土しており、一括とはいえない。ただし、須恵器杯180は試掘調査で出土した埋土1～3層に帰属すると推定される破片と本発掘調査で中層から出土した破片が接合していることから、大きな時期差はないと考える。177～182・187は須恵器、183～186は土師器である。177・178は無台杯で、177は佐渡小泊産と考えられる。178は見込みにヘラによるナデ痕、底部には板目状圧痕がある。181・182は杯蓋で大小の2種がある。183・184はロクロ土師器の椀で183は底面がロクロケズリされている。185は土師器長甕で口縁がわずかにつまみ上げられている。

SK55（図版49－188～190、図版82）

SK55は径95cm、深さ105cmの井戸跡で、埋土はレンズ状堆積である。遺物は主に4～6層の埋土中層と埋土下層から出土した。埋土下半には水溜が存在した痕跡が見られ、埋土6層以上はこの水溜の痕跡を完全に埋めている。したがって、埋土下層と中層の堆積には時間差が存在したと考えられる。188は土師器椀、189は須恵器壺の底部で6層出土である。190は土師器小甕で埋土下層出土である。埋土下層からはこのほか土師器椀の底部などが出土した。

SK77（図版49－191～193、図版82）

SK77は深さ24cmの土坑で、埋土は3層に分層され、レンズ状堆積である。遺物は2層を中心に1～3層から出土しているが、層を超えて同一個体の破片が確認でき、時期差はないであろう。出土遺物は土師器長甕の破片が多かったが、図示した以外に器形のわかるものはなかった。191・192は須恵器無台杯、193は赤褐色を呈する須恵器杯蓋である。

SK453（図版49－194、図版82）

SK453はSK553・554を切る土坑で、埋土は2層に分層され、レンズ状堆積である。出土遺物は破片資料で数十点ほどあるが、図示できたのは須恵器無台杯の194のみである。

SK108（図版49－195、図版82）

SK108からは図化したもののほか、土師器小甕の破片が1点出土しているにすぎない。195は須恵器杯の破片で、体部が直線的に外傾している。

SD109（図版49－196、図版82）

SD109はSK108に隣接する溝で、深さ約10cmと浅く、埋土は単層である。196は須恵器無台杯で体部下半が丸く上半が外傾する器形である。焼成の際に胎土に含まれる鉱物が溶融して生じたと思われる径5mm以下の黒色斑点が見られる。

SK438（図版49－197、図版82）

SK438はSK553の北東約1.5mにあり、SK553などと土坑群を形成している。埋土は3層に分層され、レンズ状堆積であるが、図示した197は土坑中央の底面付近から出土した（図版74）。これ以外の遺物は土師器の小破片2点のみである。197は完形の須恵器有台杯で、最大径3mmと大粒の長石、石英を多量に含む粗い胎土が特徴的である。底部の器壁は厚いが、体部は比較的薄い。体部下半は丸く、ヨコナデが丁寧で、ロクロ目が目立たず、体部上半は外に引き出されている。高台径が大きい。見込みに指頭圧痕、底面に3本の沈線によるヘラ記号が見られる。

SD68（図版49－198・199、図版82）

SD68は19ライン付近をほぼ南北に走る溝で、深さ約50cmで埋土は4層に分層され、基本的にレンズ状堆積である。図化したもの以外の遺物は、土師器長甕の破片1点のみである。198は須恵器杯蓋の小破片で、遺構確認面から約10cm下位で出土しており、流れ込んだ遺物であろう。199は側壁付近から出土した。

SD27（図版49－200、図版82）

SD27は16D～Fグリッドをほぼ南北に走る溝で、深さ約30cmで埋土は単層である。200は須恵器甕の口縁から頸部の破片で、頸部屈曲付近にヘラ端部の圧痕が見られる。

畑跡出土土器（図版49－201～206・図版50－207～215、図版82・83）

畑跡を構成する溝は300本を超えているが、個々の溝は小規模で、出土遺物も多くて破片数点程度であり、複数の遺物を図示できるものはない。したがって、畑跡を構成する遺構から出土した遺物を遺構ごとに記載することにあまり意味がないことから、一括して記載することとする。201・203～207は須恵器無台杯である。201はSD495出土で、体部下半が丸く上半は外に引き出される。202はSD376出土の須恵器高台杯で、SK553出土の152と同じタイプの土器である。203はSD521出土で、体部と底部の境界が不明瞭で、底部が丸みを持つ。204は体部が直線的に傾くが、205は口縁部が外反せず丸みを持つ。204はSD274、205はSD516出土である。206はSD205出土で、体部上半が外に引き出され

る。207はSD369出土で体部下半が丸い器形であろう。208はSD490出土の須恵器有台杯で大粒の長石、石英を含んだ粗い胎土が特徴的である。体部下半が丸く、上半は直線的に外傾する。見込みにナデ痕が見られる。209・210は須恵器杯蓋でいずれも小破片である。211～215はすべてロクロ土師器長甕の破片である。211はSD386出土である。頸部が短く外傾する器形で、胎土が白く赤色岩片を多く含んでいる。212も頸部が短い。SD551から出土した。213・214は頸部が直線的に外傾するもので、214は口縁がわずかにつまみ上げられている。213はSD207、214がSD488出土である。215はSD573出土で、内外面がカキ目調整され、口縁がつまみ上げられている。

16CP1（図版50－216、図版83）

216はロクロ土師器長甕で頸部が水平近くまで大きく外傾し、口縁がわずかにつまみ上げられている。

25AP3（図版50－217、図版83）

217は須恵器有台杯で体部が直線的に立ち上がる器形である。

SD60（図版50－218、図版83）

218は須恵器有台杯で見込みには指によるナデが施されている。

SD9（図版50－219、図版83）

SD9出土土器は219のほか、須恵器杯、長頸瓶が出土しているが、すべて図化不可能な小破片であった。出土土器はすべて古代の土器である。219はロクロ土師器の椀である。

SD66（図版50－220、図版83）

220はロクロ土師器長甕で頸部が直線的に外傾し、口縁は丸くおさまる。

SD4（図版50－221、図版83）

221は須恵器長頸瓶の肩部で、自然釉がみられる。

SD146（図版50－222、図版83）

222はSD146出土の破片と周辺の包含層出土の破片が接合したもので、SD146出土土器として扱った。須恵器横瓶の頸部から体部にかけての破片で、体部外面には格子目のタタキ目、内面には同心円の当て具痕がみられる。

暗渠掘削出土土器（図版50－223～225、図版83）

暗渠掘削の際にA区9列付近でまとまって出土した土器である。ほかに、土師器甕の破片が多数ある。比較的狭い範囲に土器が集中して出土したことから、何らかの遺構があったものと思われる。223は須恵器杯蓋、225は土師器椀の底部である。

3）包含層出土土器

上層出土の土器をみると16ラインよりも西に新しい土器が認められる傾向があったため、ここでは包含層出土土器をC区、B区16列以東、B区15列以西（A区を含む）の順で報告する。

C区上層出土土器（図版50－226～330、図版83）

226は須恵器杯蓋のB類で、器形は山笠状となる。9世紀前葉頃のものであろう。227は須恵器無台杯である。酸化焔焼成のいわゆる生焼けの須恵器である。228は須恵器有台杯で体部下半が丸く、上半は直線的に外傾する。229は壺蓋である。230は土師器甕で口縁が肥厚する。

B区16列以東出土土器（図版50－231～236・図版51－237～248、図版83）

231・232は須恵器無台杯で体部が直線的に外傾し、体部と底部の境界が不明瞭な器形である。233

～238は須恵器有台杯である。233・234は152や202と同じタイプである。235は径が小さく深身のものである。236～238はいずれも体部下半が丸い器形のもので、上半は外に引き出され器壁が薄く口縁もシャープである。239は金属器模倣の須恵器有台杯C類である。240・241は須恵器杯蓋で241は扁平で大型のつまみを持ち、外面がロクロケズリされている。242は須恵器短頸壺B類で、厚手でシャープさがない。外面に自然釉がかかる。243は須恵器長頸瓶の体部下半から底部の破片である。244は須恵器甕の頸部破片で外面にタタキ目が残る。245は黒色土器の皿である。246～248は土師器甕である。246は口縁がつまみ上げられている。248は内外面がカキ目調整されている。

16列以西出土土器（図版51－249～260・図版52－261～267、図版83）

249・250は須恵器無台杯である。251～257は須恵器有台杯で、251・252はいずれも径が小さく深身のものである。253・254は口径11cm前後と小型で高台径も小さく、体部と底部の境界が明瞭な器形である。253は体部と底部の境界が稜になり、糸切り底である。256は底径が大きく高台が底部外縁につき、古い要素を持つ。257は大型深身の有台杯B類で、糸切り底である。258は須恵器杯蓋で外面がロクロケズリされている。259～261は須恵器短頸壺である。特に、A区調査区西よりで短頸壺破片が多く出土した。259には外面にヘラ記号がみられる。261は頸部が直立し肩が張る器形で、肩部に沈線が施されている。262は須恵器平瓶の体部、263は須恵器長頸瓶の頸部、264は須恵器短頸壺の頸部、265は須恵器甕の体部でいずれも破片資料である。266は灰釉陶器で9世紀後半のものであろう。267は土師器椀で、SK553やSK47出土のものに比べると径が小さく浅身である。

4）中世以降の遺構出土土器（図版52－268～280、図版83・84）

出土遺物から中世以降と考えられる遺構からも古代の土器が一定量出土した。これらの遺物は混入遺物ということになるが、古代の遺構や包含層では出土しない土器がみられたため、これを報告することとした。268・269は現代まで機能していた水路SD6から出土した。268は黒色土器の有台椀、269は灰釉陶器の椀である。270～274は中世の溝であるSD13から出土した。270は須恵器高杯の杯部と脚の接合部分で、脚外面に沈線が巡る。271は土師器椀、272は灰釉陶器椀、273は黒色土器有台椀、274は土師器有台椀で灰釉陶器を模倣したものであろう。275は中世の溝であるSD14から出土した黒色土器有台椀である。276～280は中世の溝であるSD58から出土した。276・277は須恵器無台杯、278は須恵器有台杯、279は杯蓋、280は長頸瓶の体部で9世紀前半に位置づけられよう。

5）河川跡試掘トレンチ出土土器（図版52－281～287、図版84）

河川跡試掘トレンチから出土した遺物のうち主要なものを図化した。遺物はすべて河川跡埋土1層から出土した須恵器である。河川跡埋土1層は河川が埋没し水が流れなくなって以後に堆積したと考えられる明灰褐色の粘土質シルト層である。281は須恵器無台杯、282は体部外面に沈線の巡る有台杯C類である。283・284は須恵器杯蓋、285・286は須恵器壺蓋である。288は把手付きの鉢で体部外面下半がロクロケズリされる。河川跡出土の土器は8世紀代に帰属するものが多い。

B　中世の土器

上層の遺構および遺物包含層からは、土師質土器、珠洲焼、瀬戸・美濃焼などの中世の土器が出土した。それぞれの遺物の分類や編年については、以下の各氏の論考をもとにした。土師質土器：品田高志［品田

1991・1997］、珠洲焼：吉岡康暢［吉岡1994］、白磁：森田勉［森田1982］、青磁：上田秀夫［上田1982］、瀬戸・美濃焼：藤澤良祐［藤澤1991・2002］。

1）遺構出土土器

中世の遺構出土土器はSD13・14から出土したもののみで少ない。

SD13（図版53－288～297、図版84）

288は口径が17cmを超える青磁の碗である。外面には片切彫による幅の広い鎬蓮弁紋が施されている。また、蓮弁部の盛り上がりは顕著で、間弁も観察されることから、上田による青磁の分類のB-Ⅰに相当し、年代は13世紀であると考えられる。289は珠洲焼壺の底部片である。外面底部には不鮮明ながら糸切り痕が確認される。埋土の中部～下部から数多くの土師質土器が出土した。290がロクロ成形のほかは手づくね成形による皿であり、口径は8.5cmから13.9cmにおよぶ。290は体部が丸みをおびている。また、上述のものと比較して胎土は精良である。291～297は厚手で内湾する口縁部に1段のヨコナデが施され、下半に不規則な指頭圧痕がみられる。293・294は口縁端部がヨコナデによって面取りされている。これらは京都系の手づくね成形の土師器で、年代は13世紀代であると考えられ、青磁椀（288）の年代と調和的である。

SD14（図版53－298・299、図版84）

図示した2点はいずれもロクロ成形による土師質土器皿である。298は全体的に器壁が薄く、口縁部が外反するのが特徴である。299は口縁端部に向かって器壁が薄くなり、また直線的に立ち上がるため、断面はおおよそ鋭角な三角形をなしている。

2）包含層出土土器

出土状況　中世の包含層出土土器は調査区のほぼ全域から出土したが、SD13・14周辺の10～14D～Fグリッド、19・20E・Fグリッド、C区の24～26列からの出土が多く、古代の土器とは分布傾向が異なる。時期は15世紀後半を主体とし、一部に13世紀の遺物がみられる。

輸入陶磁器（図版53－300～325、図版84）

300～306は白磁の碗である。301・302は口縁部が内湾するもの、303は端反りの碗である。304～306は底部破片で、304はいわゆる「口禿げ」の白磁であろう。時期は300が15世紀、301・302は14世紀以降、304は13世紀であろう。

307は青白磁の合子である。外面には蓮弁紋が浮彫りされている。

308～317は青磁の碗である。309・310・312・317は蓮弁紋が描かれている。317は片切り彫で鎬蓮弁紋が描かれている。310はヘラ先による細線で幅の狭い蓮弁紋が描かれている。312は幅広の蓮弁紋が描かれているが、蓮弁部が盛り上がらない。313・314・316は端反りの碗で、314は口縁が玉縁状になる。323は内面に劃花紋が描かれている。319～321は青磁の皿で、322は稜花皿である。318は内面に蓮弁紋の描かれた皿である。321は青磁盤である。324・325は青磁碗の底部である。324は底部内面にスタンプがみられる。時期は、323が13世紀初め、317が13世紀、ほかは15世紀代であろう。

珠洲焼（図版53－326～330・図版54－331～337、図版84）

出土した遺物は、甕・壺・片口鉢類に分類される。326～328は甕の口頸部破片である。327・328の口縁部は「く」字状に短く外反し端部は円縁である。329～335は片口鉢類である。328～332は口

縁部を含む破片、333・334は底部の破片である。334には9条を単位とする卸目が確認される。口縁部破片の鉢類の口縁端部の形態を観察すると、329は端部が面をなし、内端は上方へややつまみ上げられ外傾口縁である。330では、内端のつまみ上げが弱くなり、内端・外端とも丸みをおびている。331・333は端部が水平な面をなし、333には口縁端面に4条を単位とする波状文が施されている。330は角口縁で端面が内傾し、332は口縁が丸く収まる。336・337は壺の底部破片で、外面底部に糸切り後の木目状圧痕が観察される。吉岡による珠洲焼の編年［吉岡1994］と比較すると、甕の326はⅡ～Ⅳ期、327・328は珠洲Ⅳ～Ⅴ期、鉢のうち329はⅠ～Ⅱ期、330はⅡ～Ⅳ期、333はⅣ期、332・333はⅣ期以降の所産であると考えられる。

越前焼（図版54－338～340、図版84）

いずれも擂鉢の破片で、339は口縁部、338・341は底部の破片資料である。339は口縁が面を持ち内傾する。341は内面の摩耗が著しい。

瀬戸・美濃焼（図版54－341～353、図版84・85）

後期を主体とし、一部に大窯期の遺物がみられた。また、図示できなかったが前期の梅瓶の破片がある。341は筒形香炉で口縁から外面に鉄釉が施されるが内面は露胎である。342～345は天目茶碗で、342・344は高台周辺に錆釉が施されている。345は内反り高台で高台周辺が露胎である。347・348は大窯第4段階の折縁皿である。349・350・352・353は折縁深皿ですべて灰釉が施されている。349が藤澤による第5型式のほかは、第6型式で卸目が付く可能性もある。352は灰釉の縁釉小皿で内面は露胎である。外面の釉の剥落が著しい。時期は347・348を除くとおおむね後期様式の後Ⅲ～Ⅳ期で、15世紀中頃～後半に位置づけられる。

土師質土器（図版55－354～358、図版85）

図示した5点はすべてC区上層から出土したものである。354がロクロ成形のほかはすべて手づくね成形である。354は、口縁部が直線的に立ち上がり、外面底部には糸切り痕が観察される。355は体部下半が丸みをおび、口縁部はシャープである。357・358はともに口縁部が強く外反する。358は口径が14cmを超える大型のものであり、体部外面にはヨコナデによって作出された明瞭な稜が観察される。357・358は口縁が大きく開いた皿形態の京都系で、15世紀末頃から16世紀のものであろう。

中世末～近世の土器（図版55－359～366、図版85）

三角田遺跡からは中世末・近世以降の土器も平箱で1箱ほど出土している。時期は17世紀初頭～18世紀前半を主体としており、肥前系陶磁器を主体とし、一定量の越中瀬戸焼が含まれている。ここでは、17世紀初頭のもの8点を図示した。359・360は染付けの皿である。361～363・366は唐津焼で、361・363は鉄釉が施された皿、362は向付で灰釉が施され、366は鉄絵皿である。364は志野の鉄絵皿、365は越中瀬戸焼の皿で底部内面は露胎で印花紋がある。

C　木　製　品（図版55－367～372、図版85）

367～369は漆塗りの椀である。367は両面黒漆塗りで、外面に朱漆で亀甲紋が描かれている。暗渠排水工事中に出土しており、層位等は不明である。368・369は両面黒漆塗りの椀で、木取りは横木取りである。368はSD58から出土し、輪高台で13世紀のものであろう。369はSK56から出土した。底部が剥落しており高台の形状は不明である。370～372はSK54から出土した。370はヘラである。先端に漆が付着しており、漆塗りの刷毛として用いられたと考えられる。372は蓋で蓋身と把手が木釘で

接合されている。木釘のうち把手上面から飛び出ているものは、把手が剥落した後再接合するための補修用の釘であろう。

D　金属製品（図版55－373～387、図版85）

銭貨が14点出土した。A区・B区から出土しているが、特に、19～21E・Fグリッドから6点出土している点が目立つ。出土した銭貨の観察表は90頁に示したとおりである。初鋳年のもっとも新しいものは381の洪武通寶（1368年）で、もっとも古いのは375の乾元重寶の758年である。373は椀形滓で時期は不明である。

E　掘立柱建物部材（図版55－388・389、図版85）

388はSB2の柱穴13CP41の柱部材である。キハダの丸太材の端部に加工痕が周縁は外から中心に、中心付近は中心から外に加工が施されている。切り合いは中心付近の加工が新しい。389はSB1の柱穴13CP9の柱部材である。スギの板材を素材として、表裏面から先端がやや尖るように加工されている。

第Ⅵ章　自然科学分析

1　はじめに

新潟県上越市下野田字三角田に所在する三角田遺跡は、高田平野を流れる関川右岸に位置し、戸野目川と飯田川に挟まれた自然堤防上に立地している。発掘調査の結果、洪水層と考えられる無遺物層を間層とし、上位に８世紀後半から中世の遺物包含層および遺構検出面（以下、上層）、下位に８世紀初頭～前葉の遺物包含層および遺構検出面（以下、下層）が確認されている。また、上層は、調査区西側（Ａ・Ｂ区）から、下層は調査区東側（Ｃ区）で確認されている。Ｃ区は、自然堤防上～縁辺部に相当すると考えられ、洪水層に由来するとされる無遺物層は他の地点よりも厚く堆積する状況が確認されている。なお、上層からは、掘立柱建物跡や井戸跡、土坑、溝、柱穴、さらに、畑跡と考えられる畝状小溝が検出され、下層からは掘立柱建物跡や土坑、溝、畝状小溝、遺物集中部が検出されている。

本報告では、発掘調査時およびその成果から課題とされた、1）古環境変遷（堆積環境・古植生）、2）植物資源利用および栽培植物の２点について検討する。

2　試　　料

A　古環境変遷

試料は、Ｃ区25E杭付近から採取された土壌27試料（3-1～3-27）である。当地点では、本遺跡の基本土層Ⅱ・Ⅳ～Ⅷ層が認められている。これらの土層は、発掘調査所見によれば、Ⅱ層は上層の遺物包含層、Ⅳ層は上層の遺構検出面、Ⅴ・Ⅵ層は洪水層と考えられる無遺物層、Ⅶ層は下層の遺物包含層（土色および遺物の出土状況からａ・ｂに分けられる）、Ⅷ層は下層の遺構検出面とされている。分析試料は、これらの各土層より選択した土壌８試料（Ⅱ層：3-4、Ⅳ層：3-7、Ⅴ層：3-10、Ⅵ層：3-16・17、Ⅶａ層：3-19、Ⅶｂ層：3-22、Ⅷ層：3-25）である。これらの試料を対象に、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析を行う。

B　植物資源利用

試料は、掘立柱建物跡の柱材等を含む木製品と種実遺体である。木製品は、上・下層より多数出土していることから、各時期の木製品および柱材の木材利用について検討することを目的とし、上層から出土した木製品３点、柱材４点、下層から出土した木製品13点、柱材25点の計45点を分析対象として選択している。なお、試料採取にあたり、木製品については、基本的に切片で採取したが、切片での採取が困難であった柄等の木製品については破損部や接合面内から木片を採取している。柱材については、接合部内や破損部から木片を採取している。一方、種実遺体は、単体試料40試料（1～40）からなり、大部分は調査区東側のＣ区の調査時に出土したものである。

これらの試料のうち、木製品については樹種同定を、種実遺体については種実同定を行う。なお、木質遺物および種実遺体の試料の詳細は、各分析結果とともに表に示す。

C　栽培植物

試料は、B区調査区の上層畑跡より採取された土壌16点であり、Ⅱ層および畝状小溝、遺構検出面であるⅣ層からそれぞれ採取されている。これらの試料のうち、上層の遺物包含層のⅡ層より2点（Ⅱa層：1-2、Ⅱb層：1-3）、畑跡の耕作土とされる土層（1-4）、畑跡と考えられる畝状小溝覆土（SD347：1-9）、上層の遺構検出面のⅣ層（1-7b）の5点を選択し、植物珪酸体分析を行う。

3　分析方法

A　珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象として200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか［1998］、Krammer［1992］、Krammer & Lange-Bertalot［1986・1988・1991a・1991b］などを参照する。

同定結果は、海～汽水生種、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、海水～汽水生種については小杉［1988］、淡水生種については安藤［1990］、陸生珪藻については伊藤・堀内［1991］、汚濁耐性については、Asai & Watanabe［1995］の環境指標種を参考とする。

B　花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9、濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するすべての種類を対象に500個体以上同定・計数する（化石の少ない試料ではこの限りではない）。また、花粉・胞子量のほかに、試料中に含まれる炭片量の割合も求める。炭片は20μm以上を対象とし、それ以下のものは除外する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。炭片量の割合は、植物遺体（花粉、胞子、植物片、炭片）の総数を基数として百分率で示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

C　植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水、塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む珪化組織片を近藤・佐瀬［1986］の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生や農耕について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の産状を図化する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体ごとに、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

D　種実同定

種実試料を肉眼および双眼実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴を現生標本および『原色日本植物種子写真図鑑』［石川1994］、『日本植物種子図鑑』［中山ほか2000］等と比較し、種類を同定し個数を求めた。分析後の種実遺体等は、種類ごとにビンに詰め、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施す。

E　樹種同定

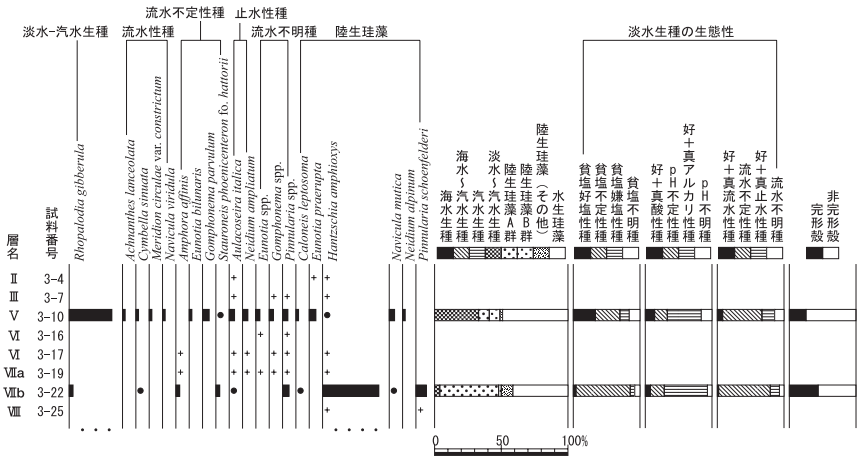
木片は、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製する。各試料別に切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

4　結　　果

A　珪藻分析

結果を第３表、第８図に示す。全般的に珪藻化石の産出は少なく、堆積環境を検討する上で有意な量が産出したのは3-22 ・ 3-10の２試料のみである。この他の６試料（3-25 ・ 3-19 ・ 3-17 ・ 3-16 ・ 3-7 ・ 3-4）の珪藻化石の産出は少ない。珪藻化石が産出した試料の完形殻の出現率は30 ～ 40 %で、珪藻化石の保存状態は不良である。産出分類群数は、合計で27属71分類群である。以下に、珪藻化石群集の特徴を述べる。

3-10は、淡水～汽水生種と淡水域に生育する水生珪藻とがほぼ同率で産出する。淡水生種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、貧塩好塩性種（少量の塩分があるほうが良く成育する種）と貧塩不定性種（少量の塩分には耐えられる種）、真＋好アルカリ性種（pH7.0以上のアルカリ性水域にもっともよく生育する種）、流水不定性種（流水域にも止水域にも普通に生育する種）が優占あるいは多産する。産出種の特徴は、河口等の塩分を含む水域や温泉等の塩類を豊富に含む水域に多産する淡水～汽水生の*Rhopalodia gibberula*が約30%と優占することである。これに付随して、流水性で中～下流性河川指標種群の*Achnanthes lanceolata*、*Cymbella sinuata*、*Meridion circulae* var. *constrictum*、*Navicula viridula*、流水不

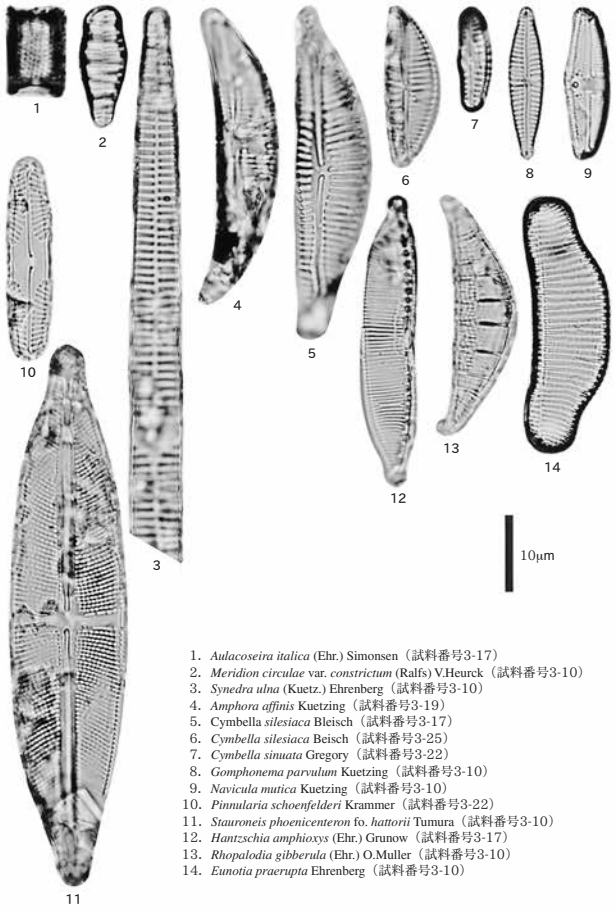


海水−汽水−淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。
いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2％未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

第８図　主要珪藻化石群集の層位分布

定性の *Gomphonema parvulum*、止水性の *Aulacoseira italica*、*Neidium ampliatum* 等を伴う。なお、中～下流性河川指標種群とは、河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、その環境を指標することができる種群とされている［安藤1990］。

3-22は、淡水域に生育する水生珪藻と、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻とがほぼ同率で産出する。淡水生種の生態性の特徴は、貧塩不定生種が優占する他は前試料に近似する。主要種は、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻Ａ群の *Hantzschia amphioxys* が約40%産出し、これに付随して、乾湿に対する適応度合いが不明な未区分陸生珪藻の *Pinnularia schoenfelderi* を伴う。淡水生種は多産するものはなく、流水不定性の *Amphora affinis*、*Stauroneis phoenicenteron* fo. *hattorii* 等が産出する。



1. *Aulacoseira italica* (Ehr.) Simonsen（試料番号3-17）
2. *Meridion circulae* var. *constrictum* (Ralfs) V.Heurck（試料番号3-10）
3. *Synedra ulna* (Kuetz.) Ehrenberg（試料番号3-10）
4. *Amphora affinis* Kuetzing（試料番号3-19）
5. Cymbella *silesiaca* Bleisch（試料番号3-17）
6. *Cymbella silesiaca* Beisch（試料番号3-25）
7. *Cymbella sinuata* Gregory（試料番号3-22）
8. *Gomphonema parvulum* Kuetzing（試料番号3-10）
9. *Navicula mutica* Kuetzing（試料番号3-10）
10. *Pinnularia schoenfelderi* Krammer（試料番号3-22）
11. *Stauroneis phoenicenteron* fo. *hattorii* Tumura（試料番号3-10）
12. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow（試料番号3-17）
13. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) O.Muller（試料番号3-10）
14. *Eunotia praerupta* Ehrenberg（試料番号3-10）

第９図　産出した珪藻化石の顕微鏡写真

この他の珪藻化石の産出が少ない3-25・3-19・3-17・3-16・3-7・3-4では、上述のような淡水生種や陸生珪藻が少量ながら混在し、産出する状況が認められる。

B　花粉分析

結果を第４表、第10図に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困

種　　類	生態性			環境指標種	C区25E杭							
	塩分	pH	流水		3-4	3-7	3-10	3-16	3-17	3-19	3-22	3-25
Cyclotella striata-C. stylorum	Euh-Meh			B	1	-	-	-	-	-	-	-
Caloneis rhombica H.Kobayashi	Meh				-	-	-	-	1	-	-	-
Anomoeoneis sphaerophora (Kuetz.) Pfitzer	Ogh-Meh	al-bi	ind		-	-	1	-	-	-	-	-
Fragilaria brevistriata Grunow	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	-	1	-	-	-	-	1	-
Rhopalodia gibberula (Ehr.) O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		-	-	32	-	-	-	3	-
Achnanthes lanceolata (Breb.) Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	-	2	-	-	-	-	-
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	3	1	3	-
Amphora spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1	-	-	-	-	-
Aulacoseira alpigena (Grun.) Krammer	Ogh-hob	ac-il	l-bi	N,U	-	-	-	-	1	1	-	-
Aulacoseira distans (Ehr.) Simonsen	Ogh-hob	ac-il	l-bi	N,U	-	-	1	-	-	-	-	-
Aulacoseira italica (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	2	2	4	-	5	3	1	-
Aulacoseira spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	1	-	-	-
Caloneis bacillum (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	1	-	-	-
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	-	-	2	-	-	-	1	-
Cocconeis placentula var. *euglypta* (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	-	1	-	-	-	-
Craticula *cuspidata* (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	-	-	-	-	1	-
Cyclotella comta (Ehr.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U	-	-	1	-	-	-	-	-
Cymbella aspera (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O,T	-	-	-	-	-	-	1	-
Cymbella cuspidata Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	1	-
Cymbella heteropleura var. *minor* Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	2	-
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	1	-	1	-	-	1
Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	-	2	-	-	-	1	-
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.) V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	1	-	-
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1	-	-	1	-	-
Diatomella balfouriana (W.Smith) Grevil	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	1	-	-	-	-	-
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	-	1	-
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind		-	-	1	-	-	-	-	-
Epithemia adnata (Kuetz.) Brebisson	Ogh-ind	al-bi	ind		-	-	-	-	1	1	1	-
Epithemia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1	-	-	-	-	-
Eunotia bilunaris (Ehr.) Mills	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	2	-	-	-	-	-
Eunotia implicata Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	1	-	1	-	-	-
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	1	1	-	-	-	1	-
Eunotia monodon Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	-	-	-	-	-	1	-
Eunotia pectinalis (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O,T	-	-	1	-	-	-	-	-
Eunotia pectinalis var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O,T	-	-	1	-	-	-	-	-
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	1	-	5	-	-	-	-	-
Eunotia praerupta var. *bidens* Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O	-	-	1	-	-	-	-	-
Eunotia praerupta var. *inflata* Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RI	-	-	1	-	-	-	-	-
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	3	2	-	2	-	-
Fragilaria construens fo. *venter* (Ehr.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	-	-	-	-	-	-	1	-
Frustulia vulgaris (Thwait.) De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	1	-	-	-	1	-
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	-	-	-	-	-	1	-
Gomphonema affine Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	1	-
Gomphonema angustatum (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	1	1	-	-
Gomphonema angustatum var. *undulata* (Greg.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	1	-
Gomphonema contraturris Lange-B. & Reichardt	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	1	-
Gomphonema cf. *helveticum* Brun	Ogh-unk	ind	r-ph	T	-	-	-	-	-	-	1	-
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	5	-	-	-	-	-
Gomphonema pumilum (Grun.) Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	1	-	-	-	-	-
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	3	-	2	1	-	-
Gyrosigma scalproides (Rabh.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph		-	-	-	-	-	1	-	-
Gyrosigma spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	1	-	1	11	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	1	1	1	-	3	1	43	2
Meridion circulae var. *constrictum* (Ralfs) V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	-	-	2	-	-	-	-	-
Navicula elginensis (Greg.) Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	-	-	-	-	-	-	1	-
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	-	-	4	-	-	-	2	-
Navicula mutica var. *ventricosa* (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	RI	-	-	-	-	-	-	1	-
Navicula placenta Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	RI	-	-	1	-	-	-	-	-
Navicula viridula (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	-	-	2	-	-	-	-	-
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	1	-	1	-	-
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	-	-	2	-	-	-	-	-
Neidium ampliatum (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		-	-	4	-	1	1	-	-
Neidium spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	2	-
Pinnularia borealis var. *brevicostata* Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	-	1	-	-
Pinnularia mesolepta (Ehr.) W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	-	-	-	-	-	-	1	-
Pinnularia neomajor Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-bi	T	-	-	-	-	-	-	1	-
Pinnularia cf. *nobilis* Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	1	-
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	-	-	-	8	1
Pinnularia subrupestris Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	1	-
Pinnularia substomatophora Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	1	-
Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	-	-	-	2	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	4	1	1	2	5	-
Rhopalodia gibba (Ehr.) O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	1	-	-
Sellaphora americana (Ehr.) Mann	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	-	1	1	2	-
Sellaphora pupula (Kuetz.) Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	1	-	-	-
Sellaphora spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	1	-	-	-
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	-	-	1	-
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	-	-	-	2	2	-	-
Stauroneis phoenicenteron fo. *hattorii* Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	1	-	-	-	3	-
Stauroneis phoenicenteron var. *signata* Meister	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	1	-
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	-	-	-	-	-
Stephanodiscus spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-	-
Synedra ulna (Kuetz.) Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	1	-	-	3	-	1
海水生種					0	0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種					1	0	0	0	0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0	1	0	0	0
淡水～汽水生種					0	1	33	0	0	0	4	0
淡水生種					5	8	67	5	28	37	98	5
珪藻化石総数					6	9	100	5	29	37	102	5

凡例

H.R.：塩分濃度に対する適応性
Euh-Meh ：海水生種－汽水生種
Meh ：汽水生種
Ogh-Meh ：淡水－汽水生種
Ogh-hil ：貧塩好塩性種
Ogh-ind ：貧塩不定性種
Ogh-hob ：貧塩嫌塩性種

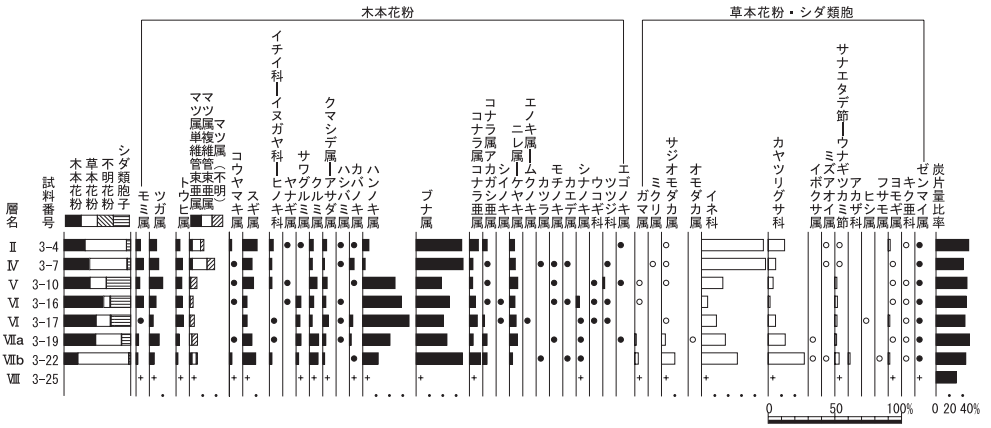
pH ：水素イオン濃度に対する適応性
al-bi ：真アルカリ性種
al-il ：好アルカリ性種
ind ：pH不定性種
ac-il ：好酸性種
ac-bi ：真酸性種
unk ：pH不明種

C.R.：流水に対する適応性
l-bi ：真止水性種
l-ph ：好止水性種
ind ：流水不定性種
r-ph ：好流水性種
r-bi ：真流水性種
unk ：流水不明種

環境指標種群

B:内湾指標種［小杉1988］
K:中～下流性河川指標種、M:湖沼浮遊性種、N:湖沼沼沢湿地指標種、O:沼沢湿地付着生種［以上は安藤1990］
S:好汚濁性種、U:広域適応性種、T:好清水性種［以上はAsai and Watanabe1995］
R:陸生珪藻［RA:A群、RB:B群、RI:未区分、伊藤・堀内1991］
Ogh-unk：貧塩不明種

第3表　珪藻分析結果



海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。
いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2％未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

第10図　主要花粉の層位分布

難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるため、出現した種類を＋で表示するに留めている。また、いずれの試料からも保存状態が極めて悪い花粉化石や第三紀の絶滅種の花粉化石等が検出された。これらは上流域の古い地層からの再堆積と判断されることから、結果表からは除外している。

3-25は、花粉化石の産出状況は不良であり、定量解析が可能な個体数は得られなかった。木本花粉ではツガ属、マツ属、クルミ属などが、草本花粉ではガマ属、イネ科、カヤツリグサ科などが検出される。

3-22は、草本花粉の割合が高く、イネ科、カヤツリグサ科が多産する。この他にはサナエタデ節－ウナギツカミ節や水湿地生植物であるガマ属、サジオモダカ属も比較的多く検出され、イボクサ属、ミズアオイ属、ミクリ属などの水生植物も伴う。木本花粉ではブナ属がもっとも多く産出し、スギ属、クルミ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属などを伴う。

3-19・3-17・3-16・3-10は、花粉化石群集が類似し、木本花粉ではハンノキ属、ブナ属が多産する。この他にはツガ属、トウヒ属、マツ属、スギ属、クルミ属、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属などを伴う。一方、草本花粉ではイネ科、カヤ

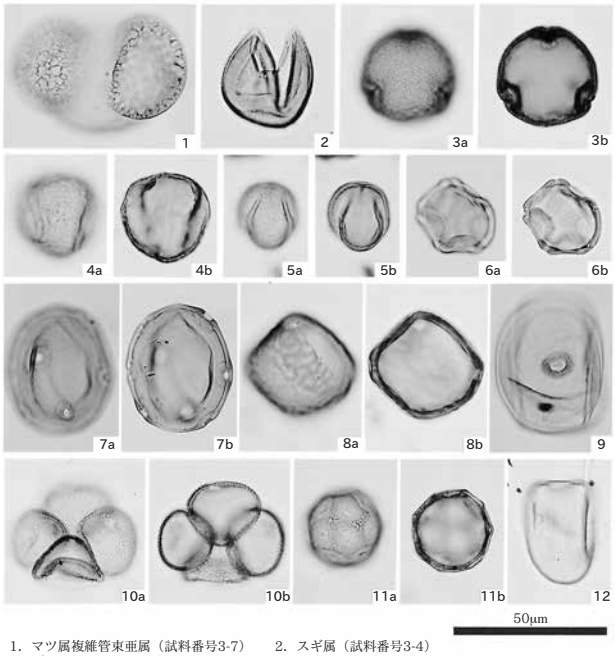
種類	C区25E杭							
試料番号	3-4	3-7	3-10	3-16	3-17	3-19	3-22	3-25
木本花粉								
マキ属	-	-	-	-	1	-	-	-
モミ属	8	12	6	12	1	4	3	4
ツガ属	13	16	21	11	7	16	8	24
トウヒ属	7	11	9	10	13	5	3	2
マツ属単維管束亜属	5	5	-	1	1	-	4	1
マツ属複維管束亜属	15	25	2	-	-	4	7	4
マツ属（不明）	6	13	10	5	8	9	2	9
コウヤマキ属	4	2	2	1	-	2	4	1
スギ属	26	16	17	7	8	15	21	2
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	7	4	4	-	2	1	4	-
マオウ属	-	-	-	-	-	1	-	-
ヤナギ属	1	-	1	1	-	-	-	-
サワグルミ属	2	-	-	8	7	8	4	2
クルミ属	7	5	12	7	5	15	14	7
クマシデ属－アサダ属	7	3	7	5	10	5	3	3
ハシバミ属	2	1	-	1	1	1	-	-
カバノキ属	1	8	1	-	6	3	2	1
ハンノキ属	11	4	51	64	83	44	25	6
ブナ属	82	80	40	55	49	50	75	4
コナラ属コナラ亜属	16	6	5	10	14	6	18	3
コナラ属アカガシ亜属	8	1	2	2	3	7	7	-
シイノキ属	-	-	-	1	1	-	-	-
ニレ属－ケヤキ属	9	10	13	9	12	13	5	-
エノキ属－ムクノキ属	-	-	-	-	1	-	-	-
カツラ属	-	1	-	-	-	-	2	-
キハダ属	-	-	-	-	-	-	1	-
モチノキ属	-	1	1	1	-	1	-	-
カエデ属	-	2	-	2	-	-	1	-
トチノキ属	2	-	-	-	-	1	1	-
ブドウ属	-	-	-	-	-	1	-	-
ツタ属	-	-	-	-	-	1	-	-
ノブドウ属	-	-	-	-	-	-	1	-
シナノキ属	-	-	-	5	1	1	1	1
ウコギ科	-	-	2	2	1	-	-	-
ミズキ属	-	-	-	-	-	1	-	-
ツツジ科	-	1	3	1	2	-	-	-
ハイノキ属	-	-	-	-	1	-	-	-
エゴノキ属	1	-	1	-	-	1	-	-
トネリコ属	-	-	-	-	1	-	-	-
スイカズラ属	-	-	1	-	-	-	-	-
草本花粉								
ガマ属	-	-	1	1	-	5	27	6
ミクリ属	-	1	-	-	-	-	-	-
サジオモダカ属	2	3	1	-	2	13	102	2
オモダカ属	-	-	-	-	-	1	-	-
イネ科	350	282	86	17	55	81	275	30
カヤツリグサ科	93	33	20	5	27	58	277	17
イボクサ属	-	-	-	-	-	4	5	-
ミズアオイ属	2	3	-	-	-	-	5	-
クワ科	-	-	-	-	-	1	3	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	6	4	8	7	8	6	33	4
アカザ科	-	-	-	-	-	-	14	-
ナデシコ科	-	-	1	-	-	-	3	-
キンポウゲ科	-	-	2	1	-	-	1	-
アブラナ科	-	-	1	-	-	-	1	-
バラ科	-	-	-	-	-	-	1	-
ヒシ属	-	-	-	-	1	-	-	-
ミズユキノシタ属	-	-	-	-	-	-	1	-
フサモ属	-	-	-	-	-	-	1	-
セリ科	-	-	2	-	3	-	4	-
ナス科	-	-	-	-	-	-	1	-
ヨモギ属	11	4	5	2	6	4	12	2
オナモミ属	-	-	-	-	1	-	10	-
キク亜科	2	-	3	2	1	1	2	-
タンポポ亜科	1	-	-	-	-	-	-	-
不明花粉	-	2	1	3	5	2	4	-
シダ類胞子								
ヒカゲノカズラ属	-	-	-	-	1	1	-	-
ゼンマイ属	1	1	2	1	1	1	1	3
イノモトソウ属	-	-	-	1	3	-	-	1
他のシダ類胞子	47	29	193	110	141	60	28	138
合計								
木本花粉	240	227	211	221	239	216	216	74
草本花粉	467	330	130	35	104	174	778	61
不明花粉	0	2	1	3	5	2	4	0
シダ類胞子	48	30	195	112	146	62	29	142
総計（不明を除く）	755	587	536	368	489	452	1023	277
その他の微化石								
クンショウモ	-	-	-	1	-	-	-	-
炭片量比率［%］	49.0	40.6	46.4	45.0	43.4	50.1	44.7	30.1

第4表　花粉分析結果

ツリグサ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ヨモギ属などが検出され、ガマ属、サジオモダカ属、イボクサ属、ヒシ属なども認められる。

3-7・3-4では、草本花粉の占める割合が高く、イネ科が多産する。次いで、カヤツリグサ科が多く、ミクリ属、サジオモダカ属、ミズアオイ属なども検出される。木本花粉は、下位の土層の試料と同様にブナ属が多産するが、ハンノキ属の割合が急減し、マツ属の割合が増加する。この他に、モミ属、ツガ属、スギ属、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属などを伴う。

炭片量比率は、3-25は30.1%、3-22は44.7%、3-19は50.1%、3-17は43.4%、3-16は45.0%、3-10は46.4%、3-7は40.6%、3-4で49.0%を示す。



1. マツ属複維管束亜属（試料番号3-7）
2. スギ属（試料番号3-4）
3. ブナ属（試料番号3-7）
4. コナラ亜属（試料番号3-19）
5. アカガシ亜属（試料番号3-4）
6. ハンノキ属（試料番号3-16）
7. クルミ属（試料番号3-4）
8. ニレ属－ケヤキ属（試料番号3-7）
9. イネ科（試料番号3-4）
10. ガマ属（試料番号3-19）
11. サジオモダカ属（試料番号3-19）
12. カヤツリグサ科（試料番号3-22）

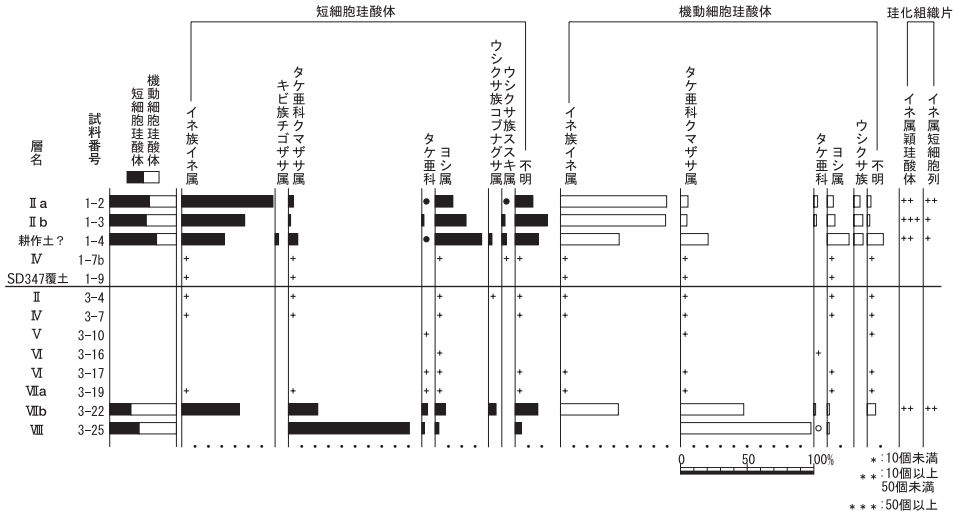
第11図　産出した花粉化石の顕微鏡写真

C　植物珪酸体分析

結果を第5表、第12図に示す。各試料から植物珪酸体が検出されるが、保存状態は不良であり、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下に、基本土層、上層畑跡の産状を示す。

基本土層

3-25は、クマザサ属を含むタケ亜科の産出が顕著に目立つ。3-22ではクマザサ属とともに栽培植物であるイネ属の産出が目立ち、籾殻に形成される穎珪酸体や葉部に形成される短細胞列も検出される。3-



なお、●○は1％未満の種類、＋はイネ科葉部短細胞珪酸体・イネ科葉身機動細胞珪酸体のいずれも100個未満の試料で検出された種類を示す。また、珪化組織片の産状を＊で示す。

第12図　植物珪酸体群集の層位分布と珪化組織片の産状

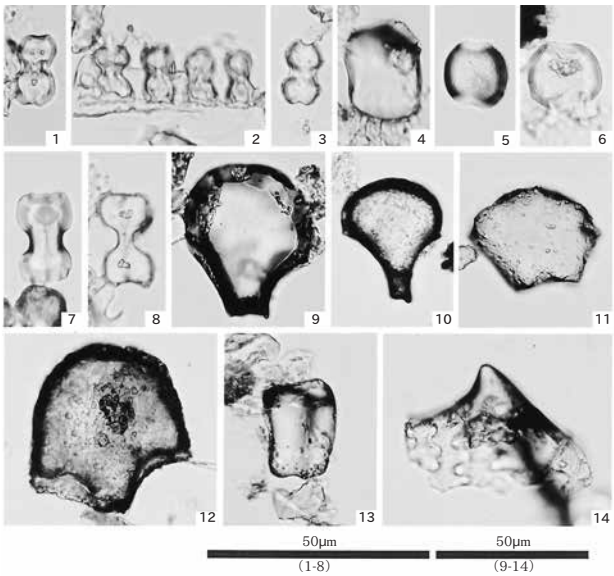
種類	B区上層畑跡					C区25E杭							
試料番号	1-2	1-3	1-4	1-7b	1-9	3-4	3-7	3-10	3-16	3-17	3-19	3-22	3-25
イネ科葉部短細胞珪酸体													
イネ族イネ属	108	59	87	1	1	2	1	-	-	-	2	61	-
キビ族チゴザサ属	-	-	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科クマザサ属	6	2	19	1	1	1	1	-	-	-	4	31	97
タケ亜科	1	2	1	-	-	-	-	1	-	1	3	6	2
ヨシ属	21	29	95	3	-	4	2	-	1	1	5	11	3
ウシクサ族コブナグサ属	-	-	7	-	-	1	-	-	-	-	-	8	-
ウシクサ族ススキ属	1	3	9	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明キビ型	19	21	34	2	-	5	1	-	-	-	1	13	3
不明ヒゲシバ型	1	5	7	1	-	3	-	-	-	1	-	1	1
不明ダンチク型	1	4	6	2	-	1	-	-	-	-	2	10	1
イネ科葉身機動細胞珪酸体													
イネ族イネ属	86	82	51	3	1	13	24	-	-	2	9	132	-
タケ亜科クマザサ属	6	5	24	10	4	4	5	1	-	1	12	144	134
タケ亜科	3	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	4	1
ヨシ属	5	6	19	1	1	6	4	-	-	1	1	5	2
ウシクサ族	5	7	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	3	2	14	4	-	9	15	1	-	2	7	19	-
合　計													
イネ科葉部短細胞珪酸体	158	125	272	11	2	17	5	1	1	3	17	141	107
イネ科葉身機動細胞珪酸体	108	104	116	18	6	32	48	2	1	6	29	304	137
総　計	266	229	388	29	8	49	53	3	2	9	46	445	244
珪化組織片													
イネ属穎珪酸体	41	64	25	-	-	-	-	-	-	-	-	21	-
イネ属短細胞列	16	4	10	-	-	-	-	-	-	-	-	43	-

第５表　植物珪酸体分析結果

19 ～ 3-4 は、植物珪酸体の検出個数は少なく、イネ属やクマザサ属、ヨシ属等がわずかに認められるのみである。

上層畑跡

基本土層のⅡ層に相当する 1-2 ・ 3 はイネ属の産出が目立ち、籾殻に形成される穎珪酸体や葉部に形成される短細胞列も検出される。この他に、クマザサ属やヨシ属等も検出される。1-4 でもイネ属の産出が目立つが、ヨシ属やクマザサ属の割合も高い。1-7b ・ 1-9 では、植物珪酸体の検出個数は少なく、イネ属やクマザサ属等がわずかに認められるのみである。



1. イネ属短細胞珪酸体（試料番号3-14）
2. イネ属短細胞列（試料番号3-22）
3. イネ属短細胞珪酸体（試料番号1-4）
4. クマザサ属短細胞珪酸体（試料番号3-25）
5. ヨシ属短細胞珪酸体（試料番号3-19）
6. ヨシ属短細胞珪酸体（試料番号1-4）
7. コブナグサ属短細胞珪酸体（試料番号1-4）
8. ススキ属短細胞珪酸体（試料番号1-4）
9. イネ属機動細胞珪酸体（試料番号3-22）
10. イネ属機動細胞珪酸体（試料番号1-4）
11. クマザサ属機動細胞珪酸体（試料番号3-25）
12. ヨシ属機動細胞珪酸体（試料番号1-4）
13. ウシクサ属機動細胞珪酸体（試料番号1-4）
14. イネ属穎珪酸体（試料番号1-4）

第13図　産出した植物珪酸体の顕微鏡写真

D　種実同定

結果を第６表に示す。被子植物３分類群 71 個（落葉高木のオニグルミの核８個、トチノキの種子１個、栽培植物のモモの核 62 個）の種実が同定された。この他に、木材、炭化材が確認された。同定された種実の状態は比較的良好で、オニグルミ、モモの核には、齧歯類（ネズミなど）によると考えられる食害痕を有する個体も認められる。以下に、本分析にて同定された種実の形態的特徴などを記す。

オニグルミ（*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* （Maxim.） Kitamura）　　クルミ科クルミ属

核の完形、半分が検出された。灰褐色、広卵体で頂部がやや尖る。径 3cm 程度。１本の明瞭な縦の縫合線があり、縫合線に沿って半分に割れた個体や、縫合線上に齧歯類（ネズミなど）によると考えられる食害痕が認められる個体がみられる。核は硬く緻密で、表面には縦方向に溝状の浅い彫紋が走り、ごつご

番号	試料名					オニグルミ		モモ			トチノキ	木材	炭化材	備考
						核		核			種子			
						完形	半分	完形	半分	破片	完形			
1	25B13	包含層		040614		-	-	-	-	-	-	1	-	
2	26B21･22, 26C1･2	SC91 須恵器上の土	VII層	041109		-	-	-	-	-	-	-	10	
3		SC91	土	041109		-	-	-	1	-	-	-	54	
4	23C19	SD113	1層	041105	(№7) №37種子	-	-	1	-	-	-	-	-	食害痕
5	23C23		II層	040804		-	-	-	1	-	-	-	-	炭化
6	24D8	24DP3	1層	041116	種子	-	-	1	-	-	-	-	-	
7	24D16		VII層	041014	種	-	-	1	-	-	-	-	-	
8	24D17	炭化物集中ブロック№120	炭層	041101		-	-	2	-	-	-	-	-	
9	24D25		VII層	040928	種	-	-	1	-	-	-	-	-	
10	24E2		VII層	041117	くるみ	-	1	-	-	-	-	-	-	食害痕
11	24E5	SK179	1層	041117		-	-	1	-	-	-	-	-	食害痕
12	24E7		VII層	-		-	-	1	-	2	-	-	-	食害痕
13	24E8	SD113	1層	041005		-	-	-	1	-	-	-	-	
14	24E9		VII層	040928	種	-	-	1	1	-	-	-	-	
15	24E10		VII層	040928	種	-	-	1	-	-	-	-	-	
16	24E14	SD158	1層	041102	種子	-	-	-	-	1	-	-	-	
17	24E15		VII層	040927	種	-	-	2	-	-	-	-	-	
18	24E18	24EP2	1層	041102	種子	-	-	-	1	-	-	-	-	
19	25B25	25BP6		041108		-	-	1	-	-	-	-	-	
20	25C3	25CP11	VII層	041202	種子	1	-	-	-	-	-	-	-	
21	25C12	25CP5		041108		-	-	-	-	-	1	-	-	
22	25C15	SD611A	VII層	041115	種子	-	-	1	-	-	-	-	-	
23	25D4	ベルト東	1層	040913	種実	-	-	17	-	6	-	-	-	4個食害痕
24	25D11	SX177	1層	041116	種子	-	-	1	-	-	-	-	-	
25	25D19	SD114	1層	040924	種	-	1	-	-	-	-	-	-	
26	25D20	SD114	1層	040924	種	-	-	1	-	-	-	-	-	食害痕
27	25E11	SD113	1層	040929	種	-	-	-	2	-	-	-	-	食害痕
28	25E14	SC95	1層	040915		-	-	1	-	-	-	-	-	
29	25E15	SD113	1層	040929	種子	-	-	-	1	-	-	-	-	
30	25E4・9	SC95	1層	041119		-	-	-	-	1	-	-	-	
31	25F4	SD98	1層	040916	種	-	-	1	-	-	-	-	-	
32	26B17	下位包含層	VII層	040913		-	-	4	-	-	-	-	-	
33	26C4	SD629	VII層	041115		-	-	1	-	-	-	-	-	
34	26C9	SD611E	VII層	041115	種子	-	1	-	-	-	-	-	-	食害痕
35	26D6		VII層	040817		-	-	1	-	-	-	-	-	
36	27B7	包含層下位	7層	041005		1	-	-	-	-	-	-	-	
37	27E11		VII層	041119		2	-	-	-	-	-	-	-	1個食害痕
38	C区26B10		VII層	040913		-	-	2	-	-	-	-	-	
39	C区北	26BP6	VII層	041109		-	-	1	-	-	-	-	-	
40	C区北東側	暗渠	VII層		種子	-	1	-	-	-	-	-	-	
												計71個		

第6表　種実同定結果

つしている。内部には子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁がある。

モモ（*Prunus parsica* Batsch）　　バラ科サクラ属

核（内果皮）の完形、半分、破片が検出された。灰褐色、広楕円体でやや扁平。先端部はやや尖る。基部は切形で中央部に湾入した臍がある。大きさは、長さ20～25mm、幅15～18mm、厚さ15mm程度。一方の側面に縫合線が発達し、縫合線に沿って半分に割れた個体や、縫合線上に齧歯類（ネズミなど）によると考えられる食害痕が認められる個体がみられる。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状に見える。

トチノキ（*Aesculus turbinata* Blume）　　トチノキ科トチノキ属

種子の完形が検出された。扁球体で径28mm程度。種皮は薄く硬く、表面にはほぼ赤道面を蛇行して一周する特徴的なカーブを境に、流理状の微細な網目模様があり光沢の強い黒色の上部と、粗面で光沢のない灰褐色の下部の着点に別れる。

E　樹種同定

結果を第7表に示す。木製品および柱材は、針葉樹1種類（スギ）、広葉樹6種類（オニグルミ、コナラ属コナラ亜属コナラ節、カツラ、キハダ、ウルシ、トネリコ属）に同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

スギ（*Cryptomeria japonica*（L. f.）D. Don）　　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部

の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、１分野に２～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

オニグルミ（*Juglans mandshurica Maxim*. subsp. *sieboldiana*（Maxim.） Kitamura）　　クルミ科クルミ属

散孔材で、道管径は比較的大径、単独または２～４個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、１～４細胞幅、１～40細胞高。

コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. Lepidobalanus sect. Prinus）　　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

カツラ（*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.）　　カツラ科

散孔材で、管孔はほぼ単独で散在し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、１～２細胞幅、１～30細胞高。

キハダ（*Phellodendron amurense Ruprecht*）　　ミカン科キハダ属

環孔材で、孔圏部は２～５列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、１～５細胞幅、１～30細胞高。

ウルシ（*Rhus verniciflua* Stockes）　　ウルシ科ウルシ属

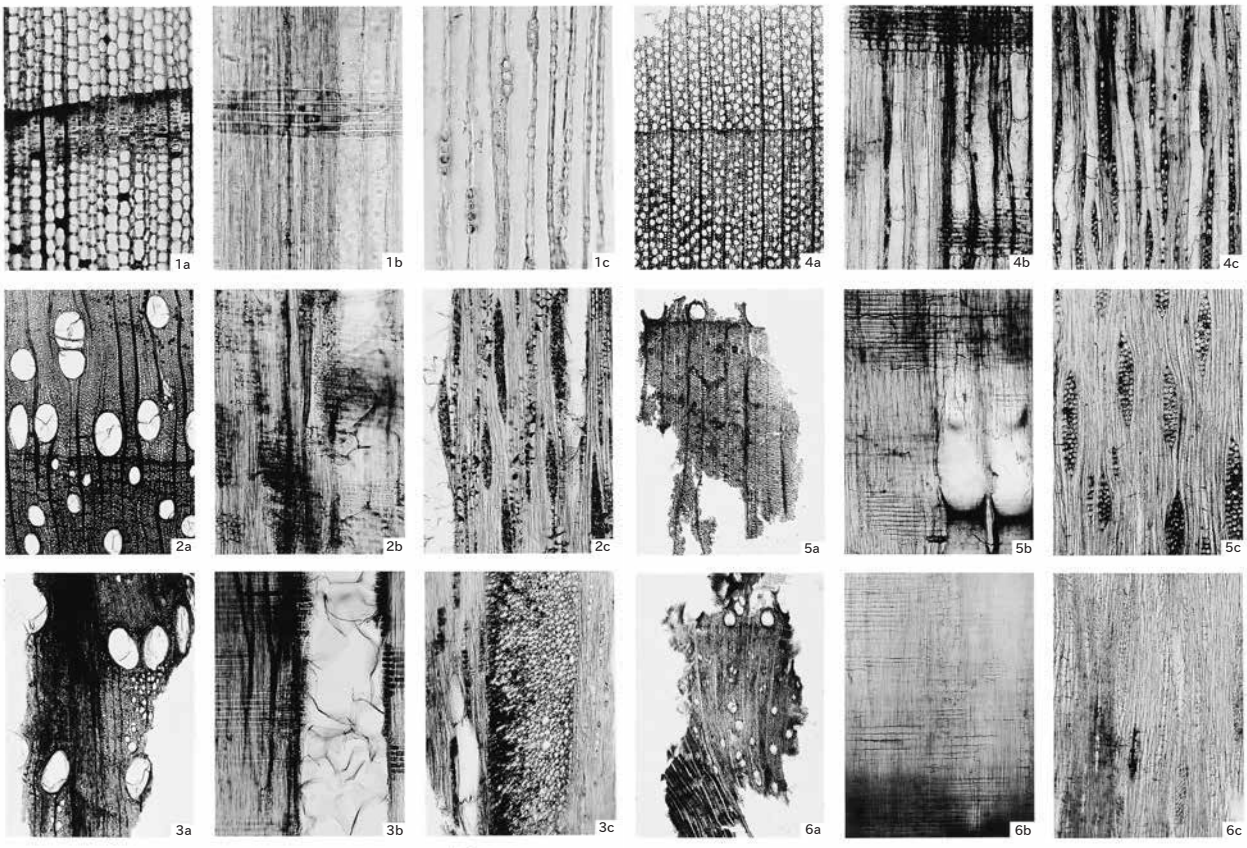
環孔材で、孔圏部は３～４列、孔圏外への移行はやや緩やかで、小道管は年輪界に向かって漸減しながら単独または２～４個が放射方向に複合して配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、１～３細胞幅、１～30細胞高で、時に上下に連結する。

トネリコ属（*Fraxinus*）　　モクセイ科

環孔材で、孔圏部は２～３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または２個が放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、１～３細胞幅、１～20細胞高。

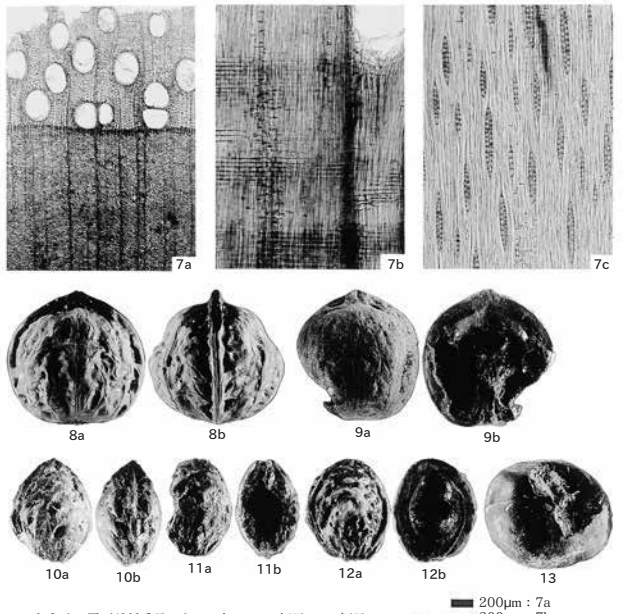
番号	遺構	建物番号	時期	種別	樹種
1	SK118		下層	棒状木製品	スギ
2	SD113		下層	曲物底板	スギ
3	SD113		下層	不明	コナラ属コナラ亜属コナラ節
4	SK54		上層	漆ヘラ	スギ
5	SK631		下層	棒状木製品	スギ
6	SK54		上層	蓋	スギ
7	SK54		上層	加工痕ある材	スギ
8	Ⅶ層		下層	ヤス	スギ
9	24E8		下層	鎌柄	コナラ属コナラ亜属コナラ節
10	SD165		下層	棒状木製品	ウルシ
11	SK118		下層	棒状木製品	スギ
12	Ⅶ層		下層	建築部材	スギ
13	SK157		下層	材	オニグルミ
14	SD113		下層	槽	スギ
15	SD113		下層	蓋	スギ
16	SD113		下層	曲物底板	スギ
17	SD113		下層	板	スギ
18	24FP1	SB6	下層	柱根	トネリコ属
19	24FP9	SB6	下層	柱根	トネリコ属
20	24DP11		下層	柱根	オニグルミ
21	9BP8	SB7	上層	柱根	トネリコ属
22	10BP1	SB7	上層	柱根	カツラ
23	13CP9	SB1	上層	柱根	スギ
24	13CP41	SB2	上層	柱根	キハダ
25	24CP1	SB3	下層	柱根	オニグルミ
26	25CP11	SB3	下層	柱根	カツラ
27	25CP12	SB3	下層	柱根	オニグルミ
28	24CP19	SB3	下層	柱根	オニグルミ
29	25CP21	SB3	下層	柱根	オニグルミ
30	25CP25	SB3	下層	柱根	カツラ
31	25CP26	SB3	下層	柱根	オニグルミ
32	24CP41	SB3	下層	柱根	オニグルミ
33	24CP40	SB3	下層	柱根	オニグルミ
34	23FP2	SB5	下層	柱根	オニグルミ
35	24FP3	SB5	下層	柱根	オニグルミ
36	23FP4	SB5	下層	柱根	オニグルミ
37	24FP5	SB5	下層	柱根	オニグルミ
38	23FP7	SB5	下層	柱根	オニグルミ
39	24FP8	SB5	下層	柱根	オニグルミ
40	25BP6	SB4	下層	柱根	カツラ
41	26BP7	SB4	下層	柱根	カツラ
42	26BP8	SB4	下層	柱根	オニグルミ
43	26CP5	SB4	下層	柱根	カツラ
44	26CP6	SB4	下層	柱根	カツラ
45	26CP8	SB4	下層	柱根	オニグルミ

第７表　樹種同定結果



1. スギ（試料番号23）
2. オニグルミ（試料番号25）
3. コナラ属コナラ亜属コナラ節（試料番号3）
　a：木口、b：柾目、c：板目
4. カツラ（試料番号22）
5. キハダ（試料番号24）
6. ウルシ（試料番号10）
　a：木口、b：柾目、c：板目

第14図　主要樹種同定試料の顕微鏡写真



7. トネリコ属（試料番号19）a：木口、b：柾目、c：板目
8. オニグルミ核（試料番号36）
9. オニグルミ核（食害痕）（試料番号10）
10. モモ核（試料番号23）
11. モモ核（食害痕）（試料番号23）
12. モモ核（試料番号13）
13. トチノキ種子（試料番号21）

第15図　主要樹種・種実同定試料の顕微鏡写真

時期・種別＼樹種		スギ	オニグルミ	コナラ節	カツラ	キハダ	ウルシ	トネリコ属	合計
上層	柱根	1			1	1		1	4
	蓋	1							1
	蓋取手？	1							1
	漆ヘラ	1							1
	計	4	0	0	1	1	0	1	7
下層	柱根	1	16		6			2	25
	槽	1							1
	曲物底板	1							1
	蓋	1							1
	錐	1							1
	柄			1					1
	板	2							2
	棒状木製品	3					1		5
	材	1	1						2
	不明			1					1
	計	10	17	2	6	0	1	2	38
合計		14	17	2	7	1	1	3	45

第8表　器種別樹種別構成表

5 考　　察

A 堆積環境

堆積環境の検討を目的として行った珪藻分析結果では、全般的に珪藻化石の産出が少なく、堆積環境を検討する上で有意な量の化石が産出したのはⅦｂ層（3-22）とⅤ層（3-10）の２試料のみであった。

下層遺物包含層のⅦｂ層は、流水域、止水域に生育する水生珪藻と、生育環境を全く異にする陸生珪藻が高い割合で混在しており、いわゆる混合群集の特徴を示した。このような混合群集から構成される堆積物は、洪水等によって堆積した一過性の氾濫堆積物中に認められる群集［堀内ほか1996］であることから、当土層は河川等の氾濫等による堆積物、あるいは、その影響を受けた堆積物と推測される。Ⅴ層は、珪藻化石の保存状態が不良であり、異地性種の混入や殻の丈夫なものが選択的に残存したと考えられる。産出した珪藻化石について見ると、淡水～汽水生種が多産し、流水指標種も低率ながら認められることから、当土層堆積時は検出される好塩生種が生育するのに適した富栄養な環境があったと考えられ、流水指標種も産出したことから流水の影響もうかがわれる。なお、発掘調査所見ではⅤ層は洪水層の可能性が指摘されていることから、当土層で認められた珪藻化石群集は、周辺河川の環境を反映している可能性がある。一方、珪藻化石の産出の少なかったⅧ・Ⅶａ・Ⅵ・Ⅲ・Ⅱ層は、産出する珪藻化石がさまざまな環境に生育する種類が混在しており、上述した混合群集の特徴が認められる。おそらく、氾濫堆積物を母材とする土層と考えられる。

B 古 植 生

花粉分析結果のうち広域の植生を反映する木本類は、Ⅴ層（3-10）とⅣ層（3-7）を境として花粉化石群集に差異が認められた。Ⅶｂ～Ⅴ層（3-22～3-10）ではブナ属、ハンノキ属が多産し、モミ属、ツガ属、トウヒ属、スギ属、クルミ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属などが検出され、これに対し、Ⅳ層（3-7）・Ⅱ層（3-4）では、Ⅶｂ～Ⅴ層と同様にブナ属が多産するが、ハンノキ属の割合が急減し、マツ属（特に複維管束亜属）の割合が増加する傾向を示した。このうち、ブナ属やコナラ亜属は冷温帯性落葉広葉樹林の主要構成要素であり、モミ属やツガ属、スギ属などは温帯針葉樹林の構成要素である。ハンノキ属は、河畔や低湿地などの適湿地に林分を形成する種を含む分類群であり、ハンノキ属と同様に渓谷沿い・河畔沿いに生育する種ではヤナギ属、サワグルミ属、クルミ属、クマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属、シナノキ属等が挙げられる。Ⅳ・Ⅱ層で割合が増加するマツ属複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は、生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿地周辺など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能な種類である。さらに、極端な陽樹であり、やせた裸地などでもよく発芽し生育することから、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。また、マツ属の急増は日本各地で知られており、その原因として自然干渉の結果としての二次林や植林が増加したことが指摘されている（たとえば［波田1987］など）。

以上の結果から、Ⅴ層堆積時までの本地域周辺は、集水域や後背の丘陵・山地にはブナ属、コナラ亜属を主体とした落葉広葉樹林が成立し、部分的にモミ属、スギ属などの温帯針葉樹が林分を形成していたと考えられる。また、関川をはじめとする周辺の河川沿いにはクルミ属、ニレ属－ケヤキ属などが生育し、低湿地にはハンノキ属が林分を形成していたと考えられる。Ⅳ～Ⅱ層堆積時には、依然として後背地には

ブナ属を主体とする落葉広葉樹林とスギ属などの針葉樹が存在し、河畔等にはニレ属－ケヤキ属などの河畔林が存在したと考えられる。一方、湿地林を形成するハンノキ属が減少し、開けた場所が増加することにより、周辺や林縁部にマツ属が増加した可能性がある。近隣の仲田遺跡（旧板倉町）における９～12世紀とされる流路跡の花粉分析結果によれば、木本類の産出は少ないが、スギ属、ブナ属、コナラ亜属等が認められている［鈴木2003］ことから、本分析結果から想定されるブナ属、コナラ亜属を主体とした落葉広葉樹林とモミ属、スギ属などの温帯針葉樹の林分は、広域の植生を反映していると考えられる。

低地を含めた周辺植生を反映する草本類を見ると、Ⅷ層（3-25）ではクマザサ属を含むタケ亜科の植物珪酸体の産出が顕著である。これまでの調査事例によれば、タケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科と比較して風化に強く、また、生産量の多いことが指摘されており［近藤1982；杉山・藤原1986］、この他の種類と比較し残留しやすいとされている。このことから、当土層ではクマザサ属を含むタケ亜科以外の植物珪酸体は残留しにくかったと考えられ、結果的にクマザサ属が優勢である状況を示したと判断される。花粉化石ではイネ科やカヤツリグサ科、ガマ属なども検出される。また、Ⅷ層は珪藻分析結果から洪水等の影響を受ける堆積環境が想定されることから、クマザサ属を含むイネ科やカヤツリグサ科、ガマ属等は、本遺跡や周辺河川に生育するものに由来すると考えられる。

Ⅶｂ層では、イネ科、カヤツリグサ科、ガマ属、サジオモダカ属、サナエタデ節－ウナギツカミ節、アカザ科、ヨモギ属等の花粉化石や、栽培植物のイネ属、クマザサ属等の植物珪酸体が検出された。イネ属では短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体、籾殻や葉部などに形成される珪化組織片も認められることや、花粉化石で比較的多く検出されたサジオモダカ属は、ガマ属やイボクサ属、ミズアオイ属等の水湿地生植物とともに水田雑草となりうる種を含む分類群であることから、集水域や本遺跡周辺で稲作が行われていた可能性がある。また、イネ属の頴や葉部に由来する珪化組織片が多く産出することから、稲籾殻や稲藁の存在が示唆され、遺跡内で利用された痕跡を示している可能性もある。この他に、タケ亜科を含むイネ科やカヤツリグサ科の一部、サナエタデ節－ウナギツカミ節、アカザ科、ヨモギ属等は、開けた明るい場所を好む人里植物を含む分類群であることから、これらは周囲の草地に生育していたものに由来すると考えられる。

Ⅶａ～Ⅴ層（3-19～3-10）では草本花粉の割合は少なく、イネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ヨモギ属や、水湿地生植物のガマ属、サジオモダカ属、イボクサ属、ヒシ属などの花粉化石が検出された。植物珪酸体は、イネ属、タケ亜科、ヨシ属などが検出されるがわずかであった。Ⅵ・Ⅴ層については、発掘調査所見や珪藻化石結果から洪水の影響が示唆されることや、ハンノキ属の花粉化石が多産する傾向にあることから、河畔や低湿地の植生を強く反映していると考えられる。

Ⅳ・Ⅱ層では、下位のⅦa-Ⅴ層と異なり、草本花粉の割合が増加し、イネ科が多産した。イネ属に由来する植物珪酸体も検出され、Ｂ区Ⅱａ層（1-2）・Ⅱｂ層（1-3）ではイネ属の植物珪酸体や珪化組織片が多産する状況が認められている。また、Ⅳ・Ⅱ層では、ハンノキ属の花粉化石が極端に減少する傾向も認められており、湿地林の減少とイネ科が生育する開けた場所の増加が想定される。ところで、炭片量比率については、これまでの研究成果によれば人間活動と密接に関係しているとされ、鳥浜貝塚（福井県）では6,000年前から炭片量が増加することから、山野を焼き払っていたことが推測されている［安田1987］。また、このような微粒炭は黒ボク土中にも多量に含まれており［山野井1996：井上ほか2002］、黒ボク土の成因の一つとして、火入れによるイネ科草本類を主とする草原の維持等も推測されている［松井・近藤1992］。本遺跡における炭片量比は、Ⅷ～Ⅱ層では約30～50％を示し、下層の遺構検出面であるⅧ

層とその上位の土層でやや差異が認められた。一方、上・下層遺物包含層や上層遺構検出面と洪水層における量比は約40～50％であり、各土層の所見との整合性や土層間における有意差を指摘することができない。

以上の結果、現段階では炭片量と花粉化石群集組成の変化との関連性やその要因を言及することは困難であり、ハンノキ属の減少とイネ科の多産が本遺跡にのみ認められる局地的な傾向であるか、本地域周辺に認められる比較的広域的な傾向であるか、また、本遺跡以外で炭化量比に変化が認められるかといった点が課題とされる。今後、これらの課題を明らかとすることにより、植生変化の要因や植生干渉等について検討できる可能性がある。

C　植物資源利用

C区を主体として出土した種実遺体からは、被子植物３分類群（オニグルミ・トチノキ・モモ）が認められた。このうち、モモは、古くから栽培のために渡来した植物とされ［南木1991］、観賞用の他、果実や核の中にある仁（種子）などが食用・薬用等に広く利用される。本分析結果から栽培の状況は言及することはできないが、モモの可食部である種実が包含層や遺構覆土から検出された状況を考慮すると、遺跡周辺や遺跡内での利用が推測される。

一方、オニグルミやトチノキは、沢筋や河畔などの適湿の地を好んで生育する落葉高木で、トチノキはアク抜きを要するが、食用・長期保存が可能で収量も多いことから、古くから里山で保護されてきた有用植物である。栽培植物のモモと同様の検出状況であることから、利用するため遺跡周辺の河畔等から採取したと考えられる。また、オニグルミは後述するように柱材の樹種に多く認められることから、食糧資源利用だけではなく、構築材として木材も利用されたと考えられる。

一方、木製品は、上層から出土した蓋・蓋取手・漆ヘラ、柱材、下層から出土した曲物底板・蓋・柄・板・棒状木製品、柱材からなる。樹種同定の結果、針葉樹１種類（スギ）、広葉樹６種類（オニグルミ、コナラ属コナラ亜属コナラ節、カツラ、キハダ、ウルシ、トネリコ属）が認められ、オニグルミ（17点）、スギ（14点）、カツラ（7点）といった順に多く、この他の樹種は１～３点といった構成を示した。これらの樹種の材質をみると、スギは、木理が通直で割裂性が高く、加工は容易な種類であり、コナラ節やトネリコ属は、重硬で強度が高いといった特徴を有し、オニグルミも比較的強度が高い部類に入る種類である。カツラとキハダは、広葉樹材としてはやや軽い部類に入り、加工は容易である。ウルシは、比較的耐水性が高いとされる種類である。

木製品の出土層位および器種別の種類構成（第８表）をみると、層位別では、上層はスギ４点、カツラ・キハダ・トネリコ属各１点からなり、スギは柱根・蓋・蓋取手・漆ヘラに利用され、カツラ・キハダ・トネリコ属はいずれも柱根に認められた。下層はオニグルミ17点、スギ10点、カツラ６点、トネリコ属２点、コナラ節２点、ウルシ１点からなり、スギは柱根・曲物底板・蓋・板・棒状木製品・材に認められた。オニグルミは17点中16点が柱根に利用され、カツラやトネリコ属は柱根にのみ認められた。また、コナラ節は柄と用途不明品に、ウルシは棒状木製品に利用される。

以上の結果から、スギは、上層・下層ともに幅広い用途に用いられることが示唆される。スギは、前述のように加工性が高く、材質的にも優れていることから、板材や柱材等に幅広く利用されたと推測される。本地域では、仲田遺跡や下割遺跡（上越市）で出土した古代～中世の木製品の調査事例でもスギを多用する傾向が認められており［パリノ・サーヴェイ株式会社2003・2004；三村・植田2003］、本分析結果

で認められた傾向と調和的である。柱材は、基本的に強度が高い種類が多く利用されており、特に、下層のオニグルミは特徴的である。オニグルミ、カツラ、キハダは河畔・谷沿いに生育し、トネリコ属も同様な環境で生育する種類が含まれる。各掘立柱建物跡の木材利用は、上層のSB7、１・２は、試料数が少なく判断は難しいが、本分析結果によれば異なる樹種を用いている傾向がうかがわれる。一方、下層では、SB5はオニグルミのみ、SB3・４はオニグルミ・カツラの２種類、SB6はトネリコ属のみと、オニグルミを主体として、カツラが伴う傾向が認められた。SB6やSB7は、試料数が少なく、現時点では傾向を把握するに至らない。

本遺跡周辺では、五反田遺跡（旧板倉町）で古代の柱材の分析調査が行われ、スギを主体とする傾向が認められている［パリノ・サーヴェイ株式会社　未公表］。この他では、下割遺跡の古墳時代前期とされる柱穴から出土した柱材や礎板にはクリとオニグルミが利用され、中世の柱材にはクリ、スギ、モクレン属が認められている［パリノ・サーヴェイ株式会社2003・2004］。また、仲田遺跡の中世とされる柱材の分析調査では、クリとコナラ節が多い傾向が認められ、この他にトネリコ属やキハダ、ヤマグワ等の利用が認められている［三村・植田2003］。したがって、オニグルミやキハダは、時期は異なるが柱材としての利用例が認められ、木材利用の傾向はおおむね類似すると言える。一方、カツラを柱材に用いる事例は、本地域では認められておらず、注目される点である。オニグルミの利用が顕著である点は、花粉分析結果やオニグルミ核が出土していることから、本遺跡周辺に生育し、入手も容易であったことが背景として考えられる。また、カツラもオニグルミと同様に河畔・谷沿いに生育する種類であることや、花粉分析結果でも認められることから、遺跡周辺においても容易に入手できた可能性がある。また、本遺跡では、前述の古代の柱材や礎板、中世の柱材に認められるクリが全く検出されず、花粉分析結果でもクリは産出しないことから、遺跡周辺にはクリは認められなかった可能性があり、入手可能なオニグルミやカツラが選択・利用されたと推測される。ところで、前述したハンノキ属の木材は、本分析結果では木製品には1点も認められなかったことから、本遺跡での木材利用との関連性は言及することはできない。

下層から出土した棒状木製品に認められたウルシは、栽培種とされる種類である。このことから、本遺跡周辺におけるウルシ栽培が推測され、おそらく、樹液採取後の木材が利用されたと考えられる。

D　栽培植物の検討

B区から検出された上層畑跡では、畝状小溝が東西あるいは南北方向に数条セットで並走する状況が認められている。分析調査の結果、畝状小溝の構築面に相当する土層（Ⅳ層：1-7b）では植物珪酸体の検出個数は少なく、C区Ⅳ層（3-7）も同様な産状を示した。畝状小溝（SD347）内の覆土（1-9）もⅣ層（1-7b）と同様に植物珪酸体の検出個数が少なかった。一方、耕作土の可能性が示唆される土層（1-4）および基本土層Ⅱ層相当層（Ⅱb層：1-3、Ⅱa層：1-2）では、栽培植物であるイネ属の短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体、珪化組織片のいずれも産出が顕著であった。

イネ属とその他のイネ科植物の産出状況をみると、イネ属は耕作土と考えられる土層より上位に向かい短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体が増加し、これに対して、クマザサ属やヨシ属は減少する傾向がうかがわれる。本分析結果によれば、各土層でイネ属の植物体が多量に混入、あるいは、蓄積される一方で、周辺に生育したと考えられるイネ科植物が減少したと考えられる。また、イネ属が検出されることから、Ⅳ層堆積以降、当地点におけるイネ属の栽培、あるいは、畑作に伴い保温や保湿材としての敷藁や施肥として稲藁が利用されたことが推測される。なお、敷藁や施肥として稲藁が利用されていた場合、耕作土や

Ⅱ層からはキビ類やムギ類の植物珪酸体が検出されなかったことから、イネ科作物以外の作物が栽培されていた可能性がある。また、C区のⅡ層（3-4）では、イネ属をはじめとして、B区の耕作土やⅡ層と同様の植物珪酸体が検出されるもののわずかであり、珪化組織片は全く検出されなかったことから、B・C区では土地利用やイネ属の利用が異なる状況も推測される。

C区下層に相当するⅧ層（3-25）・Ⅶb層（3-22）では、イネ属の短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体、珪化組織片の産出とクマザサ属の減少といった傾向が認められた。試料採取地点は、下層で検出された畝状小溝に比較的近いことから前述と同様に栽培の可能性や、遺跡内でのイネ属の利用の痕跡を示している可能性がある。

なお、日本各地における畑跡の集成［日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会編2000］によれば、新潟県内の沖積平野の微高地上における平安時代の畑跡は13遺跡の事例が確認される。このうち、江添C遺跡・江添D遺跡（吉田町）では平安時代の畑跡の分析調査が行われ、イネ属、あるいはムギ類を含むイチゴツナギ亜科に由来する植物珪酸体が多産することから、イネ属、あるいは、ムギ類栽培が行われていた可能性が指摘されている［パリノ・サーヴェイ株式会社2000a・2000b］。

引用文献

安藤一男　1990　「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42　pp.73-88

石川茂雄　1994　『原色日本植物種子写真図鑑』p.328　石川茂雄図鑑刊行委員会

伊藤良永・堀内誠示　1991　「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6　pp.23-45

井上　淳・吉岡周作・千々和一豊　2002　「琵琶湖周辺地域に分布する黒ボク土中の黒色木片について」『日本第四紀学会講演要旨集』32　pp.74-75

近藤錬三　1982　「Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究」『昭和56年度科学研究費（一般研究C）研究成果報告書』p.32

近藤錬三・佐瀬　隆　1986　「植物珪酸体分析、その特性と応用」『第四紀研究』25　pp.31-64

小杉正人　1988　「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27　pp.1-20

杉山真二・藤原宏志　1986　「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－」『考古学と自然科学』19　pp.69-84

鈴木　茂　2003　「花粉分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第128集 北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅱ 仲田遺跡』pp.42-45　新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

中山至大・井之口希秀・南谷忠志　2000　『日本植物種子図鑑』pp.642　東北大学出版会

日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会編　2000　『はたけの考古学』日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集第1集　p.291

波田善男　1987　「松くい虫被害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究－松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の攪乱とその動態について－」『資料集』pp.41-49　日本自然保護協会

原口和夫・三友清史・小林　弘　1998　「埼玉の藻類 珪藻類」『埼玉県植物誌』pp.527-600　埼玉県教育委員会

パリノ・サーヴェイ株式会社　2000a　「自然科学分析」『吉田町文化財調査報告書第5集 新潟県西蒲原郡吉田町江添C遺跡　－吉田町米納津地内国営排水路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』pp.206-213　吉田町教育委員会・山武考古学研究所

パリノ・サーヴェイ株式会社　2000b　「自然科学分析」『吉田町文化財調査報告書第6集 新潟県西蒲原郡吉田町江添D遺跡　－吉田町米納津地内国営排水路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』pp.77-81　吉田町教育委員会・山武考古学研究所

パリノ・サーヴェイ株式会社　2003　「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第120集 一般国道253号上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅰ　下割遺跡Ⅰ』pp.26-29　新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵

文化財調査事業団

パリノ・サーヴェイ株式会社　2004　「木製品の樹種同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第134集 上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅱ 下割遺跡Ⅱ』pp.39-44　新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

堀内誠示・高橋　敦・橋本真紀夫　1996　「珪藻化石群集による低地性堆積物の古環境推定について－混合群集の認定と堆積環境の解釈－」『日本文化財科学会 第13回大会 研究発表要旨集』pp.62-63　日本文化財科学会

松井　健・近藤鳴雄　1992　『土の地理学－世界の土・日本の土－』p.122　朝倉書店

南木睦彦　　1991　「栽培植物」『古墳時代の研究 4 生産と流通Ⅰ』石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編　pp.165-174　雄山閣

三村昌史・植田弥生　2003　「仲田遺跡出土木製品の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第128集 北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅱ 仲田遺跡』pp.35-41　新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

山野井徹　　1996　「黒土の成因に関する地質学的検討」『地質学雑誌』102　pp.526-544

安田喜憲　　1987　『文明は緑を食べる』p.227　読売新聞社

Asai, K. & Watanabe, T.　1995　Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution（2）Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom　10　pp.35-47

Krammer, K.　1992　PINNULARIA.eine Monographie der europaischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J.CRAMER　p.353

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.　1986　Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1. Gustav Fischer Verlag　p.876

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.　1988　Bacillariophyceae.2.Teil:Epithemiaceae,Bacillariaceae,Surirellaceae.In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2. Gustav Fischer Verlag　p.536

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.　1991a　Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3. Gustav Fischer Verlag　p.230

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.　1991b　Bacillariophyceae.4.Teil: Achnanthaceae,Kritsche Ergaenzungen zu Navicula（Lineolatae）und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/4. Gustav Fischer Verlag　p.248

第Ⅶ章　ま　と　め

1　C区下層の調査

A　出土土器の編年

1）出土土器の概要

C区下層出土の土器は、各器種の形態や法量等から８世紀初頭から前葉にほぼ相当すると考えられる。ここではさらに、土器の出土状況から前後に二分し、その形態、組成変化や周辺遺跡の事例と比較したのち、編年的位置づけを行う。

まず口縁部残存率計測からC区下層出土土器の器種構成比率をみる。調査区全体では食膳具が61.6％、貯蔵具が1.8％、煮炊具が36.6％で貯蔵具の少なさが目立つ。次に比較的土器が多く出土した遺構を見てみると、８世紀初頭のSD113は、食膳具が84.8％を占め、貯蔵具、煮炊具の比率を圧倒している。一方、８世紀前葉まで下がる可能性のあるSC49、SC119とSC93は、前者が食膳具44.6％、煮炊具55.4％、後者が食膳具61.4％、煮炊具38.6％で、貯蔵具はいずれからも出土していない。

次に層位的な出土状況や接合関係から土器の変遷を考える。SC49、SC119で土器が多く出土する１層とその下に位置するSD170、SD172の確認面との間には土器がほとんど出土しない層があることから、双方から出る土器群の間には時期差があると考えられる。また、SC93、SC94、SC95の土器も２層に分層された１層からほぼ出土しており、後述するようにSC49、SC119と接合関係もあることから、少なくともSD170、SD172とは時期差があると考えられる。

接合関係は、まずSD113出土の須恵器は畑跡１を構成するSD98、SB3の内部にあるSC91やSD142、SD609、SC90出土と接合する。SD170、SD172出土土器とは接合関係がないが、遺構がSD113に接していること、土器様相が類似することから、時期差はないと考えられる。一方、SC49、SC119出土の須恵器はSC93、SC95出土と接合する。なお、SD113とSC49出土、SD170とSC119出土が接合する例もある。

以上から、遺構確認面より高い位置で土器を多く出土する、SC49、SC119、SC93、SC94、SC95出土の土器群はC区下層の中では新しく、Ⅷ層上面で確認される遺構出土の土器群はC区下層の中では古いと考えたい。そこで、後者を第１群土器、前者を第２群土器として、さらに検討を進める。

全体

種類	器種	口縁部 残存率/36	比率 (残存率)
土師器	無台杯	16	1.0
	無台椀	49	3.0
	鉢	34	2.1
黒色土器	無台椀	15	0.9
須恵器	杯蓋	308	19.0
	有台杯	195	12.0
	無台杯	266	16.4
	杯	116	7.2
食膳具総計		999	61.6
須恵器	長頸瓶	10	0.6
	広口瓶	13	0.8
	甕	1	0.1
土師器	壺	5	0.3
貯蔵具総計		29	1.8
土師器	長甕	370	22.8
	小甕	197	12.2
	鍋	25	1.5
	甑	1	0.1
煮炊具総計		593	36.6
総　計		1621	100.0

SD113

種類	器種	口縁部 残存率/36	比率 (残存率)
土師器	無台杯	8	2.5
	無台椀	36	11.2
	鉢	0	0.0
黒色土器	無台椀	0	0.0
須恵器	杯蓋	40	12.4
	有台杯	60	18.6
	無台杯	101	31.4
	杯	28	8.7
食膳具総計		273	84.8
須恵器	長頸瓶	0	0.0
	広口瓶	13	4.0
	甕	0	0.0
土師器	壺	0	0.0
貯蔵具総計		13	4.0
土師器	長甕	21	6.5
	小甕	13	4.0
	鍋	2	0.6
	甑	0	0.0
煮炊具総計		36	11.2
総　計		322	100.0

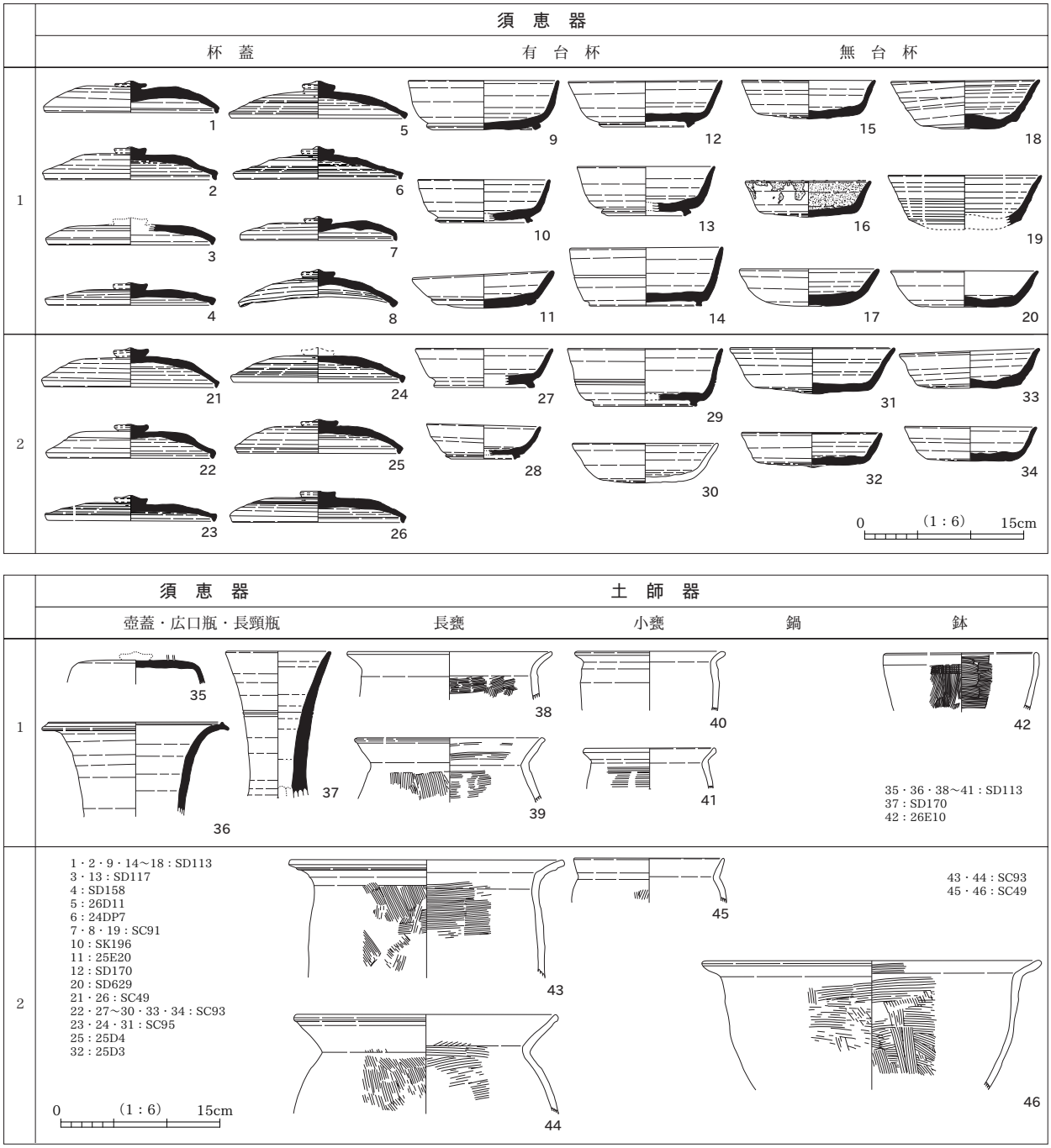
SC49+SC119

種類	器種	口縁部 残存率/36	比率 (残存率)
土師器	無台杯	2	1.0
	椀	5	2.6
	鉢	0	0.0
黒色土器	無台椀	0	0.0
須恵器	杯蓋	59	30.6
	有台杯	0	0.0
	無台杯	19	9.8
	杯	1	0.5
食膳具総計		86	44.6
須恵器	長頸瓶	0	0.0
	広口瓶	0	0.0
	甕	0	0.0
土師器	壺	0	0.0
貯蔵具総計		0	0.0
土師器	長甕	64	33.2
	小甕	31	16.1
	鍋	12	6.2
	甑	0	0.0
煮炊具総計		107	55.4
総　計		193	100.0

SC93

種類	器種	口縁部 残存率/36	比率 (残存率)
土師器	無台杯	4	1.6
	椀	0	0.0
	鉢	9	3.6
黒色土器	無台椀	0	0.0
須恵器	杯蓋	24	9.6
	有台杯	40	15.9
	無台杯	68	27.1
	杯	9	3.6
食膳具総計		154	61.4
須恵器	長頸瓶	0	0.0
	広口瓶	0	0.0
	甕	0	0.0
土師器	壺	0	0.0
貯蔵具総計		0	0.0
土師器	長甕	91	36.3
	小甕	3	1.2
	鍋	3	1.2
	甑	0	0.0
煮炊具総計		97	38.6
総　計		251	100.0

第９表　C区下層出土土器口縁部残存率計測表



第16図　C区下層の土器編年表

2）出土土器の編年

まず、形態変化は須恵器の杯蓋、有台杯、無台杯について検討する。

杯蓋：第１群土器はＡＩａが主体で、SC91出土のＢが２点ある。また、口縁端部の突出が小さいものが数点みられるのも特徴である。第２群土器はＡＩａに加え、ＡＩｂの割合が増えるほか、ＡⅡがある。

有台杯：第１群土器はＡＩａ、ＡＩｂ、Ｃがある。第２群土器は少ないが、ＡＩｂ、ＡⅡ、Ｃがある。

無台杯：第１群土器はＡⅡａ、ＡⅡｂ、Ｂがある。第２群土器はＡＩ、ＡⅡａ、ＡⅡｂがあるが、31や32は外面底部の中央が突出するものの、体部と底部との境が比較的明瞭で、底部中央までの丸みは弱い。

また、土師器の無台杯がある。

以上から第１群土器から第２群土器の変化として、杯蓋は天井部外面の広いものが減っていき、有台杯、無台杯は底部が丸底のものが減っていくようである。

続いて器種組成の変化として、まず須恵器の貯蔵具をみる。第１群土器には壺蓋、広口瓶、長頸瓶があるが、第２群土器にはない。土師器全般では、第１群土器は長甕ＡⅠ、ＡⅡ、小甕Ａ、Ｂ、鉢等、第２群土器は長甕ＡⅠ、ＡⅡ、小甕Ａ、鍋等があるが、ロクロ成形のものはほとんど認められない。

次に周辺の消費遺跡例から比較を行う。まず上越市今池遺跡SK24出土土器［坂井1984］を見る。深さが約1.3mあり、土器は自然堆積である上層から多く出土し、年代は８世紀中葉前後（今池編年Ⅱ期）に比定されている。土器は須恵器杯蓋・有台杯・無台杯・短頸壺、土師器甕等が出土しており、これらの土器の中にはＣ区下層の分類で有台杯ＡⅠａ、ＡⅠｂ、ＡⅡ、Ｃ、無台杯ＡⅡｂに相当するものがあるが、杯蓋はＣ区下層の分類には対比できない。特にＣ区下層の有台杯ＡⅠｂ、ＡⅡ、Ｃ、無台杯ＡⅡｂに類似するものがあることから、Ｃ区下層第２群土器に近い時期と考えられる、なお、今池編年Ⅰ期の土器群については、Ｃ区下層出土土器と比較できるものがほとんどなく、ここでの検討は行わない。

続いて上越市（旧柿崎町）木崎山遺跡［戸根ほか1992］で、12基検出された古代の竪穴住居のうち、３基の出土土器について検討する。３号竪穴住居からは須恵器杯蓋・有台杯・無台杯・長頸瓶、土師器無台杯・椀・高杯・鉢・長甕・小甕・甑等が出土しており、年代を今池Ⅰ期に併行する８世紀前葉とされている［北村・春日・高橋1992］。須恵器有台杯の法量がＣ区下層のものより全体に大きいが、須恵器長頸瓶、土師器無台杯、鉢など、対比可能なものもあるため、Ｃ区下層第１群土器よりやや先行するものの、近い時期と考えられる。11号・12号竪穴住居出土の須恵器有台杯の中には、Ｃ区下層の有台杯ＡⅠｂに類似するものがあるが、前者は８世紀前半、後者は８世紀中葉に比定されている。

なお、上越市津倉田遺跡［笹澤・小島1999］出土土器にも須恵器を中心にＣ区下層出土の各器種に類例が多くみられた。ここでは個々の比較を行わないが、Ｃ区下層の段階と同時期に集落が営まれていたようである。

第10表には８世紀代の県内を中心とする土器編年の対比を行い、上述の検討をもとにＣ区下層第１群、第２群土器の編年的位置づけを示した。第１群土器を新井市栗原遺跡SD25［坂井1982］出土土器の直後とし、土器編年的には明瞭に区分できない第２群土器の下限を、今池遺跡SK24出土土器を標準とする編年区分の一部に下げた。Ｃ区下層出土の土器群は、時期的に前後するものの混在がない、８世紀初頭から前葉のややまとまった土器群であり、頸城地域の栗原遺跡SD25段階から今池Ⅰ期段階を再考する際などの資料として利用されることが期待される。

Ｂ　集落の構造と変遷

Ｃ区下層の調査では４棟の掘立柱建物跡が検出された。SB3は桁行３間、梁間２間で、SB4は桁行３間、梁間２間、SB5・６は桁行２間、梁間２間の側柱建物である。

SB3には周囲を南東隅が1.5mほど開く溝が、SB4・５には東側が開くコの字状の溝が囲む。これらの溝は雨落溝と考えられ、さらにSD607やSD113に流れ込む構造となっている。また、溝がない方に入り口が設けられたと考えられる。建物を溝が囲む例は、今池遺跡［前掲］SB115（８世紀前半から９世紀前半、北西隅と東側が開く）、燕市三角田遺跡［松島2001］SB7（８世紀初頭、東側が開くコの字状）・SB9（８世紀初頭、北西部が一部開くか）、中条町蔵ノ坪遺跡［飯坂ほか2002］SB7～９（９世紀後葉、東側が開くコの字状）

等がある。

柱根はSB3で9本、SB4で6本、SB5で6本、SB6で3本が残存していた。SB3・4はオニグルミやカツラの丸材や割材を使用し、横断面を円形状や楕円形状に加工し、下端部を逆台形状や逆三角形状等に仕上げている。柱穴を掘ったのちさらに打ち込んだ可能性がある。SB5はオニグルミの割材を使用し、断面を長方形状や楕円形状に加工し、下端部を片側に偏った逆三角形状に仕上げている。

建物の存続期間は、建物を囲む溝や土器が多く廃棄されたSD113や土器集中遺構出土土器から8世紀初頭から前葉である。さらに各建物が重複せずに配置されていることから、構築や廃棄の時期に大きな差はなかったと推測される。

C区下層で検出された溝状遺構には形態や推測される性格等から、①排水溝と考えられるもの、②畑跡と考えられえる畝状小溝、③性格不明の細く長い溝に大きく分類可能である。①はSD113・145・167・607とその周辺の溝で、各溝には窪みや張り出しが複数設けられていたり、同じ溝や、接し合う溝との間に高低差がついている。なお、SD113aは調査区東を南北に走り、東側へ広がると推測される湿地帯と本集落を画する性格も有すると考えられる。

最後に、SB5とその周辺の遺構から集落構造の一端を検討したい。SB5は上述のとおり、2×2間の側柱建物で、東側が開く雨落溝（SD117）に囲まれる。溝の西側や北側に注がれた雨水は北西隅へ流れ、さらに建物の北側を南北に走る溝（SD145・167・158）を通り、主要な排水溝（SD113a）に流れ込む。建物とSD113aの間には畑地が2か所ある。SB6の北側にはSC90があり、埋土中に焼土や小礫を多く含んでいた。C区内ではほかに類似する遺構はなく、祭祀的な性格も推測される。また、SB5の南西側やSB6の北東側には性格不明遺構（SX169・171）があり、樹木の可能性を想定したい。不要となった土器や木製品は、当初溝に廃棄されていたが、のちに専用の捨て場（SC49・119・93等）を設けた可能性が出土土器の変遷から推測される。

「献進下…」などと書かれた木簡や、複数の須恵器杯蓋の転用硯の出土から、文字の読み書きが可能な人物の存在が推測されるが、須恵器や土師器の器種の内容や建物の規模等から当時の一般的集落であったと考えられる。C区下層の遺構群は前後する時代との重複がないため、8世紀初頭から前葉の集落跡を検討する際の好例となりそうである。

西暦	田嶋1998	春日1999	坂井1984	坂井1989	笹澤2003	田中2003	戸根ほか1992	本書まとめ
700	Ⅱ3	Ⅲ1		Ⅰ期	Ⅱ-3	3期	Ⅱ期	
	Ⅲ	Ⅲ2	Ⅰ期	Ⅱ1期	Ⅲ-1	4期	Ⅲ期	第1群土器
	Ⅳ1	Ⅳ1	Ⅱ期	Ⅱ2期	Ⅲ-2	八幡林H	Ⅳ期	第2群土器
	Ⅳ2（古）	Ⅳ2	Ⅲ期	Ⅲ1期	Ⅳ-1	5期	Ⅴ期	
800	Ⅳ2（新）	Ⅳ3		Ⅲ2期	Ⅳ-2	6期	Ⅵ期	

第10表　編年対照表

C　SB5出土木簡について

（釈文案）

・「獻進下□［　］□□［　×

［倉カ］

・「□［　　×

（235）×23×●　061型式

上端部は円頭形に加工されている。表面は上端から約6cm下まで腐食もなく原形を留める。若干の欠損はあるが、両側面の残りもよい。表面調整も明瞭に確認され、調整痕も見出せる。墨痕もよく残り、肉眼でも十分に判読できる程度である。それより下は腐食によって先細る形状となり、下端部は原形を確認できない。厚さも同様である。調整も確認できず、墨痕もこの部分にはほとんど見出せない。やや詳しくいえば、上端から約6～12cmにかけては右半分を大きく欠損しているため、文字の一部となる墨痕が確認できるだけである。約12～14cm付近にはわずかに「部」のような墨痕が見出せるが、染み込んだ墨痕と思われ、判読の確定までは至っていない。なお、赤外線写真では「下」の第3画（最終画）の墨痕が2つあるように見えるが、本来の墨痕は上の点で、下の墨点のような痕跡は腐食物の痕跡が付着し、その影が映り込んだものである。これらのほかに表面から見た時、木簡全体が若干左に褶曲しているが、これが元々の形状なのか、廃棄後の土圧などによるものなのかは不明である。

裏面は上端から約2cmまでは腐食が少なく、調整が確認され滑らかな状態が残る。これ以下は腐食が著しく調整や墨痕は確認できていない。

本木簡はSB5北西隅の柱穴P1埋土2層内から出土した。SB5の柱穴の中ではP1ともう1つの柱穴だけ柱根が残っていなかったので、意図的に柱根が抜かれた可能性が高く、埋土2層はその抜き取り穴に堆積した土である。出土状況は図版63の写真を見てのとおり、木簡の表面が柱穴底部を向き、上端部がやや下に傾いた状態で出土した。それ故下端部の方が開口部に近く、腐食が進んだ可能性が考えられる。この柱穴からの共伴遺物はない。SB5と関係する遺物としては、建物を囲む溝（SD117a）から須恵器が10点あまりと土師器類が少量出土しただけで、特筆される遺物は見出せていない。

判読された文字内容は表面が3文字分で、冒頭の「獻」以下に「進」と、正反対の意味である「下」が記されている。裏面は「倉」や「食」などの可能性が高いが、それ以下の文字が判読できないため類推もできず、確定できていない。その結果、表面の3文字の中で、いずれに注目するかによって「獻進下」は3つの解釈が可能となる。

1つは、「進下」を中心に解釈した場合である。習書を除くと、「進下」と記載された木簡の類例は3点が見出される。1点は平城京内に、奈良時代後期に造営された官の尼寺である西隆寺跡出土木簡である。造営の一部局である「工所」に従事して食料支給を受ける人員を書出した文書木簡だが、食料の下付を請求する意味の中で「進下」を用いていると思われる［木簡学会1990］。ほか2点は長屋王家木簡で、父・故高市皇子の家政機関から長屋王家の家政機関に宛てて塩や灯油を請求する木簡の中で、下付を求めて用いられている［奈良国立文化財研究所2001；木簡学会2004］。これらの例を参考とすれば、本木簡も請求木簡の可能性が生じ、「進下」以下には請求に対して支給される物品などが記載されていたと推測される。

しかしながら、吉川真司が指摘するように「進下」と記された木簡が上述の３点に限られ、類例が少ないこと［吉川2004］、一般的に請求木簡には「請」の文字が文面のいずれかに記載されるが、本木簡にはそれがない。よって請求木簡で理解することは難しく思われる。

次いで「獻」に着目して、この字義が本来的には“奉（タテマツル）”を意味し、古代で「獻」が用いられた時には物品等の“献上・上納”の意味で用いられていることから、この内容の木簡と解釈することもできる。「獻」使用の具体例としては、聖武天皇が東大寺に献納した物品目録である正倉院古文書「東大寺献物帳」などが典型的な例である。ところが木簡でも文書でも「獻進」となると類例がなく検討はできない。そこで、「獻」の文字を含む古代木簡に注目すると３点が考察の対象となり[1)]、石川県津幡町加茂遺跡出土木簡などで物品の献上に関する内容が確認される［三浦・森田1995］。３点の木簡すべてが木簡の中では「献上」と書かれているのをみれば、根拠はないが、意味的な類似性から“献上”の「上」に代って、「進」が用いられたとも考えられる。この場合、本木簡を献上木簡と解さなければならない。しかし、「献上」木簡自体も類例が少なく一般化しにくいことや、後述するように進上木簡も物品などの送上に用いられ基本的な機能・性格が近似して両者の区別が難しいため、本木簡の性格を特に献上木簡と断定することは控えておきたい。

さらに「進」に着目し単純に進上木簡としても、既出の進上木簡では「進」だけで用いられることはほとんどなく、「進」の上に敬意を示す文字を記すことも少ない。唯一、平城京右京三条二坊三坪の発掘調査で出土した木簡に「謹進上木工」と記された例があるのを参考にすれば、本木簡の「獻」をこれと同様に敬意を示す目的で記されたとも解される。このように「獻」と「進」のいずれが本木簡の本来的な性格か決めがたいので、ここでは機能的な近似性から広義の進上木簡と見なしておきたい。その場合、和島村八幡林遺跡出土の「村進上」木簡、旧笹神村発久遺跡出土の「健児等解申進上宿直」に次ぐ県内３例目となる。進上木簡の典型的な例は長屋王家木簡や長岡京左京出土木簡などに見出せ、前者の進上木簡を考察した舘野和己によれば、その書式として『進上元＋“進上”＋物品名・数量＋持参人名＋日付＋人名』と指摘されている［舘野2001］。地方で出土した進上木簡の中には多賀城跡出土木簡のように兵士の進上などの場合もあり、「物品名・数量」が「人・人数」に代る場合もあるが、基本的には同様と考えられる。

こうした進上木簡の書式と比較すると、本木簡の「下」以下には物品名か、人名・氏族名などが記されていた可能性が考えられる。物品名とした場合には具体的な品名を示すことはできなかったが、人名・氏族名とした場合には「下野君」などが類推される。「下」以下の一部の墨痕でも判読できれば、具体的な氏族名などの推測も可能であるが、これ以上は不明である。

一方、本木簡には進上元が記載されていないことも特徴的である。この点については前述した平城京右京三条二坊三坪出土木簡も進上元が記載されず、敬称の「謹」から書き始めていることや、「東大寺献物帳」が最初に「獻　東大寺」と記すのに近い。櫛木謙周によれば、進上木簡は本来文書木簡であるが、長屋王家木簡にみる物品進上状の場合には家政機関・直轄地・「税司（使）」・郡司などからの輸納にみられ、荷札との関係や役割を含む上、長屋王家家政機関との直接的な支配関係や物品送付に使われると指摘されている［櫛木1999］。進上木簡の直接的な使用環境は八幡林遺跡出土の「村進上」木簡でも推測され、八幡林遺跡を郡家か関連施設とすれば、郡と郷との関係ではなく、郷内の村と進上状を取り交わし、

1）木簡データベースの検索では「献」を記した木簡は５点見出される。１点は「献」を記すだけなので詳細は不明であり、もう１点は関係文献がなく詳細がわからなかった。

郡と村の直接的な関係の可能性が考えられる。このような直接的な関係に用いられるため、木簡を取り交わす両者の間で進上元が認知されており、記載されなかったと推測される。本木簡も同様とすれば、直接的な支配関係の中で使用された可能性も考えられる。

さらに平城京内出土の進上木簡は邸宅本体ではなく、付属的な施設で出土していることも注目される。報文によれば、「謹進上」木簡が出土した地点は平城京内で三坪ほど規模を持つ宅地内の付属施設で、漆工房などが存在した可能性が報告されている［西崎1992］。長屋王家木簡も長屋王家の家政機関という付属的な施設が存在する地点から出土したものである。前述した進上木簡の直接的な関係や、邸宅・官衙の付属的施設で廃棄される状況を参考に本木簡の廃棄までのルートを推測するならば、本遺跡が頸城国府と推定される今池遺跡群から２～3km地点で国府に近接しているので、関川右岸の近隣地域から物資を集積するような国郡家の出先的な施設であった可能性が考えられる。それは以下のような近世の事情も参考となる。本遺跡の所在地は「大字戸野目」に近く、高田方面から東頸城、山を越えて魚沼・関東へ向かう出入口であり、一種の要衝といえる。そのためか、貞享２～３年には周辺の幕府領からの年貢を集める郷蔵等が城下から分置され、周辺の津有・新田・里五十公郷の年貢が集積・収納されたようである。これに近い状況を古代でも推察するならば、本遺跡か周辺に国郡家の出先機関が所在し、関川右岸の村々（集落遺跡）と直接的な物資の輸納を行い、そこで本木簡が使用され、検納後不要となり廃棄されたと考えられる。このように村・郷といった集落との直接的な物資の進上で本木簡は使用されたとすれば、この木簡を作成したのは周辺の村・郷レベルの在地有力者層と考えられる。

しかしながら本木簡の場合、既出の進上木簡と比較した時、符合しない点もある。第一に、櫛木謙周も指摘しているように、進上木簡は基本的に文書木簡であるが、物品などと一緒に移動する性格上、荷札と関係する内容や近い機能を内包する。それ故、進上を受けた地点が廃棄地点となる場合が多く、各地から進上されて不要となった木簡が複数点出土するのが一般的である。前述した平城京右京三条二坊三坪でも「謹進上」木簡のほかにもう一点進上木簡が共伴する。それに対して本遺跡からは、ほかに木簡は出土していない。物資を集積する出先的な施設ならば、もう少し墨書土器を含めた文字資料が出土してもよいがそれらもない。さらに転用硯など文字に関わる遺物が少量なのに対し、遺物全般的に食器類や砥石などが主であり集落的様相である。遺構の面でも、本遺跡の下層遺構では官衙に準じるような遺構や性格は見出しがたい。具体的には、掘立柱建物の配置が軸方向をそろえるなどの規則性に乏しく、SB5に隣接して畑跡と思われる畝状遺構が検出されていることなどもそれを示している。確かに、最近の城柵官衙における調査成果を見ると、城柵内で畝状遺構が検出されるものがあり[2)]、城柵官衙内のこうした地点の可能性も推測される。しかし、上越市今池遺跡や妙高市（旧新井町）栗原遺跡、和島村八幡林遺跡など県内の官衙と関連する遺跡ではこうした畝状遺構は見られず、むしろ、集落遺跡とされている上越市一之口遺跡などで同様の遺構が見出されていることを考慮すると官衙との関係は考えがたい。

しかも、今池遺跡周辺が越後国府の所在地としても、国府の造営が本遺跡の下層の年代である８世紀初頭～前半までさかのぼるのかも問題である。木村宗文は越後国成立から大宝２年越中四郡編入までの間、渟足柵に国府機能が所在したと指摘する［木村1986］。それにしたがえば下層の年代頃に、頸城郡に越後国府とその機能が移管していたとは考えにくい。とすれば、本木簡が頸城郡の越後国府と関係するかは

2）第31回古代城柵官衙検討会で報告された秋田城跡第84次調査では元慶の乱直後と考えられる遺構面で畝間状遺構が検出され、乱後の秋田城復興期に関わる可能性が指摘されている。

不確実であり、その関係機関との間で使用されたかも問題となり一層、官衙との関係が見出しがたくなる。仮に、本遺跡がその造営に従事する人々の居住集落で、進上した木簡が戻ったと仮定しても、進上木簡の中で戻る例は少なく[3]、そもそも進上木簡が戻る状況というのは、その上納的性格や使用法から考えると、特殊な状況や条件を推測しなければならないように思われる。このようにこれまでの進上木簡が出土する地点の状況と比較すると本遺跡は大きく様相が異なり、官衙との関係で進上木簡とした場合には、その廃棄までのルートにおいて不明な点や既出の例とは符合しない点が多くなる。以上のように、木簡の文字内容からは献上や進上に関わる可能性が推察されるが、それ以外の視点からこの木簡に付随する要素をみると、進上木簡にそぐわない点が散見され、木簡の性格を進上に確定することも難しい。

そうした中で、１つだけ注意しておきたいのが、既出の進上木簡の中には神祇に対する内容を記した木簡が見られることである。唯一の例だが、富山県北高木遺跡出土３号木簡は以下のような内容である。

・道長大神進上申三月十日

　兄江富継天女建部乙成女生子兄江千仁女大神解申神×

・品治部他当女道長大神進上申事如件三月十日

報告書によればこの木簡の性格は習書木簡とされている［大島町教育委員会1995］。報文には根拠が記されていないが、冒頭と文末にほぼ同様の内容が記されているためと思われる。習書とすれば、文字内容に大した意味がない可能性も考えられるが、報文において、遺跡のすぐ北を官道の古代北陸道が通過していたと推定され、約300m北に関連すると思われる「道神社」が所在して「道長大神」との関係が指摘されていることに着目すれば、無意味な文字の習書とは見なしがたい。むしろ、一定の意味・内容を有する文章などが習書された可能性が考えられる。さらに報文のように「三月十日」が現在でも道神社の琴平大祭の日に当たることも考慮すると、「道長大神」は北陸道の道に関係する地祇と考えられる。内容的には物品の進上というよりは地祇への「上申」に関するものだが、神に対して「上申」だけが行われたとは考えがたく、幣帛のような物品の上納も伴っていたと考えられるので、この木簡によって物品の進上先としては神祇に対するものも想定される。

こうした視点から、本木簡の内容の一部が理解・説明できる。神への進上であったために敬意を示す目的で「獻」を使用したとも解される。また、進上木簡の出土点数が１点という状況も共通する。具体的な本木簡の神祇としては、建物の柱穴から出土していることを重視するならば、地下に所在しその土地や家宅の吉凶に影響をおよぼす土公神を想定することも可能であろう。本木簡の出土状況について、単純に開口している柱穴に廃棄したと理解することも可能だが、ほかのほとんどの柱根が残っている中で、柱根が抜かれたとみられる柱穴から出土している状況を重視するならば、何からの理由で柱を抜き取ったために地鎮めの献上を行ったか、または、地鎮めとして埋められた木簡が柱根を抜いた後に、柱穴の抜き取り穴に廃棄されたものとも考えられる。地祇との関係で勘案すると、時期はやや下るが上越市（旧柿崎町）新保遺跡で検出した柿崎古墓との関係が推測されるかもしれない[4]。しかしながら、それでも北高木遺跡で墨書土器や木簡が多数出土しているのに対して、本遺跡ではそれが少ないことなどは解決がつかない。

3）管見の限りで進上木簡で戻ったものは、長岡京左京出土の「槫」進上木簡にある。ただ、これも「槫」が進上・納入された出先機関から本省にあたる造営省政所に送られた進上木簡が出先機関に戻ったものであり、進上元に戻ったと解するのは難しい。

4）「石神」の墨書土器を四至の１つに埋設した柿崎古墓は、木炭槨木棺墓の下から土師器が検出されている。木炭槨を構築する前に、祭祀が行われた可能性が報告され、地祇への関係資料と見なすこともできる。

以上、本木簡に関しては地祇への献上を含めて３つの解釈が考えられるが、木簡で判読した文字数が少ないこともあっていずれに決することもできない。文字内容からは進上木簡の可能性が高く、物品などの献納に関わるものと思われるが、その廃棄までのルートや遺跡の性格などとの関係は不明瞭といわざるをえない。ただ、県内では八幡林遺跡の木簡とともに、８世紀前半という時期の確実な稀少木簡である。残った問題点については類例の増加と周辺遺跡の調査成果を待ちたい。

２　上層の調査

Ａ　出土遺物からみた遺構の時期について

上層遺跡については、遺構のあり方をいくつかのまとまりに分けることが可能である。まず、17・18Aグリッド付近では比較的土器を多量に出土する土坑がまとまって確認されている。この南にはおよそ30m四方の大規模な畑跡がある。切り合い関係から、この畑跡を構成する溝はすべて北側の土坑より新しいことがわかっている。畑跡の西側７～15A～Ｃグリッドには掘立柱建物跡５棟を含む柱穴や井戸跡、溝などが確認されている。その南にはＢ区13F～1Dグリッドまで大型の溝SD13（Ａ区ではSD58）があり、その周辺に多数の溝がみられる。19列以東と15～19D～Ｆグリッドには溝や土坑が希薄ながら存在する。ここでは、これらのまとまりを考慮しながら、出土土器からその時期を推定する。ただし、遺構との共伴関係の明らかな遺物はそれほど多くなく、時期推定はあくまで傾向の把握である。出土土器は主に須恵器食膳具の形態に基づいて時期を推定し、須恵器貯蔵具や土師器具煮炊具の検討は行うことができなかった。今後の課題としたい。なお、出土遺物の詳細や出土状況については各説を参照願いたい。

17・18Aグリッド土坑群　この土坑群にはSK553・554・453・438などの土坑がある。このうち年代を推定することの可能な遺物が出土しているのは、SK553・554・438である。

SK553出土土器をみると須恵器無台杯・有台杯とも体部下半が丸く、体部上半は直立気味で外に引き出されないものが多い。調整はロクロ目の目立たないロクロナデである。底部は平坦で器壁の厚いものが多い。有台杯は内面接地の高台が主体である。法量は有台杯の口径がおよそ12～15cmで、器高は3.3～3.9cmである。有台杯には金属器模倣のＣ類が１点含まれている。杯蓋は径が約15cm、約17cmと大型のものが２点出土した。土師器はすべてロクロ成形で口径が16cmを超える大型の椀が２点と小甕や長甕が出土した。甕類の口縁がつまみ上げられるものはみられない。こうした土器様相から、SK553出土土器は今池編年Ⅱ期に相当し、上越市今池遺跡SK24、岡原遺跡SK18出土土器［上越市教育委員会1995］と同時期の８世紀中葉が主体であると考えられる。ただし、土師器椀は９世紀に出現する土器で、新しい様相といえる。

SK554出土土器では須恵器無台杯２点を検討する。いずれも、体部下半から底部が丸く、器壁が厚い。口径も12cmほどでSK553よりも小型である。SK553よりもやや新しく、今池遺跡編年Ⅲ期に相当し、８世紀後葉～末の土器と考えられる。SK438出土土器は口径約14cmで、体部下半が丸く、底部は平坦で、高台径が大きい。調整はなめらかにロクロナデされ、ロクロ目は目立たない。１点の土器であり、年代推定には限界があるが、今池編年Ⅱ期のものと思われる。

土坑群付近の包含層からは、233・234・236などが出土しているが、遺構出土土器の年代と調和的である。この中で注目されるのは、包含層出土の233・234、SK553出土の152である。一見無台杯に見えるが、高台が剥落した有台杯である。土坑群出土の土器としては器壁が薄く、体部下半は丸くならず、

体部上半が外側に引き出されている。胎土も精良緻密で共通している。高台の剥落は接合方法に起因すると考えられ、同一の製作技術を示唆する。また、土坑群以外で同じ特徴の土器は畑跡出土の202しか確認できなかった。後述するように畑跡出土土器は土坑群出土土器と時期が一部重複しており、これらの土器は同一の窯で製作された可能性が高い。他遺跡を含め今後類例に注意する必要があろう。

畑跡出土土器　畑跡出土土器は土器様相からは北側の土坑群出土土器と類似しており、おおむね8世紀後半を中心とすると思われる。ただし、須恵器無台杯201や土師器甕類で口縁がつまみ上げられるものなど、やや新しい要素も散見される。

7～15A～Cグリッド　この範囲で時期推定が可能な土器が出土している遺構は、SK47・55・56などすべて井戸跡である。SK47出土土器では、佐渡小泊産の須恵器無台杯（177）が出土している点が注目される。須恵器有台杯は口径約10cmで、杯蓋は径13cmと16cmのものが出土している。また、土師器無台椀が2点（184・184）出土しいずれもやや深身で、口径が約12cmと15.5cmである。出土土器の年代としては今池編年Ⅳ期の9世紀初頭～前葉と考えられる。SK55からは土師器小甕が出土している。1点のみで時期推定に限界があるが、おおむね10世紀代のものと考えられよう。また、SK56からは13世紀と考えられる漆器椀が出土している。遺構埋土を見ると古代のSK47・55は灰色～暗灰色粘土を主体としているのに対し、SK56や中世の遺構分布域にある井戸跡SK54には黒褐色土の埋土が堆積していた。この他の遺構では、掘立柱建物跡のSB1・7、井戸跡のSK59が灰色系粘土を埋土の主体とするのに対して、井戸跡のSK22・29・30・37・46・54は黒褐色の埋土を主体とし、掘立柱建物跡SB1・2・9は黒褐色土もしくは黒褐色土ブロックを含む埋土であった。また、8世紀中葉の土器を出土する17・18グリッド土坑群は灰色系の粘土を主体とする埋土であった。こうした埋土と出土遺物の相関関係から、あくまで傾向ではあるが、7～15A～Cグリッドでは灰色系の粘土を埋土の主体とする遺構が古代で、黒褐色系の埋土を主体とする遺構が中世のものの可能性が高いと思われる。

この範囲の包含層からは9世紀以降の土器が比較的多くみられる。たとえば、249・250・253・254・255の須恵器食膳具は9世紀前葉～中葉と考えられ、10～12列では灰釉陶器や10～11世紀の土器が散見される。また、10～14列を中心に13世紀および15世紀後半を主体とする中世の遺物も多数出土している。共伴遺物により時期を明確にできる遺構は多くないが、包含層出土土器の時期を考慮すると、この範囲の遺構には9世紀以降の古代・中世の遺構が多く含まれていると考えられる。

1～13D～Fグリッド　この範囲にはSD13・14・58の中世の遺物が出土した遺構がある。SD13からは13世紀と考えられる青磁、土師質土器がまとまって出土し、SD14からはロクロ成形の土師質土器、SD58からは13世紀代と考えられる漆器椀が出土した。

その他の遺構分布域　19列以東ではSK108・SD110から古代の土器が出土している。SK108出土土器は破片で時期が不詳であるが、SD110出土土器は8世紀後葉のものと思われる。畑跡の南には河川跡がありその埋土1層からは8世紀代の土器が出土している。埋土1層は河川が埋没し、水の流れない窪地となった後の堆積物と考えられる。この河川跡以南にはSK41・SK42・44・45などの土坑やSD27・43・51・72などの遺構がある。このうちSD27・43は切り合いから河川跡よりも新しいことが判明している。これらの遺構は共伴遺物がないものの、遺跡周辺での中世の土器や古銭の出土量がほかに比べて多く、中世の遺構の可能性がある。

3　総　　括

三角田遺跡はＣ区下層と上層に大別されるため、総括も分けて行う。

Ａ　Ｃ区下層遺跡

Ｃ区下層遺跡は洪水性堆積物（以下、「洪水層」）に覆われていた。土器の年代は８世紀初頭から前葉に限定され、基本的に新しい遺物の混入が確認できないことから、遺構もこの時期に限定できる。ただし、遺構の検出状況や包含層の堆積からは、洪水が遺跡廃絶の契機である証拠は確認できなかった。Ｃ区上層からは９世紀代の土器が出土しており、洪水層は集落廃絶後９世紀頃の間の比較的短期間に堆積したと考えられる。洪水層の観察からは、複数回の洪水による可能性が指摘されている（新潟大学積雪地域災害研究センター高濱信行教授の御教示）。地元の方々に聞き取ったところ、遺跡周辺はかつて飯田川の洪水を受けた地域とのことであり、洪水層は飯田川の氾濫に起因する可能性が高い。

遺跡は４棟の掘立柱建物跡、溝に囲まれたピット群、２か所の畑跡を中心とし、その間を溝がめぐり、建物や溝の配置に高い計画性がうかがえる。遺構の重複がほとんどみられないことから、これらはほぼ同時に存在したと思われる。掘立柱建物跡はその規模・形態から住居もしくはそれに類する施設と考えられる。畑跡の存在や、出土遺物に官衙的な様相を示すものがみられないことを考え合わせると、Ｃ区下層遺跡は一般的な集落跡と考えられよう。東西方向に遺跡が広がらないことは確実であり、溝を介した遺構の有機的な配置が南北方向に広がる兆候も希薄なことから、当時の集落の一単位の大部分を調査できたと考えられる。

集落の構造をみると、北側に規模・構造が類似したSB3 ・４の２棟の掘立柱建物跡があり、それぞれコ字状と隅が空く形で溝が巡る。SB4に隣接するピット群とあわせて、集落の中核的な建物であったと考えられる。SD113 ・ 607はSB3とピット群の東を一辺約20mで方形に区画している。この区画内には遺構が希薄で、広場的な機能を持っていた可能性がある。溝の形状からSB3 ・４ともこの区画に向かって入口が設けられていたと推察される。区画の南に隣接して２か所の畑があり、その南側には２棟の掘立柱建物がある。この２棟は北側の建物に比べると小規模であるが、SB5の柱穴抜き取り穴から住居廃絶祭祀と関わる可能性のある木簡が出土している。

出土遺物は日用品が中心で、鎌柄、ヤス、槽などの木製品は当時の集落における生業のあり方を知る上で貴重な事例となろう。また、花粉分析および植物珪酸体分析から周辺に水田が存在した可能性が指摘され、樹種同定からは建物柱部材として湿地性のオニグルミ、カツラ、トネリコ属など遺跡周辺で獲得可能であった材が利用されていたことが明らかとなった。

このように遺存状況の良好なＣ区下層遺跡の遺構・遺物のあり方から、当時の集落の姿がうかがえる。集落は数棟の建物と広場、生産域（畑跡）によって構成され、遺物・建築部材から自給自足的な生業がうかがえる。集落の周囲の低地では水田が営まれていたのであろう。当時の頸城平野における一般的集落の居住単位とその構成・生業を示す貴重な事例といえよう。

Ｂ　上 層 遺 跡

上層遺跡はⅣ層を基盤としており調査区のＡ・Ｂ区に位置する。層位的にはＣ区下層遺跡よりも明ら

かに上層といえるが、同一地点で上層遺跡と下層遺跡の上下関係が捉えられた場所はない。今回未調査に終わった市道下野田長面線下で両者の重複が明らかとなることが期待される。

上層遺跡は掘立柱建物跡５棟、土坑26基、井戸跡10基、畑跡２か所、多数の溝、ピットなどの遺構で構成され、古代から近世までの長期にわたる。上層遺跡でもっとも古い遺構は、17・18Aグリッドの土坑群である。出土土器から８世紀中葉～後葉と考えられる。土坑群の南には大規模な畑跡がある。遺構の切り合いは、畑跡が土坑群よりも新しいが、出土土器は土坑群と時期が重複しており、両者はほぼ同時期の居住域の縁辺と生産域であると考えられる。畑跡は耕作痕と推定される多数の溝で構成され、複雑に切り合っていることから、相対的に長期間耕作された可能性がある。畑の栽培植物を推定するため、植物珪酸体分析を行ったが、栽培植物を明確にすることはできなかった。これらの遺構はＣ区下層遺跡の廃絶直後を最古としており、Ｃ区下層集落に居住していた集団が活動域を移した可能性がある。

畑跡の西側には掘立柱建物跡、井戸跡があり、居住域があったと考えられる。これらの遺構は、埋土と出土遺物からSB1・７を含む建物跡・井戸跡群とSB2・８・９を含む建物跡・井戸跡群に分けられ、おおむね前者が９世紀以降の古代、後者が中世と推定される。包含層出土土器も遺構出土土器と同様の傾向を示しており、前述の土坑群や畑跡よりも新しい時期の居住域と考えられ、遺跡内における土地利用の変遷がうかがえる。古代・中世とも遺構は調査区北半で多く、遺跡の調査区は現在下野田集落のある自然堤防の南側縁辺にあたることから、調査区北側に中心のある居住域の縁辺を調査したものと思われる。

Ｂ区西側から県道下をＡ区に抜けるSD13（Ａ区ではSD58）からは13～14世紀の土器が出土しており、中世の遺構が存在していることがわかる。畑跡の南には埋没した河川が存在しており、遺構は希薄であるが土坑、溝がある。この周辺では中世の遺物が比較的多く出土しており、これらは中世の遺構の可能性が高い。中世の遺物は15世紀中頃から後半を主体とし、13世紀のものが一定量みられる。

近世の遺物も出土し、17世紀から18世紀前半のものを主体とするが、遺構は確認できなかった。

上層遺跡は下層遺跡廃絶後、古代から近世に至るまで、断続的に居住・生産活動が行われた痕跡が残されており、下層遺跡も含めるとその始まりは８世紀初頭になる。三角田遺跡は現在下野田集落がある自然堤防とその周縁に立地し、頸城平野の長期にわたる開発において断続的に拠点として占地された場所なのであろう。

要　　約

1　三角田遺跡は、上越市下野田字三角田161－1ほかに所在する。遺跡は高田平野のほぼ中央に位置し、関川右岸の自然堤防上に立地する。標高は10～11mである。

2　発掘調査は一般国道253号上越三和道路建設に伴い平成16年度に実施した。調査面積は14,800m^2（上層12,140m^2　下層2,660m^2）である。

3　調査の結果、遺跡は上層・下層からなり、古代を中心として中世・近世までの長期にわたることが判明した。上層遺跡は調査区全域に存在し、下層遺跡は調査区東側のC地区に限定して確認された。上層と下層の間には洪水性堆積物と考えられる無遺物層が存在した。

4　下層の遺構は掘立柱建物跡4棟、溝に囲まれたピット群1基、畑跡2か所、土坑8基、土器・炭化物集中遺構8、溝、ピットである。遺跡が洪水層に覆われていたため、出土土器の時期が8世紀初頭～中葉に限定されており、遺構もこの時期のものと思われる。掘立柱建物跡は溝がめぐり、柱根の遺存する柱穴も多く、遺存状況は良好であった。洪水層にパックされた集落跡の大部分を調査したと考えられる。

5　下層出土遺物は須恵器、土師器、木製品、砥石などで、出土土器の時期から8世紀初頭～中葉と限定される。土器は須恵器が杯蓋・有台杯・無台杯の食膳具を主体とし、土師器は小甕・長甕の煮炊具を主体とする当該期の良好な資料である。木製品は鎌柄、ヤス、棒状木製品、槽や掘立柱建物跡の柱部材が出土した。

6　上層の遺構は掘立柱建物跡5棟、土坑26基、井戸跡10基のほか、畑跡1か所、溝、ピットである。共伴遺物が少なく、時期の明確でない遺構が多い。掘立柱建物跡は方向と埋土から少なくとも2時期に分けることが可能で、掘形が方形基調で大型の建物跡は9世紀頃を中心とした古代の可能性がある。井戸跡は古代と中世のものがあり、畑跡やB区北側の土坑は8世紀後半と考えられる。B区西側の大型の溝からは13世紀後半～14世紀前葉の遺物が比較的まとまって出土した。

7　上層の遺物は8世紀中葉～近世におよぶ。古代の土器は8世紀中葉～11世紀で、8世紀代が主体である。中世の土器は13世紀～16世紀の長期にわたるが、13世紀後半～14世紀前葉、15世紀代のものが多い。また、17世紀代を中心とする近世の土器も比較的多く出土している。このほか漆器椀、蓋、漆ヘラなどの木製品や銭貨などの中世の遺物が出土した。

8　自然科学分析は、珪藻、花粉、植物珪酸体、木製品の樹種同定を行った。分析結果の中では、木製品の素材がスギを中心としていること、掘立柱建物跡の柱部材がオニグルミを中心とする湿地性の樹種を中心としており、遺跡近傍で伐採された可能性が高いことが注目される。

9　調査結果を総合すると、三角田遺跡はまず8世紀初頭にC区に集落が営まれ、この集落は洪水層堆積以前の8世紀中葉に廃絶された。その後、遺跡中央北側に8世紀後半を中心に集落と大規模な畑跡が残され、さらにその西側を中心に古代～中世の遺跡が形成されたと考えられる。こうした状況から、三角田遺跡は自然堤防とその周縁において断続的に居住生産活動が行われた遺跡と推定される。

引用・参考文献

相沢　央　　2004　「第三節 頸城郡の人々と暮らし」『上越市史 通史編１ 自然・原始・古代』 新潟県上越市

新井市教育委員会　2000 『新井市遺跡発掘10年の歩み』 新潟県新井市教育委員会・新井市遺跡発掘友の会

荒川隆史ほか 2004　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第133集 青田遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

飯坂盛泰・高橋　保ほか 2002 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第115集 一般国道７号中条黒川バイパス関係発掘調査報告書 蔵ノ坪遺跡』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

上田秀夫　　1982　「14～16世紀の青磁椀の分類について」『貿易陶磁研究』第２号　日本貿易陶磁研究会

江口友子・寺崎裕助　2002 「八反田遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第110集 八反田遺跡・高畑遺跡』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

岡本郁栄　　1999　「新潟県の地形外観」『新潟県の考古学』 高志書院

大島町教育委員会　1995 『富山県大島町北高木遺跡発掘調査報告書』

尾崎高宏　　2002　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第111集 黒田古墳群』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

尾崎高宏　　2004　「国道253号線 上越地内（戸野目～北田中地区）試掘調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成15年度』 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　　1999　「越後・佐渡の様相」『北陸古代土器研究』第８号　北陸古代土器研究会

春日真実　　1999　「第４章古代 第２節土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 古志書院

春日真実　　2001　「第Ⅴ章遺物」「第Ⅳ章まとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第104集 梯子谷窯跡』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤　学・荒川隆史　1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 和泉Ａ遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤　学・高階敏昭・沢田福宏　2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第128集 仲田遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤　学・猪狩俊哉　2004 「第Ⅴ章遺物 ５木製品 Ｂ柱根・礎板・根絡み 2）柱根の観察・計測項目」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第133集 青田遺跡』本文・観察表編　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

金子拓男ほか 2003　『上越市史資料編２ 考古』 上越市

北野博司　　2003a 「四ツ屋遺跡」『上越市史 資料編２ 考古』 新潟県上越市

北野博司　　2003b 「江向遺跡」『上越市史 資料編２ 考古』 新潟県上越市

北村　亮・春日真実・高橋　保　1992 「第Ⅶ章まとめ ２遺物」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第28集 木崎山遺跡』 新潟県教育委員会

木村宗文　　1986　「第三節 国府と国分寺」『新潟県史』通史編１　原始・古代

櫛木謙周　　1999　「長屋王家の経済基盤と荷札木簡」『木簡研究』21号

小島幸雄　　1991　『新潟県上越市 中島廻り遺跡発掘調査報告書』 新潟県上越市教育委員会

小島幸雄　　2003　「中島廻り遺跡」『上越市史 資料編２ 考古』 新潟県上越市

小島幸雄・中村美恵子　1984 『新潟県上越市 本長者原廃寺確認調査概要』 新潟県上越市教育委員会

古代城柵官衙遺跡検討会　2005　『第31回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』

小林昌二　　1998　「『御田の阿櫻夫』 九五一人」『日本歴史』618

坂井秀弥　　1982　『栗原遺跡（第４次・第５次調査概報）』 新潟県教育委員会・新井市教育委員会

坂井秀弥　　1983　『栗原遺跡第６次発掘調査概報』 新潟県教育委員会

坂井秀弥　　1984　「第Ⅲ章今池遺跡の調査 ３遺物 Ａ奈良・平安時代 １土器」「第Ⅵ章考察 １今池遺跡群における奈良・平安時代の土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』 新潟県教育委員会

坂井秀弥　　1994　「第Ⅴ章 ３奈良・平安時代 Ａ土器の概観、Ｂ土器各説」「第Ⅶ章 ２奈良・平安時代の土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第53集 山三賀Ⅱ遺跡』 新潟県教育委員会

坂井秀弥　　1999　「第４章古代 第１節総論」『新潟県の考古学』 古志書院

坂井秀弥ほか 1986　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第40集 一之口遺跡西地区』 新潟県教育委員会

坂井秀弥ほか 1984　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』 新潟県教育委員会

笹澤正史・中村直人・大居敬子　1997 『新潟県上越市 保坂遺跡発掘調査報告書』 新潟県上越市教育委員会

笹澤正史　2002　「上越地方最大の須恵器窯跡群－末野・日向窯跡群－」『三和村史 自然・考古編』 新潟県三和村
笹澤正史　2003　「第５章古代 第１節時代概説」『上越市史 資料編２ 考古』 新潟県上越市
笹澤正史・小島幸雄　1999　『津倉田遺跡』 新潟県上越市教育委員会
笹澤正史・中村直人　1998　『新潟県上越市 保坂遺跡発掘調査報告書』 新潟県上越市教育委員会
品田高志　1991　「越後の中世土師器－編年的研究の現状と課題－」『新潟考古学談話会会報』第８号　新潟考古学談話会
品田高志　1997　「越後国における土師器の編年と諸相」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』 桂書房
上越市教育委員会　1981　『上越市遺跡詳細分布調査報告書』
上越市教育委員会　1994　『横曽根Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
上越市教育委員会　1995　『岡原・大野遺跡発掘調査報告書』
上越市教育委員会　1996　『横曽根Ⅱ遺跡・横曽根Ⅲ遺跡・上押出遺跡－横曽根Ⅱ遺跡ほか発掘調査報告書－』
新保誠吾ほか 1994　『樋詰遺跡発掘調査報告書』 新潟県吉川町教育委員会
鈴木俊成・春日真実ほか　1994　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第60集 一之口遺跡東地区』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
田嶋明人　1988　「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題』報告編　石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
高田平原団体グループ　1962　「高田平原の沖積層について－高田平原の団体研究・そのⅣ－」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』第７号　新潟大学教育学部高田分校
高田平原団体研究グループ　1965　「高田平原北部の第四系－高田平原の団体研究・そのⅤ－」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』第９号　新潟大学教育学部高田分校
高田平野団体研究グループ　1981　「高田平野の第四系と形成史－新潟県の第四系・そのXXIV－」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』第25号　新潟大学教育学部高田分校
高田平野地盤沈下団体研究会　1973　「高田平野の浅層地下水－新潟県の第四系XVII－」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』第18号　新潟大学教育学部高田分校
高橋　勉　1985　『月岡遺跡 範囲確認緊急調査報告書』 新潟県新井市教育委員会
高橋　勉　1989　『杉明遺跡』 新潟県新井市教育委員会
高橋　勉　1996　『平成７年度 新井市遺跡確認調査報告書 倉田遺跡』 新潟県新井市教育委員会
高橋保雄ほか 1996　「水久保遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第79集 水久保遺跡・宮平遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
舘野和己　2001　「長屋王家の文書木簡に関する一考察」『奈良文化財研究所研究論集ⅩⅡ 長屋王家・二条大路木簡を読む』
田中　靖　2003　「第Ⅵ章－2.出土土器について」『和島村埋蔵文化財調査報告書 第14集 下ノ西遺跡Ⅳ』 新潟県和島村教育委員会
戸根与八郎ほか　1985　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第32集 宮野遺跡』 新潟県教育委員会
戸根与八郎ほか　1992　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第28集 木崎山遺跡』 新潟県教育委員会
戸根与八郎ほか　1990　『樋田遺跡第２次発掘調査概報』 新潟県吉川町教育委員会
奈良国立文化財研究所　1985　『奈良国立文化財研究所史料第27冊 木器集成図録近畿古代篇』
奈良国立文化財研究所　1993　『平城京発掘調査出土木簡概報（二七）－長屋王家木簡四－』P4下（8）
奈良国立文化財研究所　2001　『平城京木簡二　長屋王家木簡二』（No.1691）　吉川弘文館
新潟県教育委員会　1987　『新潟県中世城館跡等分布調査報告書』
新潟古砂丘研究グループ　1976　「新潟県の砂丘－その研究史と問題点」『新潟大学理学部地質鉱物学教室研究報告』第４号 新潟大学理学部地質鉱物学教室
西崎卓也　1992　「平城京右京三条二坊三坪」『木簡研究』15号
秦　繁治ほか 1988　『水久保・中島古屋敷跡遺跡』 新潟県頸城村教育委員会
秦　繁治・金子拓男ほか　1979　『水科古墳群発掘調査報告書』 新潟県中頸城郡三和村教育委員会
秦　繁治・坂井秀弥　1990　『法花寺遺跡（廃寺）他発掘調査報告書－三和村の遺跡と開発史－』 新潟県三和村教育委員会
秦　繁治・関　雅之・戸根与八郎　1976　『新潟県東頸城郡牧村宮口古墳群発掘調査報告 宮口古墳群』 新潟県牧村教育委員会
秦　繁治・小林義廣・草野英二・高野武男・小林昌二　1998　『榎井Ａ遺跡』 新潟県頸城村教育委員会
秦　繁治・小林義廣　1999　『等仙寺・梶木・山崎塚遺跡』 新潟県清里村教育委員会

藤澤良祐　1991　「古瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅹ　瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐　2002　「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯　財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
松島悦子　2001　『燕市埋蔵文化財調査報告書 第1集 三角田遺跡』 新潟県燕市教育委員会・吉田町教育委員会
三浦純夫・森田喜久夫　1995　「石川・賀茂遺跡」『木簡研究』18号
室岡　博ほか 1989　『樋田遺跡発掘調査概報』 新潟県中頸城郡吉川町教育委員会
室岡　博・戸根与八郎・小池義人　1990 『樋田遺跡第二次発掘調査概報』 新潟県中頸城郡吉川町教育委員会
室岡　博・戸根与八郎・小池義人　1991 『樋田遺跡第三次発掘調査概報』 新潟県中頸城郡吉川町教育委員会
木簡学会　1990　『日本古代木簡選』 岩波書店
木簡学会　2004　『日本古代木簡集成』(No.180)
森田　勉　1982　「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』第2号　日本貿易陶磁研究会
山崎忠良ほか 2003　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第120集 下割遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
山崎忠良・継　実ほか　2004 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第134集 下割遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
吉川真司　2004　「移」『日本古代木簡集成』 東京大学出版会
四ツ屋遺跡調査団　1988 『新潟県上越市 四ツ屋遺跡発掘調査報告書』
渡邊裕之ほか 2005　新潟県埋蔵文化財調査報告書第138集 台の上遺跡・峪ノ上遺跡・五反田遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

C区下層掘建柱建物跡観察表

SB3

図版番号	2,3,7,8, 58,59,61	グリッド	24B・C 25B・C	桁行 (m)	3間+1 (7.70)	梁間 (m)	2間 (4.52)	床面積	34.80m²	時期	8世紀初頭～前葉	構造	側柱	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根（痕）	柱穴間隔		距離（m）	方位		N-64°-W	
24CP1	楕円	U字状	80	48	9.97	9.29	0.68	有	24CP1-25CP12		1.84	切り合い関係			
25CP12	長楕円	漏斗状	64	34	9.96	9.29	0.67	有	25CP12-25CP11		1.84	SD604が周囲を巡る			
25CP11	楕円	漏斗状	80	48	9.88	9.19	0.69	有	25CP11-25CP25		2.04				
25CP25	円	台形状	44	38	9.89	9.30	0.59	有	25CP25-25CP14		1.88				
25CP14	楕円	台形状	44	36	9.78	9.42	0.36	有	25CP14-25CP10		2.08				
24CP40	円	箱状	72	68	9.98	9.53	0.45	有	24CP40-24CP19		2.44				
25CP5	楕円	階段状	50	40	9.89	9.56	0.33	有	25CP5-25CP10		1.84				
25CP10	円	台形状	40	40	9.92	9.28	0.64		25CP10-25CP40		2.30	出土遺物			
24CP19	円	漏斗状	66	58	9.74	9.14	0.60	有	24CP19-24CP41		1.86				
24CP41	楕円	漏斗状	80	54	9.87	9.27	0.60	有	24CP41-25CP21		1.88				
25CP21	円	階段状	60	52	9.90	9.10	0.80	有	25CP21-25CP26		2.00				
25CP26	円	階段状	50	44	9.89	9.33	0.56	有	25CP26-25CP40		2.04				
25CP40	楕円	台形状	48	36	9.95	9.56	0.39		24CP1-24CP40		2.12				

SB4

図版番号	2,3,9,58, 59,62	グリッド	25B 26B・C	桁行 (m)	3間 (5.50)	梁間 (m)	2間 (4.60)	床面積	25.3m2	時期	8世紀初頭～前葉	構造	側柱	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根（痕）	柱穴間隔		距離（m）	方位		N-66°-W	
26BP7	楕円	台形状	66	52	9.87	9.27	0.60	有	26BP7-26BP4		1.94	切り合い関係			
26BP4	楕円	台形状	102	68	9.84	9.28	0.56		26BP4-26BP5		1.54	SC91、SC92と重複。SD601が周囲を巡る			
26BP5	不整形	階段状	88	32	9.80	9.23	0.57		26BP5-26BP6		1.86				
26BP6	楕円	台形状	112	76	9.79	9.13	0.66		26BP6-26BP8		1.05				
26BP8	楕円	漏斗状	95	70	9.86	9.33	0.53	有	26BP8-26CP4		1.48				
26BP1	不整形	漏斗状	76	48	9.75	9.41	0.34		26BP1-25BP6		2.42				
26CP4	長楕円	U字状	90	52	9.89	9.19	0.70	有	26CP4-26CP3		1.05	出土遺物			
26CP3	長楕円	階段状	73	32	9.88	9.46	0.42		26CP3-26CP5		1.12	41～48（SC91）			
25BP6	円	U字状	68	64	9.81	9.07	0.74	有	25BP6-26CP1		1.98				
26CP1	楕円	台形状	84	48	9.87	9.29	0.58		26CP1-26CP6		1.70				
26CP6	円	階段状	64	62	9.88	9.34	0.54	有	26CP6-26CP5		1.80				
26CP5	方形	漏斗状	76	70	9.86	9.16	0.70	有	26BP7-26BP1		2.12				

SB5

図版番号	4,10,11, 59,63	グリッド	23E・F 24E・F	桁行 (m)	2間 (3.88)	梁間 (m)	2間 (3.84)	床面積	14.9m²	時期	8世紀初頭～前葉	構造	側柱	棟方向	南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根（痕）	柱穴間隔		距離（m）	方位		N-7°-E	
SB5P3	円	U字状	52	46	9.94	9.26	0.68	有	P3-P5		2.24	切り合い関係			
SB5P5	円	U字状	48	40	10.03	9.28	0.75	有	P5-P8		1.62	SD117が周囲を巡る >SD164			
SB5P8	円	U字状	50	48	10.03	9.42	0.61	有	P8-P7		1.98				
SB5P2	円	U字状	52	48	10.06	9.33	0.73	有	P2-P1		1.92				
SB5P7	円	U字状	44	44	10.04	9.34	0.70	有	P7-P6		1.86	出土遺物			
SB5P1	円	U字状	38	38	10.04	9.51	0.53		P1-P4		1.94	24、25（SD117）、147（SB5P1）			
SB5P4	円	U字状	48	40	10.06	9.36	0.70	有	P4-P6		1.78				
SB5P6	楕円	階段状	76	56	10.09	9.46	0.63		P3-P2		1.92				

SB6

図版番号	4,10,11, 59	グリッド	24F	桁行 (m)	2間 (4.32)	梁間 (m)	2間 (3.49)	床面積	15.08m²	時期	8世紀初頭～前葉	構造	側柱	棟方向	南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根（痕）	柱穴間隔		距離（m）	方位		N-6°-E	
24FP3	楕円	階段状	70	56	10.00	9.62	0.38		24FP3-24FP1		1.94	切り合い関係			
24FP1	円	階段状	36	36	9.96	9.19	0.77	有	24FP1-24FP7		1.90				
24FP7	円	U字状	32	30	9.99	9.59	0.40		24FP7-24FP10		1.86				
24FP2	円	U字状	56	48	10.01	9.56	0.45		24FP2-24FP6		1.48				
24FP10	円	階段状	46	42	9.96	9.47	0.49	有	24FP10-24FP4		1.70	出土遺物			
24FP6	楕円	U字状	64	48	9.93	9.59	0.34		24FP6-24FP9		2.24				
24FP9	円	階段状	40	34	10.00	9.20	0.80	有	24FP9-24FP4		2.08				
24FP4	楕円	U字状	50	36	10.00	9.55	0.45		24FP3-24FP2		1.80				

上層掘建柱建物跡観察表

SB7

図版番号	20,31,68,69	グリッド	9A・B 10B	桁行（m）	3間（7.36）以上	梁間（m）	2間（6.06）	床面積	44.6m²	時期	SB1と同時期か	構造	側柱	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根（痕）	柱穴間隔		距離（m）	方位		N-68°-W	
9BP10	方形	階段状	48	38	10.17	9.79	0.38		9BP10-9BP5		2.22	切り合い関係			
9BP5	長楕円	階段状	84	40	10.25	9.83	0.42		9BP5-9BP9		2.7	＞SD560			
9BP9	長楕円	階段状	80	44	10.23	9.73	0.5	有	9BP9-9BP15		2.8				
9BP15	方形	U字状	52	48	10.19	9.68	0.51								
10BP1	方形	階段状	58	46	10.22	9.94	0.28	有	10BP1-9BP8		2.62	出土遺物			
9BP8	長方形	階段状	70	48	10.16	9.75	0.41	有	9BP8-9AP1		2.56				
9AP1	方形	階段状	56	52	10.18	9.89	0.29	有							

SB1

図版番号	24,32,68,69	グリッド	12C・13C	桁行（m）	3間（6.48）以上	梁間（m）	2間（5.45）	床面積	35.32m²	時期	SB7と同時期か	構造	側柱	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根（痕）	柱穴間隔		距離（m）	方位		N-60°-W	
13CP8	円	階段状	46	46	10.52	10.22	0.3		13CP8-13CP4		2.06	切り合い関係			
13CP4	方形	U字状	52	44	10.55	10.11	0.44	有	13CP4-13CP10		2.48	＞13CP62			
13CP10	楕円	階段状	60	48	10.56	10.04	0.52		13CP10-13CP9		2.58				
13CP9	楕円	U字状	46	36	10.57	9.97	0.6	有	13CP9-13CP7		2.76				
12CP3	円	U字状	40	40	10.5	10.16	0.34		12CP3-12CP5		2.22	出土遺物			
12CP5	円	U字状	42	38	10.53	10.18	0.35	有	12CP5-12CP4		2.06				
12CP4	楕円	U字状	34	28	10.56	10.2	0.36	有	12CP4-13CP7		2.2				
13CP7	円	階段状	48	42	10.58	10.28	0.3								

SB2

図版番号	24,33,69,70	グリッド	13C・D	桁行（m）	3間（7.04）	梁間（m）	2間（3.93）	床面積	27.67m²	時期	SB8と前後する時期か	構造	総柱	棟方向	南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根（痕）	柱穴間隔		距離（m）	方位		N-10°-W	
13CP22	円	U字状	32	28	10.62	10.2	0.42	有	13CP22-13CP23		2.2	切り合い関係			
13CP23	円	階段状	32	28	10.6	10.16	0.44		13CP23-13CP43		2.5				
13CP43	円	U字状	36	32	10.57	9.94	0.63	有	13CP43-13DP4		2.18				
13DP4	円	U字状	38	34	10.57	10.01	0.56		13DP4-13DP5		1.94				
13CP50	不整形	台形状	40	40	10.62	10.47	0.15		13CP50-13CP27		2.28				
13CP27	円	U字状	34	32	10.59	9.93	0.66	有	13CP27-13CP42		2.38				
13CP42	円	U字状	36	32	10.58	10.14	0.44	有	13CP42-13DP5		2.4	出土遺物			
13DP5	不整形	U字状	34	32	10.55	10.26	0.29	有	13DP5-13DP10		1.82				
13CP48	円	階段状	40	40	10.56	10.07	0.49		13CP48-13CP5		2.28				
13CP5	不整形	階段状	48	44	10.56	10.07	0.49	有	13CP5-13CP41		2.46				
13CP41	円	U字状	32	28	10.56	9.98	0.58	有	13CP41-13DP10		2.18				
13DP10	楕円	U字状	32	26	10.56	10.28	0.28		13CP22-13CP50		2.04				

SB8

図版番号	24,34,69,70	グリッド	13C・D	桁行（m）	2間（4.84）	梁間（m）	2間（3.54）	床面積	17.13m²	時期	SB2と前後する時期か	構造	総柱	棟方向	南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根（痕）	柱穴間隔		距離（m）	方位		N-5°-W	
13CP26	円	階段状	26	24	10.57	10.18	0.39	有	13CP26-13DP7		2.4	切り合い関係			
13DP7	楕円	U字状	28	22	10.58	10.31	0.27	有	13DP7-13DP1		2.4				
13DP1	楕円	階段状	34	24	10.56	10.33	0.23	有	13DP1-13DP2		1.72				
13CP40	円	U字状	24	22	10.58	10.27	0.31	有	13CP40-13DP8		2.26				
13DP8	円	U字状	24	24	10.53	10.3	0.23		13DP8-13DP2		2.56				
13DP2	円	U字状	24	24	10.57	10.36	0.21		13DP2-13DP3		1.66	出土遺物			
13CP6	円	U字状	32	32	10.57	10.36	0.21	有	13CP6-13DP9		2.36				
13DP9	楕円	U字状	34	26	10.55	10.29	0.26		13DP9-13DP3		2.48				
13DP3	方形	台形状	36	28	10.53	10.44	0.09		13CP26-13CP40		2.02				

SB9

図版番号	24,34	グリッド	13B・C	桁行（m）	3間（4.50）	梁間（m）	2間（2.68）	床面積	12.06m²	時期		構造	総柱	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根（痕）	柱穴間隔		距離（m）	方位		N-85°-W	
13BP10	円		27	25	10.54	10.14	0.4		13BP10-13BP11		0.95	切り合い関係			
13BP11	円		26	24	10.54	10.18	0.36		13BP11-13BP1		1.74				
13BP1	円		22	20	10.58	10.35	0.23		13BP1-13BP8		1.68				
13BP8	円		35	34	10.51	9.81	0.7	有	13BP8-13BP9		0.85				
13BP2	方形	台形状	24	22	10.56	10.25	0.31	有	13BP2-13BP5		1.32				
13BP5	楕円	箱状	30	24	10.58	10.35	0.23	有	13BP5-13BP13		1.54				
13BP13	円		28	26	10.59	10.56	0.03		13BP13-13BP9		1.6	出土遺物			
13BP9	円		33	28	10.6	10.28	0.32	有	13BP9-13CP60		1.8				
13CP14	円		32	28	10.59	10.33	0.26		13CP14-13CP34		1.52				
13CP34	円	箱状	30	28	10.62	10.32	0.3	有	13CP34-13CP60		1.67				
13CP60	円		22	22	10.6	10.35	0.25		13BP10-13BP2		0.97				

C区下層土器・炭化物集中部・土坑観察表

遺構名	種別	平面図	断面図	写真	グリッド	平面形	断面形	長径	短径	深さ	底面高	埋土	出土遺物	切り合い関係	備考
SC49	土器・炭集中	12	13		23D・24D	円形		4.0	3.7		9.87	水平	65～70	＞SD170、SD172、23・24C・D柱穴群？	
SC90	土器・炭集中	13	13		24E	不整形		1.7	0.9		10.02	水平			
SC91	土器・炭集中	9	19		26B・26C	長方形		1.8	1.3	28	9.82	水平	41～48		SB4と重複
SC92	土器・炭集中	9	19		26B	不整形		1.9	0.8	22	9.80	水平			SB4と重複
SC93	土器・炭集中	14	14		25D	不整形		4.9	2.2		10.06	水平	73～82		
SC94	土器・炭集中	4	6		25D・26D	方形		3.1	2.7		9.82	レンズ状	49～54		
SC95	土器・炭集中	4	6		25E	方形		4.8	4.0	8	9.86	レンズ状	56～61		
SC119	土器・炭集中	12	13		24D	不整形		4.3	3.3		10.08	水平	71、72		SC49と同一か
SK118	土坑	14	14	67	23E	長方形	弧状	4.9	2.5	20	9.82	レンズ状			埋土２層上面波打つ
SK157	土坑	13	13			楕円	階段状	1.0	0.8	41	9.75	レンズ状		＞24EP1	
SK162	土坑	4	6		24E	方形	弧状	1.2	1.2	5	9.82	単層	55		
SK163	土坑	4	6		24E	長方形	台形急傾斜	0.7	0.3	20	9.62	レンズ状			
SK179	土坑	4	6		24E	楕円形	弧状	1.4	0.8	12	9.84	レンズ状		＞SD200	
SK196	土坑	12			24C	楕円？		1.1				単層	62		
SK631	土坑	14	14		25B・25C	不整	台形状	5.6	4.4	15	9.95	レンズ状			埋土２層上面波打つ
SX169	不明	4	6		23F	不整形	不整形	2.6	1.8	9	9.94	不明			
SX171	不明	4	6		24F	不整形	不整形	1.9	1.7	12	9.86	単層			
SX177	不明	4			24D・25D	不整形		5.0	3.0	8	9.90	単層			

A区上層遺構観察表

遺構名	種別	平面図	断面図	写真	グリッド	平面形	断面形	長径	短径	深さ	底面高	埋土	出土遺物	切り合い関係	備考
SK181	土坑	16	17		5F1	方形	弧状	1.0	0.7	15	9.99	レンズ状			
SK189	土坑	18	19		4C12	楕円形	台形・緩やか	1.4	0.9	28	9.77	単層			
SK575	土坑	20	21		8C	楕円	弧状	1.1	0.7	30	9.87	レンズ状			
SK576	土坑	18	19		7D	円	台形状	1.1	0.9	18	9.94	単層			
SX65	不明	16	17		1D4-1D10	不製形	弧状	2.1	1.7	17	9.64	水平			
SX710	不明	16	17		2D1	不製形	台形・緩やか	1.6	1.1	8	9.84	単層			
SX75	不明	16	17		2D2	不整形	台形・緩やか	1.7	1.0	8	9.84	単層			
SX76	不明	16	17		2D12-2D18	不製形	台形・緩やか	2.2	1.0	20	9.72	レンズ状			

B区上層土坑・井戸跡観察表

遺構名	種別	平面図	断面図	写真	グリッド	平面形	断面形	長径	短径	深さ	底面高	埋土	出土遺物	切り合い関係	備考
SK31	土坑	24	37		14C	楕円	弧状	1.4	1.0	35	10.20	レンズ状			
SK41	土坑	26	36		16E	楕円	弧状	1.4	1.1	33	10.23	レンズ状		SK42＞	
SK42	土坑	26	36		16E	楕円	弧状	1.0	0.7	34	10.21	単層			
SK44	土坑	26	36		17F	楕円	箱状	1.8	1.2	36	10.24	水平			炭化物と粘土の互層
SK45	土坑	26	36		17E	楕円	箱状	1.7	1.2	36	10.23	水平			炭化物と粘土の互層
SK70	土坑	26	36		17F･18F	不整	階段状	4.2	2.7	36	10.31	水平			
SK71	土坑	28	36		19D	楕円	台形状	1.4	1.1	63	9.98	単層			埋土はブロックを多く含む
SK73	土坑	26	36		16B	方？	箱状	1.0	(1.0)	31	10.21	レンズ状			
SK77	土坑	26	36		16B	円？	台形状	(1.6)	1.5	24	10.26	レンズ状	191～193		
SK108	土坑	28	36		22A･B	楕円	弧状	2.0	1.5	20	10.42	レンズ状	195		
SK438	土坑	26	35		18A	円？	台形状	(1.3)	1.2	18	10.27	レンズ状	197	SD433＞	
SK439	土坑	26	35		18A	楕円？	台形状	(2.0)	(1.3)	14	10.32	レンズ状		SD400、SD433＞	
SK453	土坑	26	35		17A	方？	台形状	(2.0)	1.8	22	10.20	レンズ状	194	＞SK553、SK554	
SK544	土坑	26	35		17A	円？	台形状	(1.3)	(1.1)	11	10.40	単層		SD375、SD692＞	
SK553	土坑	26	35		17A･B	不整	台形状	(5.5)	(4.5)	35	10.25	レンズ状	148～163	SD383、SD385、SD386、SD398、SD399、SD400、SD413、SD416、SD432、SK453＞	
SK554	土坑	26	35		17A	不整	台形状	(4.8)	(3.5)	30	10.11	レンズ状	164・165	SD521、SD551、SK453＞	
SK22	井戸跡	24	37	71	14B	円	台形状	0.9	0.8	70	9.84	レンズ状			
SK29	井戸跡	24	37	71	14B	円	U字状	1.0	1.0	80	9.76	レンズ状			埋土最下層は人為埋め戻しか
SK30	井戸跡	24	37	72	14B	不整	台形状	1.0	0.9	70	9.69	レンズ状			8・9層は人為埋め戻しか
SK37	井戸跡	24	37	71	15C	円	台形状	2.0	1.7	130	9.16	レンズ状			
SK46	井戸跡	24	38		15C	円	台形状	0.8	0.7	90	9.69	レンズ状			
SK47	井戸跡	24	37	72･74	14B	円	U字状	0.5	0.5	80	9.76	レンズ状	177～187		４層は地山ブロック
SK54	井戸跡	22	38	72	12F	円	箱状	1.7	1.7	140	9.15	水平・ブ	371～373		
SK55	井戸跡	24	38	72	13D	不整	箱状	1.0	0.9	105	9.50	水平・レ	188～190		埋土最下層は水平堆積
SK56	井戸跡	24	38	73	13D	円	半円状	2.1	2.0	90	9.67	レンズ状	370		壁際埋土は地山ブロック
SK59	井戸跡	24	38		15C	円	箱状	0.8	0.7	80	9.81	レンズ状			

※長径、短径、底面高の単位はm、深さの単位はcm

凡例
1　色　調　『新版　標準土色帳』[小山・竹原 1994] による。
2　調　整　調整の種別は本文20頁を参照。
　　体部内面・外面欄中の上は上半部、下は下半部を示す。
　　→調整の前後関係を示す。
3　胎　土　須恵器・土師器は混和材、陶磁器は胎土の色調を示した。
4　残存率　最大残存部位の径の残存率を示した。
　　1/16以下は空欄とした。

下層出土土器観察表（1）

報告No.	種類	器種	分類	出土位置			法量（cm）			色調	色調	胎　土（混和材）	製作痕跡			底部切り離し・調整	残存率	備考
				グリッド	遺構	層位	口径	器高	底径	（外側）	（内側）		口縁部	体部外面	体部内面			
1	須恵器	杯蓋	ＡⅠａ	23D20	SD113	1	16.1	2.9		灰白	灰白	砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ		2/3	外面自然釉
				25D22・24D7		Ⅶ												
2	須恵器	杯蓋	ＡⅠａ	25E10	SD113a	1	16	3.1		灰	灰白	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロケズリ	ロクロナデ、ナデ		2/3	
				25F4	SD98	1												
3	須恵器	有台杯	C	25E12	SD113a	1	14.1	5.5	10	青灰	青灰	石・雲・長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ ロクロケズリ	ロクロナデ、ナデ	ロクロケズリ	1/2	外面に沈線一条 口縁部内面煤付着
				26B21・26C1	SC91	1												
				25B21		Ⅶ												
4	須恵器	有台杯	C	25E12	SD113a	1	15.5	5.7	8.7	灰	青灰	長・針・砂	ロクロナデ	ロクロナデ ロクロケズリ	ロクロナデ、ナデ、ロクロケズリ	ロクロケズリ	1/2	外面に沈線一条
				24D12・24D6	SC49	2												
				23C20	SD609	1												
5	須恵器	有台杯	ＡⅠａ	25E11	SD113a	1	13.9	4.6	9.7	灰	灰白	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/3	
				25E1		Ⅶ												
6	須恵器	杯		25E11	SD113a	1	14.8			青灰	青灰	石・長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		2/3	
				25D19・25E15		Ⅶ												
7	須恵器	有台杯		25E11	SD113a	1			8.2	灰	灰白	石・長・砂		ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ		1/6	
8	須恵器	有台杯		24E3	SD113a	1			9	灰	灰白	長・砂		ロクロナデ	ロクロナデ		1/6	
9	須恵器	無台杯	B	24D16	SD113a	1	13.7	4.5	9	にぶい褐	にぶい黄橙	石・雲・長・角・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ	ほぼ完	外面の摩耗顕著
10	須恵器	無台杯	ＡⅡ	25E15	SD113a	1	13.2	4	8.4	灰白	灰白	針・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り→ナデ	1/2	生焼け、外面一部こげ
11	須恵器	無台杯	ＡⅡ	25E10	SD113a	1	12.8	3.5	8	青灰	青灰	長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	完	
12	土師器	無台杯		24E15	SD113a	1	12.1	3.3	9.8	灰黄	灰白	雲・長					1/3	器面剥離顕著
13	須恵器	無台杯	ＡⅡａ	24D17・24D18	SD113a	1	12.2	3.6	9.6	灰白	灰白	石・長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/3	
				24D17		Ⅶ												
14	須恵器	無台杯	ＡⅡａ	25E10	SD113a	1	11.6	3.4	9.3	灰白	紫黒	長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り・板目状圧痕	3/4	内面全体と口縁部外面の一部に漆膜付着
				23E19		Ⅶ												
15	須恵器	壺蓋		25E11	SD113a	1				明青灰	明青灰	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロケズリ	ロクロナデ、ナデ		1/3	天井部外面に沈線が２本巡る
				24E15・26E3		Ⅶ												
16	須恵器	広口瓶		23D3	SD113b	1	16.4			灰	灰	石・雲・砂	ロクロナデ				2/3	内外面に自然釉
				25D20・C区暗渠		Ⅶ												
17	須恵器	長頸瓶		23D3・24D22	SD113b	1				灰	灰	石・雲・長・針・砂		ロクロナデ	ロクロナデ		3/4	外面に自然釉
				24D18		Ⅶ												
18	土師器	長甕	ＡⅠ	25E12	SD113a	1	19			にぶい黄橙	浅黄橙	石・雲・長・砂	ヨコナデ	ナデ	ハケ目		1/4	
				24D15		Ⅶ												
19	土師器	長甕	ＡⅡ	23D20	SD113a	1	17.2			灰白	灰白	石・砂	ヨコナデ	ハケ目	ハケ目		1/6	
20	土師器	小甕	A	24E12	SD113a	1	13.4			灰白	明褐灰	石・チ・砂	ヨコナデ	ナデ	ナデ		1/12	
21	土師器	小甕	B	24E15	SD113a	1	11.9			灰白	灰白	石・角・砂	ロクロナデ	カキ目	ロクロナデ		1/4	
22	土師器	甕		24D16	SD113a	1			5.1	浅黄橙	にぶい黄橙	石・雲・長・砂		ケズリ	ハケ目	ナデ	1/2	
23	土師器	椀	A	23C19	SD113b	1	11.8	5.3	8.1	にぶい橙	褐灰	石・雲・砂	ナデ	ナデ	ナデ	未調整	完	器面の摩耗顕著、甕の転用か
24	須恵器	杯蓋	ＡⅠａ	24F16	SD117a	1	15.4			灰黄褐	にぶい黄橙	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロケズリ	ロクロナデ、ナデ		1/4	
25	須恵器	有台杯	ＡⅠｂ	23F15	SD117a	1	12.8	14.6	7.2	灰白	灰白	石・長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/4	
				24E18		Ⅶ												
26	須恵器	無台杯	ＡⅡ	25D20	SD114	1	14.2	4.4	9	にぶい黄橙	灰白	雲・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/4	
27	須恵器	有台杯	ＡⅠｂ	24D18	SD141	1	13.8	4.1	9.4	灰黄褐	灰白	長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/4	
28	須恵器	有台杯	ＡⅠｂ	24D17	SD170・SC119	1	14.2	4.3	8	青灰	青灰	石・長・角・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	3/4	
				25F12		Ⅶ												
29	須恵器	有台杯	ＡⅠａ	24D22	SD170	1			7.8	にぶい黄橙	灰白	砂		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ	1/2	

下層出土土器観察表（2）

報告No.	種類	器種	分類	出土位置			法量（cm）			色調	色調	胎　土（混和材）	製作痕跡			底部切り離し・調整	残存率	備考
				グリッド	遺構	層位	口径	器高	底径	（外側）	（内側）		口縁部	体部外面	体部内面			
30	須恵器	長頸瓶		24D17	SD170	1	9.6			灰	灰	石・雲・長・砂	ロクロナデ					口頸部外面に沈線が２本巡る
31	土師器	鉢		24D7	SD170	5	8.1			褐灰	褐灰	砂	ナデ	ナデ	ナデ		1/5	
32	土師器	甕		24D17	SD170	1			8.3	にぶい黄橙	黒	石・雲・砂		ナデ	ハケ目	ナデ	1/2	
33	土師器	鉢		24D12	SD170	5			5.7	にぶい橙	淡黄橙	石・砂	ナデ	ナデ	ナデ		1/3	
34	須恵器	杯蓋	ＡⅠ	24E8	SD158	1	15.4	2.1		灰黄	褐灰	石・長	ロクロナデ	ロクロケズリ	ロクロナデ→ナデ		1/3	
				24E9・24E20		Ⅶ												
35	須恵器	無台杯	ＡⅡb	26C	SD629		13.7	3.4	9.5	淡褐色	灰白	砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/3	
36	土師器	小甕	A	26B14	SD606	Ⅶ	15.1			明褐灰	浅黄橙	石・砂	ヨコナデ	ナデ	ナデ		1/4	
37	土師器	小甕	A	25C13	SD601	Ⅶ	13.6			灰黄褐	褐灰	石・砂	ヨコナデ	ナデ	ハケ目		1/5	
38	須恵器	無台杯	ＡⅡa	24D11	SD172	1			8.2	青灰	青灰	長・砂		ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り・板目状圧痕	1/2	
39	土師器	長甕	ＡⅠ	24D11	SD172		18.8			にぶい橙	にぶい黄橙	雲・砂	ヨコナデ				1/5	
40	土師器	甕		24D11	SD172	1			7.7	褐灰	灰褐	石・角・砂		ハケ目、ナデ	ハケ目、ナデ	ナデ	2/3	
41	須恵器	杯蓋	B	26B21	SC91	1	14.5	2.2		灰	灰白	長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		完	外面に自然釉
42	須恵器	杯蓋	B	26B21	SC91	1	14.3	2.6		灰	灰	長・砂	ロクロナデ	ロクロケズリ	ロクロナデ		完	転用硯
43	須恵器	無台杯	B	26B21	SC91	1	14.3	5.1	8.1	にぶい橙	明赤褐	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			
				26C25	SD607	1												
44	須恵器	有台杯		26C1	SC91	1			10.4	灰白	灰白	長		ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ	1/5	
45	土師器	長甕		26B21	SC91	1	19.3			浅黄橙	橙	石・砂	ヨコナデ	ハケ目	ハケ目			器面の摩耗顕著
46	土師器	長甕		26C1	SC91	1	25.8			にぶい黄橙	にぶい黄橙	石・雲・砂	ヨコナデ		ハケ目		小片	
				26B21		Ⅶ												
47	土師器	小甕		26C1	SC91	1	19.3			浅黄橙	浅黄橙	石・雲・砂	ヨコナデ				小片	
				26B21		Ⅶ												
48	土師器	小甕	A	26C1	SC91	1			8.0	浅黄橙	浅黄橙	石・砂		ナデ	ハケ目	ナデ		
				26B21		Ⅶ												
49	須恵器	杯蓋	A	25D25	SC94	1	15.7	1.6		灰白	灰白	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/2	転用硯
50	須恵器	有台杯		25D20	SC94	1	11.8			青灰	暗青灰	石・長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		小片	
51	土師器	無台椀		25D25	SC94	1	12.8	5	6.1	明褐灰	暗灰	石・長・砂	ヨコナデ	ナデ	ハケ目		1/4	黒色土器
52	土師器	鉢		25D25	SC94	1			5.7	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石・長・角		ナデ	ハケ目	未調整	1/2	
53	須恵器	有台杯	ＡⅠa	24E24	SC90	Ⅶ	13.9	4.1	8.4	灰白	灰白	石・雲・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	ヘラ切り	1/3	
				24E24		1												
54	土師器	甕		24E25	SC90	1			7.5	浅黄橙	褐灰	砂		タテハケ	ハケ目	ナデ	1/4	器面が摩耗
55	土師器	甕		24E2	SK162	1			7.3	浅黄橙	にぶい黄橙	石・角・砂		ナデ	ハケ目、ナデ	ナデ		
56	須恵器	杯蓋	ＡⅠa	26E9	SC95	1	15.6	2.4		灰白	灰白	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロケズリ	ロクロナデ→ナデ		1/3	
				26E1		1												
57	須恵器	坏蓋	ＡⅠa	25E9	SC95	1	15.8	2.5		灰	灰白	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロケズリ	ロクロナデ→ナデ		1/5	転用硯
				25D3		Ⅶ												
58	須恵器	無台杯	ＡⅠ	25E9	SC95	Ⅶ	15.3	4.3	11	灰白	灰白	石・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り・板目状圧痕	1/2	
				24D6	SC49	2												
				26F10		1												
59	須恵器	無台杯	ＡⅡa	25E9	SC95	1	12.6	3.8	9.5	灰白	灰白	石・長・針	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/2	
				24D18	SD119	1												
60	須恵器	杯		25E8	SC95	1	12.9			青灰	青灰	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		小片	
				25D23		Ⅶ												
61	須恵器	杯蓋	ＡⅠ	24D4	24DP7	1	15.3	3.1		明青灰	青灰	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロケズリ	ロクロナデ		1/4	転用硯
				24D5		Ⅶ												
62	須恵器	有台杯	ＡⅠ	24C22	SK196	1	12.2	4	8.2	明青灰	灰白	石・長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/4	
63	須恵器	無台杯	ＡⅠ	24D16	24DP2	1	9.6			灰	灰白	石・長		ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	ヘラ切り・板目状圧痕	1/4	
64	土師器	鉢		24D16	24DP2	1	12.8			にぶい橙	にぶい橙	石・長・砂	外：ヨコナデ 内：ヨコハケ	ハケ目	ナデ		小片	
65	須恵器	杯蓋	ＡⅡ	24D6	SC49	1	16	3.9		青灰	明青灰	石英、長石	ロクロナデ	ロクロケズリ	ロクロナデ		完	体部外面に２本１組の沈線が２条

下層出土土器観察表（3）

報告No.	種類	器種	分類	出土位置			法量（cm）			色調	色調	胎　土（混和材）	製作痕跡			底部切り離し・調整	残存率	備考
				グリッド	遺構	層位	口径	器高	底径	（外側）	（内側）		口縁部	体部外面	体部内面			
66	須恵器	杯蓋	ＡⅠa	23D10	SC49	Ⅶ	16.1	3.7		明青灰	明青灰	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		3/4	
				24D6		1												
67	土師器	長甕	ＡⅡ	24D1	SC49	1	22.8			浅黄橙	灰白	石・チ・砂	ヨコナデ	ナデ	ハケ目		1/5	
68	土師器	鍋		24D1	SC49	1	30.4			浅橙	にぶい橙	石・角・砂	外：ヨコナデ 内：ヨコハケ→ヨコナデ	ハケ目	ハケ目		1/4	器面の摩耗顕著
				24C19・23D3		Ⅶ												
69	土師器	小甕	A	24D6	SC49	2	13.9			にぶい橙	にぶい橙	石・砂	ヨコナデ	ハケ目	ナデ		1/4	器面の摩耗顕著
70	土師器	甕		24D1	SC49	2			7.1	にぶい黄橙	明黄橙	石・雲・砂		ヘラケズリ	ハケ目、ナデ		1/2	
71	土師器	長甕		24D12	SC119	1	23			にぶい黄橙	褐灰	石・長・角・砂	ヨコナデ	ナデ	ハケ目		1/4	
				25D5		Ⅶ												
72	土師器	長甕	ＡⅠ	24D18	SC119	1	24			浅黄橙	灰	石・角・砂	ヨコナデ	ハケ目	ハケ目		1/5	
73	須恵器	杯蓋	ＡⅠa	25D15	SC93	1	15.5	3.2		青灰	青灰	長・角・砂	外：ロクロナデ 内：ロクロケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ		ほぼ完	外面に自然釉
				25D10		Ⅶ												
74	須恵器	有台杯	C	25D10	SC93	1	14.3	5.4	9.5	灰	灰	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ	1/5	外面に沈線２条
75	土師器	無台杯		25D4	SC93	1	13.4	3.7	8.9	浅黄橙	淡黄	石・雲・角・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	ヘラ切り	1/3	
76	須恵器	無台杯	ＡⅡb	25D4	SC93	1	12.3	3.5	9.8	灰白	灰白	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り・板目状圧痕	完	
77	須恵器	無台杯	ＡⅡb	25D15	SC93	1	12	3.4	8.7	灰白	灰白	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/2	内面底部に不明付着物
				24D17		Ⅶ												
78	須恵器	無台杯	ＡⅡb	25D10	SC93	1	12.2	3.2	8.6	明青灰	青灰	雲・長・針	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	2/3	
79	須恵器	有台杯	ＡⅠb	25D10	SC93	1	12.7	13.7	8.9	青灰	灰白	石・長・針	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/5	
80	須恵器	有台杯	ＡⅡ	25D9・25D14・24D17	SC93	1	10.6	3.2	6	青灰	灰	雲・長・角・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	5/6	内面は器面剥離顕著
81	須恵器	杯		25D10	SC93	1	12.9			青灰	灰白	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/4	
82	土師器	甕		24D4	SC93	1			8.8	浅黄橙	灰白	石		ハケ目	ハケ目	ナデ	底部残	
83	土師器	長甕	ＡⅠ	25D4	SC93	1	25.5			明褐灰	灰白	石・角・砂	ヨコナデ	ハケ目	ハケ目		3/4	
84	土師器	長甕	ＡⅡ	25D4	SC93	1	24.4			灰白	にぶい黄橙	石・砂	ヨコナデ	ハケ目	ハケ目		3/4	
				25D		Ⅶ												
85	須恵器	甕		24B13		Ⅶ			15.2	灰	灰	長・砂	ロクロナデ				1/5	
86	須恵器	杯蓋	ＡⅠb	25D4		Ⅶ	15.1	3.2		青灰	灰白	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/2	
87	須恵器	坏蓋	ＡⅠb	26D11		Ⅶ	16.3	3.5		灰	灰白	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロケズリ	ロクロナデ		1/5	転用硯
88	須恵器	有台杯	ＡⅠb	25F16		Ⅶ	14.3	4.8	8	灰白	灰白	雲・長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/2	
89	須恵器	有台杯	ＡⅠa	C区暗渠		Ⅶ	14.3	4.1	10.1	灰	灰白	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/3	
90	須恵器	有台杯	ＡⅠ	24C3		Ⅶ	13.4	3.7	9.6	灰白	灰	砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/6	
91	須恵器	有台杯	ＡⅠa	25E20		Ⅶ	12.9	3.5	8.6	褐灰	灰	石・長・角・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	3/4	
92	須恵器	有台杯	ＡⅡ	28B11		Ⅶ	11.8			灰	黒、灰白		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/6	内面に自然釉
93	須恵器	有台杯	ＡⅠa	25E15		Ⅶ			10	灰	灰白	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り・板目状圧痕	1/4	
94	須恵器	有台杯	ＡⅠb	24C18		Ⅶ			8.1	灰	灰	長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/4	
95	須恵器	無台杯	ＡⅡa	26C2		Ⅶ	13.7	4.2	9.1	明青灰	青灰	長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り→ナデ	1/4	
96	須恵器	無台杯	ＡⅡb	C区暗渠		Ⅶ	13.5	3.8	9.7	灰白	灰白	石・長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/5	
97	須恵器	無台杯	ＡⅡa	25D4		Ⅶ	12.5	4	9	灰白	灰白	石・長・角・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り→ナデ	1/3	
98	須恵器	無台杯	ＡⅡa	25D3		Ⅶ	12.9	3.3	10.2	淡黄	淡黄	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り・板目状圧痕	3/4	
99	須恵器	無台杯	ＡⅡ	23E21		Ⅶ	12.6	3.2	8.8	明青灰	明青灰	長・角	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/6	
100	須恵器	無台杯	ＡⅡb	24F16		Ⅶ	12.4	3.6	7.9	灰	灰	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ	1/5	
101	須恵器	有台杯		23E17		Ⅶ	11.8			褐灰	褐灰	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/5	
102	須恵器	無台杯		24D8		Ⅶ	12.2	3.8	10.5	浅黄橙	浅黄橙	雲・長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/6	生焼け
103	土師器	無台杯		25E11		Ⅶ	12.4	3.1	9.5	灰白	灰白	雲・チ・砂	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	1/6	
104	土師器	長甕	ＡⅠ	24D暗渠		Ⅷ	24.4			浅黄橙	にぶい黄橙	石・砂	ヨコナデ	ハケ目	ハケ目		1/4	
105	土師器	長甕	ＡⅡ	25A16		Ⅶ	19.5			灰白	灰白	石・長・砂	ヨコナデ	ハケ目	ハケ目		1/5	
106	土師器	小甕	A	24D15		Ⅶ	14.1			灰褐	灰白	石・角・砂	ヨコナデ	ハケ目	ハケ目		1/4	
107	土師器	甕		26E10		Ⅶ			7	淡橙	浅黄橙	石・角・砂		ナデ	ナデ	木葉痕	底部残	
108	土師器	鉢		25B12		Ⅶ	11.8			橙	淡橙	砂	ナデ	ナデ	ナデ		1/5	
109	土師器	鉢	A	26E10		Ⅶ	14			黒褐	灰褐	石・長・砂	外：ヨコナデ、内：ヨコハケ	ハケ目	ハケ目		1/5	
110	土師器	甑		24D19		Ⅶ			13	にぶい橙	浅黄橙	石・角・砂		ハケ目	ナデ		1/8	
111	土師器	壺		27D12・27D19		Ⅶ	14.2			橙	にぶい黄橙	石・砂	ヨコナデ				1/5	古式土師器

上層出土土器観察表（1）

報告No.	種別	器種	分類	出土地点			法量（cm）			色調		胎土（混和材・色調）	製作痕跡			底部切り離し・調整	残存率	備考
				グリッド	遺構	層位	口径	器高	底径	（外面）	（内面）		口縁部	体部外面	体部内面			
148	須恵器	無台杯	AⅡa？	17A24・25他	SK553	床			5.6	灰	灰	石・長		下：ロクロナデ	底内：ロクロナデ	ヘラ切り		体部外面摩耗
149	須恵器	無台杯	AⅡb	17A24・25他	SK553	2	13.8	3.5	8.0	灰白	灰白	長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/6	
150	須恵器	有台杯	AⅡ	17A24・25他	SK553	3	11.8	3.9	9.0	灰	灰	長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/8	
151	須恵器	有台杯	AⅠb	17A24・25他	SK553	3	13.8	3.7	8.9	暗灰～灰	灰	長・雲・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	ほぼ完	
152	須恵器	有台杯	AⅠb	17A24・25他	SK553	3	14.4	3.3	9.1	灰	灰	長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/6	高台ハガレ
153	須恵器	有台杯	AⅠb	17A24・25他	SK553	床	13.8	3.7	8.9	灰白	灰白	長・雲・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			
154	須恵器	有台杯	C	17A24・25他	SK553	2	14.6			灰	灰	長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			
155	須恵器	稜椀		17A24・25他	SK553	1～3	16.8			灰	灰	石・長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/3	
156	須恵器	杯蓋	A	17A24・25他	SK553	1・3	14.7			灰白～黄灰	灰白	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロケズリ	ロクロナデ?	ヘラ切り	1/3	
157	須恵器	杯蓋	A	17A24・25他	SK553	2	16.9			灰	灰	長	ロクロナデ	天：ロクロケズリ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/12	内面摩耗
158	土師器	無台椀	BⅠ	17A24・25他	SK553	2	16.1	4.8	6.6	浅黄橙	浅黄橙	石・角・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	1/8	
159	土師器	無台椀	BⅠ	17A24・25他	SK553	3	17.6			明褐	にぶい橙	石・角・砂					1/8	
160	土師器	小甕	B	17A24・25他	SK553	2	14.0			淡橙～橙	淡橙～橙	石・砂・チ	ロクロナデ	上：ロクロナデ	上：ロクロナデ		1/4	
161	土師器	小甕	B	17A24・25他	SK553	2	14.1			橙	浅黄橙	砂	ロクロナデ				1/8	
162	土師器	長甕	B	17A24・25他	SK553	3	18.9			浅黄橙	浅黄橙	石・砂	ロクロナデ				1/8	
163	土師器	長甕	B	17A24・25他	SK553	3	19.4			橙	橙	石・砂	不明	上：不明	上：不明		1/8	
164	土師器	長甕	B	17A24・25他	SK554	3	19.8			浅黄橙	浅黄橙	石・砂	不明	上：不明	上：不明		1/8	
165	須恵器	無台杯	AⅡa	17A25	SK554	1	12.1	3.4		灰	灰	石・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り→ナデ	1/3	底部外面板目圧痕
166	須恵器	無台杯	AⅡa	17A25	SK553・554	1	12.2	3.6		灰白	灰白	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り→ナデ	ほぼ完	底部外面板目圧痕
167	須恵器	無台杯	AⅡb	17A24・25他	SK553・554	1	13.2	3.1	8.9	灰白	灰白	石・長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り→ナデ	1/4	
168	須恵器	無台杯		17A24・25他	SK553・554	1			7.8	灰白	灰白	長・砂			ロクロナデ	回転糸切り		底部のみ残存
169	須恵器	有台杯		17A24・25他	SK553・554	1			9.6	灰白	灰白	石・長		下：ロクロナデ	下：ロクロナデ		1/8	
170	須恵器	横瓶		17A24・25他	SK553・554	1	11.0			灰オリーブ	灰白	長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/3	外面自然釉
171	須恵器	短頸壺	A	17A24・25他	SK553・554	1	9.4			灰白	灰	長	ロクロナデ	上：ロクロナデ	上：ロクロナデ		1/3	自然釉
172	須恵器	鉢		17A24・25他	SK553・554	1	27.0			灰白～灰	灰白～灰	石・長・砂	ロクロナデ	上：ロクロナデ	上：ロクロナデ		1/8	
173	須恵器	広口鉢		17A24・25他	SK553・554	1				灰白～灰	灰白～灰	砂	カキ目	カキ目	カキ目、ハケ目			
174	土師器	小甕	B	17A24・25他	SK553・554	1	9.8			明褐灰～灰褐	明褐灰～灰褐	石・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/8	
175	土師器	小甕	B	17A24・25他	SK553・554	1	13.8			にぶい黄褐	にぶい黄褐	砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/16	
176	土師器	長甕	B	17A24・25他	SK553・554	1	21.7			浅黄橙	浅黄橙	石・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/6	
177	須恵器	無台杯	AⅡb	14B24・25他	SK47	15-16	12.7	3.4	8.0	灰白	灰白	石・長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/4	小泊産
178	須恵器	無台杯	AⅡb	14B24・25他	SK47	15-16	12.8	3.5	8.5	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ→ナデ	ヘラ切り→ナデ	1/3	底部外面板目圧痕
179	土師器	無台椀	BⅡ	14B24・25他	SK47	15-16	13.2			にぶい黄褐	灰白	砂	ロクロナデ				1/8	
180	須恵器	有台杯	AⅡb	14B24・25他	SK47	15-18	10.1	3.5	6.8	暗灰～灰	青灰	長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	4/5	試掘出土土器と接合
181	須恵器	杯蓋	B	14B24・25他	SK47	15-17	13.0			灰白～灰	灰白	砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/6	
182	須恵器	杯蓋	A	14B24・25他	SK47	15-16	15.9	4.6		灰白	灰白	石・角・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ→ナデ		完形	
183	土師器	無台椀	BⅡ	14B24・25他	SK47	床	15.3	4.0	5.0	浅黄橙～橙	浅黄橙～橙	砂	ロクロナデ	ロクロナデ		糸切り→ロクロケズリ	完形	回転糸切り
184	土師器	無台椀	BⅠ	14B24・25他	SK47	床	15.1			淡橙	浅黄橙～橙	石・砂	ロクロナデ	ロクロナデ			1/4	
185	土師器	長甕	B	14B24・25他	SK47	3	20.0			にぶい黄橙	にぶい黄褐	雲・砂	ロクロナデ	上：ロクロナデ	上：ロクロナデ		1/8	内面オコゲ・煤
186	土師器	壺		14B24・25他	SK47	15-16			4.6	浅黄橙	灰褐	石・砂					完形	底部のみ残存
187	須恵器	甕		14B24・25他	SK47	15-16				灰	灰白	砂		タタキ（平行）、ナデ	タタキ（同心円）			
188	土師器	無台椀	BⅡ	13D14	SK55	6	12.8			にぶい褐～橙	にぶい褐	石	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/8	
189	須恵器	壺		13D14	SK55	6			6.6	暗青灰～青灰	青灰	長・砂		下：ロクロナデ	底：ロクロナデ	回転糸切り	完形	底部のみ残存
190	土師器	小甕	B	13D14	SK55	12	13.0	11.4	5.6	にぶい黄橙	赤橙	石・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	2/3	口縁部外面煤
191	須恵器	無台杯	AⅡb	16B8・13	SK77	2	13.8	3.6	9.0	灰白	灰白	長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/8	
192	須恵器	無台杯	AⅡb	16B8・13	SK77	2				灰白	灰白	長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			
193	須恵器	杯蓋	A	16B8・13	SK77	3	16.6			にぶい赤褐	橙	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/8	
194	須恵器	無台杯		17A23	SK453	上部				灰	灰白	長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/12	
195	須恵器	無台杯		22A21	SK108		12.1			灰白	灰	砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/8	
196	須恵器	無台杯	AⅡb	22B3	SD109	1	13.6	6.5	3.0	灰白	灰白	石	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り→ナデ	1/6	底部外面板目圧痕

上層出土土器観察表（2）

報告No.	種別	器種	分類	出土地点			法量（cm）			色調		胎土（混和材・色調）	製作痕跡			底部切り離し・調整	残存率	備考
				グリッド	遺構	層位	口径	器高	底径	（外面）	（内面）		口縁部	体部外面	体部内面			
197	須恵器	有台杯	ＡⅠb	18A21	SK438	2	13.9	3.6	9.7	灰	灰	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り→ナデ	完形	底部見込みにヘラ記号
198	須恵器	杯蓋	A	19B15	SD68		15.9			灰	灰	長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/12	
199	土師器	長甕	B	18B15	SD68		16.4			浅黄橙	浅黄橙	石・雲・砂	ロクロナデ	上：ロクロナデ	上：ロクロナデ		1/6	口縁部内外面煤
200	須恵器	甕			SD27	1	27.0			灰	灰白～灰	長・砂	ロクロナデ				1/4	頸部にヘラ端部の圧痕
201	須恵器	無台杯	ＡⅡb	17D20	SD302					灰白	灰白	砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			
202	須恵器	有台杯	ＡⅠb	17B1	SD376		12.9	3.2	9.0	青灰～灰白	灰白	長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/4	
203	須恵器	無台杯	ＡⅡa		SD521	1	13.2	3.5		灰白	灰白	長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/2	口縁、底部内外面摩耗
204	須恵器	有台杯		17D16	SD218					灰	灰	石・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/12	
205	須恵器	杯		18D6	SD516		13.8			浅黄橙	浅黄橙	石・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/8	
206	須恵器	無台杯	ＡⅡb	16C17	SD205				9.0	灰白	灰白～灰	石・長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/8	
207	須恵器	杯		16B5	SD369	埋土	13.9			灰白	灰白	石	ロクロナデ	上：ロクロナデ	上：ロクロナデ			
208	須恵器	有台杯	ＡⅠb	17D18	SD490	埋土	13.6	4.2	9.7	灰	灰白	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ→ナデ	ヘラ切り	1/2	
209	須恵器	杯蓋	A	16B20	SD219	埋土	14.4			灰	灰白		ロクロナデ				1/8	
210	須恵器	杯蓋	A	17C2	SD283		15			灰	灰白	砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/8	
211	土師器	甕	B	17B10	SD386	埋土				灰白	灰白	石・砂	不明				1/16	
212	土師器	小甕	B	17A25	SD551		14.6			灰褐	浅黄橙	角・砂	ロクロナデ	上：ロクロナデ			1/8	
213	土師器	小甕	B	16C19	SD207		14.6			灰白	浅黄橙～黒褐	石・砂	ロクロナデ?				1/8	
214	土師器	長甕	B	17D18	SD488		15.7			にぶい褐	黒褐	角・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/8	内面煤
215	土師器	長甕	B	9B21	SD573	1	18.8			にぶい橙	橙	石・砂	内：カキ目	上：カキ目	上：カキ目		1/8	
216	土師器	甕	B	16C	16CP1					にぶい黄橙	浅黄橙	石・チ・砂	ロクロナデ				1/16	
217	須恵器	有台杯	ＡⅠb	25A	25AP3		13.7	3.6	10.3	灰	灰	砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/6	
218	須恵器	有台杯	ＡⅠb	7A24	SD60	1			8.0	青灰	青灰	長・砂			底内：ナデ			
219	土師器	無台椀	ＢⅡ		SD9	1	12.6			にぶい黄橙	にぶい黄橙	石・長	ロクロナデ				1/8	
220	土師器	長甕	B		SD66	2	18.2			浅黄橙	浅黄橙	石・角・砂	ロクロナデ				1/8	
221	須恵器	長頸瓶		9E14	SD4					黒	灰	石・長・砂		上：ロクロナデ	上：ロクロナデ		1/6	
222	須恵器	横瓶		4A22	SD146	1	10.8			灰白～灰	灰白	長・砂	ロクロナデ	上：タタキ(格子)	上：タタキ(同心円)		完形	口縁のみ完形
223	須恵器	杯蓋	A	8A15	暗渠工事遺構		17.5			灰	緑灰	石・砂	ロクロナデ	ロクロケズリ	ロクロナデ		1/8	
224	須恵器	壺		8A15	暗渠工事遺構				6.0	灰黄褐	淡黄	石・砂			底内：ロクロナデ		完形	高台のみ完形
225	土師器	無台椀		8A15	暗渠工事遺構				5.6	浅黄橙	灰白	石・砂				回転糸切り	完形	底部のみ完形
226	須恵器	杯蓋	B	26B17		Ⅱ	12.3			灰白	灰白	長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/3	
227	須恵器	無台杯	ＡⅡb	25C1		Ⅱ	14.0	4.0	9.6	浅黄橙	浅黄橙	砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/3	
228	須恵器	有台杯	ＡⅠb	23B		Ⅳ・Ⅴ	14.2	4.5	10.2	灰白	灰白	長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ→ナデ	ヘラ切り→ケズリ	1/3	底部内面ナデ
229	須恵器	壺蓋		24B		Ⅰ	8.0	2.4	10.7	灰白	灰白	砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り？	1/6	外面自然釉（オリーブ黒）
230	土師器	長甕	B	23B10		Ⅱ	21.0			黄橙	浅黄橙	砂	ロクロナデ				1/8	
231	須恵器	無台杯	ＡⅡa	16D21		Ⅳ	12.5	3.2		灰白～灰	灰白	長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り→ヘラナデ	1/8	口縁底部内面・体部下半摩耗
232	須恵器	無台杯	ＡⅡa	18B12		Ⅱ	12.6	3.4		灰白	灰白	石	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/6	底部完形
233	須恵器	有台杯	ＡⅠb	17A23		Ⅳ	13.1	3.0	7.0	灰白	灰白	長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/6	
234	須恵器	有台杯	ＡⅠb	18A		Ⅱ	14.5	3.1	9.3	灰白	灰白	長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/4	
235	須恵器	有台杯		18C12		Ⅱ			7.2	青灰	灰	長・砂		下：ロクロナデ	下：ロクロナデ	ヘラ切り	1/3	
236	須恵器	有台杯	ＡⅠb	18A		Ⅱ	14.8	4.2	11.1	灰	灰白	長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/4	
237	須恵器	有台杯	ＡⅠb	18A		Ⅱ	14.4	3.4	8.5	灰白	灰白	石・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/6	
238	須恵器	有台杯	ＡⅠb	17B1他		Ⅱ	13.9	4.0	9.3	灰	灰	長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	2/3	体部外面～底部摩耗
239	須恵器	有台杯	C	17F3		Ⅱ				灰	灰	長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			
240	須恵器	杯蓋	A	16E8		Ⅱ	14.7	2.6		灰オリーブ	灰	石・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/8	外面自然釉
241	須恵器	杯蓋		18A		Ⅱ				灰	灰	石・長		ロクロケズリ	ロクロナデ			
242	須恵器	短頸壺	B	17F5		Ⅱ	9.0			オリーブ	灰白～灰	砂	ロクロナデ	ロクロナデ	上：ロクロナデ		1/8	
243	須恵器	長頸瓶		19D24他		Ⅱ			9.0	暗オリーブ	灰白	石・長・砂		下：タタキ(格子)	下：ロクロナデ		1/4	外面自然釉
244	須恵器	甕		16F5		Ⅱ				灰	灰	長・砂	ロクロナデ					
245	黒色	Ⅲ		16F24		Ⅱ				橙	黒	石・長・砂	ロクロナデ				1/12	内面黒色処理

上層出土土器観察表（3）

報告No.	種別	器種	分類	出土地点			法量（cm）			色調		胎土（混和材・色調）	製作痕跡			底部切り離し・調整	残存率	備考
				グリッド	遺構	層位	口径	器高	底径	（外面）	（内面）		口縁部	体部外面	体部内面			
246	土師器	甕	B	19A25		Ⅱ				浅黄橙～橙	浅黄橙～橙	石・砂	ロクロナデ				1/12	
247	土師器	長甕	B	17A25		Ⅳ	20.5			橙	浅黄橙	砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/8	
248	土師器	長甕	B	16F24		Ⅱ	24.7			浅黄橙	浅黄橙	石・砂	ロクロナデ	上：カキ目 下：ハケ目	上：カキ目		1/6	
249	須恵器	無台杯	AⅡb	14E12		Ⅱ	12.1	2.5	8.0	灰白	灰白	長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/8	全体的に摩耗
250	須恵器	無台杯	AⅡb	12E23		Ⅱ	12.4	3.9	7.2	灰白	灰白	長・針・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	1/6	
251	須恵器	有台杯		5F17		Ⅱ			4.1	灰	灰	長		下：ロクロナデ	下：ロクロナデ		1/2	底部のみ1/2残存
252	須恵器	有台杯		14E1		Ⅳ			5.5	灰白～灰	灰白	砂		下：ロクロナデ	下：ロクロナデ	ヘラ切り	2/3	底部のみ2/3残存
253	須恵器	有台杯	AⅡb	15E1		Ⅱ	10.6	3.8	7.5	灰白～灰	灰	長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	1/4	体部内面～口縁部に自然釉
254	須恵器	有台杯	AⅡb	15D18他		Ⅱ	11.4	3.1	6.4	暗青灰～青灰	暗青灰	長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/3	
255	須恵器	有台杯		12E14		Ⅳ			7.9	青灰	青灰	長		ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/4	底部が1/4残存
256	須恵器	有台杯		15D17		Ⅱ			10.1	暗青灰	灰白	長・針			ロクロナデ→ナデ	ヘラ切り	1/4	底内ロクロナデ→ナデ
257	須恵器	有台杯	B	14B9		Ⅱ	15.1	6.1	9.5	灰	灰	石・長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	1/2	
258	須恵器	杯蓋	A	14B17		Ⅱ	15.3	2.2		灰	灰白	石・長	ロクロナデ	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		1/6	
259	須恵器	短頸壺	B	15D13		Ⅱ	5.5			灰	灰白	針・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/4	ヘラ記号
260	須恵器	短頸壺	B	15B6		Ⅱ	12.0			灰	灰	砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/8	
261	須恵器	短頸壺	A	1A18		Ⅱ	8.2			灰白～灰	灰白	長・砂	ロクロナデ	上：ロクロナデ	上：ロクロナデ		1/8	
262	須恵器			14E18		Ⅱ			14.7	灰	灰白	石・砂		ロクロナデ	ロクロナデ		1/8	
263	須恵器	長頸瓶		7C7・7B24		Ⅳ・Ⅱ	9.0			オリーブ黒	灰～黒	砂	ロクロナデ	上：ロクロナデ	上：ロクロナデ		2/3	
264	須恵器	短頸壺	A	14E2・6		Ⅱ	11.8			暗青灰	青灰	石・長・砂	ロクロナデ				1/3	
265	須恵器	甕		2B20		Ⅱ				灰	灰	石・砂		上：タタキ（平行）	上：タタキ（同心円）			
266	灰釉	椀		12E24		Ⅱ			7.0	灰白	灰白			ロクロナデ	ロクロナデ		4/5	底部のみ4/5残存
267	土師器	椀	B	4C12		Ⅳ	10.8	3.2	4.4	浅黄橙	にぶい黄橙	砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	1/4	
268	黒色	椀		10E5	SD6	2			7.3	灰白	黒	長					1/4	底部のみ1/4残存、内面黒色
269	灰釉	椀		11E1	SD6	6			7.0	灰白	灰白、オリーブ灰	長・砂		ロクロナデ	ロクロナデ		2/3	底部のみ2/3残存
270	須恵器	高杯		12E17	SD13	4	8.0			灰	灰	砂		下：ロクロナデ	下：ロクロナデ			脚部のみ残存
271	土師器	椀		12F	SD13	下	12.4			にぶい黄橙	にぶい黄橙	石・角・針・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/8	
272	灰釉	皿		12F	SD31	下				灰白	オリーブ灰		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/16	
273	黒色	無台椀		12F	SD13	下			6.3	褐灰	黒	石・雲・角			ミガキ？		完形	内面黒色、底部完形
274	土師器	有台椀		12E15	SD13	7			7.6	にぶい橙	にぶい黄橙	石・長・角・砂					1/3	底部のみ1/3残存
275	黒色	有台椀		12F12・23	SD14	1			6.4	にぶい橙	黄灰	石・長・砂					1/6	内面黒色、底部1/3
276	須恵器	無台杯	AⅡb	5E1	SD58	1	11.7	3.3	7.4	青灰	青灰	長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1/4	
277	須恵器	無台杯	AⅡb	4E4	SD58	1	11.8	3.4	6.8	灰	灰	長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	1/2	
278	須恵器	有台杯	AⅡ	5E4	SD58	1	10.7	3.3	6.7	灰	灰	長	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/4	
279	須恵器	杯蓋	B	4E4	SD58	1				灰	灰	長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/12	
280	須恵器	長頸瓶		1A21・25他	SD58	1			10.5	灰	灰白	長・砂		カキ目、ロクロケズリ	ロクロナデ		1/3	
281	須恵器	無台杯	AⅡa		河川トレンチ7	河1				灰白	灰白	石・長・砂				ヘラ切り	完形	底部完形・底部摩耗
282	須恵器	有台杯	C		河川トレンチ3	Ⅳ	15.5	7.3	12.0	灰白	浅黄橙	長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ→ナデ	ヘラ切り→ロクロケズリ	完形	底部内面ナデ
283	須恵器	杯蓋	A		河川トレンチ3	Ⅳ	14.7			暗オリーブ灰	灰白	砂	ロクロナデ	ロクロケズリ	ロクロナデ→ナデ		1/4	外面自然釉（暗オリーブ灰）
284	須恵器	杯蓋	A		河川トレンチ7	河1	14.2	2.7		灰白	灰白	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロケズリ	ロクロナデ→ナデ		完形	底部内面ナデ
285	須恵器	壺蓋			河川トレンチ3	Ⅳ	12.6			灰	灰	砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/4	
286	須恵器	壺蓋			河川トレンチ4	Ⅳ	12.6	3.4	9.8	浅黄橙	浅黄橙	石・角・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/4	
287	須恵器	把手付鉢			河川トレンチ3	Ⅳ				灰白	灰白	石・長		ケズリ	ロクロナデ			
288	青磁	椀			SD13	5	17.2			オリーブ灰	灰オリーブ	灰					1/8	
289	珠洲焼	壺		12F	SD13	下層			13.9	灰白	灰	石・砂				糸切り	1/3	底部が1/3残存
290	土師質	皿		12E12	SD13	7	10.6			にぶい橙	灰白	石・長・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/8	ロクロ成形
291	土師質	皿		12E18	SD13	4	8.5	1.9		にぶい黄橙	にぶい黄橙	石・長・角・砂	ヨコナデ	指頭圧痕			ほぼ完	手づくね成形
292	土師質	皿		12F	SD13	下層	11.7			浅黄橙	浅黄橙	石・雲・角・砂	ヨコナデ		指頭圧痕		1/8	手づくね成形
293	土師質	皿		12E13	SD13	6	12.1			にぶい黄橙	にぶい黄橙	石・角・砂	ヨコナデ	指頭圧痕			1/8	手づくね成形

上層出土土器観察表（4）

報告No.	種別	器種	分類	出土地点			法量（cm）			色調		胎土（混和材・色調）	製作痕跡			底部切り離し・調整	残存率	備考
				グリッド	遺構	層位	口径	器高	底径	（外面）	（内面）		口縁部	体部外面	体部内面			
294	土師質	皿		12F	SD13	下層				にぶい橙	淡橙	雲・砂	ヨコナデ		指頭圧痕		1/12	手づくね成形
295	土師質	皿		12F	SD13	下層	13.9			浅黄橙	にぶい黄橙	石・長・砂	ヨコナデ		指頭圧痕		1/4	手づくね成形
296	土師質	皿		12E9	SD13	7				にぶい黄橙	にぶい黄橙	石・砂	ヨコナデ				1/12	手づくね成形
297	土師質	皿		12F	SD13	下層	13.8			褐灰	にぶい黄橙	石・長・雲・砂	ヨコナデ	指頭圧痕	指頭圧痕		1/6	手づくね成形
298	土師質	皿		12F17	SD14	1	8.5			にぶい黄橙	にぶい黄橙	石・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/6	ロクロ成形
299	土師質	皿		12F12	SD14	1	7.8	1.8	4.0	淡橙～橙	淡橙～橙	石・砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		1/2	ロクロ成形
300	白磁	皿		11E16		Ⅱ	7.5			灰白	灰白	灰白					1/6	
301	白磁	皿		11F10		Ⅱ	10.4			灰白	灰白	灰白					1/8	
302	白磁	皿		11D12		Ⅱ	11.2			灰白	灰白	灰白					1/8	
303	白磁	皿		14F23		Ⅱ	10.7			灰白	灰白	灰白、砂					1/8	
304	白磁	皿		14C20		Ⅱ			5.8	灰白	灰白	灰白					1/4	底部1/4残存、割口に漆付着
305	白磁	皿		15B1		Ⅱ			3.8	灰白	灰白	灰白					完形	底部のみ完形
306	白磁	皿		19E22		Ⅱ			5.4	灰白	灰白	灰白					1/4	底部のみ1/4残存
307	青白磁	合子		13E23		Ⅱ	4.9			灰白	灰白	灰白					1/4	
308	青磁	碗		10E18		Ⅱ	10.1			オリーブ灰	オリーブ灰	灰白					1/6	割口に漆付着
309	青磁	碗		10F21		Ⅱ	11.2			明オリーブ灰	明オリーブ灰	浅黄橙					1/8	
310	青磁	碗		13F14		Ⅱ				オリーブ灰	オリーブ灰	灰白					1/12	
311	青磁	碗		11F21		Ⅱ	12.8			緑灰	緑灰	灰白					1/8	
312	青磁	碗		18C1		Ⅱ	13.6			緑灰	緑灰	灰白					1/6	
313	青磁	碗		14・15D～F		Ⅰ				オリーブ灰	オリーブ灰	灰白					1/12	
314	青磁	碗		19E		Ⅰ	15.6			灰オリーブ	灰オリーブ	灰白					1/8	
315	青磁	碗		13F20		Ⅱ	15.3			灰オリーブ	灰オリーブ	灰白					1/8	割口に漆付着
316	青磁	碗		17C23		Ⅱ				オリーブ灰	オリーブ灰	灰白					1/12	
317	青磁	碗		14B22		Ⅱ				緑灰	オリーブ灰	灰白						
318	青磁	皿		15C14		Ⅱ	9.6			灰オリーブ	灰オリーブ	灰白					1/8	
319	青磁	皿		16B・C		Ⅰ				明オリーブ灰	明オリーブ灰	灰白					1/12	
320	青磁	皿		3D6		Ⅱ				オリーブ灰	オリーブ灰	灰白					1/16	
321	青磁	盤		5E		Ⅰ				灰オリーブ	灰オリーブ	灰白						
322	青磁	皿		13B25		Ⅱ				オリーブ灰	オリーブ灰	灰白						稜花皿
323	青磁	碗		17F4		Ⅱ				灰オリーブ	灰オリーブ	灰白						
324	青磁	碗		3B14		Ⅱ			6.0	緑灰	緑灰	灰白					1/4	底部1/4残存
325	青磁	碗		C区南		Ⅱ			7.3	オリーブ灰	オリーブ灰	灰白					1/3	
326	珠洲	甕		3D17		Ⅱ				灰	灰	長・砂		タタキ（平行）				
327	珠洲	甕		16E1		Ⅱ				青灰	青灰	石・長・砂		タタキ（平行）				
328	珠洲	甕		20D10		Ⅱ				灰	灰	石・長・砂		タタキ（平行）				
329	珠洲	片口鉢類		14～15D		Ⅱ	25.8			灰	灰	長・針・砂					1/8	
330	珠洲	片口鉢類		16E19		Ⅱ				暗青灰	灰	石・針・砂						
331	珠洲	片口鉢類		11D7		Ⅱ	33.8			灰白	灰白	長・針・砂					1/8	
332	珠洲	片口鉢類		13C5		Ⅱ				灰白	灰白	長・針・砂			卸目			
333	珠洲	片口鉢類		4A19						灰	灰	石・長・砂	端面に波状紋					
334	珠洲	片口鉢類		25A25		Ⅱ			15.6	灰	灰	石・長・針・砂			卸目（1単位9条）		1/6	底部に板目状圧痕
335	珠洲	片口鉢類		B区北暗渠		Ⅱ			14.1	灰白	灰白	長・雲・針・砂			卸目		1/6	
336	珠洲	壺		15F16		Ⅱ			10.0	灰白～灰	灰	長・針・砂					1/6	
337	珠洲	壺		20E9		Ⅱ			10.7	灰	灰	石・針・砂					1/6	
338	越前	鉢		25C1		Ⅱ				淡黄	淡黄	石・砂						
339	越前	鉢		3B14		Ⅱ				灰白	灰白	角・砂			卸目（1単位8条）		1/12	
340	越前	鉢		2D21		Ⅱ			11.6	にぶい橙	灰赤～赤	石・砂			卸目（1単位15条）		1/4	
341	瀬戸美濃	筒形香炉		13D16		Ⅱ				暗褐	褐～黒	灰白					1/12	鉄釉
342	瀬戸美濃	天目茶椀		13E8		Ⅱ	11.0			極暗赤褐	極暗赤褐	灰白～黄灰					1/4	錆釉・鉄釉

上層出土土器観察表（5）

報告No.	種別	器種	分類	出土地点			法量（cm）			色調		胎土（混和材・色調）	製作痕跡			底部切り離し・調整	残存率	備考
				グリッド	遺構	層位	口径	器高	底径	（外面）	（内面）		口縁部	体部外面	体部内面			
343	瀬戸美濃	天目茶椀		13E22		Ⅱ	10.7			極暗赤褐	極暗赤褐	淡黄、砂					1/6	鉄釉
344	瀬戸美濃	天目茶椀		18E		Ⅰ	11.7			黒	黒	灰白					1/6	錆釉、鉄釉
345	瀬戸美濃	天目茶椀		25E23他		Ⅱ他			5.6	黒	黒褐	灰白、砂					完	鉄釉、底部は完形
346	瀬戸美濃	花瓶		16D23		Ⅱ				灰白	黄褐	灰白					1/3	灰釉
347	瀬戸美濃	折縁皿		13C4		Ⅱ			6.8	暗オリーブ	暗オリーブ	灰白					1/4	灰釉、底部1/4残存
348	瀬戸美濃	折縁皿		25F16		Ⅱ				オリーブ	オリーブ	黄灰					1/4	灰釉、底部1/4残存
349	瀬戸美濃	折縁深鉢		19E13		Ⅱ				灰オリーブ	灰オリーブ	灰白					1/16	灰釉
350	瀬戸美濃	折縁深鉢		26C		Ⅰ				灰オリーブ	灰オリーブ	灰白					1/16	灰釉
351	瀬戸美濃	縁釉小皿		14・15B・C		Ⅰ	14.4			浅黄橙	浅黄橙	灰白					1/8	灰釉
352	瀬戸美濃	折縁深鉢		19E15		Ⅱ				にぶい黄	にぶい黄	灰						灰釉
353	瀬戸美濃	折縁深鉢		23F10		Ⅱ				暗オリーブ	暗オリーブ	灰白						灰釉
354	土師質	皿		24E24		Ⅱ	7.6	1.5	5.5	にぶい黄橙	にぶい黄褐	砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	1/8	ロクロ成形
355	土師質	皿		27B1		Ⅱ				暗灰～灰	灰白～暗灰	長・砂	ヨコナデ				1/12	手づくね成形
356	土師質	皿		25D4		Ⅱ	10.5			灰黄	黄灰	砂	ヨコナデ				1/8	手づくね成形
357	土師質	皿		24C23		Ⅱ				黄灰、黒褐	黄灰、黒褐	石・長・砂	ヨコナデ				1/8	手づくね成形
358	土師質	皿		26C12		Ⅱ	14.5			にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂	ヨコナデ				1/8	手づくね成形
359	染付	皿		18D		Ⅰ			8.8	明青灰	明青灰	灰白					1/6	
360	染付	皿		17D18		Ⅱ				明青灰	明青灰	灰白					1/16	
361	唐津	皿		13・14D～F		Ⅱ	10.3	2.7	6.5	暗褐、黒褐	暗褐、黒褐	灰白、石					1/4	鉄釉
362	唐津	向付		23E3		Ⅱ	10.7			灰オリーブ	オリーブ黄	灰白					1/4	灰釉
363	唐津	皿		18D		Ⅰ	10.5	2.9	4.6	灰オリーブ	灰オリーブ	明褐灰					1/6	鉄釉
364	志野	皿		10E15他		Ⅱ	11.8	2.1	7.2	灰白	灰白						ほぼ完	鉄絵
365	越中瀬戸	皿		17C20		Ⅱ			5.7	極暗赤褐	暗赤褐	灰白					ほぼ完	鉄釉、底部完形、底部内面印花紋
366	唐津	皿		19F5		Ⅱ				褐	褐	褐灰					1/16	鉄絵

下層出土木製品観察表

報告No.	グリッド	遺構No.	建物番号	層位	種類	法量（cm）			木取り	樹種	樹種試料No.
						長さ	幅	厚さ・径			
115	24E8	SD113		上面	鎌柄	42.0	1.8	1.7	板目	コナラ属コナラ亜属コナラ節	9
116	25E20	SD113		1	槽	29.8	11.4	4.1	横木取り	スギ	14
117	24D16	SD113		1	曲物底板	36.5	9.1	0.7	柾目	スギ	2
118	24D16	SD113		1	不明	42.0	9.0	2.1	割材		
119	24E2	SD113		1	板	20.0	4.4	0.8	柾目	スギ	17
120	25E19	SD113		1	蓋	12.6	6.5	0.7	柾目	スギ	15
121	24D22	SD113		1	曲物底板	11.3	5.5	0.8	柾目	スギ	16
122	24E21	SD165		中	棒状木製品	18.2	1.4	1.3		ウルシ	10
123	23E13	SK118		1	棒状木製品	37.6	1.6	1.7		スギ	1
124	23E17	SK118		1	棒状木製品	15.9	1.6	1.5		スギ	11
125	25B24	SK631		埋土	棒状木製品	13.5	1.5	1.4		スギ	5
126	24E9			Ⅶ	建築部材	30.1	13.6	9.7		スギ	12
127	24E4	SK157		3	材	24.4	5.1	3.4	割材	オニグルミ	13
128	C区	暗渠		Ⅶ	ヤス	19.3	1.5	0.9		スギ	8
	24C	P1	SB3		柱根	89.0	22.0	20.0		オニグルミ	25
129	25C	P12	SB3		柱根	74.2		21.0	丸材	オニグルミ	27
	25C	P11	SB3		柱根	68.0		21.0	丸材	カツラ	26
130	25C	P25	SB3		柱根	74.8		20.6	丸材	カツラ	30
	24C	P40	SB3		柱根	49.0	24.0	16.0	割材	オニグルミ	33
131	24C	P19	SB3		柱根	53.2	21.1	19.4	割材	オニグルミ	28
132	24C	P41	SB3		柱根	75.6		20.4	割材	オニグルミ	32
133	25C	P21	SB3		柱根	98.8	20.4	16.6	割材	オニグルミ	29
134	25C	P26	SB3		柱根	81.6	21.4	20.8	割材	オニグルミ	31
135	26B	P7	SB4		柱根	82.4		19.8	割材	カツラ	41
136	25B	P6	SB4		柱根	99.0		19.2	丸材	カツラ	40
137	26C	P8	SB4		柱根	63.2	14.4	14.6	割材	オニグルミ	45
	26C	P6	SB4		柱根	80.0		19.0	丸材	カツラ	44
	26C	P5	SB4		柱根	82.0	21.0	14.0	丸材	カツラ	43
138	26B	P8	SB4		柱根	60.2	17.6	13.2	割材	オニグルミ	42
139	23F	P2	SB5		柱根	88.2	18.6	12.4	割材	オニグルミ	34
140	24F	P3	SB5		柱根	95.8	17.4	16.2	割材	オニグルミ	35
141	23F	P4	SB5		柱根	85.6	16.6	16.4	割材	オニグルミ	36
142	24F	P5	SB5		柱根	72.6	17.0	7.2	割材	オニグルミ	37
143	23F	P7	SB5		柱根	82.8	17.0	9.8	割材	オニグルミ	38
144	24F	P8	SB5		柱根	73.8	18.2	15.8	割材	オニグルミ	39
145	24F	P1	SB6		柱根	69.8		11.2	丸材	トネリコ属	18
146	24F	P9	SB6		柱根	59.2		10.8	丸材	トネリコ属	19

上層出土木製品観察表

報告No.	グリッド	遺構No.	建物番号	層位	種類	法量（cm）			木取り	樹種	樹種試料No.
						長（口径）	幅（器高）	厚（径・底径）			
367				撹乱	漆椀	10.1					
368		SD58		床	漆椀	14.5	4.9	6.6			
369		SK56		10	漆椀			8.0			
370	12F22	SK54		13	漆ヘラ	16.5	3.4	0.4	柾目	スギ	4
371	12F22	SK54		13	加工痕ある材	10.2	2.5	1.1	横木取り	スギ	7
372	12F22	SK54		13	蓋	13.2	18.1	2.7		スギ	6
388	13C22・23	13CP41	SB2		柱根	54.0		12.5	丸材	キハダ	24
389	13C17	13CP9	SB1		柱根	54.5	18.5	7.3	割材	スギ	23

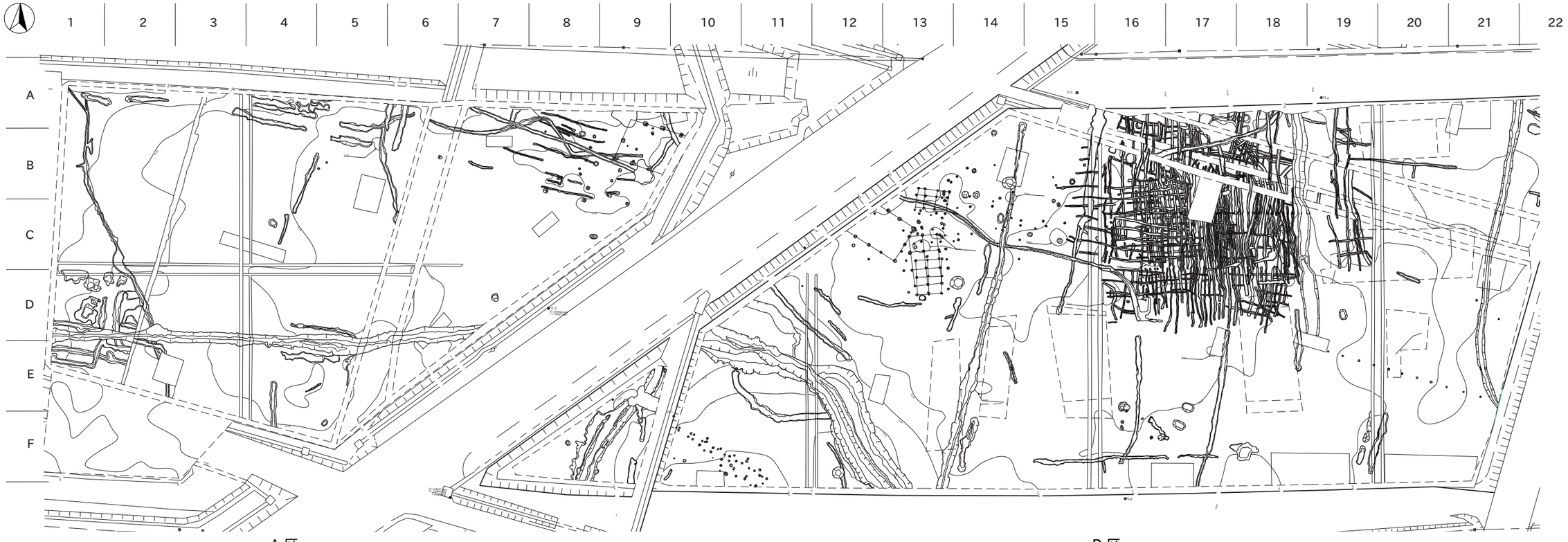
上層出土銭貨観察表

径の単位：mm、重量の単位：g

報告番号	銭貨名	書体	出土地点	層位	外径縦	外径横	内径縦	内径横	銭厚	重量	初鋳年	国名	備考
374	大中通寶	楷書	4A22	Ⅰ	23.1	19.2	22.9	19.4	1.3	2.44	1361	明	重点通
375	乾元重寶	楷書	5C22	Ⅱ	23.4	19.1	23.6	19.1	1.1	2.38	758	唐	
376	開元通寶	楷書	1F14	撹乱	24.8	19.8	24.6	20.1	1.1	2.32	845	唐・南唐	
377	元祐通寶	行書	10G1	不明	24.5	20.9	24.5	19.9	1.2	2.23	1086	北宋	
378	治平元寶?	篆書?	15B1	Ⅱ	23.8	19.3	23.5	19.3	1.2	2.35	1064	北宋	
379	天聖元寶	楷書	15F6	Ⅱ	24.9	20.3	24.9	20.0	1.3	3.00	1023	北宋	
380	至和元寶	楷書	16B・C	Ⅰ	23.0	17.5	23.5	17.2	1.1	3.21	1054	北宋	
381	洪武通寶	楷書	19E3	Ⅱ	22.9	19.5	22.7	19.5	1.4	2.12	1368	明	単点通・コ頭通
382	宋通元寶	楷書	19F4	Ⅱ	25.0	19.1	24.9	19.5	1.2	3.33	960	北宋	
383	元豊通寶	行書	20F5	Ⅳ	23.6	18.4	23.4	18.6	1.3	3.50	1078	北宋	遺構確認作業中出土
384	皇宋通寶	篆書	20F5	Ⅳ	25.1	19.8	25.4	19.3	1.2	3.86	1038	北宋	遺構確認作業中出土
385	元祐通寶	篆書	20F5	Ⅳ	24.4	19.3	24.3	20.0	1.0	3.24	1086	北宋	遺構確認作業中出土
386	紹聖元寶	篆書	21F2	Ⅱ	23.6	18.6	23.7	18.3	1.1	2.69	1094	北宋	
387	元符通寶	行書	B区南	不明	23.5	18.5	23.5	18.6	0.9	2.28	1098	北宋	

図　　版

1　トーンについては図版中に凡例を付した。
2　土器・陶磁器の断面は、須恵器を黒塗り、灰釉陶器を点描で表現し、その他は白抜きとした。
3　転用硯の摩耗痕の範囲は一点鎖線で示した。
4　木製品の木目は、木取部位表示を目的としているため、年輪幅は実際を示したものではない。
5　遺物の写真図版の番号・縮尺は、図面図版と統一してある。

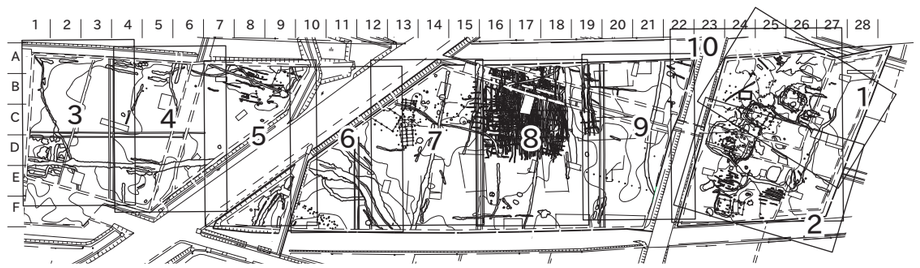


A 区

B 区

C 区下層（上層の遺構は図版30参照）

0 （1：600） 30m



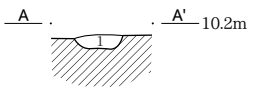
分割図概念図

0 （1：2,000） 100m

SD113a
SD555
SD556
SD603
SD607
SD628
SD629
SD602
SD601
SD606
SD620
SD115
B93
SD643
SC92
SC91
SB4
SD607
SD601
SD624
SD601
SX625
SK631
SB3
SD610
SD622
SD618
SD626
SD605
SD614
SD617
SD604
SD612
SD613
SK609
SD642
SD615
SD641
TS.6
0
(1:200)
10m

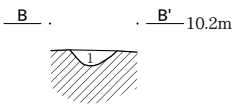
遺構分割図１土層断面図

SD615



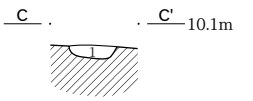
1　灰色粘土　しまり中

SD615



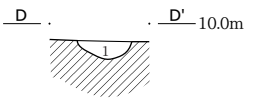
1　灰色粘土

SD612



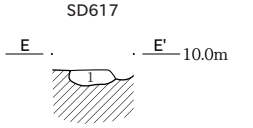
1　灰色粘土　炭化物少々混入、しまり中

SD614



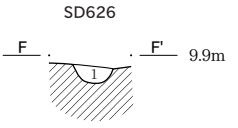
1　灰色粘土　炭化物少々混入、しまり中

SD617



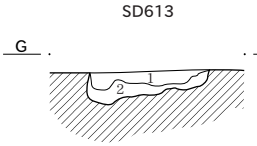
1　暗灰色粘土　しまり中

SD626



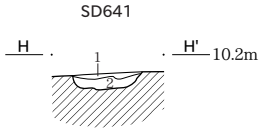
1　灰色粘土　しまり中

SD613



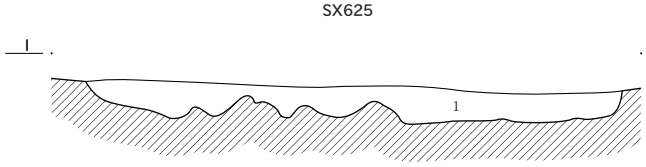
1　暗灰色粘土　炭化物少々含まれる、しまり中
2　灰色シルト　白色土ブロックを含む

SD641



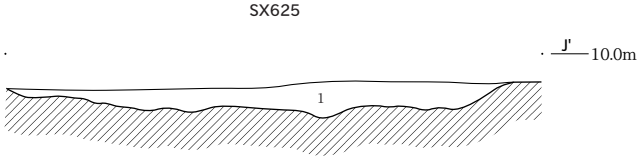
1　暗灰褐土　粘性あり
2　灰白色土　しまりあり

SX625



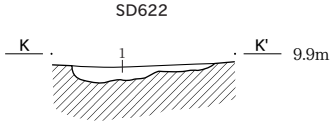
1　灰色粘土　炭化物少々混入、しまり中

SX625



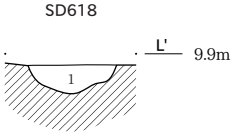
1　灰色粘土　炭化物少々混入、しまり中

SD622



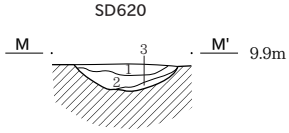
1　暗灰白色粘土　しまり中

SD618



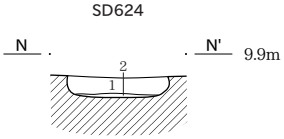
1　暗灰褐色粘土　しまり中

SD620



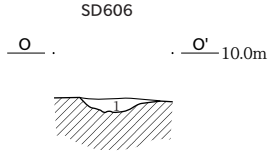
1　暗灰褐色粘土　しまり中
2　灰白粘土　しまり中
3　灰色粘質シルト

SD624



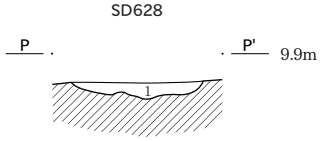
1　灰色粘土　炭化物少々混入、しまり中
2　灰色シルト

SD606



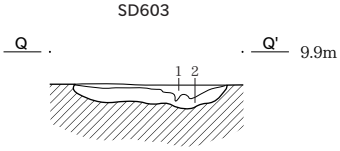
1　灰色粘土　しまり中

SD628



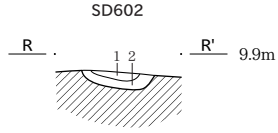
1　暗灰褐色粘質土　しまり中

SD603



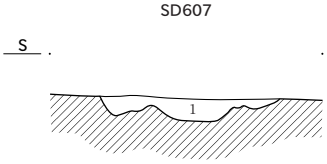
1　灰色粘土　しまり中、黒炭混入
2　灰色シルト

SD602



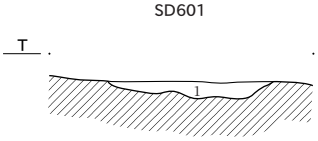
1　灰色粘土　しまり中
2　灰白粘土　しまり中

SD607



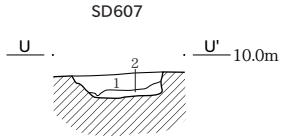
1　灰色粘土　しまり中

SD601



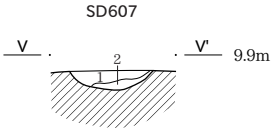
1　青灰色粘土　1～10mm炭粒散在、灰色粘土塊状に多量混入

SD607



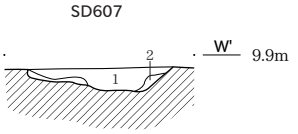
1　灰色粘土　しまり中
2　灰色シルト

SD607



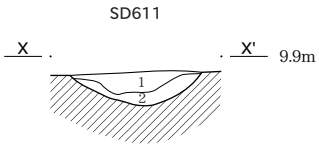
1　灰色粘土　しまり中
2　灰色シルト

SD607



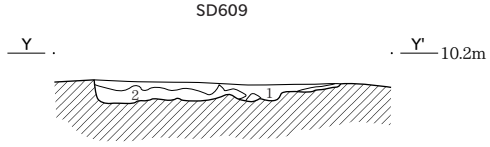
1　暗灰色粘土　炭化物少量含まれる、しまり中
2　暗灰色シルト

SD611



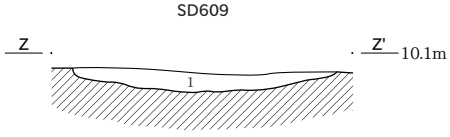
1　暗灰褐色粘土　黒い炭のブロック混入、しまり中
2　灰白色土　炭化物粒子が混入

SD609



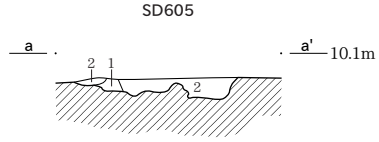
1　暗灰褐色土　炭少量混入、炭ブロックあり、しまりあり
2　緑灰色土　炭混入あり

SD609



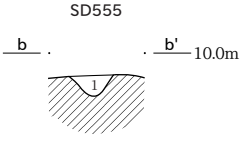
1　灰色粘土　炭化物少々混入、しまり中

SD605



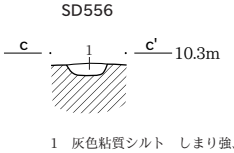
1　灰白色土　しまりあり
2　暗灰褐色土　炭化物含む、粘性・しまりややあり

SD555

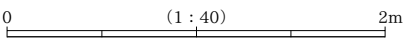


1　灰色粘土　暗灰色粘土混じる、しまりやや弱、粘性やや弱

SD556

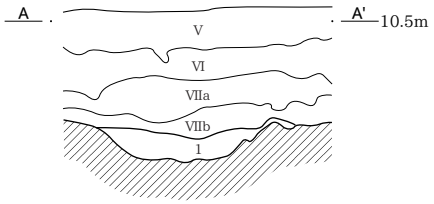


1　灰色粘質シルト　しまり強、粘性中



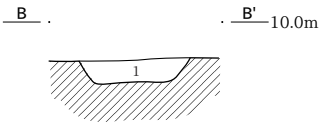
SX175
SD113a
SD178
SX176
SD173
SD116
SD99b
SD104b
SD98
SD105
畑跡1
SD121
SD97
SD96
SD104a
SD103
SD102
SD122
SD101
SD100
SD99a
SD115
SC94
SC95
SD114
SC93
SD643
SX171
SC90
SK179
SD158
SD200
SK157
SX177
SK163
24EP2
SB6
SD166
SD126
SD125
SD130
SD160
SD161
SD117b
SD117a
SD141
SD142
SD124
SD167
SK168
SK610
SD134
SD135
SD165
SB5
SD164
SD605
SC119
SD170
SK162
SD127
SD129
SD181
SD128
SD180
SD137
SD144
SD145
SD156
SD155
SK196
SC49
SD172
SD159
SD136
SD143
SD139
SD154
SX199
畑跡2
SX169
SD138
SD133a
SK118
SD113b
0
(1 : 200)
10m

SD113a



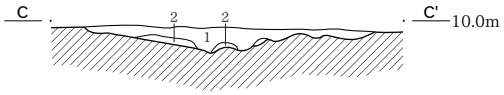
1　青灰色粘土　炭化物含む、しまりあり、粘性強

SD113a



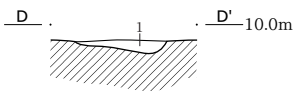
1　青灰色粘土　炭化物含む、しまりあり、粘性強

SD113a



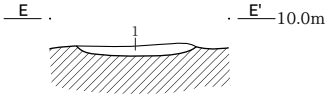
1　青灰色粘土　炭化物含む、しまりあり、粘性強
2　灰色粘土　青灰色粘土塊状含む、しまりあり、粘性強

SD114



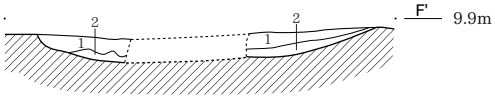
1　暗灰色土　炭化物密集、5～10mm灰色粘土
ブロック多く含む

SD115



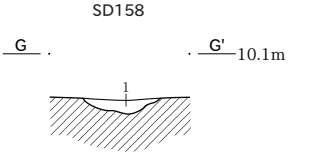
1　青灰色粘土　炭化物含む

SD116



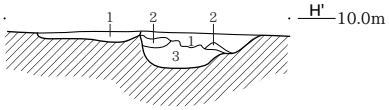
1　青灰色粘土　炭化物多く含む、灰色粘土多量、しまり強、粘性強、
2　灰色粘土　炭化物少量含む、青灰色粘土多く混在

SD158



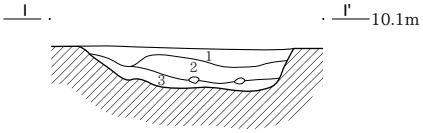
1　青灰色粘土　炭化物多く含む、灰色
粘土塊状に多く混入、しまり強、粘性あり

24EP2　SD158



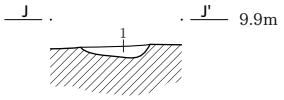
24EP2
1　青灰色粘土　炭化物多く含む、灰色粘土小塊少量混在
SD158
1　青灰色粘土　炭化物含む、灰色粘土小塊多く混入、
しまりあり、粘性強
2　灰色粘土　炭化物少量含む、しまりあり、粘性強、
3　青灰色粘土　炭化物多く含む、灰色粘土塊多く含む、
しまりやや弱、粘性やや強

SD167



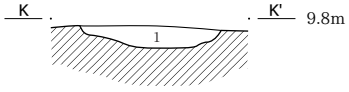
1　青灰色粘土　炭化物少量含む、灰色粘土多量、
灰色砂多く含む、しまりあり、粘性強
2　青灰色粘土　炭化物少量含む、灰色粘土多量、
腐植物多く含む、しまりあり、粘性強
3　青灰色粘土　炭化物少量含む、灰色粘土多量、
灰色砂多く含む、しまりあり、粘性強

SD113a



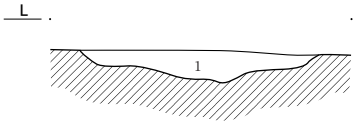
1　灰色粘土　炭化物多く含む、灰色粘土小塊
状に多く混じる、土壌化が進む腐植物多く含む

SD113a



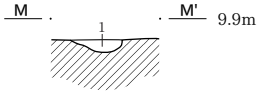
1　灰土粘土　炭化物多く含む、灰色粘土塊多く含む

SD113a



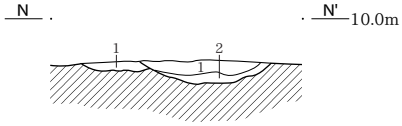
1　青灰色粘土　炭化物多く含む、灰色粘土塊状に多量混在

SD173



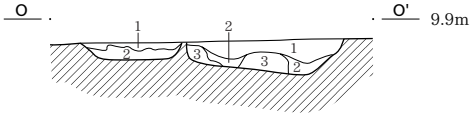
1　灰色粘土　炭化物少量含む、青灰色粘土
多く混入、しまり強、粘性強

SD178　SD113a



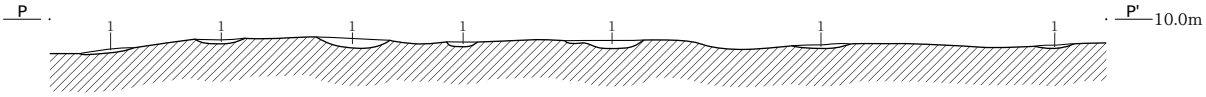
SD178
1　灰色粘土　炭化物少量含む、青灰色粘土小粒含む、
しまりあり、粘性強
SD113a
1　青灰色粘土　炭化物多く含む、腐植物多く含む、
しまりあり、粘性強、
2　灰色粘土　炭化物少量含む、青灰色粘土少量含む

SD113a　SX176

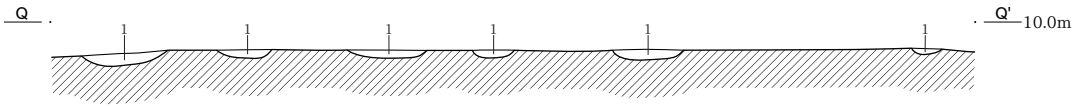


SD113a
1　青灰色粘土　炭化物多く含む、腐植物多く含む、しまりあり、粘性強
2　灰色粘土　炭化物少量含む、青灰色粘土少量混入
SX176
1　灰色粘土　炭化物多く含む、腐植物多く含む、しまりあり、粘性強
2　黒褐色土　灰色粘土多量、腐植物多量、しまりやや弱、粘性弱
3　灰色粘土　青灰色粘土少量、しまりあり、粘性強

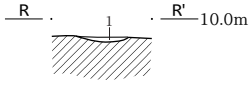
SD103　SD102　SD101　SD99b　SD98　SD97　SD96



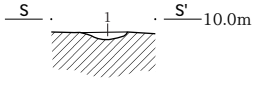
SD103　SD102　SD101　SD99b　SD98　SD105



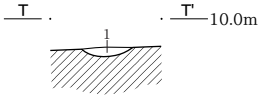
SD99a



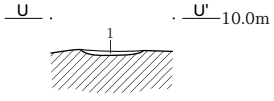
SD100



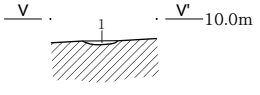
SD104a



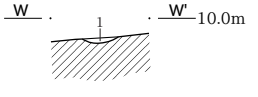
SD104b



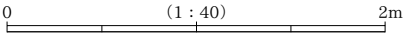
SD121

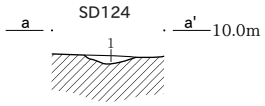


SD122

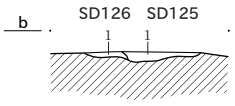


SD96～105、121、122
1　青灰色粘土　炭化物多く含む、灰色粘土をブロック状に多量含む、しまりあり、粘性強

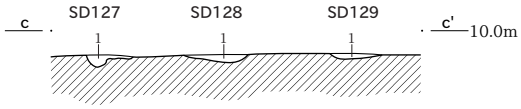




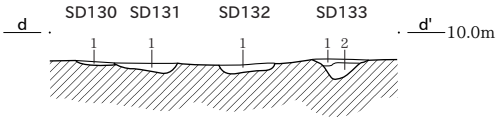
1　青灰色粘土、炭化物少量含む、灰色粘土多く



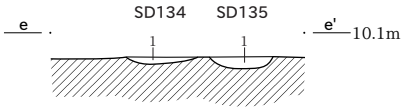
SD126
1　青灰色粘土　炭化物少量含む、灰色粘土多く含む
SD125
1　青灰色粘土　1～2mm炭化物含む、灰色粘土多く含む



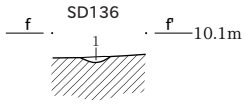
SD127
1　青灰色粘土　1～2mm炭化物含む、灰色粘土小塊多く含む、しまり強
SD128
1　青灰色粘土　炭化物少量含む、灰色粘土小塊多く含む、しまり強
SD129
1　青灰色粘土　炭化物少量含む、灰色粘土小塊多く含む、しまり強



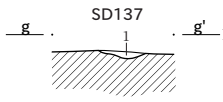
SD130
1　青灰色粘土　炭化物含む、灰色粘土多量混入、しまり強
SD131
1　青灰色粘土　炭化物含む、灰色粘土小塊状に多く混入、しまり強
SD132
1　青灰色粘土　炭化物少量含む、灰色粘土多量混入、しまり強
SD133
1　青灰色粘土　炭化物含む、灰色粘土多く混入、しまり強、
2　青灰色粘土　炭化物含む、灰色粘土塊状に多量混入



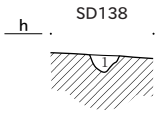
SD134
1　青灰色粘土　炭化物少量含む、灰色粘土多量混入、しまり強
SD135
1　青灰色粘土　炭化物含む、灰色粘土塊状に多く含む



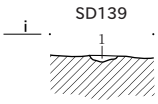
1　青灰色粘土　炭化物を少量含む、灰色粘土塊状多量混入



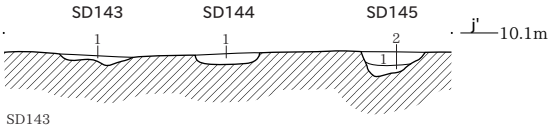
1　青灰色粘土　炭化物含む、灰色粘土塊状に多量混入、しまり強



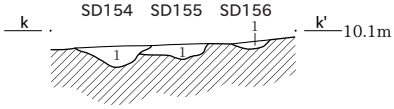
1　青灰色粘土　炭化物少量含む、散在、灰色粘土小塊少量混入



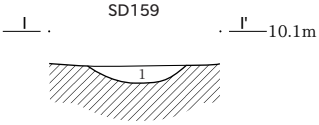
1　青灰色粘土　炭化物少量含む、散在、灰色粘土混入



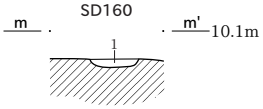
SD143
1　青灰色粘土　炭化物多く含む、灰色粘土塊多く含む
SD144
1　青灰色粘土　炭化物多く含む、灰色粘土塊多く含む
SD145
1　青灰色粘土　炭化物多く含む
2　灰色粘土



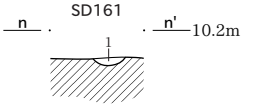
SD154
1　青灰色粘土　炭化物含む　灰色粘土塊多く含む　しまり強
SD155
1　青灰色粘土　炭化物含む、灰色粘土塊多く含む　しまり強
SD156
1　青灰色粘土　炭化物含む　灰色粘土



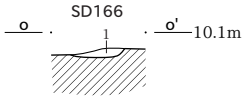
1　青灰色粘土　1～10mm炭粒多く含む、灰色粘土塊多く含む



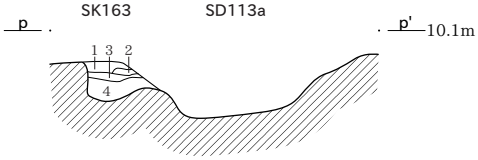
1　青灰色粘土　1～3mm炭粒多量散在、灰色粘土小塊多く含む



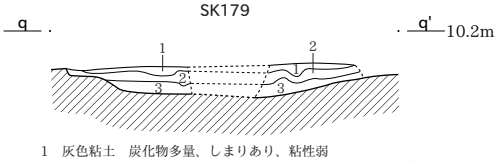
1　青灰色粘土　1～2mm炭粒微量散在、灰色粘土塊多く含む



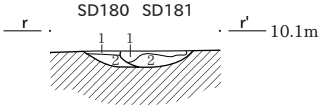
1　青灰色粘土　1～2mm炭化物少量含む、灰色粘土多く含む



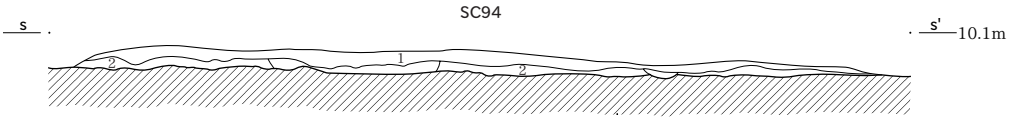
1　青灰色粘土　炭化物多く含む、灰色粘土小塊含む、しまり強、粘性強
2　灰色粘土　炭化物多く含む、青灰色粘土わずかに含む、しまりあり、粘性強
3　青灰色粘土　炭化物少量含む、灰色粘土小塊まばらに含む、しまりあり、粘性強
4　青灰色粘土　炭化物多く含む、灰色粘土小塊多く含む、しまりやや弱、粘性あり



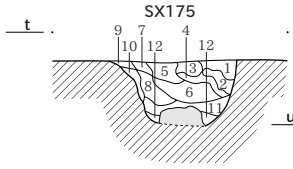
1　灰色粘土　炭化物多量、しまりあり、粘性弱
2　灰色土　炭化物多く含む、灰色砂（灰か？）多く混入、灰色粘土少量混入、しまりあり、粘性弱
3　青灰色粘土　炭化物多く含む、灰色粘土塊多く含む、しまりあり、粘性強

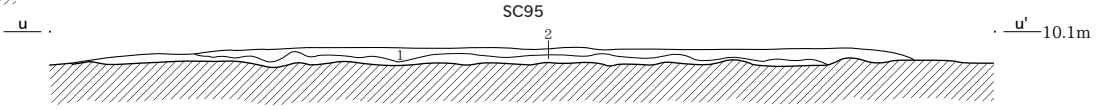


SD180、181
1　青灰色粘土　炭化物を含む、灰色粘土塊状に多く混入
2　灰色粘土　炭化物含む



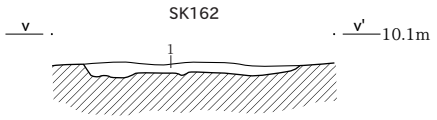
1　青灰色粘土　炭化物多く含む、灰色粘土塊状に多量混入、しまりやや弱、粘性やや弱
2　灰色粘土　炭化物少量含む、青灰色粘土小塊状に混入



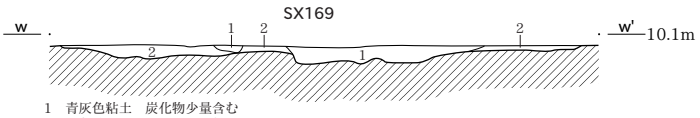


1　黒褐色土
2　灰色粘土　　8　灰色粘土
3　黒褐色土　　9　灰色粘土
4　黒褐色土　10　灰色粘土
5　黒褐色土　11　灰色粘土
6　黒褐色土　12　灰色粘土
7　黒褐色土　1～12層腐植物多く含む

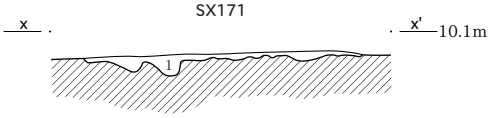
1　暗灰色土　炭化物多く含む、灰色粘土塊状に多く含む、しまりあり
2　灰色粘土　炭化物含む、しまりあり、粘性強



1　青灰色粘土　炭化物多く含む、灰色粘土小塊状に多く混入

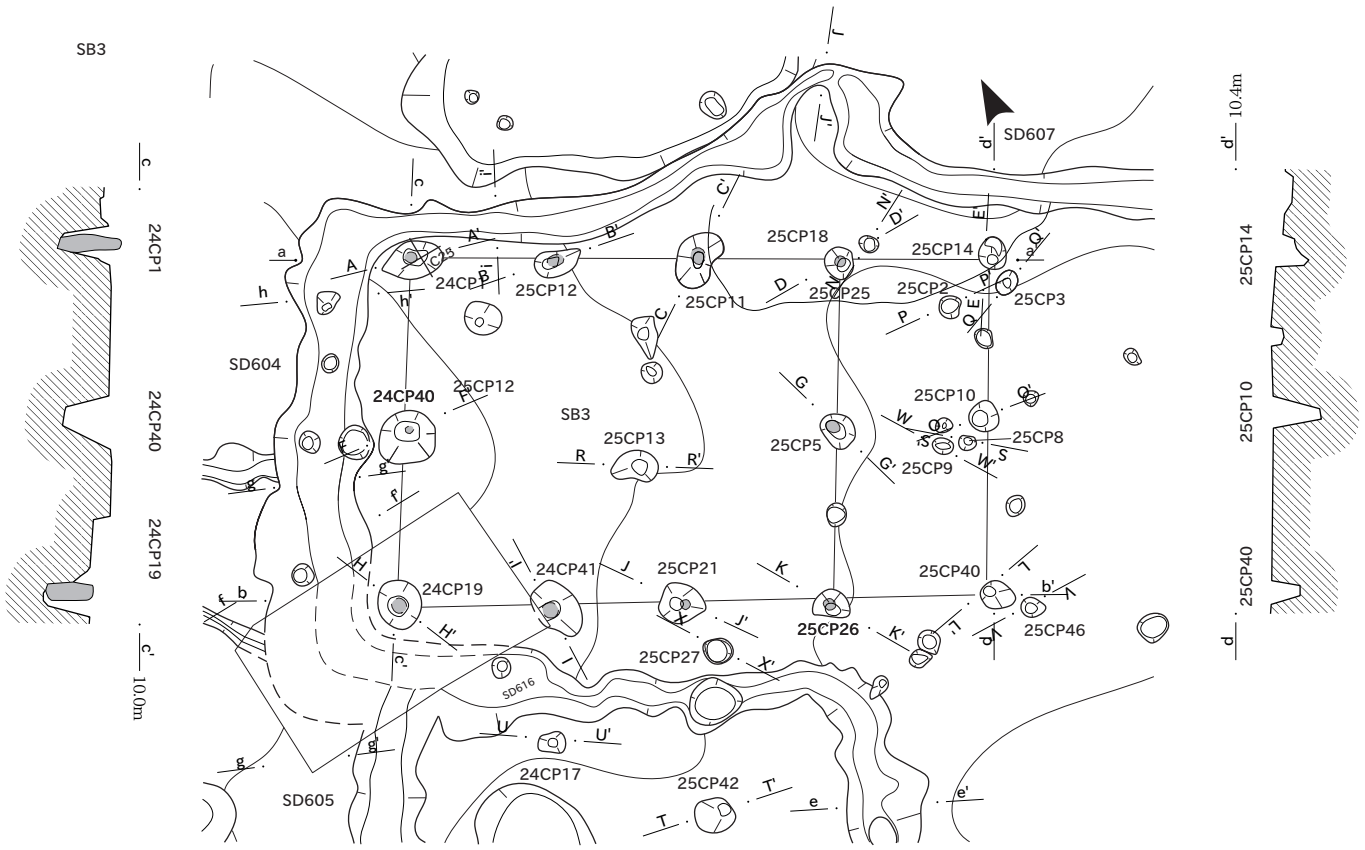


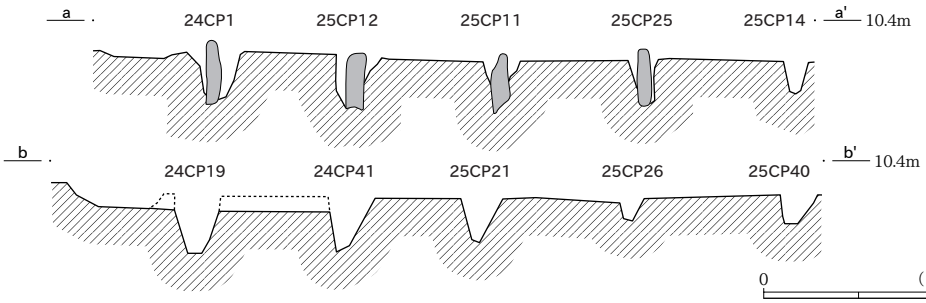
1　青灰色粘土　炭化物少量含む
2　灰色粘土　1層よりやや暗い

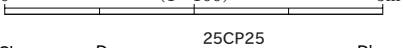


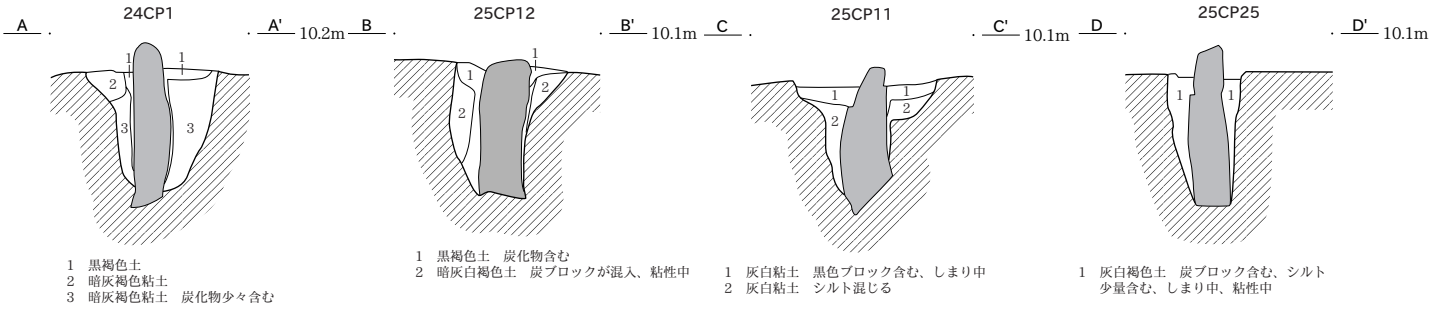
1　青灰色粘土　炭化物多く含む、灰色粘土塊状に多量混入、しまり強

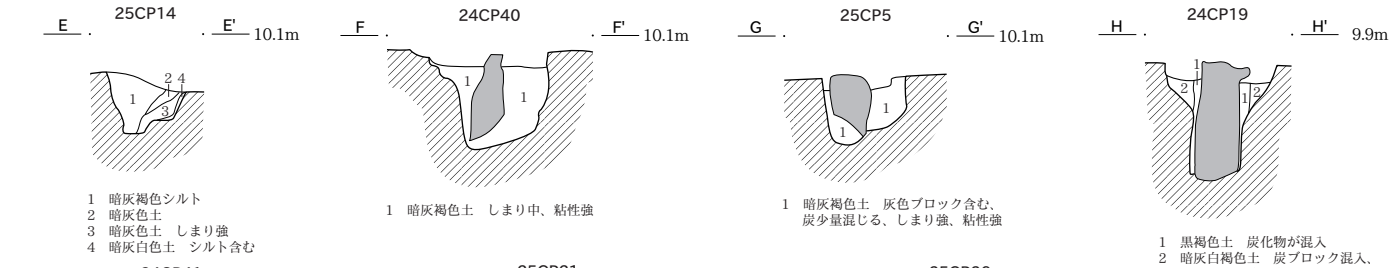
0　（1：40）　2m

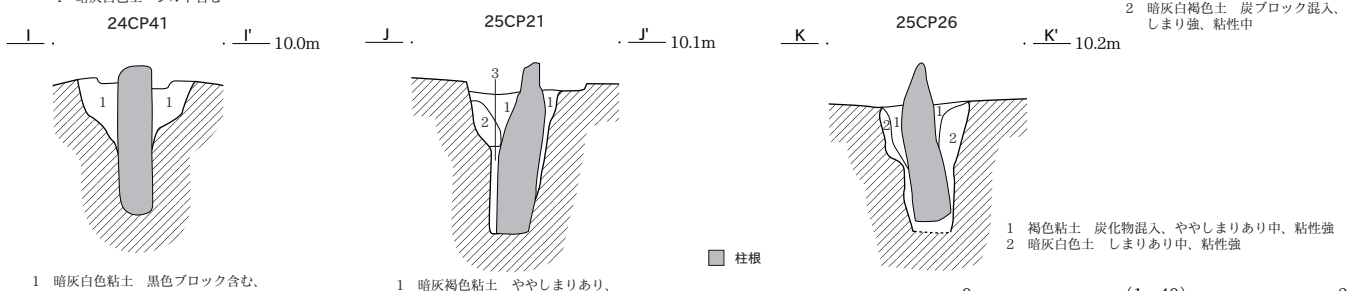

SB3
SD607
SD604
SD605
SD616
24CP1
24CP40
24CP19
24CP12
24CP11
24CP18
24CP14
25CP25
25CP2
25CP3
24CP41
25CP21
25CP26
25CP40
25CP46
25CP27
24CP17
25CP42
25CP13
25CP5
25CP10
25CP8
25CP9
10.4m
10.0m

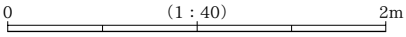

a
24CP1
25CP12
25CP11
25CP25
25CP14
a'
10.4m
b
24CP19
24CP41
25CP21
25CP26
25CP40
b'
10.4m


0
(1 : 100)
5m

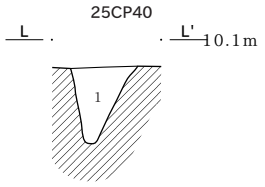

A
24CP1
A'
10.2m
1 黒褐色土
2 暗灰褐色粘土
3 暗灰褐色粘土　炭化物少々含む
B
25CP12
B'
10.1m
1 黒褐色土　炭化物含む
2 暗灰白褐色土　炭ブロックが混入、粘性中
C
25CP11
C'
10.1m
1 灰白粘土　黒色ブロック含む、しまり中
2 灰白粘土　シルト混じる
D
25CP25
D'
10.1m
1 灰白褐色土　炭ブロック含む、シルト
少量含む、しまり中、粘性中


E
25CP14
E'
10.1m
1 暗灰褐色シルト
2 暗灰色土
3 暗灰色土　しまり強
4 暗灰白色土　シルト含む
F
24CP40
F'
10.1m
1 暗灰褐色土　しまり中、粘性強
G
25CP5
G'
10.1m
1 暗灰褐色土　灰色ブロック含む、
炭少量混じる、しまり強、粘性強
H
24CP19
H'
9.9m
1 黒褐色土　炭化物が混入
2 暗灰白褐色土　炭ブロック混入、
しまり強、粘性中


I
24CP41
I'
10.0m
1 暗灰白色粘土　黒色ブロック含む、
しまり強、粘性中
J
25CP21
J'
10.1m
1 暗灰褐色粘土　ややしまりあり、
白色ブロック含む
柱根
K
25CP26
K'
10.2m
1 褐色粘土　炭化物混入、ややしまりあり中、粘性強
2 暗灰白色土　しまりあり中、粘性強

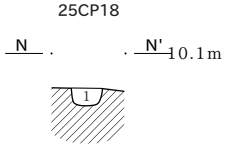

0
(1 : 40)
2m

25CP40



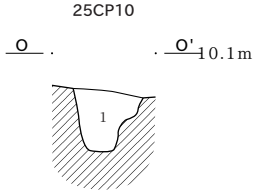
1　灰色粘土　しまり中

25CP18



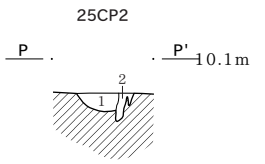
1　暗灰白色粘土
　しまりややあり

25CP10



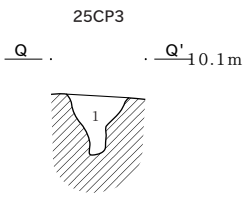
1　暗灰色粘土　炭化物やや多く
　含む、粘性あり、しまりあり

25CP2



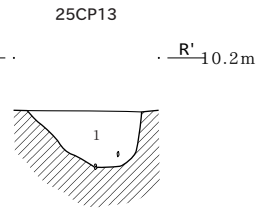
1　暗灰色粘土　しまり中
2　黒灰色土

25CP3



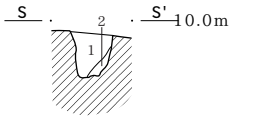
1　暗灰色シルト　ややしまりあり

25CP13



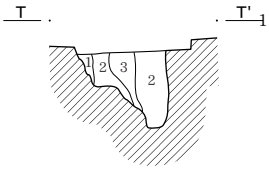
1　暗灰色粘土　炭化物やや多く含む、
　しまりあり、粘性あり

25CP8



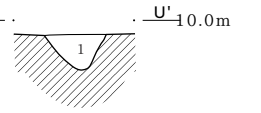
1　黒褐色粘土　炭ブロック含む
2　暗灰褐色土　粘性弱、しまり中

25CP42



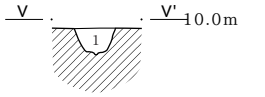
1　灰色粘土　しまり中
2　灰褐色粘土　しまり中
3　暗灰褐色土　炭化物少量含む、しまり中

24CP17



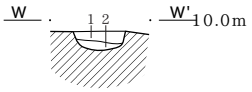
1　暗灰褐色土　しまりあり、粘性あり

25CP46



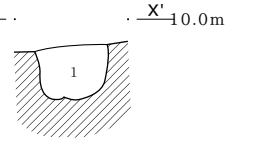
1　暗灰褐色粘土

25CP9



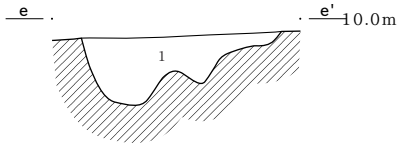
1　黒褐色粘土　炭ブロック含む
2　暗灰褐色土　粘性弱、しまり中

25CP27



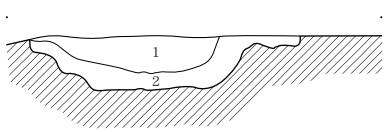
1　暗灰白褐色土　しまり中

SD604



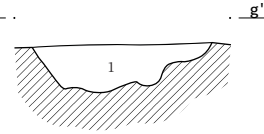
1　暗灰褐色粘土　しまり中

SD604



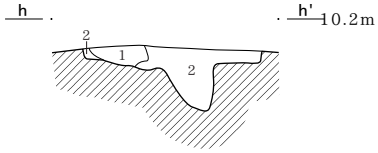
1　灰褐色土　しまりあり、粘性あり
2　暗灰褐色土　炭化物少量含む、ややしまりあり、

SD604



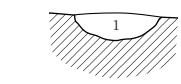
1　暗灰褐色粘土　炭化物少量含む、ややしまりあり

SD604



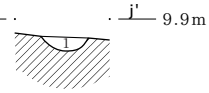
1　灰褐色土　しまりあり、粘性あり
2　暗灰褐色土　炭化物少量含む、ややしまりあり、

SD604

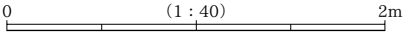


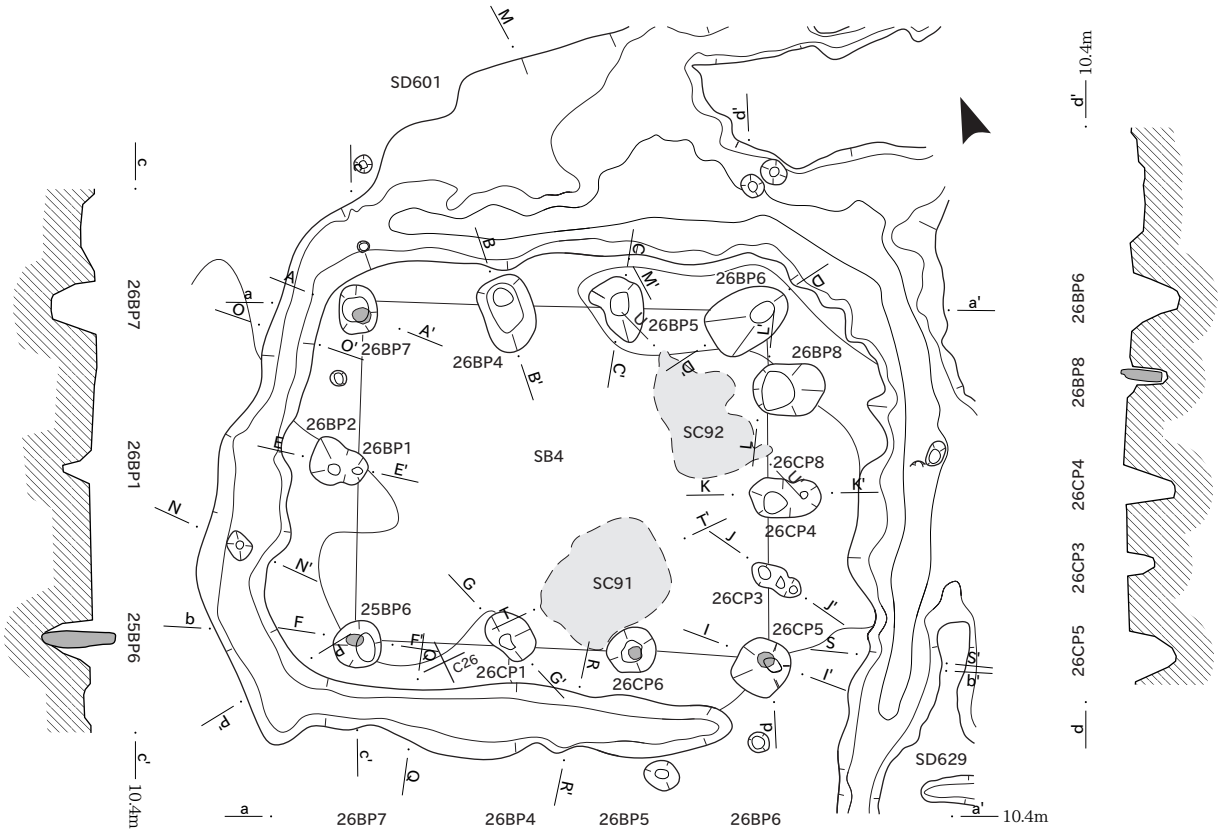
1　灰色粘土　炭化物少量含む、しまり中

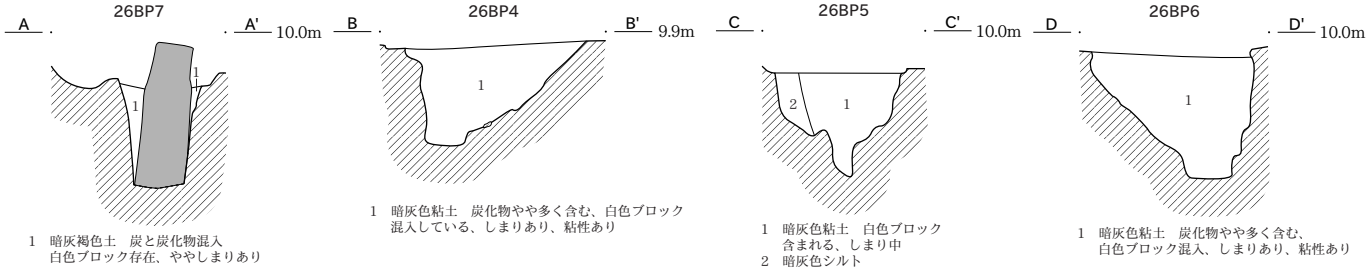
SD604

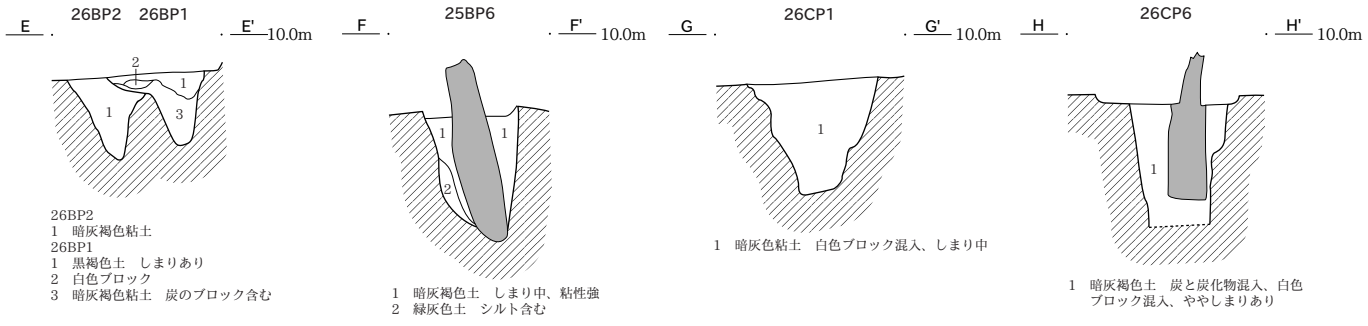


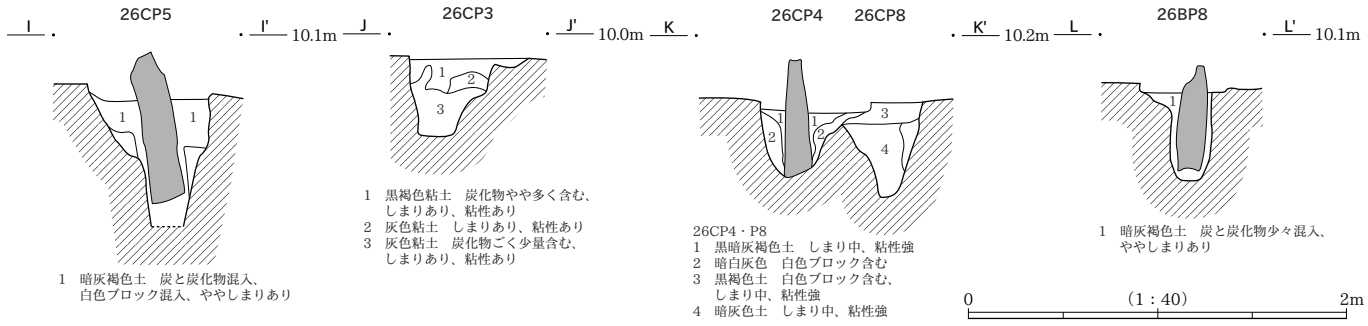
1　灰色粘土　しまり中



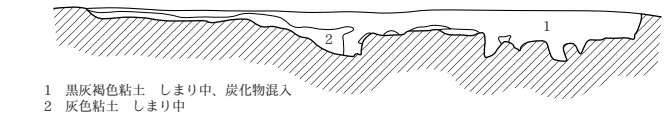

SD601
SB4
SC92
SC91
SD629
26BP1
26BP2
26BP4
26BP5
26BP6
26BP7
26BP8
25BP6
26CP1
26CP3
26CP4
26CP5
26CP6
26CP8
10.4m
柱根
炭化物集中範囲
0　(1：100)　5m


A　26BP7　A' 10.0m
1 暗灰褐色土　炭と炭化物混入
白色ブロック存在、ややしまりあり
B　26BP4　B' 9.9m
1 暗灰色粘土　炭化物やや多く含む、白色ブロック
混入している、しまりあり、粘性あり
C　26BP5　C' 10.0m
1 暗灰色粘土　白色ブロック
含まれる、しまり中
2 暗灰色シルト
D　26BP6　D' 10.0m
1 暗灰色粘土　炭化物やや多く含む、
白色ブロック混入、しまりあり、粘性あり


E　26BP2　26BP1　E' 10.0m
26BP2
1 暗灰褐色粘土
26BP1
1 黒褐色土　しまりあり
2 白色ブロック
3 暗灰褐色粘土　炭のブロック含む
F　25BP6　F' 10.0m
1 暗灰褐色土　しまり中、粘性強
2 緑灰色土　シルト含む
G　26CP1　G' 10.0m
1 暗灰色粘土　白色ブロック混入、しまり中
H　26CP6　H' 10.0m
1 暗灰褐色土　炭と炭化物混入、白色
ブロック混入、ややしまりあり

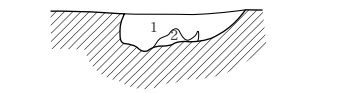

I　26CP5　I' 10.1m
1 暗灰褐色土　炭と炭化物混入、
白色ブロック混入、ややしまりあり
J　26CP3　J' 10.0m
1 黒褐色粘土　炭化物やや多く含む、
しまりあり、粘性あり
2 灰色粘土　しまりあり、粘性あり
3 灰色粘土　炭化物ごく少量含む、
しまりあり、粘性あり
K　26CP4　26CP8　K' 10.2m
26CP4・P8
1 黒暗灰褐色土　しまり中、粘性強
2 暗白灰色　白色ブロック含む
3 黒褐色土　白色ブロック含む、
しまり中、粘性強
4 暗灰色土　しまり中、粘性強
L　26BP8　L' 10.1m
1 暗灰褐色土　炭と炭化物少々混入、
ややしまりあり
0　(1：40)　2m

SD601



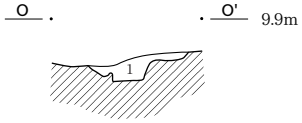
1　黒灰褐色粘土　しまり中、炭化物混入
2　灰色粘土　しまり中

SD601



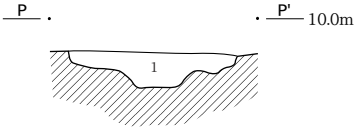
1　灰色粘土　しまり中、炭化物少々含む
2　灰色シルト

SD601



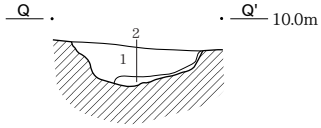
1　青灰色粘土　やや暗い

SD601



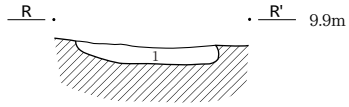
1　灰色粘土　しまり中

SD601



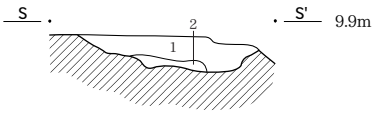
1　灰色粘土　しまり中
2　灰色シルト

SD601



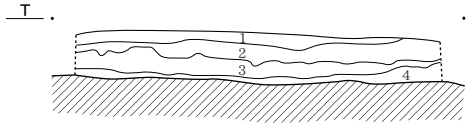
1　灰色粘土　しまり中

SD601



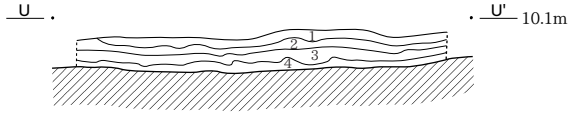
1　暗灰褐色粘土　しまり中、炭化物少量混入する
2　灰色粘土

SC91

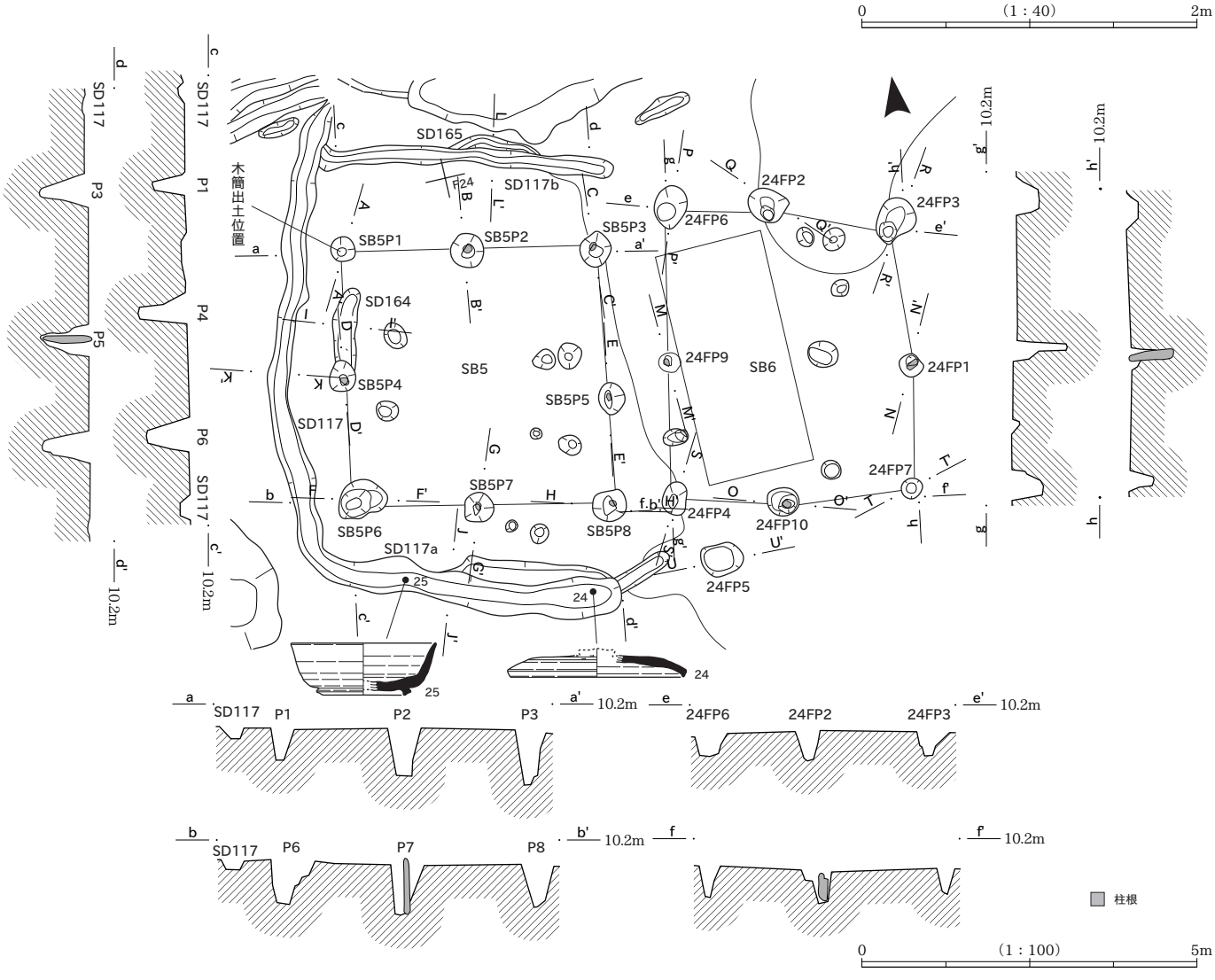


1　土器の含まれる黒色土　炭の集中する層
2　炭のブロックが含まれる灰白色粘土
3　黒灰白色粘土
4　灰白色土　しまり中

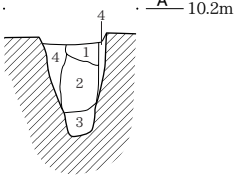
SC92



1　土器の含まれる黒色土　炭の集中する層
2　炭のブロックが含まれる灰白色粘土
3　黒灰白色粘土
4　灰白色土　しまり中

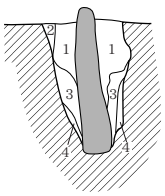


SB5P1



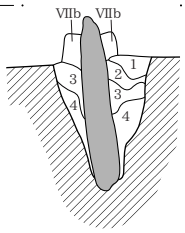
1　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量
2　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量
3　青灰色粘土　炭化物少量、
4　青灰色粘土　灰色粘土多量、灰色砂多量

SB5P2



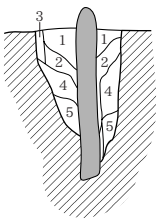
1　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量
2　灰色粘土　炭化物少量、灰色砂多量
3　灰色細砂粒　青灰色粘土多量
4　灰色細砂粒　青灰色粘土少量

SB5P3



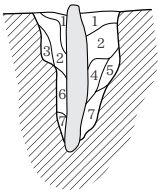
1　青灰色粘土　炭化物極少量、灰色粘土少量混入、灰色砂多量
2　灰色砂　炭化物極少量、青灰色粘土多量
3　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土少量、灰色砂多量
4　灰色砂　青灰粘土少量

SB5P4



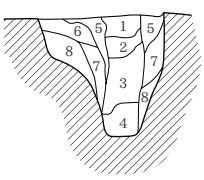
1　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量、灰色砂多量
2　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量、灰色砂多く含む
3　青灰色粘土　灰色粘土多量
4　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量、灰色砂含む
5　青灰色粘土　灰色粘土少量、灰色砂多量

SB5P5



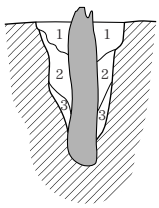
1　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量、灰色砂多量
2　青灰色粘土　炭化物少量、灰色砂多量、灰色粘土多量
3　青灰色粘土　灰色砂多量、灰色粘土多量
4　灰色粘土　灰色砂多量、青灰色粘土多量
5　灰色粘土　青灰色粘土塊状に少量、灰色砂多量
6　灰色粘土　灰色砂多量、青灰色粘土多量
7　暗灰色粘土　腐植物少量

SB5P6



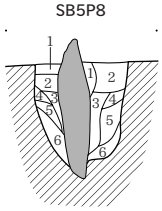
1　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量、しまりあり、粘性強
2　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量、しまりあり、粘性強
3　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土少量、しまりあり、粘性強
4　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量
5　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量、しまりあり、粘性強
6　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量、しまりあり、粘性強
7　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量、しまりあり、粘性強
8　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量、灰色砂多量

SB5P7



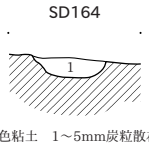
1　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量、灰色砂少量
2　灰色砂　炭化物極少量、青灰色粘土塊状に少量
3　灰色粘土　炭化物極少量、灰色砂多量

SB5P8



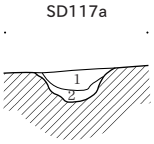
1　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量、灰色砂少量
2　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量、灰色砂少量
3　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量
4　灰色粘土　灰色砂多量、灰色粘土少量、しまりあり、粘性弱
5　灰色細砂粒　青灰色粘土少量、しまりあり、粘性弱
6　灰色粘土　灰色砂多量、青灰色粘土多量、しまりあり、粘性弱

SD164



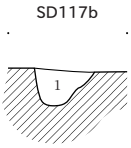
1　青灰色粘土　1～5mm炭粒散在、灰色粘土少量

SD117a



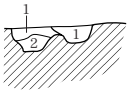
1　青灰色粘土　1～10mm炭粒散在、灰色粘土多量

SD117b



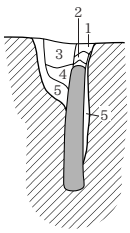
1　青灰色粘土　1～10mm炭粒散在、灰色粘土小塊状に多く混入

SD165 SD117



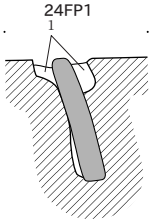
SD117
1　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量
SD165
1　青灰色粘土　炭化物含む
2　灰色粘土

24FP9



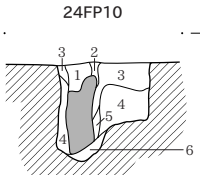
1　灰色砂、青灰色粘土多量
2　灰色砂、青灰色粘土多量
3　灰色砂、炭化物少量、青灰色粘土少量
4　灰色粘土　暗褐色（腐植土）少量、青灰色粘土・灰色砂少量
5　灰色粘土　灰色砂多量、炭化物少量、青灰色粘土多量

24FP1



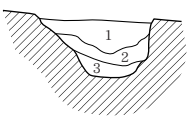
1　灰色粘土　灰色砂多量、青灰色粘土多量

24FP10



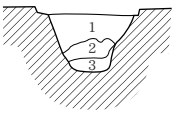
1　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量
2　灰色粘土　灰色砂多く含む、青灰色粘土少量
3　灰色粘土　炭化物少量、灰色砂多量、青灰色粘土少量
4　灰色粘土　炭化物少量
5　灰色粘土　灰色砂多量
6　灰色砂　灰色粘土少量

24FP6



1　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量、灰色砂多量
2　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量
3　青灰色粘土　炭化物極少量、灰色粘土多量

24FP2

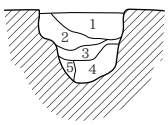


1　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量、しまりあり、粘性強
2　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土少量、しまりあり、粘性強
3　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土、灰色砂少量、しまりあり、粘性強

24FP3

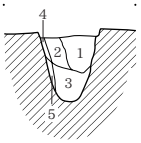
1　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量、しまりあり、粘性強
2　青灰色粘土　炭化物極少量、灰色粘土・灰色砂少量、しまりあり、粘性強
3　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土に少量、しまりあり、粘性強
4　青灰色粘土　炭化物極少量、灰色粘土少量、しまりあり、粘性強
5　灰色砂、青灰色粘土少量、しまりあり、粘性弱
6　青灰色粘土　炭化物極少量、しまりあり、粘性強
7　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量、しまりあり、粘性強

24FP4



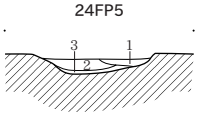
1　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量、灰色砂多量
2　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量、灰色砂多量
3　青灰色粘土　炭化物微量、灰色粘土多量
4　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土少量
5　青灰色粘土　炭化物極少量、灰色粘土多量

24FP7



1　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量、しまりあり、粘性強
2　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量、灰色砂多量
3　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量
4　灰色砂　青灰色粘土塊状に少量、灰色粘土少量
5　青灰色粘土　灰色粘土・灰色砂少量

24FP5

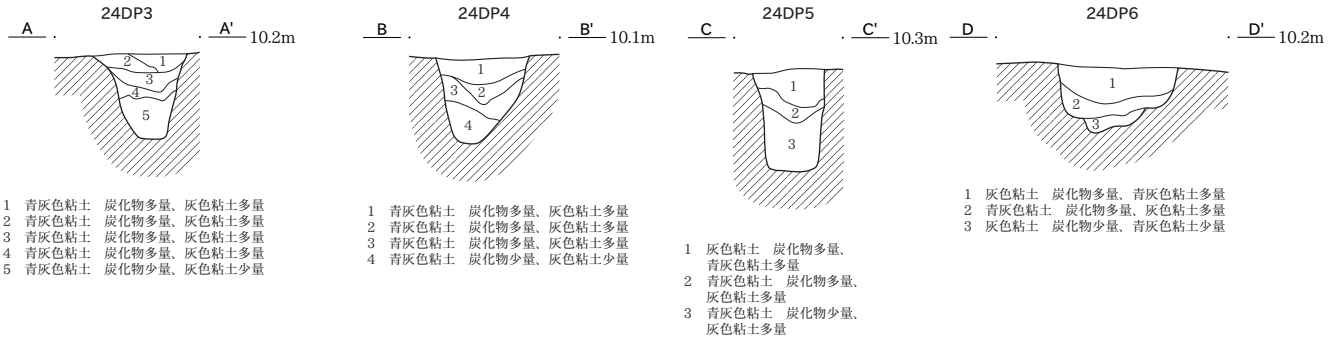


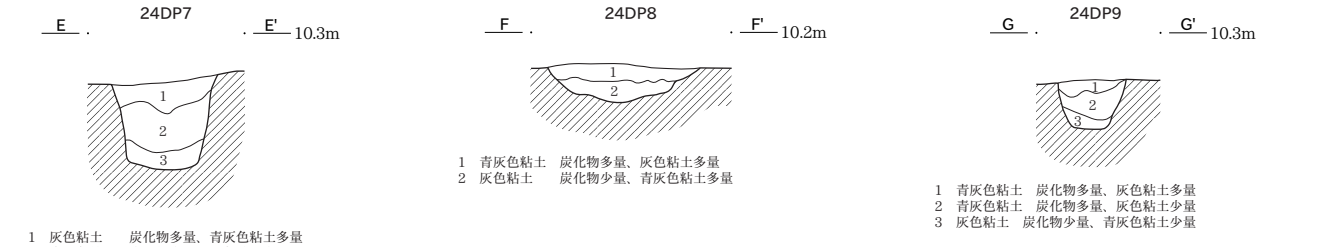
1　黒褐色土　炭化物多量、灰色粘土多量
2　暗褐色土　炭化物多量
3　青灰色粘土　炭化物多量、灰色砂多量

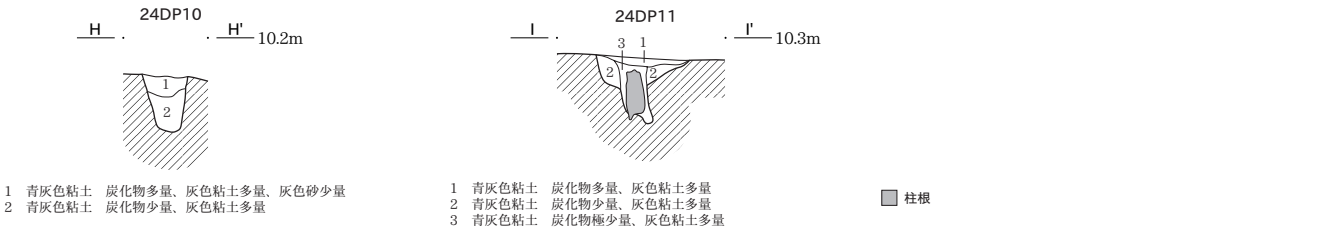
柱根

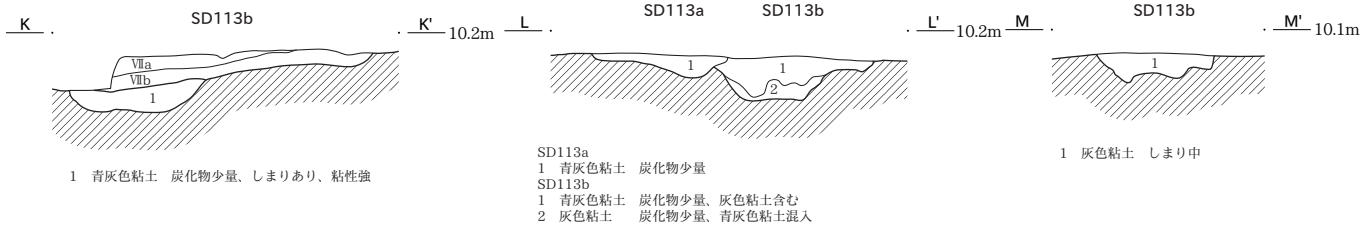
0　（1：40）　2m

SD113b
SK196
24DP8
24DP6
24DP4
24DP7
24DP11
24DP3
24DP9
24DP5
SD141
SD142
SC49
24DP12
24DP13
24DP10
SD172
SD170
SK168
24DP2
SD113a
SD113b
SC119
D25
D24
土器炭化物集中遺構
SD170上面炭化物範囲
0　(1：100)　5m


A　24DP3　A'　10.2m
1　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量
2　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量
3　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量
4　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量
5　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土少量
B　24DP4　B'　10.1m
1　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量
2　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量
3　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量
4　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土少量
C　24DP5　C'　10.3m
1　灰色粘土　炭化物多量、青灰色粘土多量
2　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量
3　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量
D　24DP6　D'　10.2m
1　灰色粘土　炭化物多量、青灰色粘土多量
2　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量
3　灰色粘土　炭化物少量、青灰色粘土少量


E　24DP7　E'　10.3m
1　灰色粘土　炭化物多量、青灰色粘土多量
2　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量
3　灰色粘土　炭化物少量、青灰色粘土少量
F　24DP8　F'　10.2m
1　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量
2　灰色粘土　炭化物少量、青灰色粘土多量
G　24DP9　G'　10.3m
1　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量
2　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土少量
3　灰色粘土　炭化物少量、青灰色粘土少量

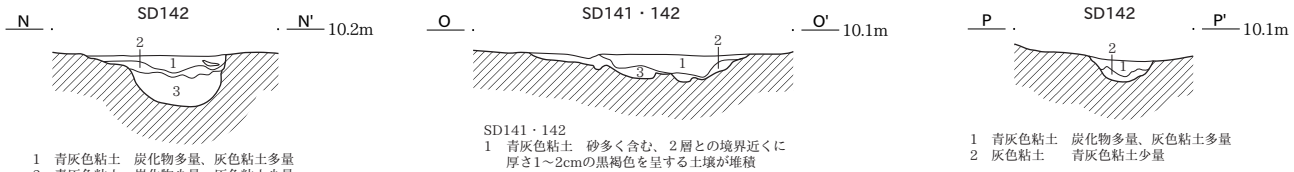

H　24DP10　H'　10.2m
1　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量、灰色砂少量
2　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量
I　24DP11　I'　10.3m
1　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量
2　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量
3　青灰色粘土　炭化物極少量、灰色粘土多量
柱根
0　(1：40)　2m



1　青灰色粘土　炭化物少量、しまりあり、粘性強

SD113a
1　青灰色粘土　炭化物少量
SD113b
1　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土含む
2　灰色粘土　　炭化物少量、青灰色粘土混入

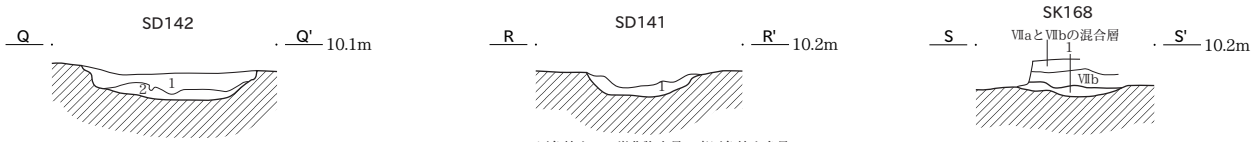
1　灰色粘土　しまり中



1　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量
2　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土少量
3　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量

SD141・142
1　青灰色粘土　砂多く含む、2層との境界近くに
　厚さ1～2cmの黒褐色を呈する土壌が堆積
SD142
2　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土少量、1層より炭粒
　明らかに少ない
3　青灰色粘土　灰色粘土多量

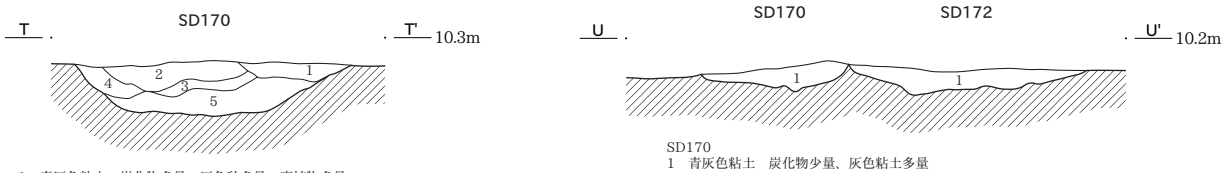
1　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量
2　灰色粘土　　青灰色粘土少量



1　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量
2　灰色粘土　　炭化物少量、青灰色粘土少量

1　灰色粘土　　炭化物少量、青灰色粘土多量

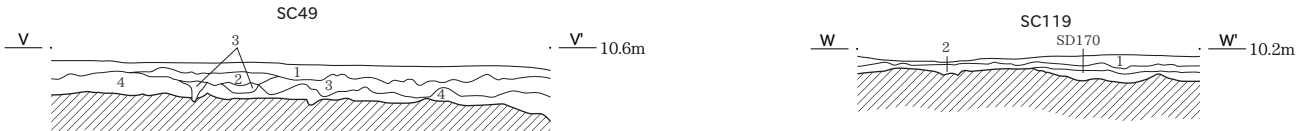
1　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量



1　青灰色粘土　炭化物多量、灰色砂多量、腐植物多量
2　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量
3　灰色粘土　　砂少量、青灰色粘土少量
4　青灰色粘土　砂多量、灰色粘土多量
5　青灰色粘土　砂、炭化物多量、灰色粘土多量

SD170
1　青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量
SD172
1　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土多量

0　（1：40）　2m



1　青灰色粘土　灰色粘土多量、炭化物多量
2　青灰色粘土　灰色粘土多量、灰色砂多量
3　青灰色粘土　灰色粘土多量、灰色砂多量、炭化物・砂粒多量
4　青灰色粘土　灰色粘土多量

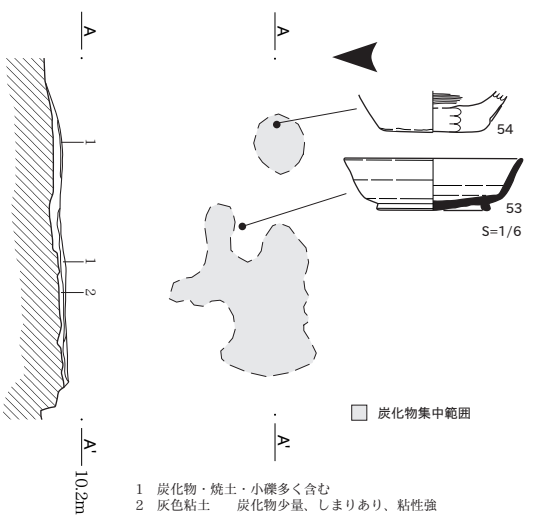
1　青灰色粘土　砂多く含む、灰色砂多量
2　青灰色粘土　砂多く含む、灰色粘土多量

0　（1：60）　3m

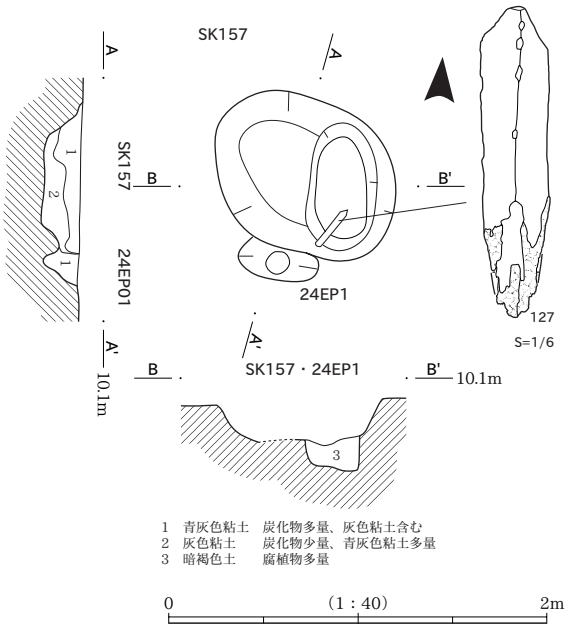
SC90

出土小礫重量別集計表

	個数	総重(g)
0.01未満	0	0
0.01以上0.02未満	223	2.23
0.02以上0.03未満	390	7.8
0.03以上0.04未満	166	4.98
0.04以上0.05未満	129	5.16
0.05以上0.06未満	83	4.15
0.06以上0.07未満	61	3.66
0.07以上0.08未満	62	4.34
0.08以上0.09未満	45	3.6
0.09以上0.1未満	35	3.15
0.1以上0.2未満	250	33.83
0.2以上0.3未満	137	32.83
0.3以上0.4未満	90	30.88
0.4以上0.5未満	41	18.24
0.5以上0.6未満	19	10.13
0.6以上0.7未満	15	9.53
0.7以上0.8未満	15	11.29
0.8以上0.9未満	9	7.7
0.9以上1.0未満	6	5.64
1.0以上1.1未満	36	50.04
2.0以上3.0未満	11	24.75
3.0以上5.0未満	3	11.8
5.0以上	5	44.13
	1831	329.95

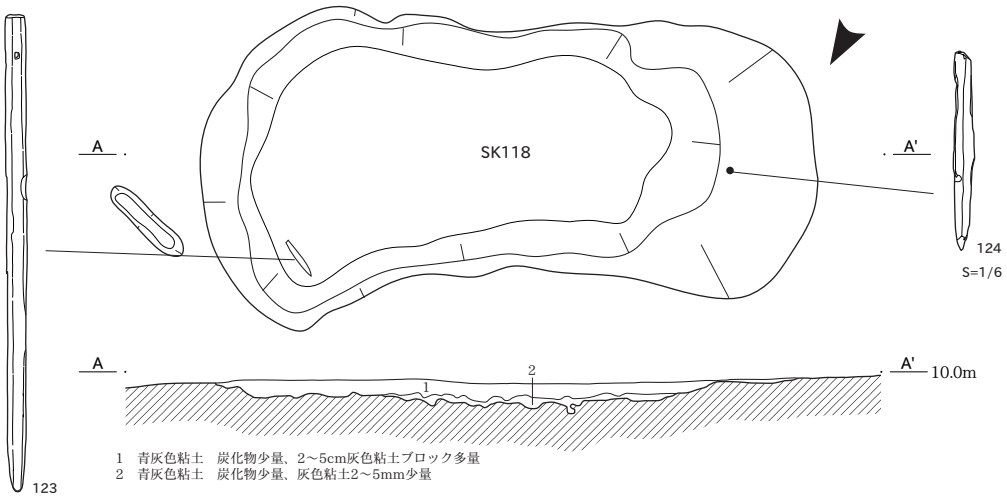


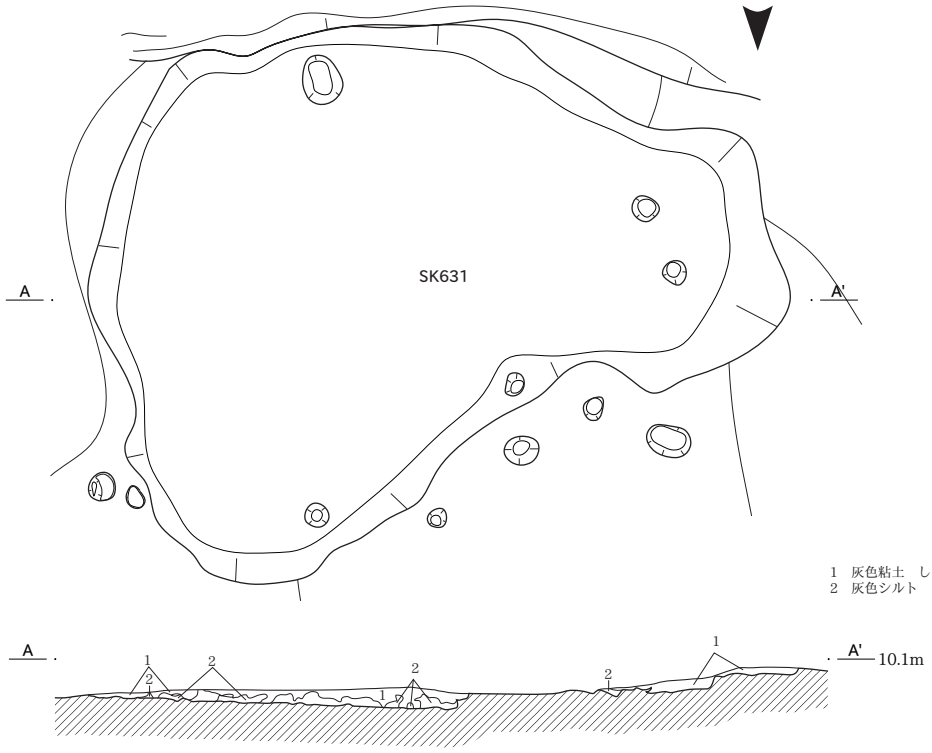
1　炭化物・焼土・小礫多く含む
2　灰色粘土　　炭化物少量、しまりあり、粘性強

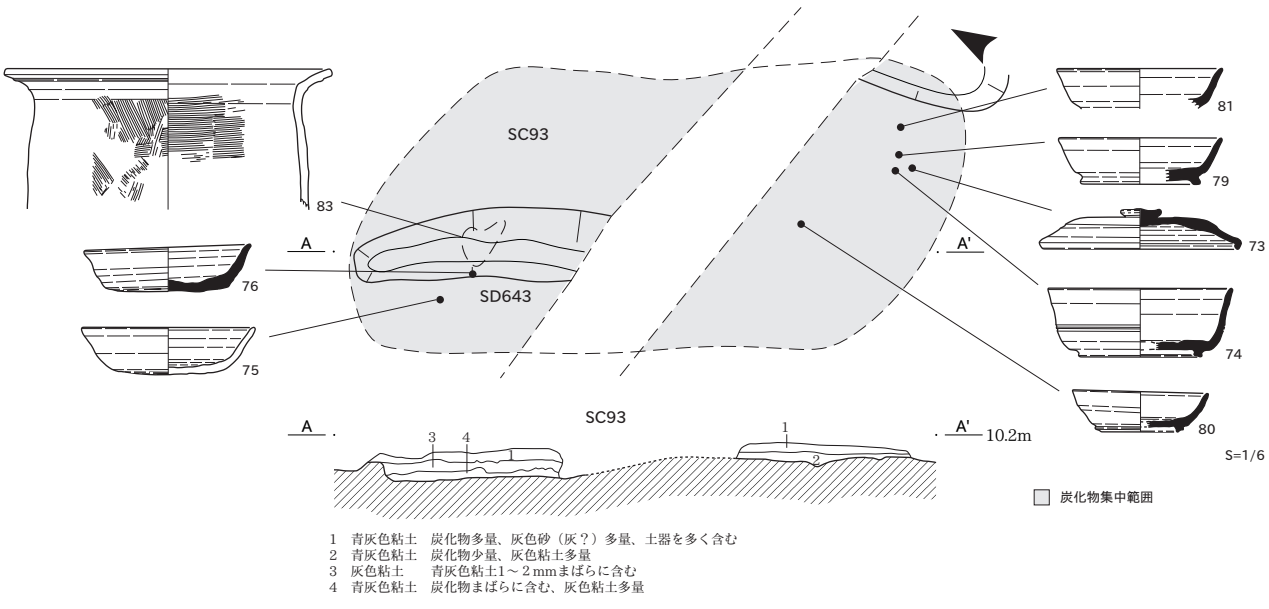


1　青灰色粘土　炭化物多量、灰色粘土含む
2　灰色粘土　　炭化物少量、青灰色粘土多量
3　暗褐色土　　腐植物多量

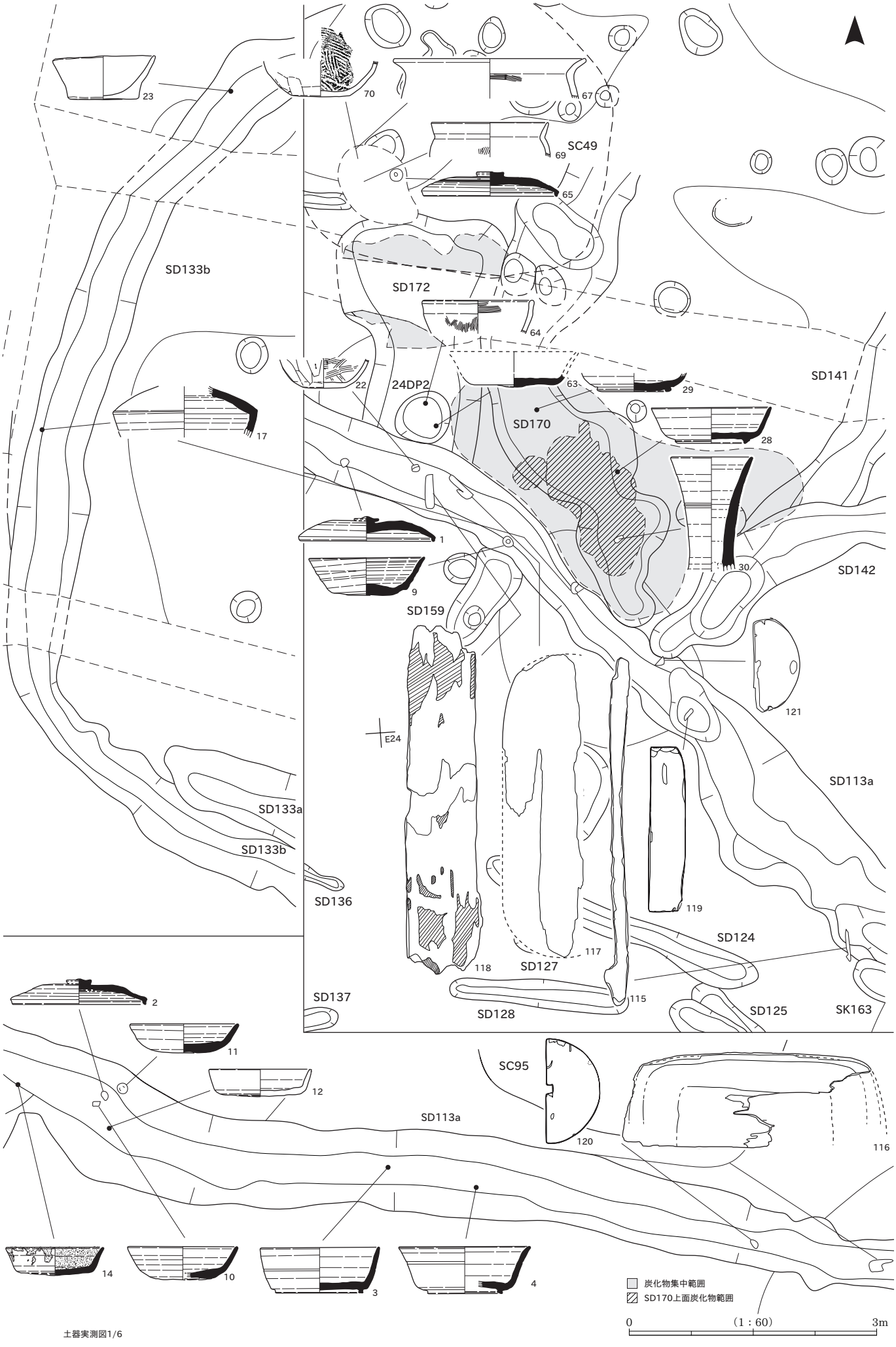
0　（1：40）　2m


SK118
A
A'
123
124
S=1/6
10.0m
1 青灰色粘土　炭化物少量、2～5cm灰色粘土ブロック多量
2 青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土2～5mm少量


SK631
A
A'
10.1m
1 灰色粘土　しまり中
2 灰色シルト


SC93
SD643
83
76
75
81
79
73
74
80
A
A'
10.2m
S=1/6
炭化物集中範囲
1 青灰色粘土　炭化物多量、灰色砂（灰？）多量、土器を多く含む
2 青灰色粘土　炭化物少量、灰色粘土多量
3 灰色粘土　青灰色粘土1～2mmまばらに含む
4 青灰色粘土　炭化物まばらに含む、灰色粘土多量

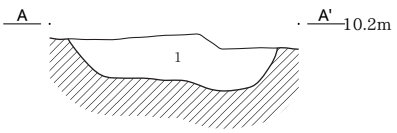
0　（1：60）　3m


SC49
SD133b
SD172
SD141
SD170
24DP2
SD142
SD159
SD113a
SD133a
SD133b
SD136
SD124
SD127
SD137
SD128
SD125
SK163
SC95
E24
炭化物集中範囲
SD170上面炭化物範囲
0
(1：60)
3m

土器実測図1/6

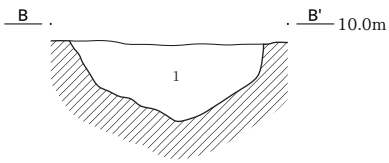
A2
A4
B2
B3
B4
C2
C3
C4
D2
D3
D4
E2
E3
E4
F2
F3
F4
9.80
9.90
10.00
SD81
SD82
SD147
SD146
SD60
SK189
SD188
SX64
SX65
SX710
SX75
SD86
SD85
SX66
SX76
SD61
SD87
SD58
SD62
SD89
SD63
SD182
0
(1：200)
10m

SK189



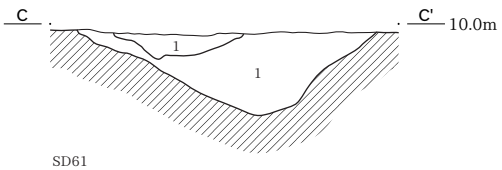
1　褐色粘土　しまり中、粘性中、砂質含む

SD58



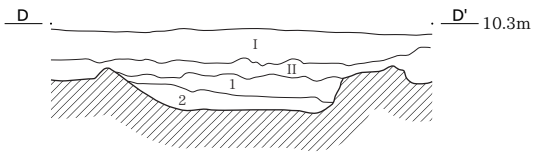
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中

SD61　SD58



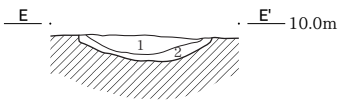
SD61
1　明灰色粘土　しまりやや強、粘性やや弱
SD58
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中

SD60



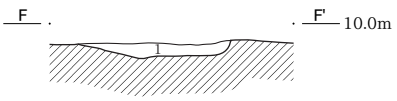
1　明灰色粘土　鉄分沈着、しまり中
2　明灰色粘土　しまりやや弱、シルト砂混じる、鉄分沈着

SD61



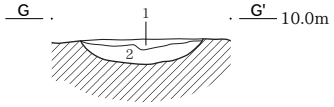
1　明灰色粘土　しまりやや強、粘性やや弱
2　明灰色粘土　しまりやや弱、砂質シルト含む

SD62



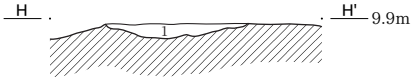
1　明灰色粘土　しまり中、鉄分沈着

SD63



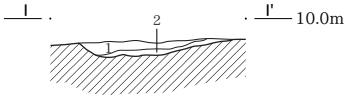
1　明灰色粘土　しまり中、鉄分沈着
2　明灰色粘土　しまりやや弱い、砂質シルト含む、鉄分沈着

SD81



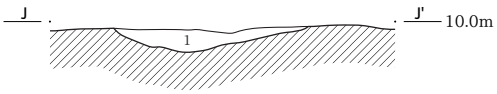
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中

SD82



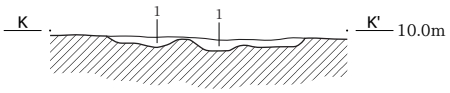
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性やや弱
2　明灰色粘土　しまり中、粘性中

SD85



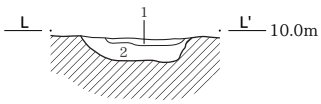
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中

SD86



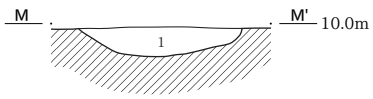
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中

SD87



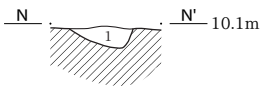
1　褐色シルト　しまり中、粘性やや弱
2　褐色シルト　しまり中、粘性弱

SD182



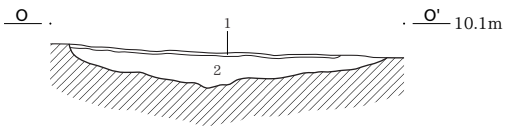
1　褐色シルト　しまり中、粘性弱、砂分多い、鉄分沈着

SD188



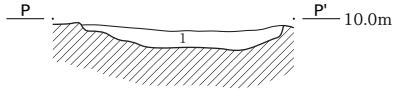
1　褐色シルト　しまりやや強、粘性中

SX65



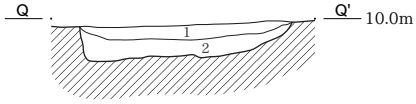
1　明灰色粘土　しまり中、鉄分沈着
2　明灰色粘土　しまりやや弱、シルト砂混じる、鉄分沈着

SX75



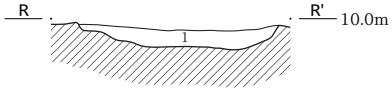
1　褐色シルト　しまり中、粘性やや弱

SX76

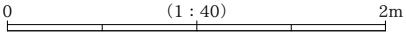


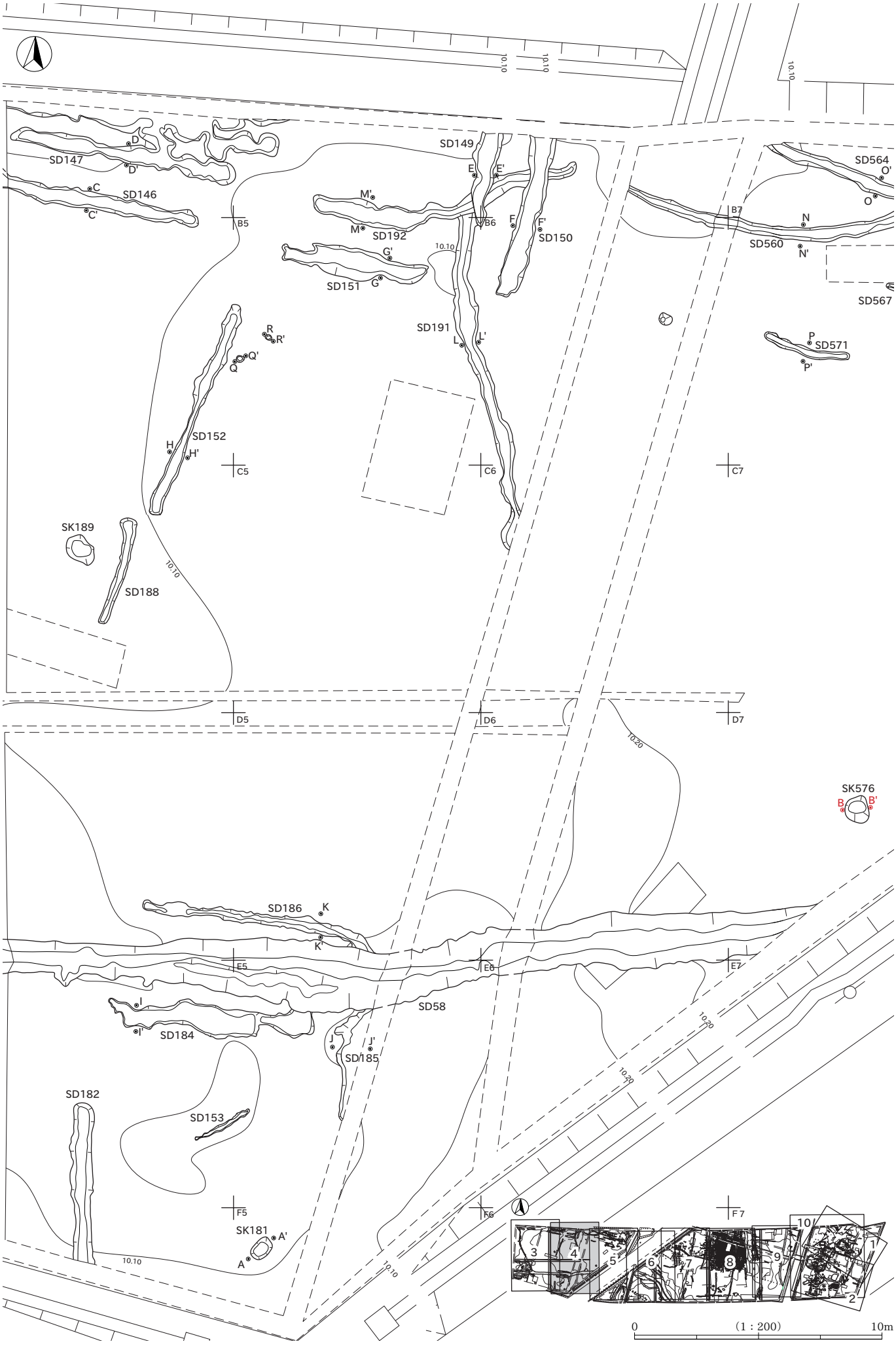
1　褐色シルト　しまり中、粘性やや弱
2　褐色シルト　しまり中、粘性弱

SX710

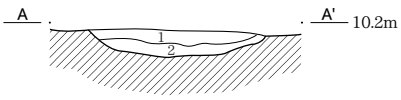


1　褐色シルト　しまり中、粘性やや弱



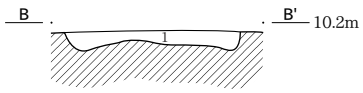

SD147
SD146
SD149
SD564
SD192
SD150
SD560
SD567
SD151
SD191
SD571
SD152
SK189
SD188
SK576
SD186
SD58
SD184
SD185
SD182
SD153
SK181
B5
B6
B7
C5
C6
C7
D5
D6
D7
E5
E6
E7
F5
F6
F7
10.10
10.20
0
(1 : 200)
10m

SK181



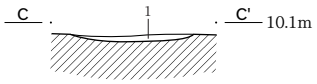
1　暗褐色シルト　しまり中、粘性中、鉄分沈着
2　暗褐色シルト　しまり中、粘性中、炭化物多い

SK576



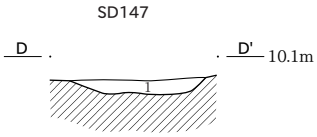
1　褐色砂質シルト　しまりやや強、粘性弱

SD146



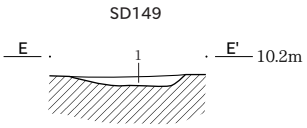
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中

SD147



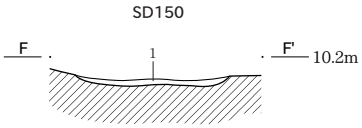
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中

SD149



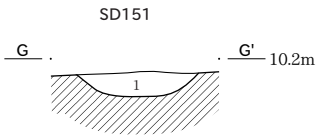
1　暗灰色粘土　しまりやや強、粘性中

SD150



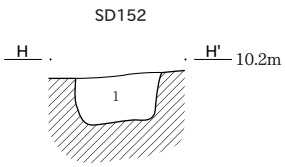
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中、鉄分沈着

SD151



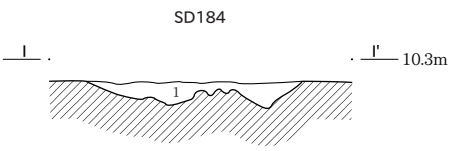
1　暗灰色粘土　しまりやや強、粘性中

SD152



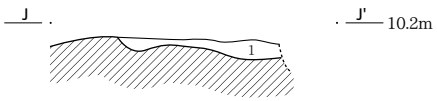
1　褐色シルト　しまり中、粘性中、鉄分沈着

SD184



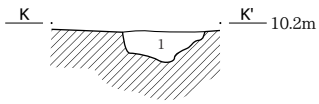
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中

SD185



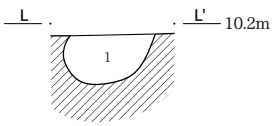
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中

SD186



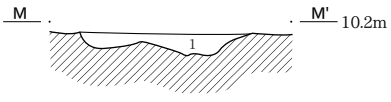
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中

SD191



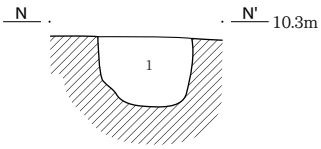
1　褐色シルト　しまり中、粘性中、鉄分沈着

SD192



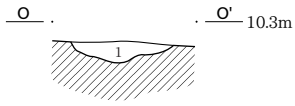
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中

SD560



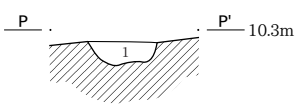
1　青灰色シルト　しまり中、粘性中、灰色粘土ブロックを含む、
酸化鉄沈着、マンガン少量含む

SD564



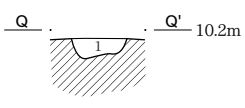
1　青灰色粘質シルト　しまり強、粘性中、暗灰色
粘土多量に混じる

SD571



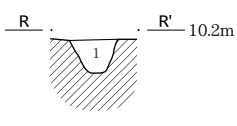
1　灰色粘質シルト　しまり強、粘性中

5BP1

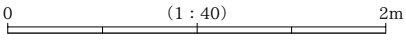


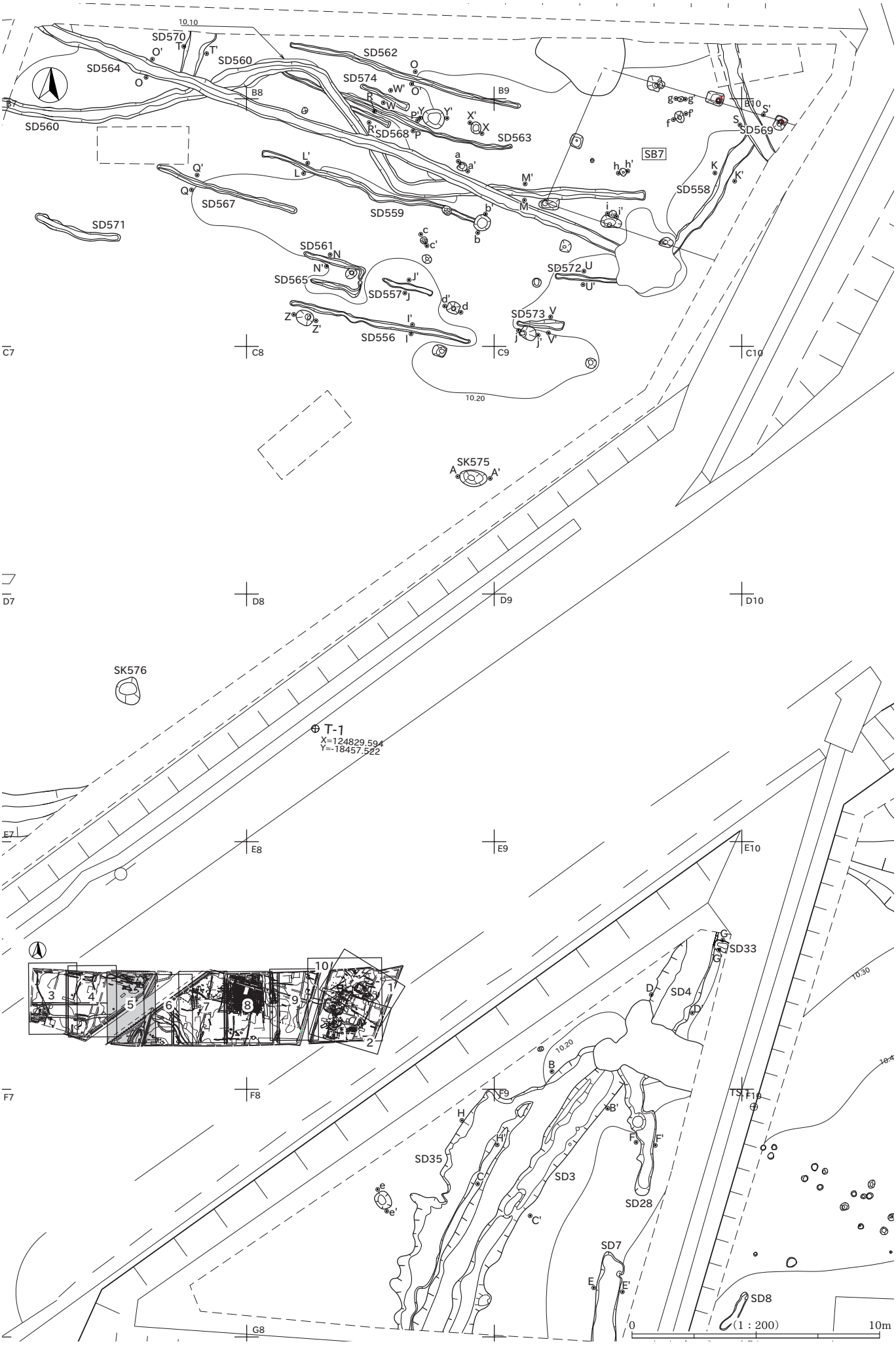
1　暗灰色粘土　しまりやや強、粘性中

5BP2

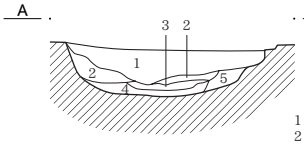


1　暗灰色粘土　しまりやや強、粘性中



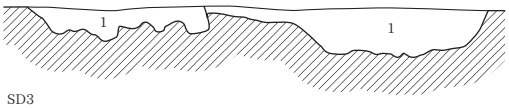

SD570
SD564
SD560
SD562
SD574
SD568
SD563
SD569
SD571
SD567
SD559
SD558
SD561
SD565
SD557
SD572
SD573
SD556
SK575
SK576
SB7
T-1
X=124829.594
Y=-18457.522
SD33
SD4
SD35
SD3
SD28
SD7
SD8
10.10
10.20
10.30
0
(1 : 200)
10m

SK575



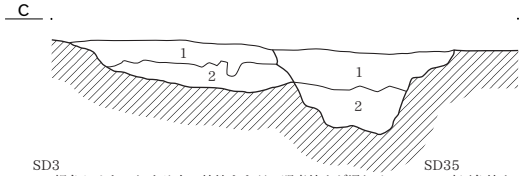
1　褐色砂質シルト　しまりやや中、粘性やや弱
2　灰色砂質シルト　しまり中、粘性やや弱
3　明灰色粘質シルト　しまりやや中、粘性中
4　灰色シルト　しまりやや中、粘性中
5　褐色砂質シルト　しまり中、粘性やや弱、1層よりもやや暗い

SD35　SD3



SD3
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性やや弱、赤色シルト混入
SD35
1　暗灰色粘土

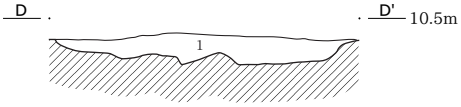
SD35　SD3



SD3
1　褐色シルト　しまり中、粘性やや弱、明青粘土が混じる
2　明青粘土　しまり中、粘性中

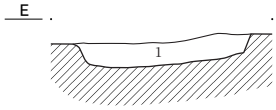
SD35
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中
2　褐色シルト　しまり中、粘性中、暗灰色粘土が混じる

SD4



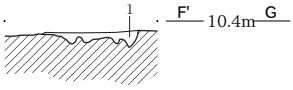
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中

SD7



1　白灰色シルト　しまり中、粘性中

SD28

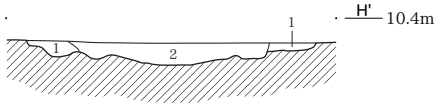


1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中

SD33

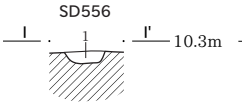
1　暗灰色粘土　鉄分沈着、
しまり中、粘性中

SD35



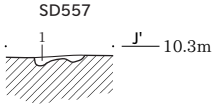
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中
2　青灰色シルト　しまり中、粘質やや弱、暗灰色粘土混じる

SD556



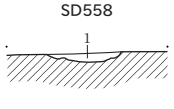
1　灰色粘質シルト　しまり強、
粘性中

SD557



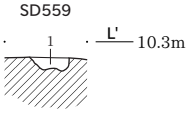
1　灰色粘質シルト　しまり強、
粘性中

SD558



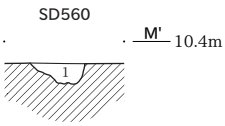
1　青灰色シルト　しまり強、粘性弱、
暗灰色粘土が混じる

SD559



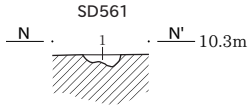
1　灰色粘質シルト　しまり強、
粘性中

SD560



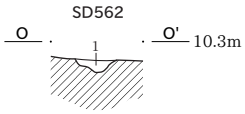
1　青灰色シルト　しまり強、粘性弱、
酸化鉄沈着

SD561



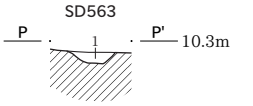
1　灰色粘質シルト　しまり強、
粘性中

SD562



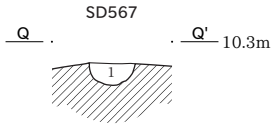
1　青灰色シルト　しまり強、粘性中、
灰色粘土が混じる、炭化物を多量

SD563



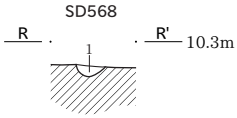
1　灰色粘質シルト　しまり強、粘性中

SD567



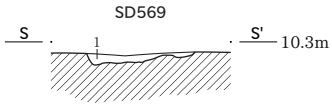
1　灰色粘質シルト　しまり中、粘性中

SD568



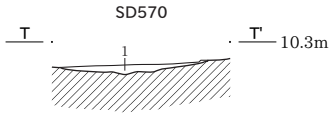
1　灰色粘質シルト　しまり強、粘性中

SD569



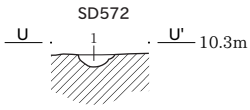
1　青灰色シルト　しまり強、粘性弱、
暗灰色粘土が混じる

SD570



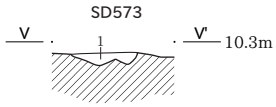
1　暗灰色粘土　しまり強、粘性中、
炭化物を少量含む

SD572



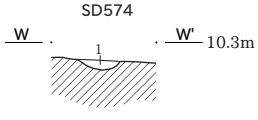
1　灰色粘質シルト　しまり中、粘性中

SD573



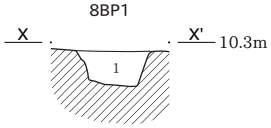
1　灰色粘質シルト　しまり強、粘性中

SD574



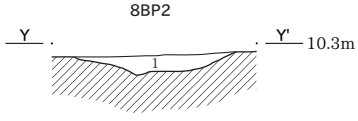
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中、
炭化物多量

8BP1



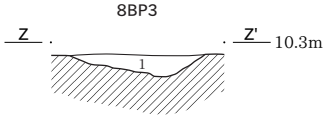
1　灰色粘質シルト　しまり強、
粘性中

8BP2



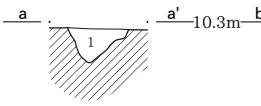
1　暗灰色粘土　しまり強、粘性弱

8BP3



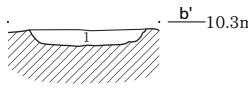
1　暗灰色粘土　しまり強、粘性中

8BP4



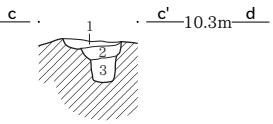
1　灰色粘質シルト　しまり中、
粘性中、炭化物多量

8BP5



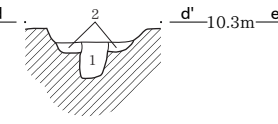
1　青灰色シルト　しまり中、粘性中、
暗灰色粘土が混じる

8BP7



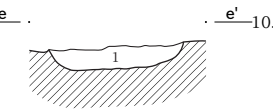
1　灰色粘質シルト　しまり強、粘性弱
2　灰色粘土　しまり中、粘性中
3　褐色粘質シルト　しまり中、粘性やや
強

8BP9



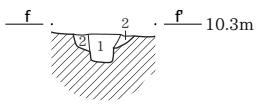
1　灰色粘質シルト　しまり中、
粘性中、酸化物沈着、柱痕
2　灰色粘質シルト　しまり中、粘性中、
酸化鉄沈着

8FP1



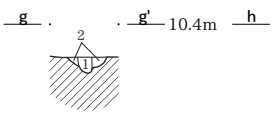
1　白灰色シルト　しまり中、粘性中

9BP2



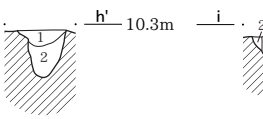
1　暗灰色砂質シルト　しまり中、
粘性弱、柱痕
2　灰色砂質シルト　しまり中、
粘性弱

9BP3



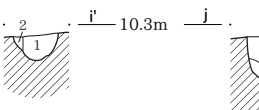
1　暗灰色砂質シルト　しまり中、
粘性弱、柱痕
2　青灰色砂質シルト　しまり中、
粘性弱

9BP4



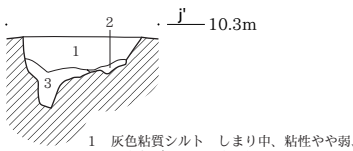
1　灰色砂質シルト　しまりやや強、
粘性弱
2　暗灰色粘質シルト　しまり中、粘
性中

9BP6

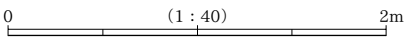


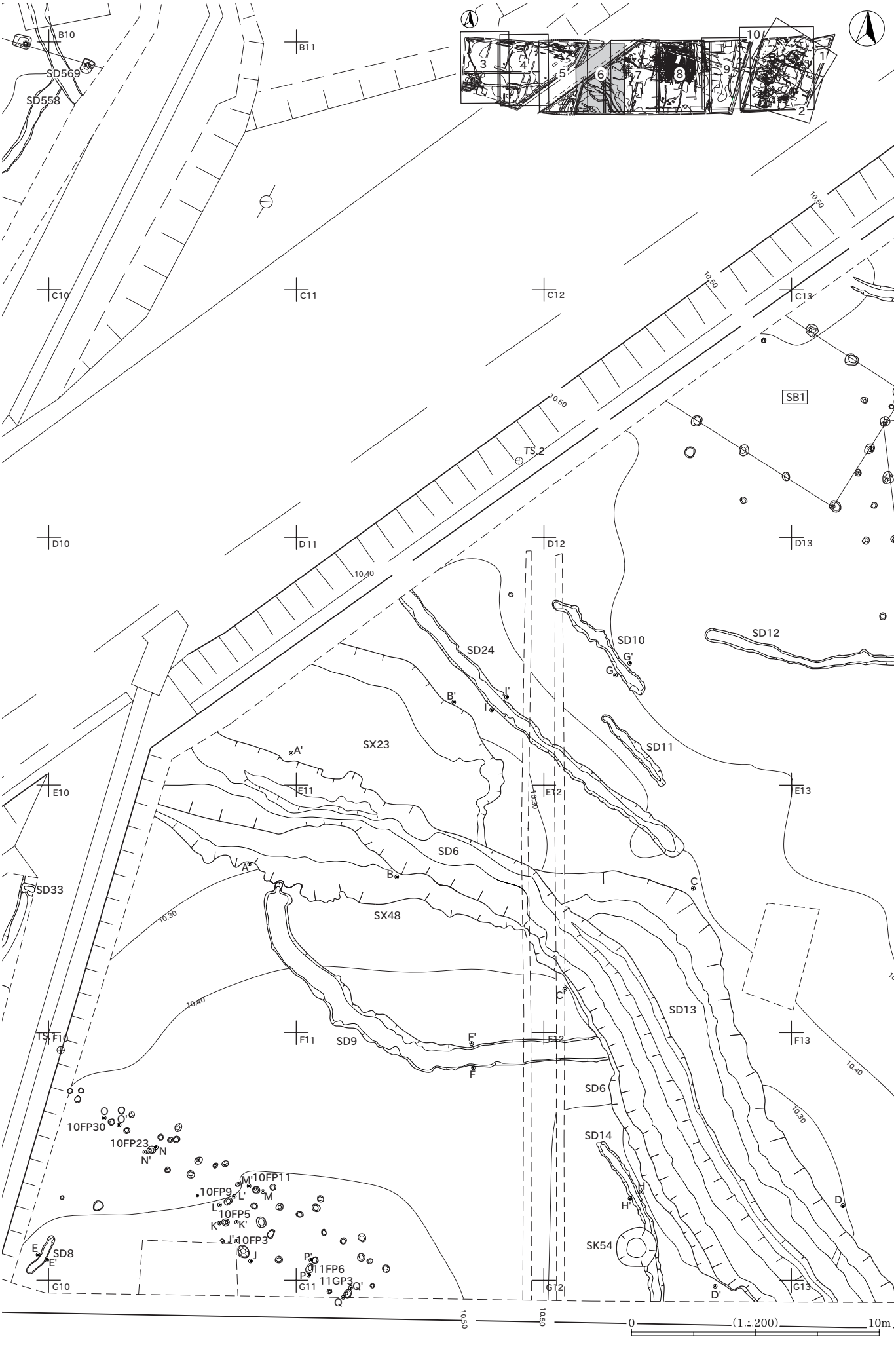
1　灰色粘質シルト　しまり中、
粘性中、黒褐色をマーブル状に含む
2　青灰色粘土　しまりやや弱、粘性中、
暗灰混じる

9BP12

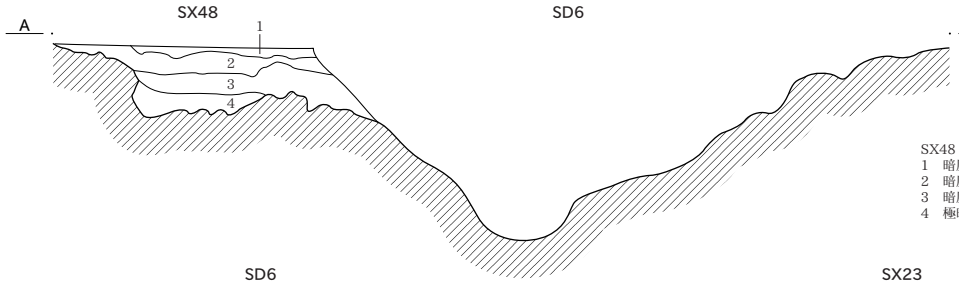


1　灰色粘質シルト　しまり中、粘性やや弱、
灰白色ブロック、炭化物含む。
2　灰色粘質シルト　しまり中、粘性やや弱
3　灰色シルト　しまり中、粘性やや弱

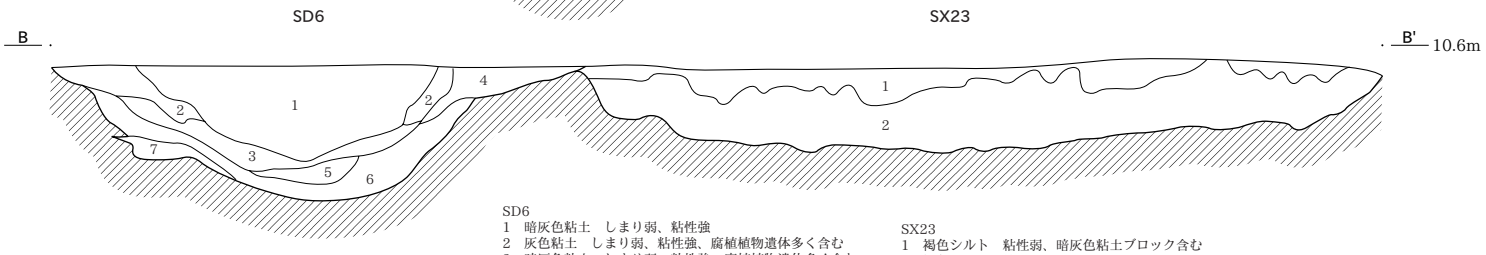



B10
B11
SD569
SD558
C10
C11
C12
C13
SB1
TS.2
D10
D11
D12
D13
SD24
SD10
SD12
SD11
SX23
E10
E11
E12
E13
SD6
SD33
SX48
SD13
TS.F10
F11
SD9
F12
F13
SD6
SD14
10FP30
10FP23
10FP11
10FP9
10FP5
10FP3
SD8
SK54
11FP6
11GP3
G10
G11
G12
G13
0
(1：200)
10m

遺構分割図６土層断面図

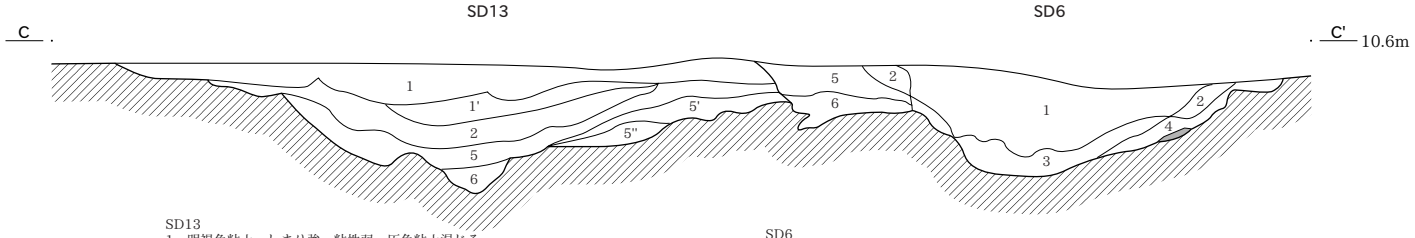


SX48
1　暗灰粘質シルト
2　暗灰粘質シルト　明褐色ブロックを含む
3　暗灰色粘土　しまり弱、粘性強、砂混じる
4　極暗灰色粘土　しまり弱、粘性強、砂混じる



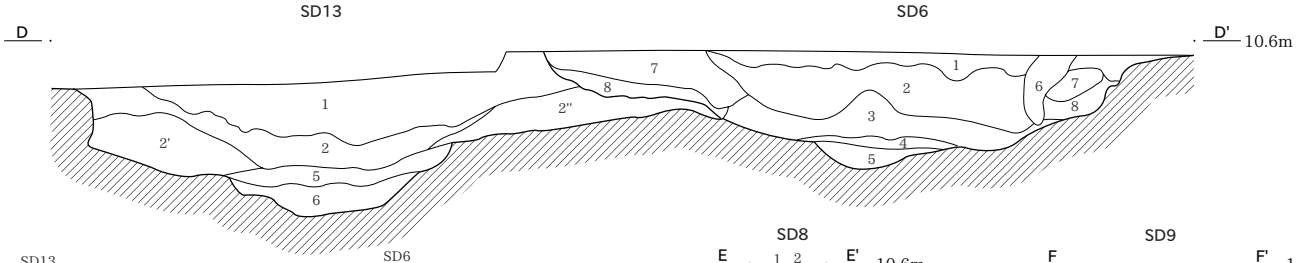
SD6
1　暗灰色粘土　しまり弱、粘性強
2　灰色粘土　しまり弱、粘性強、腐植植物遺体多く含む
3　暗灰色粘土　しまり弱、粘性強、腐植植物遺体多く含む
4　灰色粘土　しまり弱、粘性強
5　極暗灰色砂　しまり弱、粘性弱、植物遺体多く含む
6　黒褐色粘土　黄褐色土ブロック含む
7　暗褐色粘土

SX23
1　褐色シルト　粘性弱、暗灰色粘土ブロック含む
2　褐色シルト　粘性ややあり



SD13
1　明褐色粘土　しまり強、粘性弱、灰色粘土混じる
1′暗灰色粘土　しまり中、粘性強
2　暗灰色粘土　しまり中、粘性強、砂を少量含む
5　暗褐色粘土　しまり弱、粘性強、砂を多く含む
5′暗灰色粘質シルト　しまり中、粘性中
5″明褐色シルト　しまり中、粘性中、灰色粘土混じる土
6　暗褐色粘土　砂混じり
※層名のアラビア数字は下の断面図に対応

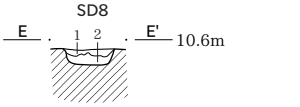
SD6
1　暗灰色粘土　しまり強、粘性強、植物遺体多く含む、新しい流水路部分
2　明灰色粘土　しまり中、粘性強
3　灰色粘土　　しまりやや弱、粘性極強、植物遺体含む
4　灰色粘土　砂混じる、明褐色粘土混じる
5　灰色粘土　しまり中、粘性強
6　暗灰色粘土　しまり中、粘性強、砂少量含む



SD13
1　暗灰色粘土　しまりやや良、粘性やや強
2　暗灰色粘土　砂を少量含む、しまり中、粘性強
2′明褐色粘土　暗灰色粘土、暗灰色粗砂混じる
2″4層　しまりやや弱、粘性強、黒褐色砂混じりシルト
5　暗灰色粘土　しまりやや弱、粘性強、砂多量に含む
6　暗灰色砂混じり粘土　しまり弱、粘性強
※層名のアラビア数字は下の断面図に対応

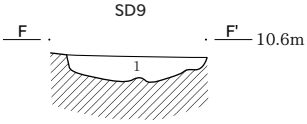
SD6
1　暗灰色粘土　しまり強、粘性やや弱
2　灰色粘土　しまり中、粘性強、
植物遺体含む、新しい流水路
3　灰色粘土　植物遺体含む、しまりやや弱、粘性強
4　暗灰砂　しまり中、粘性なし
5　褐色粘土　しまり中、粘性強、植物遺体含む
6　灰色粘土　しまり中、粘性やや強、植物遺体含む
7　暗灰色粘土　しまりやや強、粘性やや強
8　暗褐色粘土　しまり中、粘性強

SD8



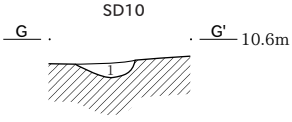
1　暗灰色シルト　しまり強、粘性やや弱、
明灰色ブロックが混じる
2　明褐色シルト　しまり中、粘性中

SD9



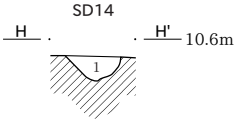
1　暗灰色粘土　しまり強、粘性弱

SD10



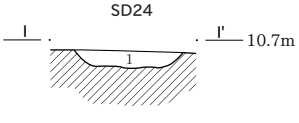
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性弱、
明褐色シルト混じる

SD14



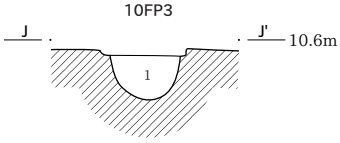
1　暗褐色粘質シルト　しまり中、粘性中

SD24



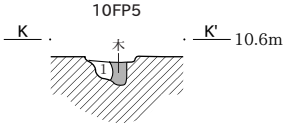
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性やや弱、褐色シルト混じる

10FP3



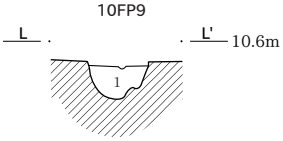
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中

10FP5



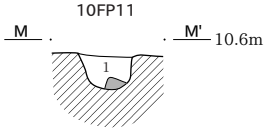
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中

10FP9



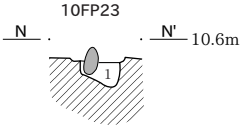
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中

10FP11



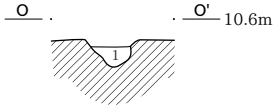
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中

10FP23



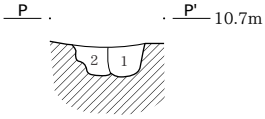
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中

10FP30



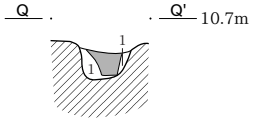
1　青灰色シルト　しまり中、粘性中

11FP6



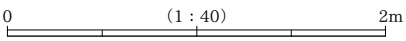
1　黒色粘土　しまり中、粘性中
2　青灰色粘土　しまり中、粘性中

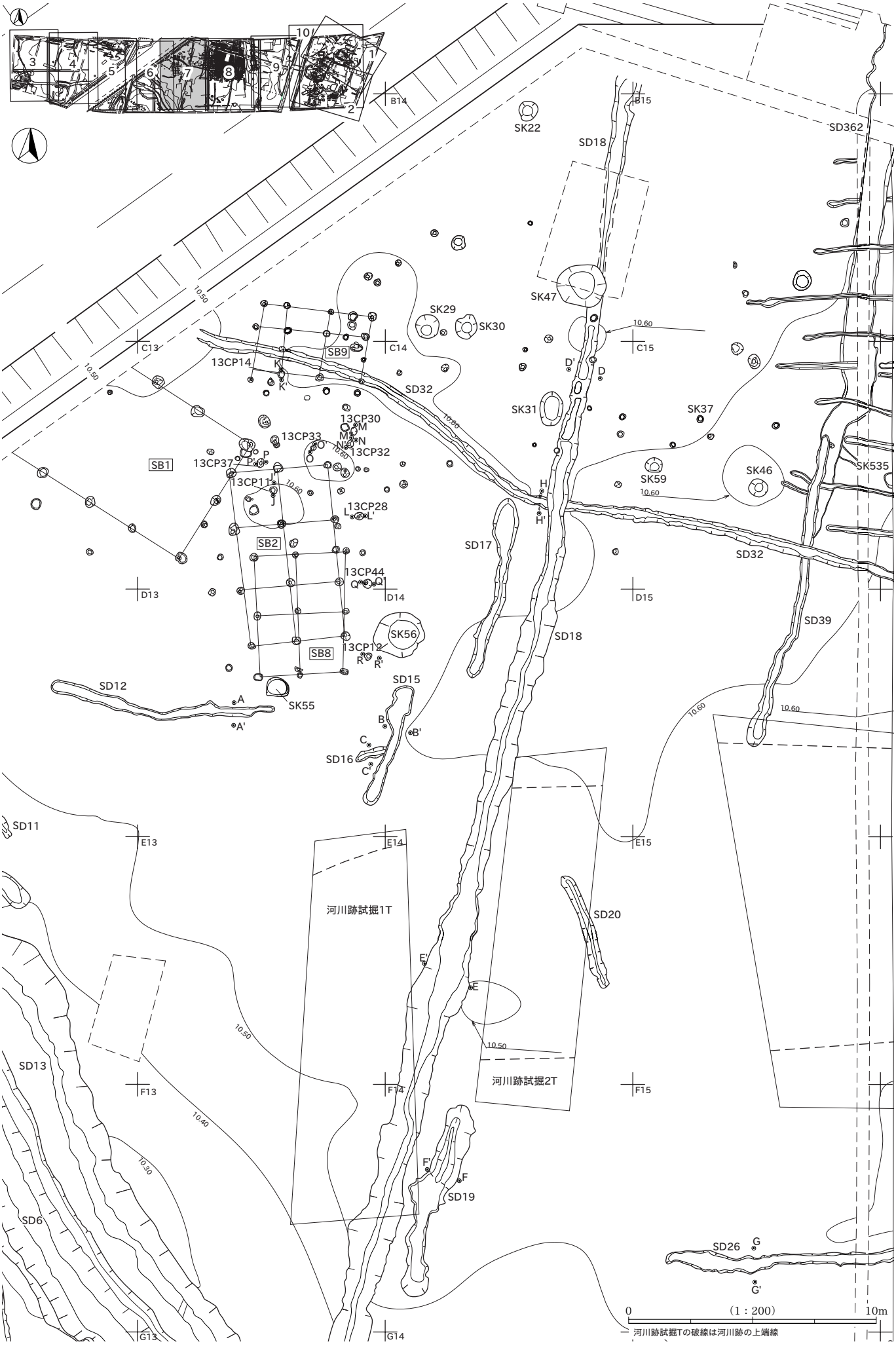
11GP3



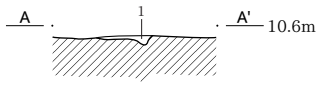
1　白色シルト　しまり中、粘性やや弱

柱根



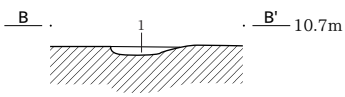

SK22
SD18
SD362
SK47
SK29
SK30
SB9
13CP14
SD32
SK31
SK37
13CP30
13CP33
13CP32
SB1
13CP37
13CP11
SK59
SK46
SK535
13CP28
SD17
SD32
SB2
13CP44
SD39
SD18
SK56
13CP12
SB8
SD15
SD12
SK55
SD16
河川跡試掘1T
SD11
SD20
河川跡試掘2T
SD13
SD6
SD19
SD26
0
(1：200)
10m
河川跡試掘Tの破線は河川跡の上端線

SD12



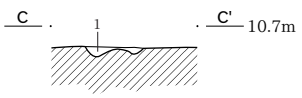
1　暗灰色粘土　しまり強、粘性弱、
　明褐色シルト混じる

SD15



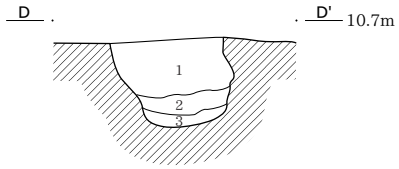
1　暗灰色粘土　しまり弱、粘性弱、
　明褐色シルト混じる

SD16



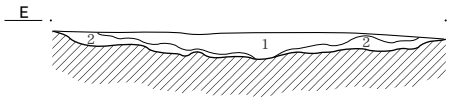
1　暗灰色粘土　しまり強、粘性弱、
　明褐色シルト混じる

SD18



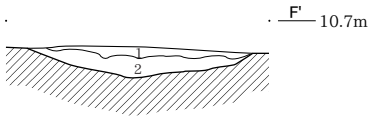
1　明赤褐色粘質シルト　しまり強、粘性強
2　明赤褐色粘質シルト　しまり中、粘性やや強
3　明赤褐色粘質シルト　しまり中、粘性やや強、
　灰色砂質シルト混じる

SD18



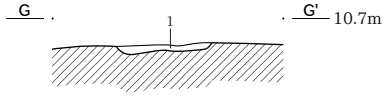
1　暗灰色粘土　しまり強、粘性弱
2　明褐色シルト　しまり中、粘性中

SD19



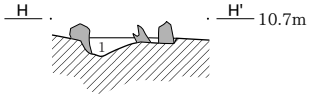
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中
2　明褐色シルト　しまり中、粘性中

SD26



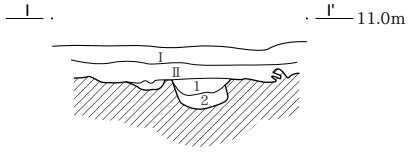
1　暗灰色粘土　しまり強、粘性弱、明褐色シルト混じる

SD32



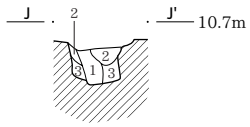
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性やや弱

SD39



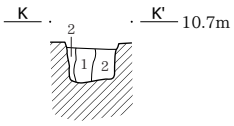
1　暗灰色粘土　灰白土混じる
2　明青灰色粘質シルト　暗灰色粘土ブロック含む

13CP11



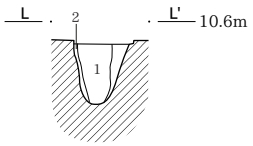
1　灰色粘土　粘性強、暗灰粘土混じる、明灰色シルト含む
2　明灰色シルト　暗灰粘土少量含む
3　明灰色シルト　やや汚れた地山

13CP14



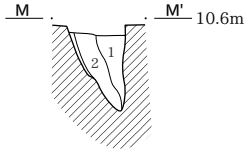
1　黒褐色粘質シルト　柱痕
2　明褐色シルト　黒褐色シルトブロック混じる

13CP28



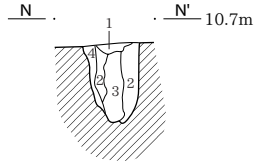
1　黒褐色粘質シルト　しまり中、粘性やや強、柱痕
2　明褐色シルト　しまり中、粘性中

13CP30



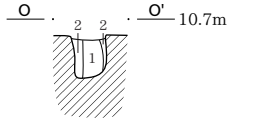
1　黒褐色粘土　しまりやや強、粘性強
2　明褐色粘土　しまり中、粘性強

13CP32



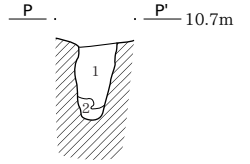
1　明褐色粘土　しまり強、粘性強、灰色粘土含む
2　明褐色粘土　しまり中、粘性強、灰色粘土混じる
3　灰色粘土　しまり中、粘性強、明褐色粘土混じる
4　明褐色粘土　しまり強、粘性強

13CP33



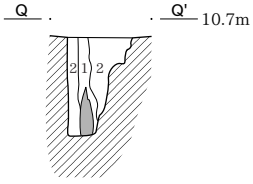
1　黒褐色粘土　しまり強、粘性中、柱痕
2　明褐色粘土　しまりやや強、粘性やや強

13CP37



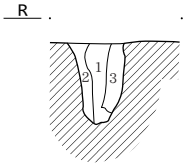
1　黒褐色粘質シルト　青灰色土含む
2　灰色粘土

13CP44



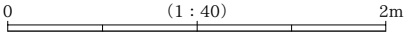
1　灰色粘土　柱痕
2　青灰色シルト　暗灰色粘土ブロック含む

13DP12

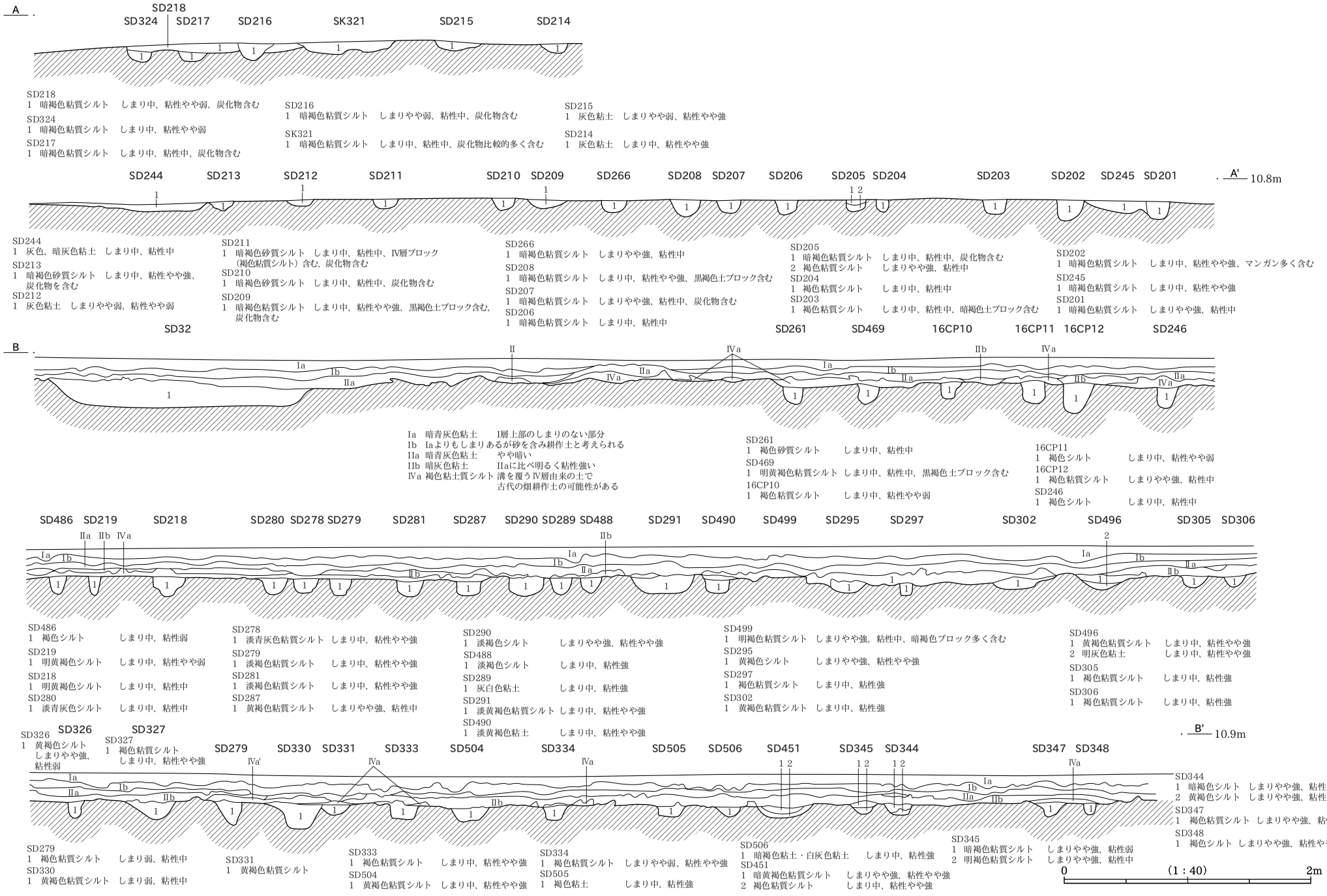


1　暗灰色粘土　柱痕
2　暗灰色粘土　青灰色シルト混じる
3　青灰色粘質シルト

柱根・木



SK554 SD521 SD551 SK552
SD450
SD455
SK544
SK453
SK438
SD362
SK524
SK439
SK553
SK73
SK77
SD354
SD448
SK323
SD682
SD353
SK535
SD360
SD68
SD32
SD461
SD483
SK71
SD27
SD50
SK41
SK42
SK45
SD43
16FP1
16FP2
河試掘
7T
SD34
SK44
16FP3
SD26
SD702
SK70
SD701
河川跡試掘3T
0 (1 : 200) 10m
河川跡試掘Tの破線は河川跡の上端線



SD218
1 暗褐色粘質シルト　しまり中、粘性やや弱、炭化物含む

SD324
1 暗褐色粘質シルト　しまり中、粘性やや弱

SD217
1 暗褐色粘質シルト　しまり中、粘性中、炭化物含む

SD216
1 暗褐色粘質シルト　しまりやや弱、粘性中、炭化物含む

SK321
1 暗褐色粘質シルト　しまり中、粘性中、炭化物比較的多く含む

SD215
1 灰色粘土　しまりやや弱、粘性やや強

SD214
1 灰色粘土　しまり中、粘性やや強

SD244
1 灰色、暗灰色粘土　しまり中、粘性中

SD213
1 暗褐色砂質シルト　しまり中、粘性やや強、炭化物を含む

SD212
1 灰色粘土　しまりやや弱、粘性やや弱

SD211
1 暗褐色砂質シルト　しまり中、粘性中、Ⅳ層ブロック（褐色粘質シルト）含む、炭化物含む

SD210
1 暗褐色砂質シルト　しまり中、粘性中、炭化物含む

SD209
1 暗褐色粘質シルト　しまり中、粘性やや強、黒褐色土ブロック含む、炭化物含む

SD266
1 暗褐色粘質シルト　しまりやや強、粘性中

SD208
1 暗褐色粘質シルト　しまり中、粘性やや強、黒褐色土ブロック含む

SD207
1 暗褐色粘質シルト　しまりやや強、粘性中、炭化物含む

SD206
1 暗褐色粘質シルト　しまり中、粘性中

SD205
1 暗褐色粘質シルト　しまり中、粘性中、炭化物含む
2 褐色粘質シルト　しまりやや強、粘性中

SD204
1 褐色粘質シルト　しまり中、粘性中

SD203
1 褐色粘質シルト　しまり中、粘性中、暗褐色土ブロック含む

SD202
1 暗褐色粘質シルト　しまり中、粘性やや強、マンガン多く含む

SD245
1 暗褐色粘質シルト　しまり中、粘性やや強

SD201
1 暗褐色粘質シルト　しまりやや強、粘性中

Ia　暗青灰色粘土　　Ⅰ層上部のしまりのない部分
Ib　Iaよりもしまりあるが砂を含み耕作土と考えられる
IIa　暗青灰色粘土　　やや暗い
IIb　暗灰色粘土　　IIaに比べ明るく粘性強い
Ⅳa　褐色粘土質シルト　溝を覆うⅣ層由来の土で古代の畑耕作土の可能性がある

SD261
1 褐色砂質シルト　　しまり中、粘性中

SD469
1 明黄褐色粘質シルト　しまり中、粘性中、黒褐色土ブロック含む

16CP10
1 褐色粘質シルト　　しまり中、粘性やや弱

16CP11
1 褐色シルト　　しまり中、粘性やや弱

16CP12
1 褐色粘質シルト　　しまりやや強、粘性中

SD246
1 褐色シルト　　しまり中、粘性中

SD486
1 褐色シルト　　しまり中、粘性弱

SD219
1 明黄褐色シルト　　しまり中、粘性やや弱

SD218
1 明黄褐色シルト　　しまり中、粘性中

SD280
1 淡青灰色シルト　　しまり中、粘性中

SD278
1 淡青灰色粘質シルト　しまり中、粘性やや強

SD279
1 淡褐色粘質シルト　　しまり中、粘性やや強

SD281
1 淡褐色粘質シルト　　しまり中、粘性やや強

SD287
1 黄褐色粘質シルト　　しまりやや強、粘性中

SD290
1 淡褐色シルト　　しまりやや強、粘性やや強

SD488
1 淡褐色シルト　　しまり中、粘性強

SD289
1 灰白色粘土　　しまり中、粘性強

SD291
1 淡黄褐色粘質シルト　しまり中、粘性やや強

SD490
1 淡黄褐色粘土　　しまり中、粘性やや強

SD499
1 明褐色粘質シルト　しまりやや強、粘性中、暗褐色ブロック多く含む

SD295
1 黄褐色シルト　　しまりやや強、粘性やや強

SD297
1 褐色粘質シルト　　しまり中、粘性強

SD302
1 黄褐色粘質シルト　しまり中、粘性強

SD496
1 黄褐色粘質シルト　　しまり中、粘性やや強
2 明灰色粘土　　しまり中、粘性やや強

SD305
1 褐色粘質シルト　　しまり中、粘性強

SD306
1 褐色粘質シルト　　しまり中、粘性強

SD326
1 黄褐色シルト　しまりやや強、粘性弱

SD327
1 褐色粘質シルト　しまり中、粘性やや強

SD279
1 褐色粘質シルト　　しまり弱、粘性中

SD330
1 黄褐色粘質シルト　しまり弱、粘性中

SD331
1 黄褐色粘質シルト

SD333
1 褐色粘質シルト　　しまり中、粘性やや強

SD504
1 黄褐色粘質シルト　しまり中、粘性やや強

SD334
1 褐色粘質シルト　　しまりやや弱、粘性やや強

SD505
1 褐色粘土　　しまり中、粘性強

SD506
1 暗褐色粘土・白灰色粘土　しまり中、粘性強

SD451
1 暗黄褐色粘質シルト　しまりやや強、粘性やや強
2 褐色粘質シルト　　しまり中、粘性やや強

SD345
1 暗褐色粘質シルト　　しまりやや強、粘性弱
2 明褐色粘質シルト　　しまりやや強、粘性中

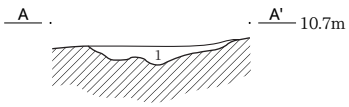
SD344
1 暗褐色シルト　しまりやや強、粘性中
2 黄褐色シルト　しまりやや強、粘性中

SD347
1 褐色粘質シルト　しまりやや強、粘性中

SD348
1 褐色シルト　しまりやや強、粘性やや弱

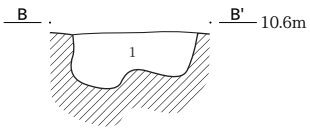
SD450
SD459
SD456
SD457
SD458
SD355
SD354
SD358
SD449
SD448
SD353
SD357
SD360
SD358
SD359
SD361
SD356
SD123
河川跡
河川跡試掘6T
河川跡試掘5T
河川跡試掘4T
SD107
SD111
SD112
SD703
SD704
SK108
SD109
SD69
SK71
SD72
SD51
T-2
X=124851.193
Y=18313.971
B20
B21
B22
C20
C21
C22
D20
D21
D22
E20
E21
E22
F20
F21
F22
10.50
10.60
0
(1:200)
10m
河川跡試掘Tの破線は河川跡の上端線

SD51



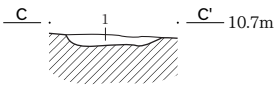
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中

SD27



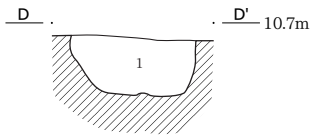
1　明褐色シルト　しまり中、粘性中、酸化鉄含有

SD34



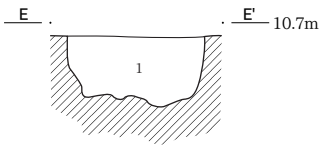
1　明褐色シルト　しまり中、粘性中、酸化鉄含有

SD43



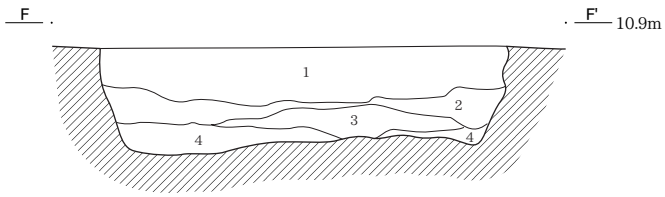
1　明褐色シルト　しまり中、粘性中、酸化鉄含有

SD50



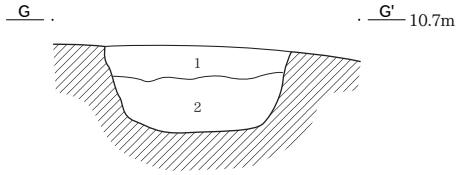
1　灰色粘土　しまり中、粘性中、酸化鉄含

SD68



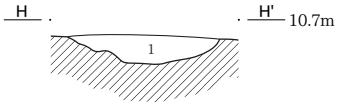
1　明褐色粘質シルト
2　褐色粘質シルト　マンガン含む
3　褐色シルト
4　灰色粘質シルト　砂含む

SD69



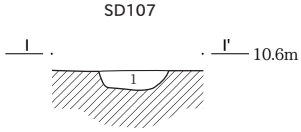
1　青灰色粘土　しまり中、粘性中、
暗褐色粘土が混じる、マンガン少量含、酸化鉄沈着
2　青灰色粘土　しまり中、粘性やや強、暗褐色粘土混じる、
マンガン多く含む、酸化鉄沈着

SD72



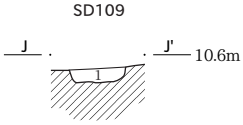
1　暗灰色粘土　しまりやや弱、粘性やや強、炭化物少量含

SD107



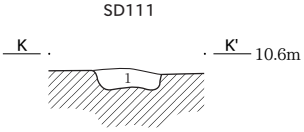
1　灰色粘土　しまり中、粘性やや強、酸化鉄沈着、炭化物少量含

SD109



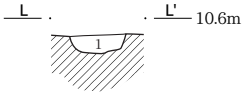
1　青灰色粘土　しまり中、粘性やや強、
炭化物少量含、酸化鉄沈着

SD111



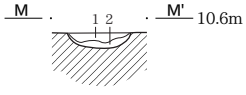
1　青灰色粘土　しまり中、粘性やや強、炭化物少量含

SD112



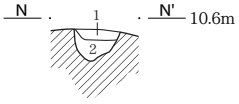
1　青灰色粘土　しまり中、粘性中、炭化物少量含

SD703



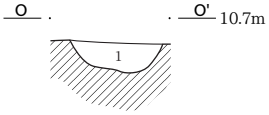
1　暗褐色粘質シルト　しまりやや強
粘性やや弱
2　青灰色粘土　しまりやや弱、粘性
やや強、炭化物含む

SD704



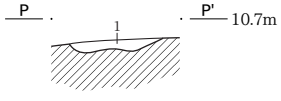
1　暗青灰色粘質シルト　しまり中、粘性中
2　青灰色粘土　しまりやや弱、やや強

16BP3



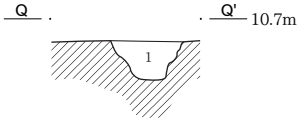
1　暗褐色粘土　しまりやや強、粘性中

16DP3



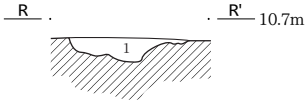
1　暗褐色粘質シルト　しまりやや強、
粘性弱、炭化物少量含む

16FP1



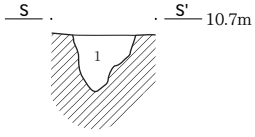
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中、
炭化物少量含む

16FP2

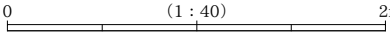


1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中、
炭化物少量含む

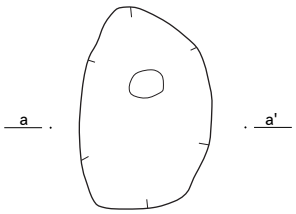
16FP3

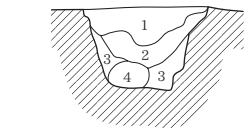


1　暗灰色粘土　しまり中、粘性中



25CP1

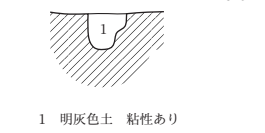




1　灰色粘質シルト
2　灰色粘質土
3　灰色粘質　明褐色シルト含む
4　明灰色シルト

0　(1：40)　2m

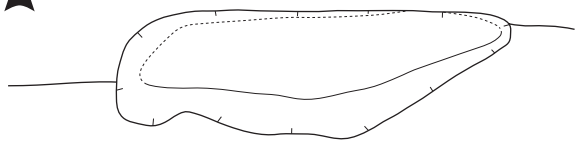
25BP1



1　明灰色土　粘性あり

0　(1：40)　2m

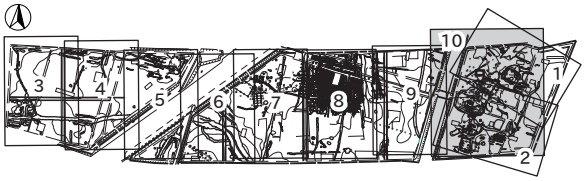
SK21

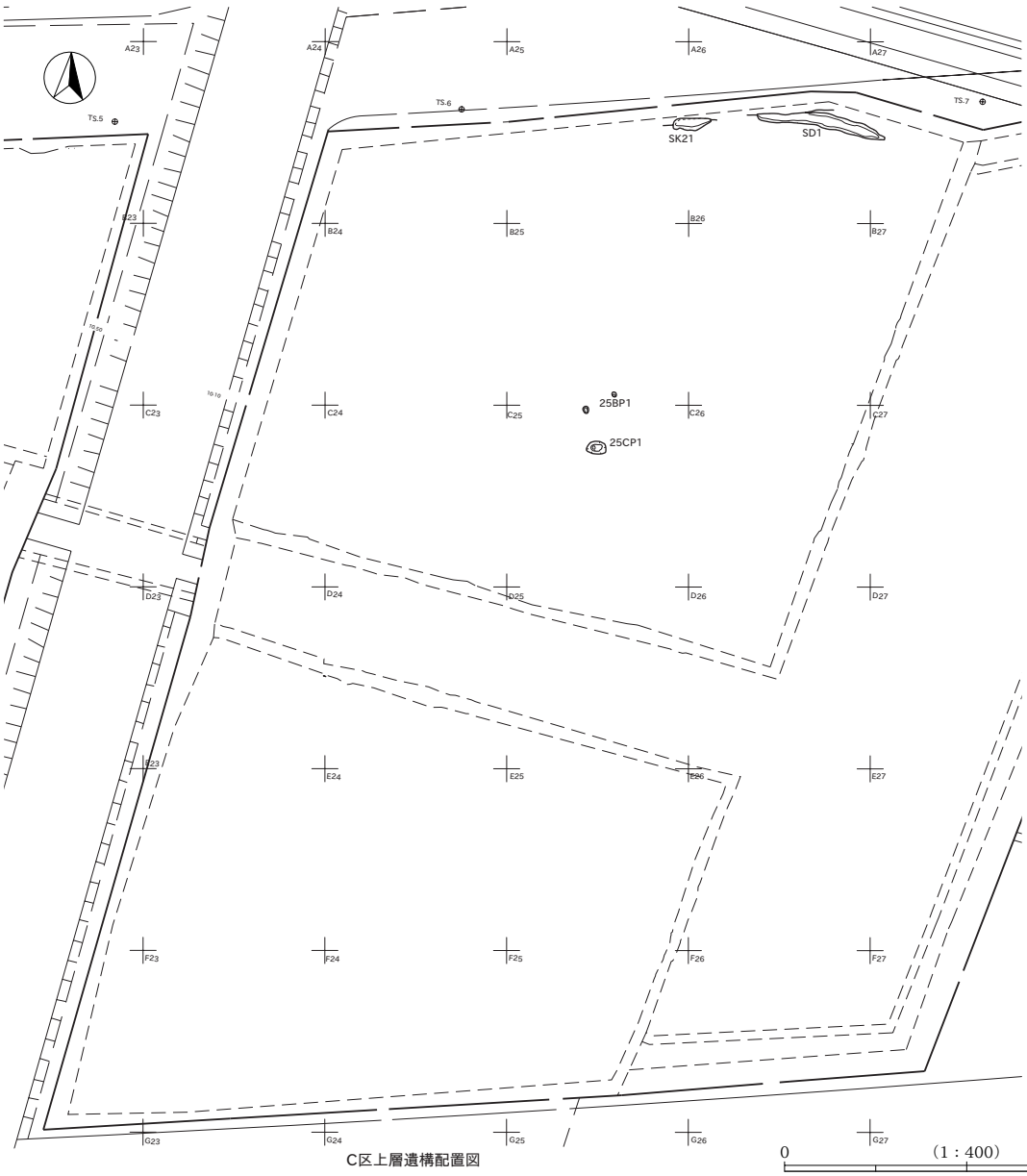


0　(1：40)　2m

SD1

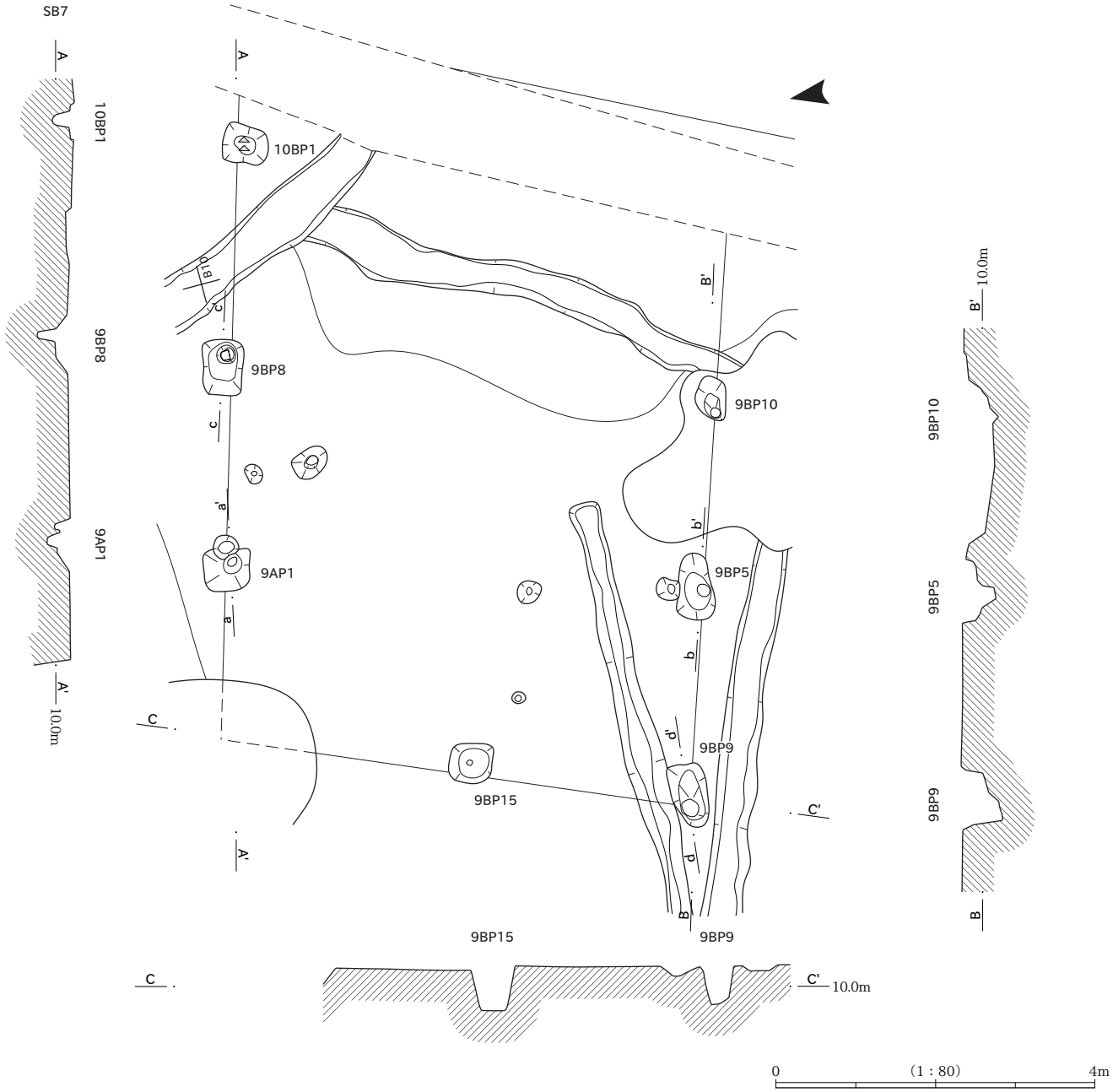
0　(1：80)　4m

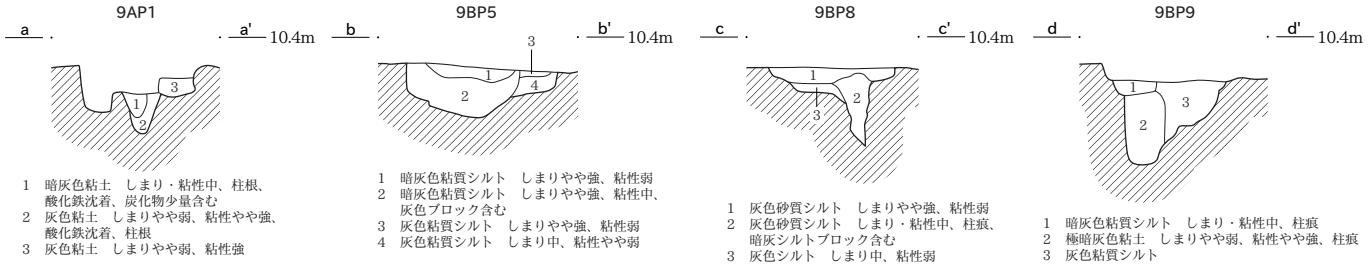


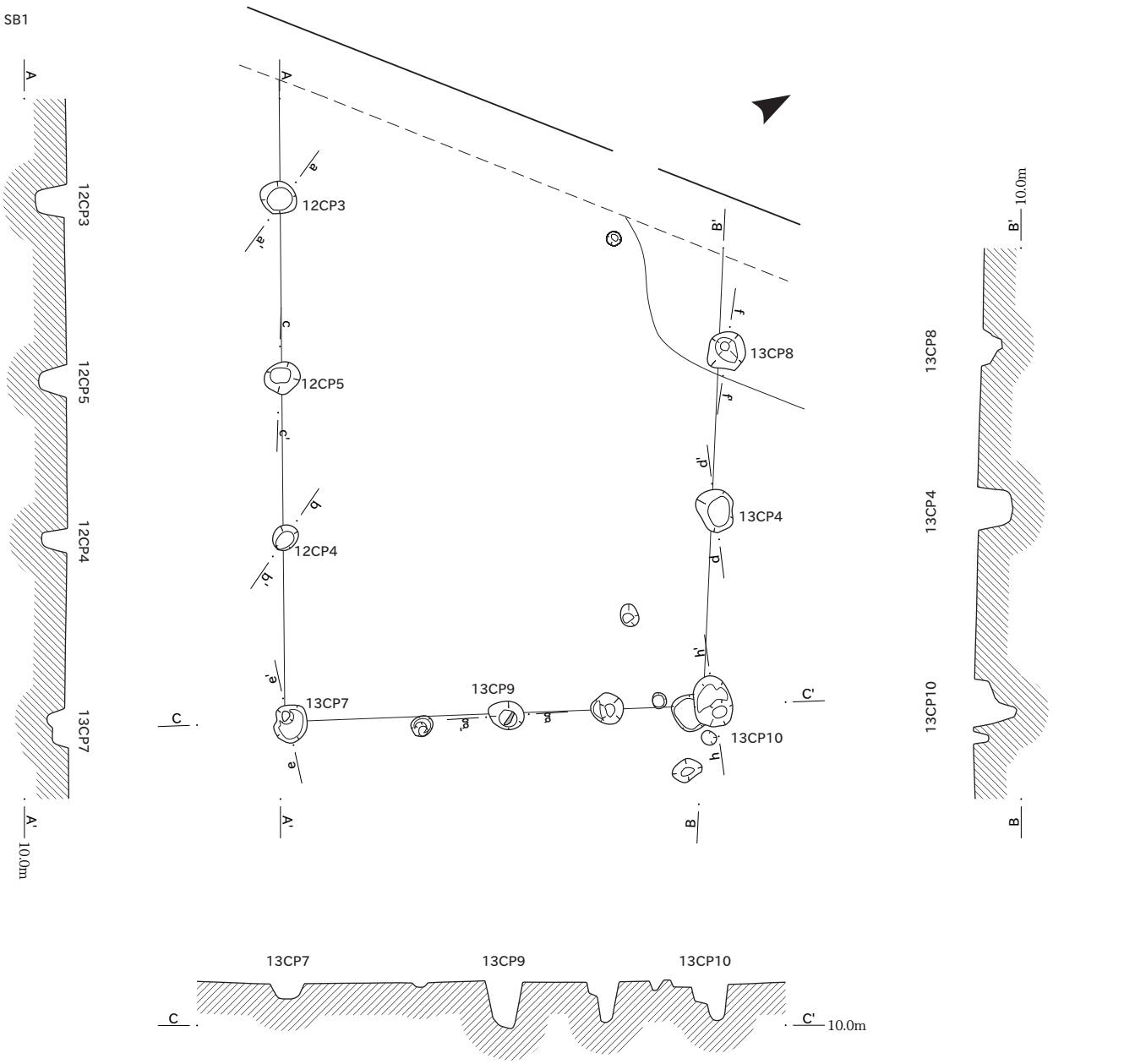


C区上層遺構配置図

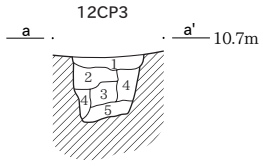
0　(1：400)　20m


SB7
10BP1
9BP8
9AP1
9BP10
9BP5
9BP9
9BP15
A
A'
B
B'
C
C'
10.0m
0　(1：80)　4m

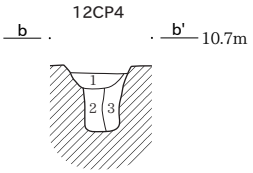

9AP1
a
a'
10.4m
1　暗灰色粘土　しまり・粘性中、柱根、酸化鉄沈着、炭化物少量含む
2　灰色粘土　しまりやや弱、粘性やや強、酸化鉄沈着、柱根
3　灰色粘土　しまりやや弱、粘性強
9BP5
b
b'
10.4m
1　暗灰色粘質シルト　しまりやや強、粘性弱
2　暗灰色粘質シルト　しまりやや強、粘性中、灰色ブロック含む
3　灰色粘質シルト　しまりやや強、粘性弱
4　灰色粘質シルト　しまり中、粘性やや弱
9BP8
c
c'
10.4m
1　灰色砂質シルト　しまりやや強、粘性弱
2　灰色砂質シルト　しまり・粘性中、柱痕、暗灰シルトブロック含む
3　灰色シルト　しまり中、粘性弱
9BP9
d
d'
10.4m
1　暗灰色粘質シルト　しまり・粘性中、柱痕
2　極暗灰色粘土　しまりやや弱、粘性やや強、柱痕
3　灰色粘質シルト
0　(1：40)　2m



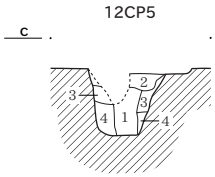
0　(1：80)　4m



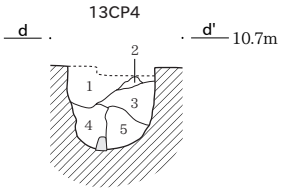
1　灰色粘質シルト　しまり強、粘性やや弱
2　灰色粘土　しまり中、粘性強
3　灰色粘土　しまり中、粘性強、
　明褐色シルトブロック含む
4　明灰色粘質シルト　しまり、粘性やや強
5　灰色粘土　しまり中、粘性強



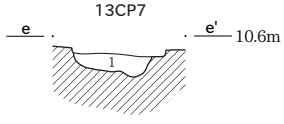
1　明灰色シルト
2　黒褐色粘土　柱痕
3　灰色粘土



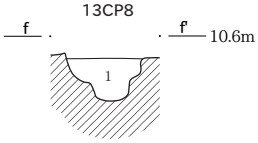
1　灰色粘土　粘性強、柱痕
2　明青灰色シルト
3　灰色粘土
4　明褐色粘質シルト



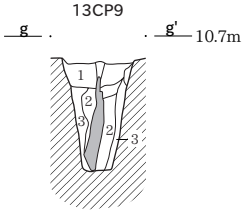
1　灰色粘質シルト　しまり強、粘性中
2　明灰シルト
3　淡青灰粘質シルト　しまり中
4　青灰粘土　しまり中、粘性やや強
　暗灰粘土混じる、柱痕
5　青灰粘土　しまり中、粘性強



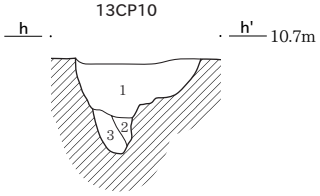
1　灰色粘土　しまりやや強、粘性強



1　灰色粘土　しまり良、粘性弱



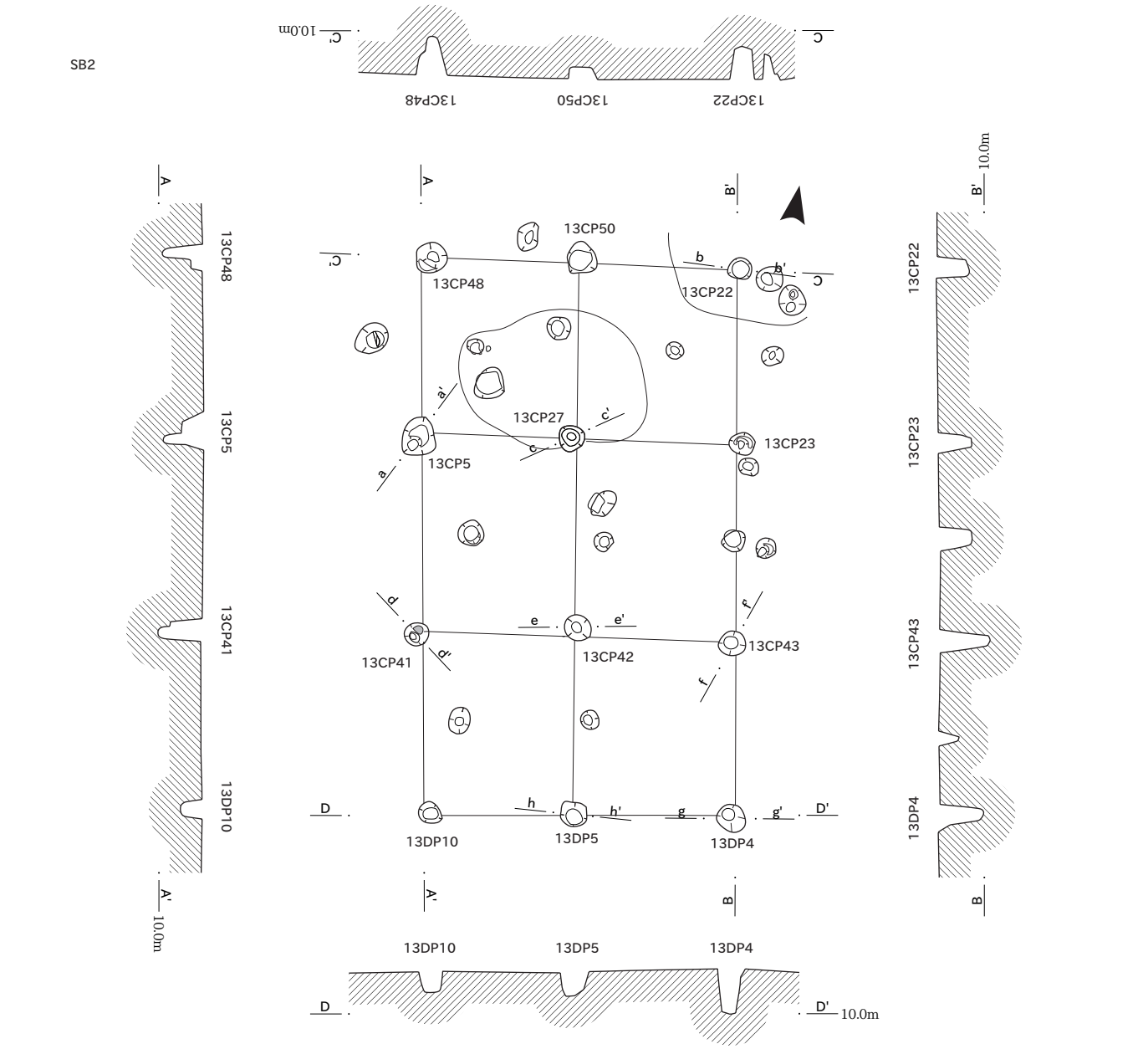
1　暗灰色粘土
2　暗褐色粘土　粘性強、柱痕
3　明褐色粘質シルト

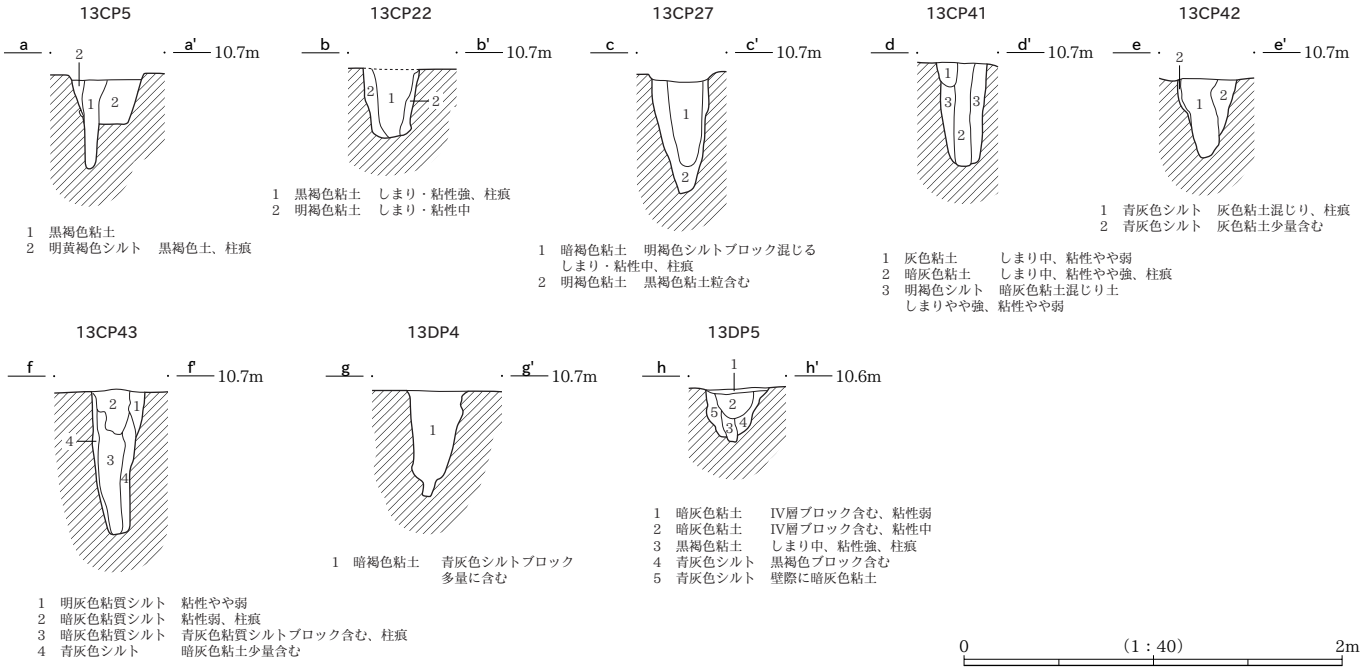


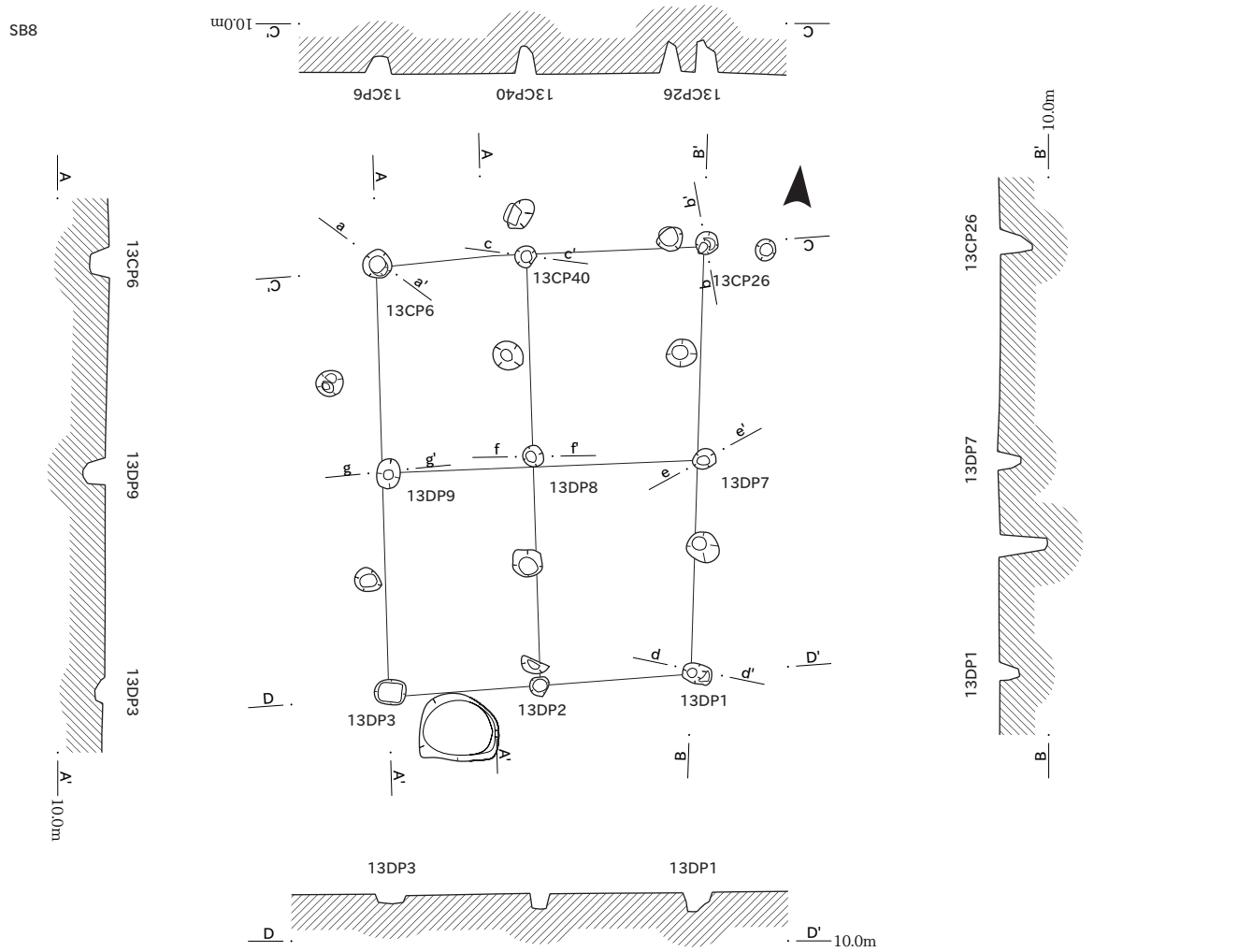
1　褐色粘土　灰色粘土混じり土、
　しまり・粘性中
2　褐色粘土　しまり中、粘性強
3　灰色粘土　しまり中、粘性強、柱痕

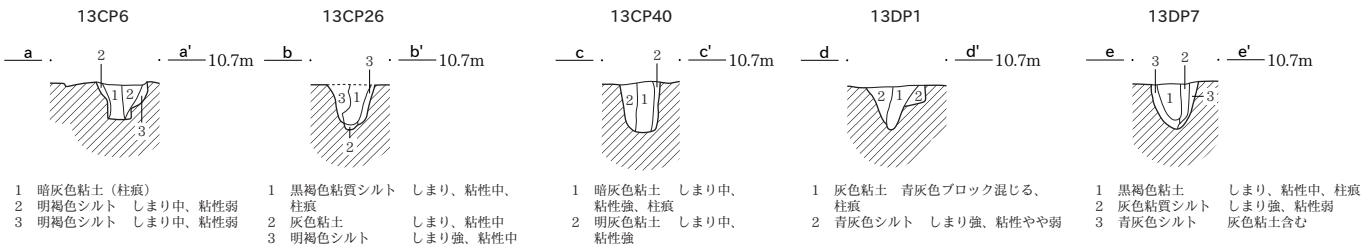
柱根

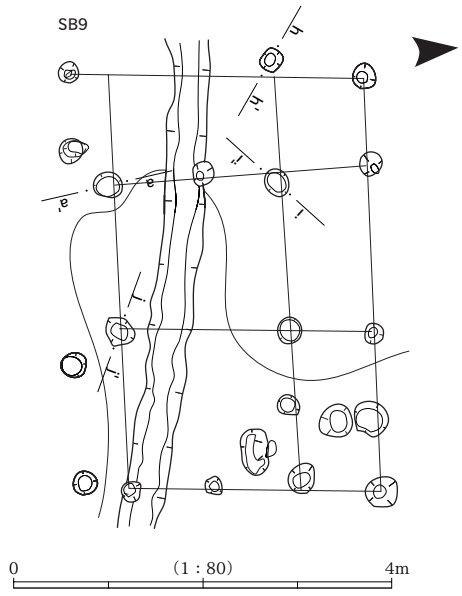
0　(1：40)　2m

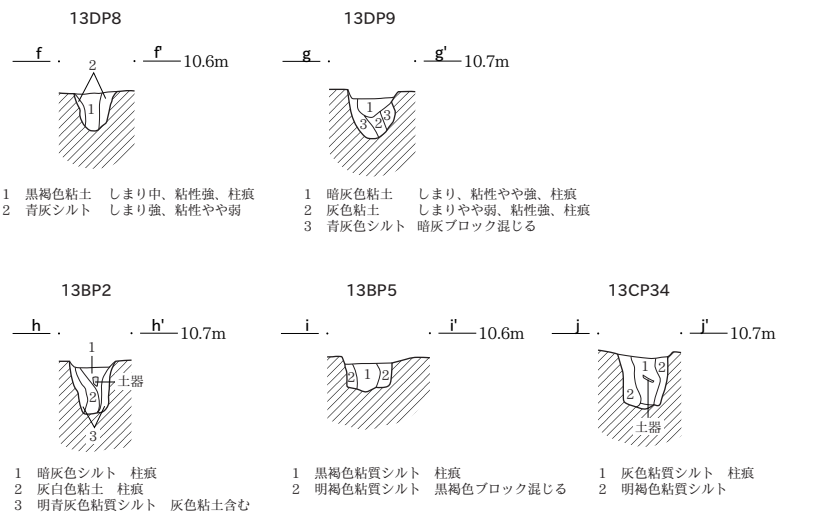

SB2
C'
10.0m
C
13CP22
13CP50
13CP48
A
A'
10.0m
13CP48
13CP5
13CP41
13DP10
B'
10.0m
B
13CP22
13CP23
13CP43
13DP4
13CP50
13CP48
13CP22
13CP27
13CP5
13CP23
13CP41
13CP42
13CP43
13DP10
13DP5
13DP4
D
D'
10.0m
0
(1：80)
4m

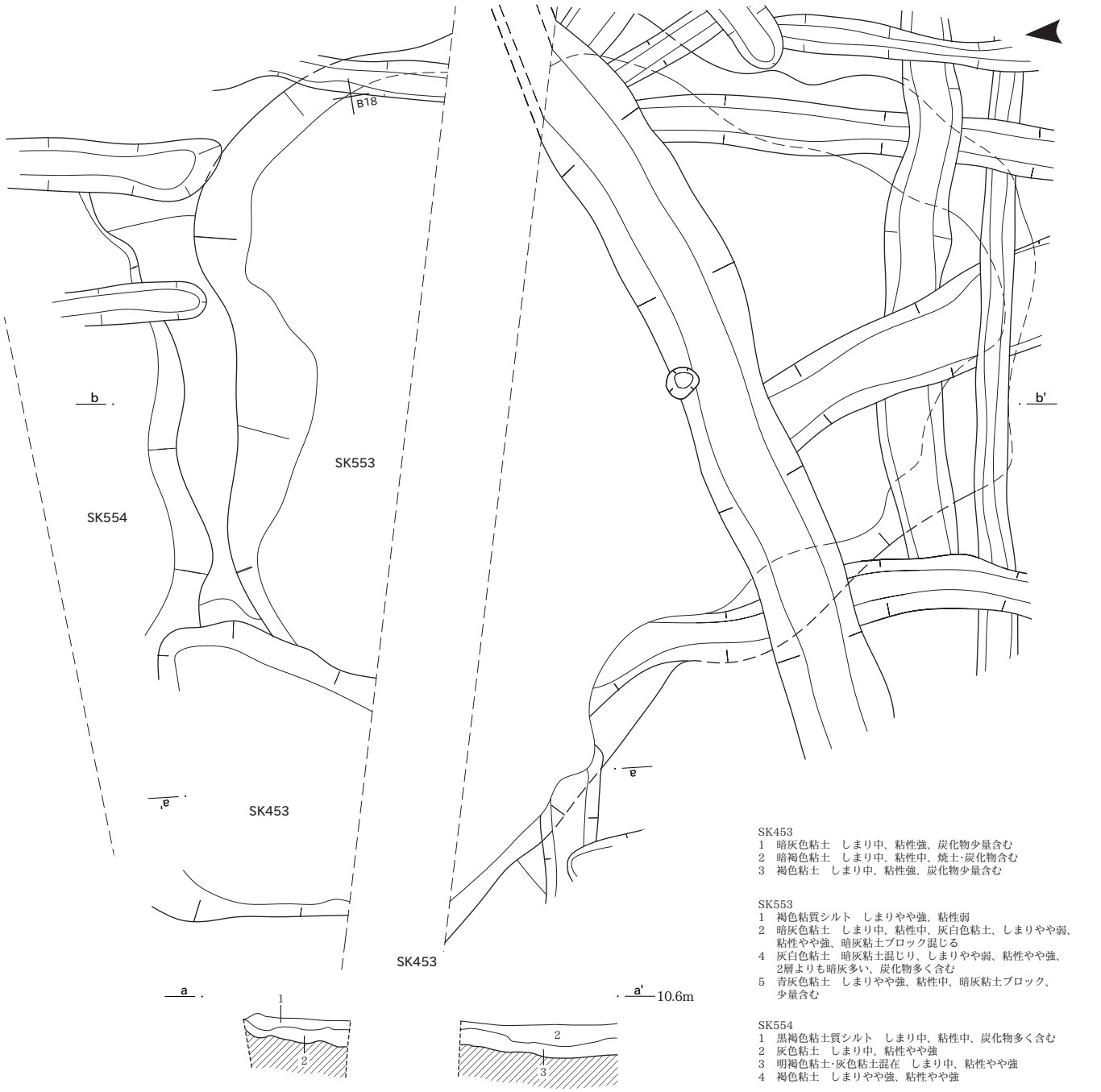

13CP5
a
a'
10.7m
1 黒褐色粘土
2 明黄褐色シルト　黒褐色土、柱痕
13CP22
b
b'
10.7m
1 黒褐色粘土　しまり・粘性強、柱痕
2 明褐色粘土　しまり・粘性中
13CP27
c
c'
10.7m
1 暗褐色粘土　明褐色シルトブロック混じる
しまり・粘性中、柱痕
2 明褐色粘土　黒褐色粘土粒含む
13CP41
d
d'
10.7m
1 灰色粘土　しまり中、粘性やや弱
2 暗灰色粘土　しまり中、粘性やや強、柱痕
3 明褐色シルト　暗灰色粘土混じり土
しまりやや強、粘性やや弱
13CP42
e
e'
10.7m
1 青灰色シルト　灰色粘土混じり、柱痕
2 青灰色シルト　灰色粘土少量含む
13CP43
f
f'
10.7m
1 明灰色粘質シルト　粘性やや弱
2 暗灰色粘質シルト　粘性弱、柱痕
3 暗灰色粘質シルト　青灰色粘質シルトブロック含む、柱痕
4 青灰色シルト　暗灰色粘土少量含む
13DP4
g
g'
10.7m
1 暗褐色粘土　青灰色シルトブロック
多量に含む
13DP5
h
h'
10.6m
1 暗灰色粘土　IV層ブロック含む、粘性弱
2 暗灰色粘土　IV層ブロック含む、粘性中
3 黒褐色粘土　しまり中、粘性強、柱痕
4 青灰色シルト　黒褐色ブロック含む
5 青灰色シルト　壁際に暗灰色粘土
0
(1：40)
2m


SB8
13CP6
13CP40
13CP26
13DP9
13DP8
13DP7
13DP3
13DP2
13DP1
10.0m
0
(1：80)
4m


13CP6
a
a'
10.7m
1 暗灰色粘土（柱痕）
2 明褐色シルト　しまり中、粘性弱
3 明褐色シルト　しまり中、粘性弱
13CP26
b
b'
10.7m
1 黒褐色粘質シルト　しまり、粘性中、柱痕
2 灰色粘土　しまり、粘性中
3 明褐色シルト　しまり強、粘性中
13CP40
c
c'
10.7m
1 暗灰色粘土　しまり中、粘性強、柱痕
2 明灰色粘土　しまり中、粘性強
13DP1
d
d'
10.7m
1 灰色粘土　青灰色ブロック混じる、柱痕
2 青灰色シルト　しまり強、粘性やや弱
13DP7
e
e'
10.7m
1 黒褐色粘土　しまり、粘性中、柱痕
2 灰色粘質シルト　しまり強、粘性弱
3 青灰色シルト　灰色粘土含む


SB9
0
(1：80)
4m

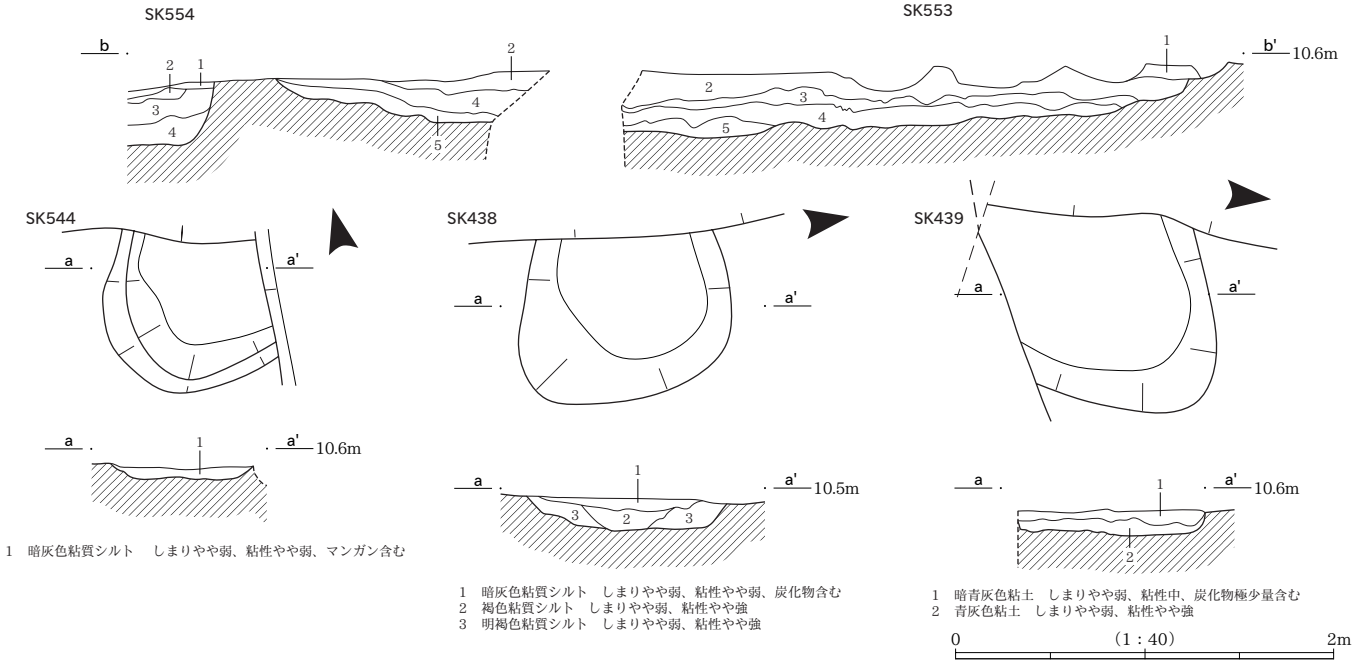

13DP8
f
f'
10.6m
1 黒褐色粘土　しまり中、粘性強、柱痕
2 青灰シルト　しまり強、粘性やや弱
13DP9
g
g'
10.7m
1 暗灰色粘土　しまり、粘性やや強、柱痕
2 灰色粘土　しまりやや弱、粘性強、柱痕
3 青灰色シルト　暗灰ブロック混じる
13BP2
h
h'
10.7m
土器
1 暗灰色シルト　柱痕
2 灰白色粘土　柱痕
3 明青灰色粘質シルト　灰色粘土含む
13BP5
i
i'
10.6m
1 黒褐色粘質シルト　柱痕
2 明褐色粘質シルト　黒褐色ブロック混じる
13CP34
j
j'
10.7m
土器
1 灰色粘質シルト　柱痕
2 明褐色粘質シルト
0
(1：40)
2m



SK453
1　暗灰色粘土　しまり中、粘性強、炭化物少量含む
2　暗褐色粘土　しまり中、粘性中、焼土･炭化物含む
3　褐色粘土　しまり中、粘性強、炭化物少量含む

SK553
1　褐色粘質シルト　しまりやや強、粘性弱
2　暗灰色粘土　しまり中、粘性中、灰白色粘土、しまりやや弱、粘性やや強、暗灰粘土ブロック混じる
4　灰白色粘土　暗灰粘土混じり、しまりやや弱、粘性やや強、2層よりも暗灰多い、炭化物多く含む
5　青灰色粘土　しまりやや強、粘性中、暗灰粘土ブロック、少量含む

SK554
1　黒褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、炭化物多く含む
2　灰色粘土　しまり中、粘性やや強
3　明褐色粘土･灰色粘土混在　しまり中、粘性やや強
4　褐色粘土　しまりやや強、粘性やや強



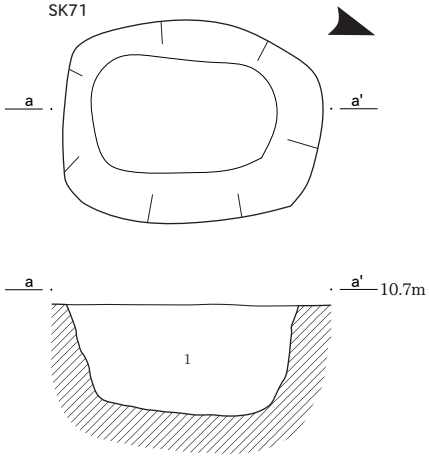
1　暗灰色粘質シルト　しまりやや弱、粘性やや弱、マンガン含む

1　暗灰色粘質シルト　しまりやや弱、粘性やや弱、炭化物含む
2　褐色粘質シルト　しまりやや弱、粘性やや強
3　明褐色粘質シルト　しまりやや弱、粘性やや強

1　暗青灰色粘土　しまりやや弱、粘性中、炭化物極少量含む
2　青灰色粘土　しまりやや弱、粘性やや強

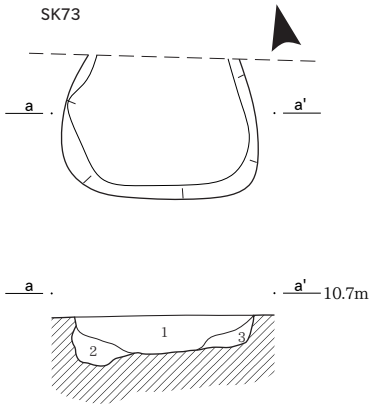
0　(1：40)　2m

SK71



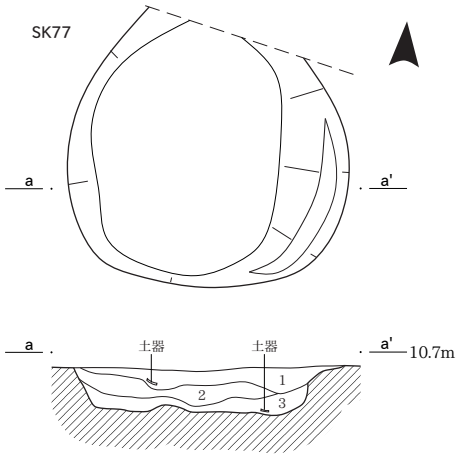
1　灰色粘質シルト　暗灰色粘土ブロックをマーブル状に多量に含む、しまりやや弱、粘性やや弱

SK73



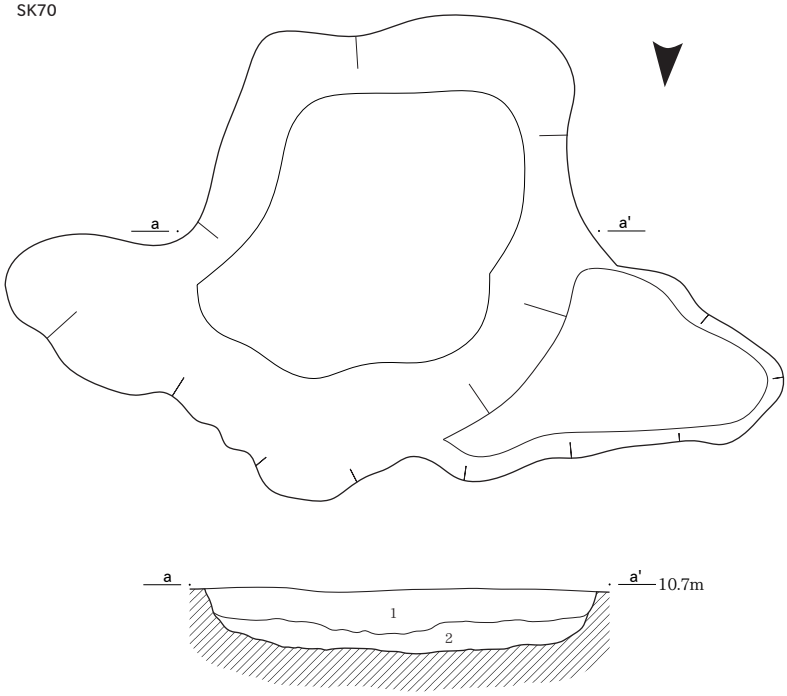
1　褐色シルト
2　黒褐色土
3　明褐色シルト

SK77



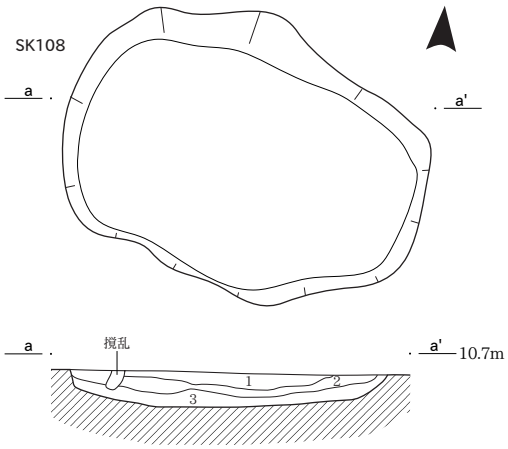
1　明褐色粘質シルト　しまりやや強、粘性中
2　暗灰色粘質シルト　しまり中、粘性やや強、炭化物を非常に多く含む
3　暗灰色粘質シルト　しまりやや弱、粘性強

SK70



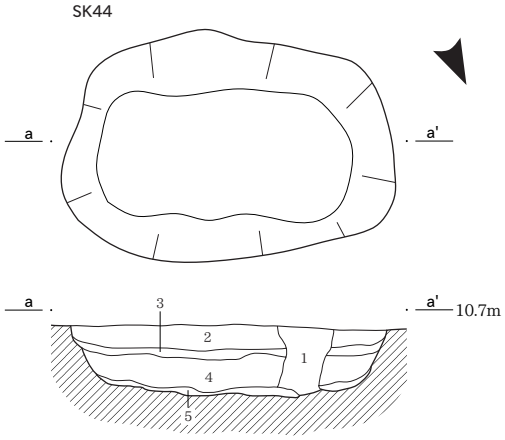
1　青灰色粘土で暗褐色粘土が混じる　炭化物多、酸化鉄沈着、しまり中、粘性中
2　青灰色粘土　炭化物少量含む、しまりやや弱、粘性やや強

SK108



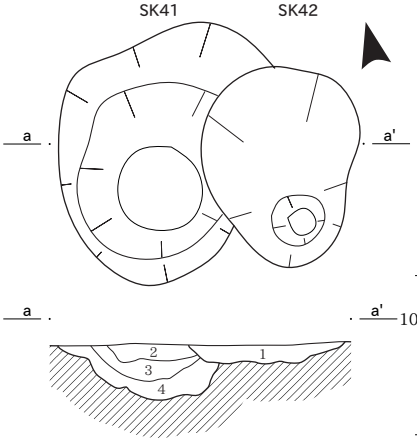
1　暗青灰色粘土　しまりやや強、粘性中、炭化物多く含む
2　青灰色粘土　しまりやや弱、粘性やや強
3　暗青灰色粘土　しまり弱、粘性やや強

SK44



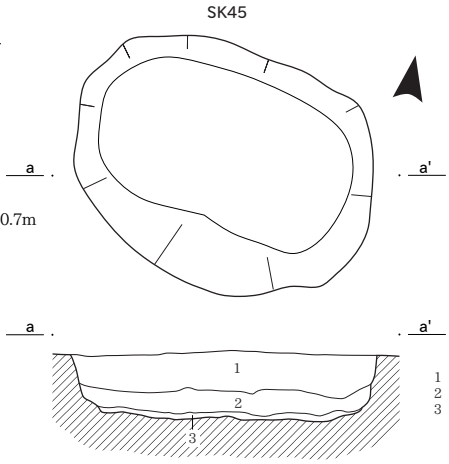
1　灰色粘質シルト　炭化物あり、しまり中、粘性やや強
2　灰色粘土　炭化物多、しまりやや強、粘性強
3　黒色炭化物層　焼土少量、しまり中、粘性中
4　黄褐色粘土　炭化物多、焼土少量、酸化鉄沈着、しまり中、粘性中
5　黒色炭化物層　焼土少量、しまり中、粘性やや弱

SK41　SK42



SK41
2 暗灰色粘土　しまりやや強、粘性中
3 灰色粘土　しまりやや強、粘性中
4 黄褐色粘土　しまり中、粘性やや強、炭化物を少量含む
SK42
1 暗灰色粘土　しまりやや強、粘性中

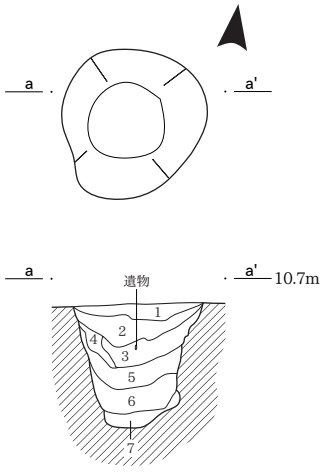
SK45



1　灰色粘土　炭化物多、しまりやや強、粘性強
2　黄褐色粘土　炭化物多（1層より多）、焼土少量、しまりやや強、粘性中
3　黒色炭化物層　焼土少量、しまり弱、粘性やや弱

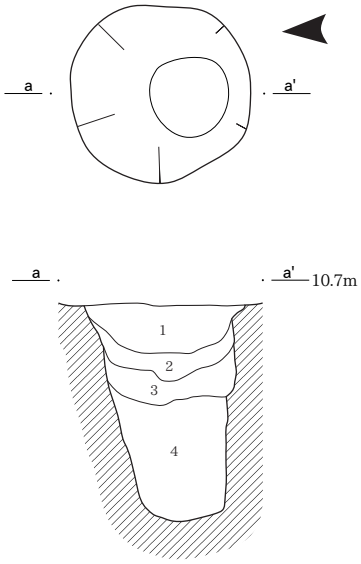
0　（1：40）　2m

SK22



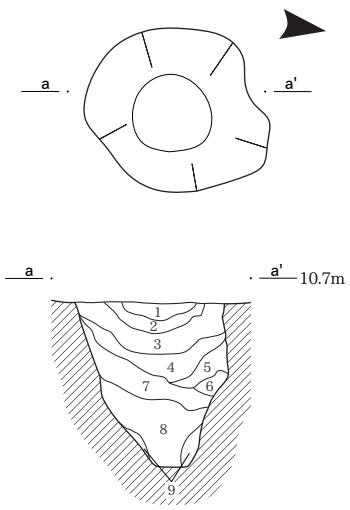
1　黒褐色シルト　しまり強、粘性やや弱
2　黒褐色粘土　明褐色シルト含む、しまりやや弱、粘性やや強
3　暗灰色粘土　明褐色ブロック含む、しまり中、粘性強
4　暗灰粘土　しまり中、粘性やや強3と5の中間の土
5　灰色粘土　明褐色ブロック含む、しまり中、粘性強
6　灰色粘土　明褐色ブロック含む、しまり中、粘性強
7　明褐色粘土　灰色粘土混じり土、しまり中、粘性強

SK29



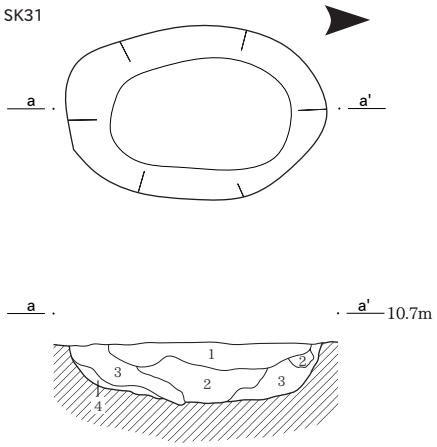
1　黒褐色シルト　しまり強、粘性中、明褐色ブロック少量含む
2　黒褐色粘土　しまり中、粘性強、明褐色ブロック含む
3　黒褐色粘土　しまり中、粘性強、明褐色ブロック含む、
　2層より黒い
4　黒褐色粘土　灰白色粘土を含む、しまり中、粘性強

SK30



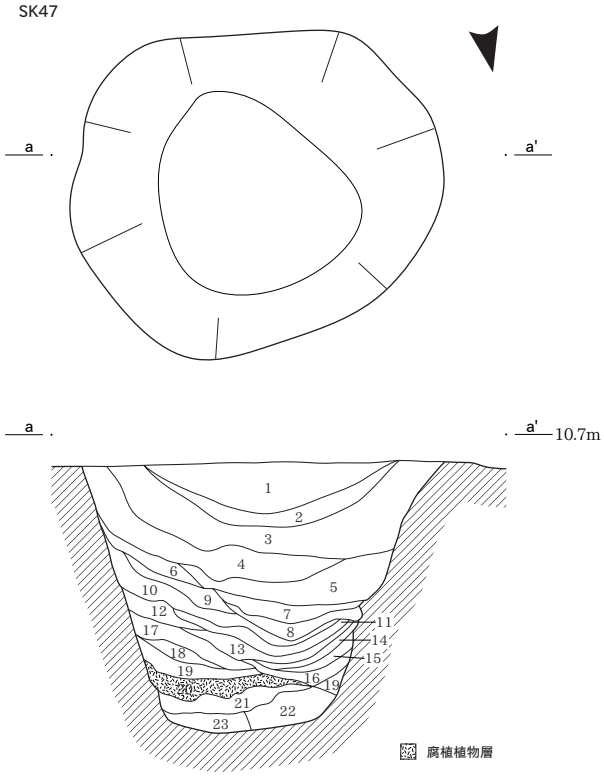
1　黒褐色粘質シルト　しまり強、粘性中
2　明褐色シルト　しまり強、粘性弱
3　黒褐色粘質シルト　明褐色ブロック含む、しまり中、粘性やや強
4　黒褐色粘質シルト　明褐色ブロック少ない、しまり中、粘性強
5　黒褐色粘質シルト　明褐色シルト混じり土、しまり中、粘性強
6　黒褐色粘土　明褐色ブロック含む、しまり中、粘性強
7　黒褐色粘質シルト　明褐色ブロック多く含む
8　黒褐色粘土　灰白色粘土含む、しまり中、粘性強
9　暗灰粘土　灰白粘土、明褐色シルト含む

SK31



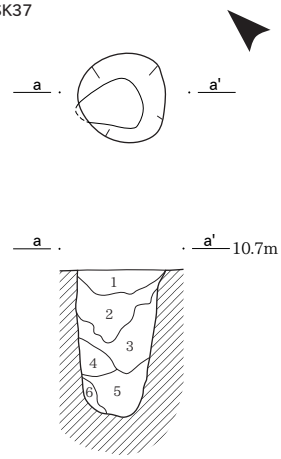
1　明褐色粘質シルト　しまり強、粘性弱、灰色粒土ブロック含む
2　青灰色粘土　しまり中、粘性やや弱、明灰粘土ブロック多く含む
3　青色粘土　青灰色シルトブロック含む、しまり中、粘性強
4　青灰粘土　しまり中、粘性強、灰色粘土ブロック含む

SK47



1　灰色粘土　しまりやや強、粘性やや弱
2　灰色粘土　しまり中、粘性やや強
3　灰色粘土　しまりやや弱、粘性中、マンガン沈着
4　暗青灰色粘土　しまり弱、粘性中、炭化物多く含む、特に下部に多い
5　暗青灰色粘土　しまりやや弱、粘性やや強、マンガン多く沈着
6　暗青灰色粘土　しまりやや弱、粘性やや強
7　暗灰色粘土　しまり弱、粘性やや強
8　暗灰色粘土　しまりやや弱、粘性やや強、青灰色粘土ブロック（地山崩落土）多く含む
9　暗青灰色粘土　しまりやや弱、粘性やや強、青灰色粘土ブロック（地山崩落土）多く含む
　底面に青灰色シルトブロック
10　暗灰色粘土　しまり弱、粘性中、青灰色粘土ブロック（地山崩落土）多く含む
　底面に青灰色シルトブロック
11　青灰色粘質シルト　しまりやや弱、粘性中、暗灰色粘土ブロック状に含む
12　青灰色シルト　しまりやや弱、粘性やや弱、地山崩落土
13　暗灰色粘土　しまりやや弱、粘性やや強、明灰色シルト（地山）ブロック状に含む
14　明青灰色粘質シルト　しまりやや弱、粘性中
15　暗灰色粘土　しまりやや弱、粘性やや強
16　暗灰色粘土・青灰色シルト混じり　しまりやや弱、粘性やや強
17　暗褐色粘土　しまりやや弱、粘性やや強、青灰色粘土混じる、炭化物少量含む
18　暗褐色粘土　しまりやや弱、粘性中、炭化物（材）少量含む
19　暗褐色粘土　しまりやや弱、粘性やや強、青灰色粘土混じる
20　暗褐色粘土　しまりやや弱、粘性中、植物遺体（腐植）炭化物多く含む
21　暗褐色粘土　しまりやや弱、粘性中、青灰色ブロック含む
22　暗褐色粘土・青灰色シルト混じり土　しまりやや弱、粘性中
23　青灰色シルト　しまり中、粘性中、暗褐色粘土含む

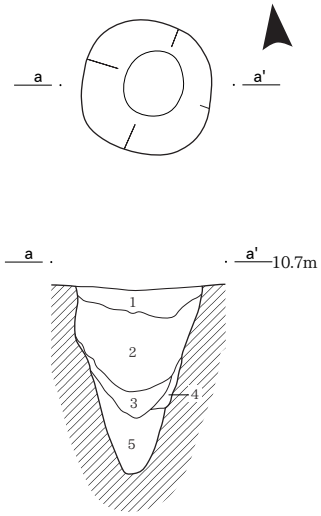
SK37



1　黒褐色粘質シルト　明褐色ブロックを含む、しまりやや強、粘性やや弱
2　黒褐色粘質シルト　砂混じり、しまり弱、粘性やや強
3　黒褐色粘土　明褐色ブロック多量に含む、しまりやや弱、粘性強
4　灰色粘土　明褐色ブロック多量に含む、しまり弱、粘性強
5　灰白色粘土　しまり弱、粘性強
6　明灰色粘土　しまり弱、粘性強

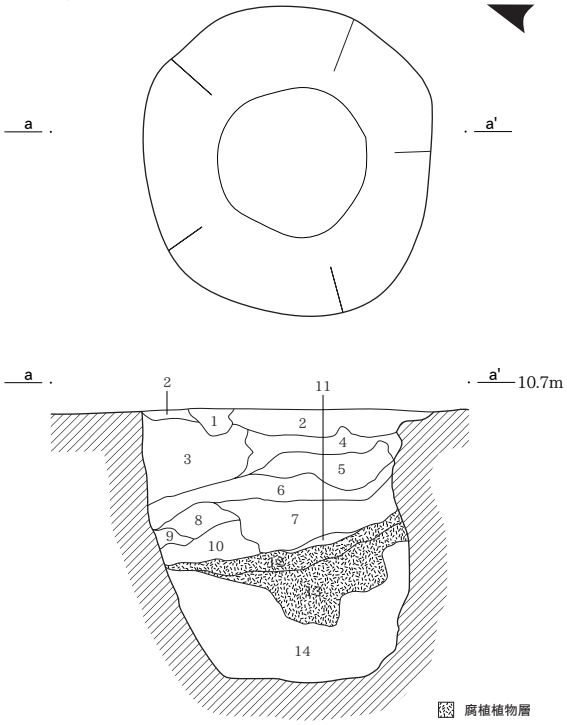
0　（1：40）　2m

SK46



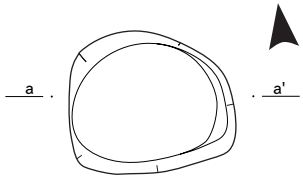
1　暗灰色粘土　明青灰色シルトブロック含む、しまりやや強、粘性中
2　黒褐色粘土　砂混じり、明青灰色シルトブロック多く含む、しまり中、粘性強
3　黒褐色粘土　明青灰色シルトブロック含む、しまり中、粘性強
4　黒褐色粘土　明青灰色シルトブロック多量に含む、しまり中、粘性強
5　暗灰色粘土　明青灰色ブロック含む、しまりやや弱、粘性極強

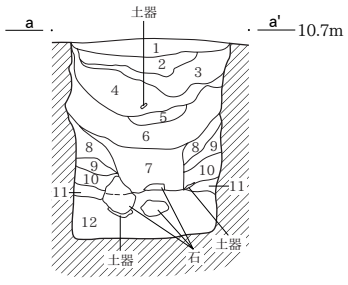
SK54



1　灰色粘質シルト　しまり中、粘性やや強
2　灰色シルト　しまりやや強、粘性中
3　明赤褐色粘質シルト　灰色粘土含む、地山崩土、しまりやや強、粘性弱
4　暗灰色粘質シルト　褐色シルトブロック含む
5　灰色粘土　褐色シルトブロック多量に含む、しまり中、粘性やや弱
6　暗褐色粘土　明赤褐色ブロック含む、しまりやや弱、粘性やや強
7　黒褐色粘土　明青灰色ブロック含む
8　明赤褐色粘土　地山崩落土
9　黒褐色粘土
10　明青灰色粘質シルト　やや灰色を帯びる
11　明褐色粘質シルト
12　黒褐色粘土　腐植物多く含む
13　黒褐色粘土　腐植物、木片多く含む
14　明青灰色粘土　シルト含む

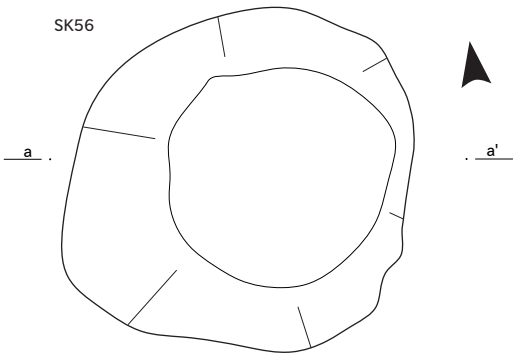
SK55

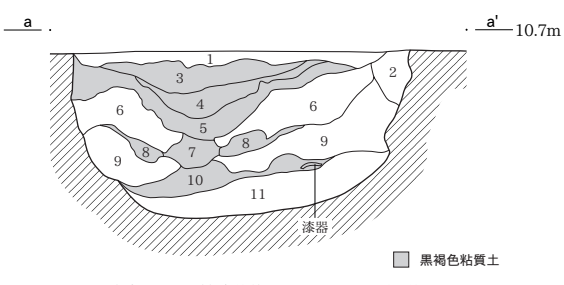




1　暗灰色シルト　しまり強、粘性中
2　灰色粘質シルト　しまり強、粘性弱
3　暗灰色粘質シルト　しまり中、粘性中
4　灰色粘土　しまり中、粘性中
5　灰色粘土　しまりやや弱、粘性強
6　暗灰色粘土　しまり弱、粘性強
7　暗灰色粘土　灰色ブロック混じる
8　灰色粘土
9　褐色粘土　灰色土ブロック混じる
10　褐色粘土
11　暗灰色粘土
12　灰色粘土

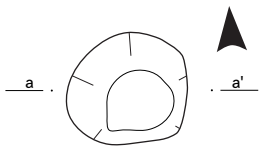
SK56

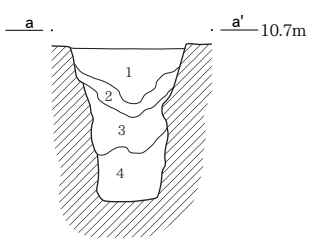




1　明黄褐色シルト　暗褐色粘質シルト含む、しまり強、粘性弱
2　青灰色シルト
3　黒褐色粘質シルト　しまりやや強、粘性やや弱
4　黒褐色粘質シルト　しまり中、しまりやや強
5　黒褐色粘土　褐色ブロック含む、しまり中、粘性強
6　明赤褐色粘土　黒褐色土混じり、しまり中、粘性強、地山崩落土
7　黒褐色粘土　青灰粘土ブロック混じり、しまりやや弱、粘性強
8　黒褐色粘土　明赤褐色粘土ブロック混じる、しまりやや弱、粘性強
9　明赤褐色粘土　しまり中、粘性強、地山崩落土
10　青灰色粘土　黒褐色粘土を含む、しまりやや弱、粘性強
11　明赤褐色粘土　しまりやや弱、粘性強、地山崩落土

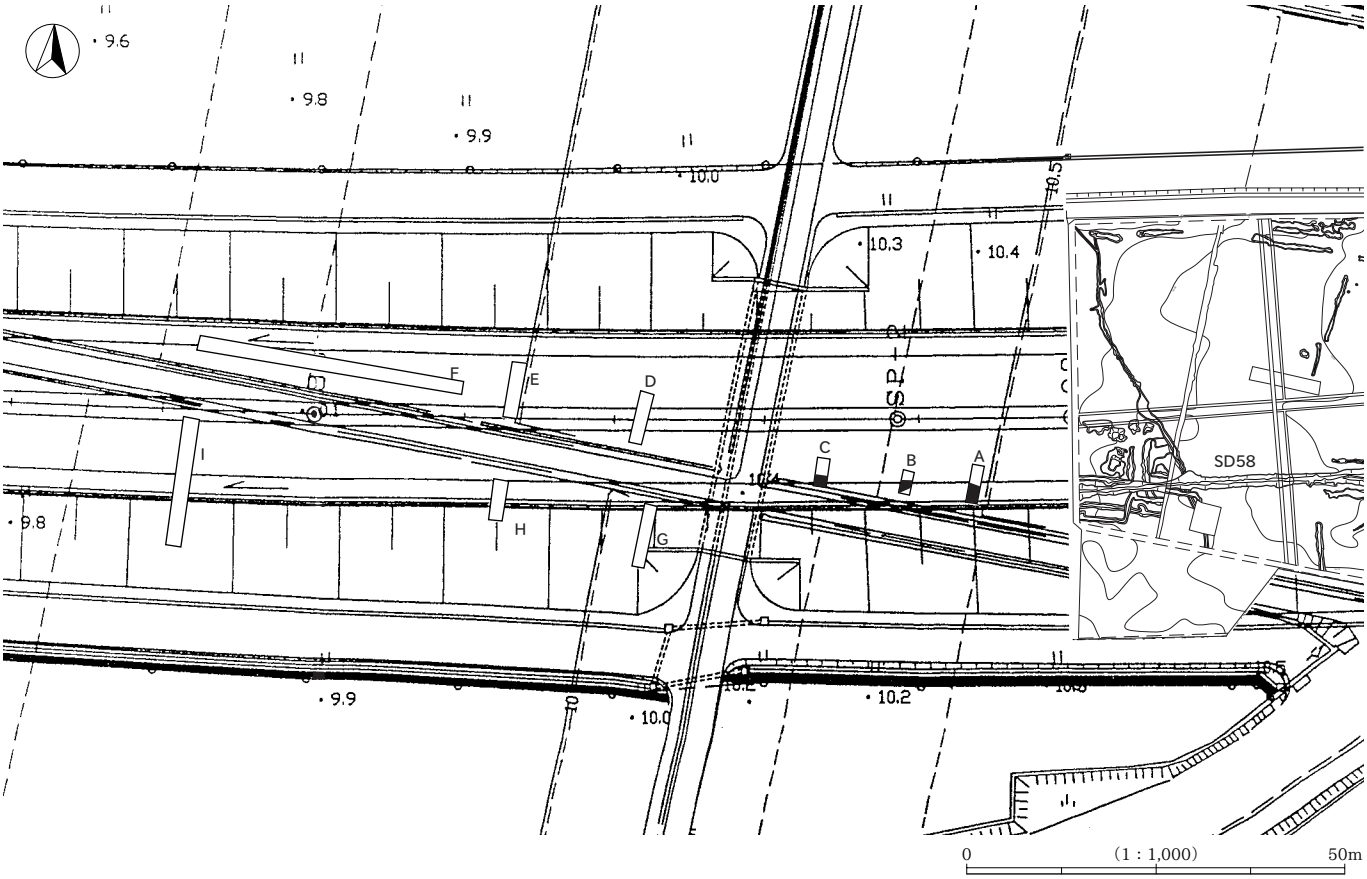
SK59



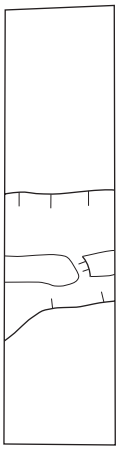


1　暗灰色粘土
2　灰白色粘質シルト
3　暗灰色粘土
4　暗灰色粘土（3層より明るい）

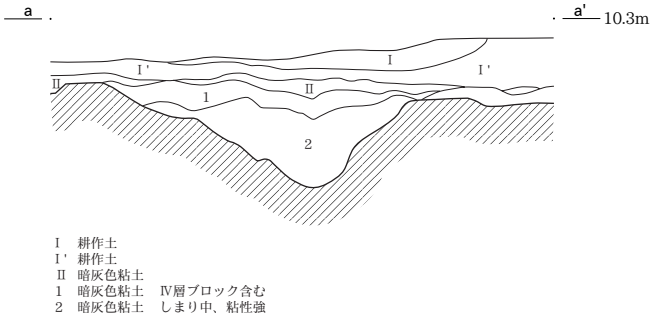
0　（1：40）　2m



SD58追加調査トレンチ位置図（1/1,000）

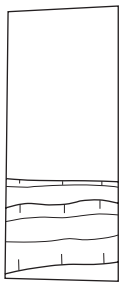


Aトレンチ平面図（1/100）

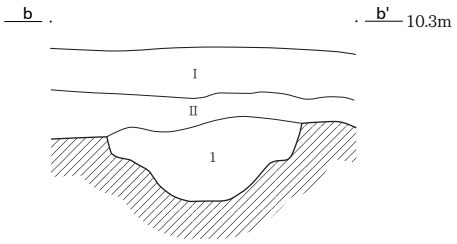


I　耕作土
I'　耕作土
II　暗灰色粘土
1　暗灰色粘土　Ⅳ層ブロック含む
2　暗灰色粘土　しまり中、粘性強

Aトレンチ土層断面図（1/40）



Cトレンチ平面図（1/100）

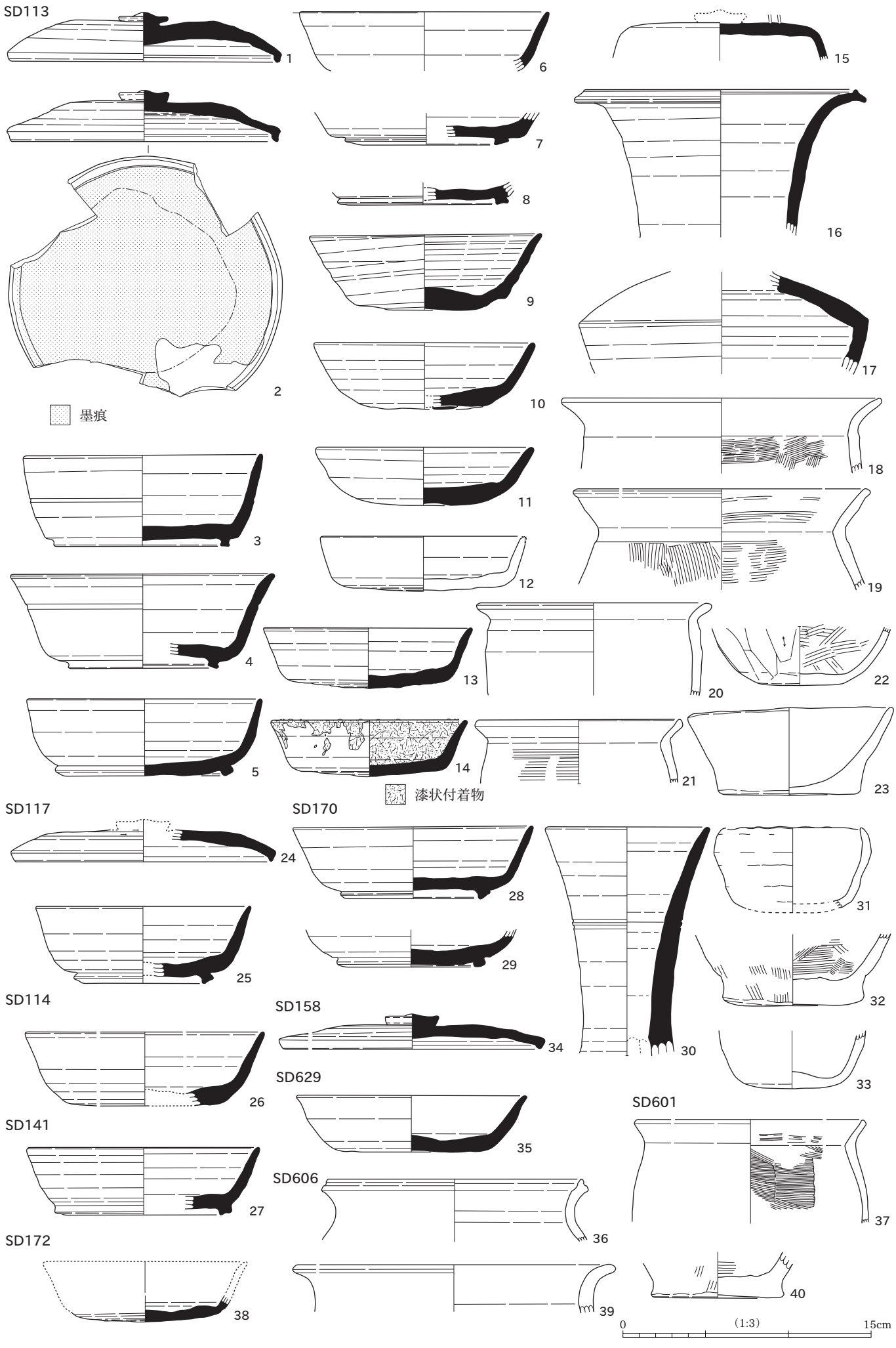


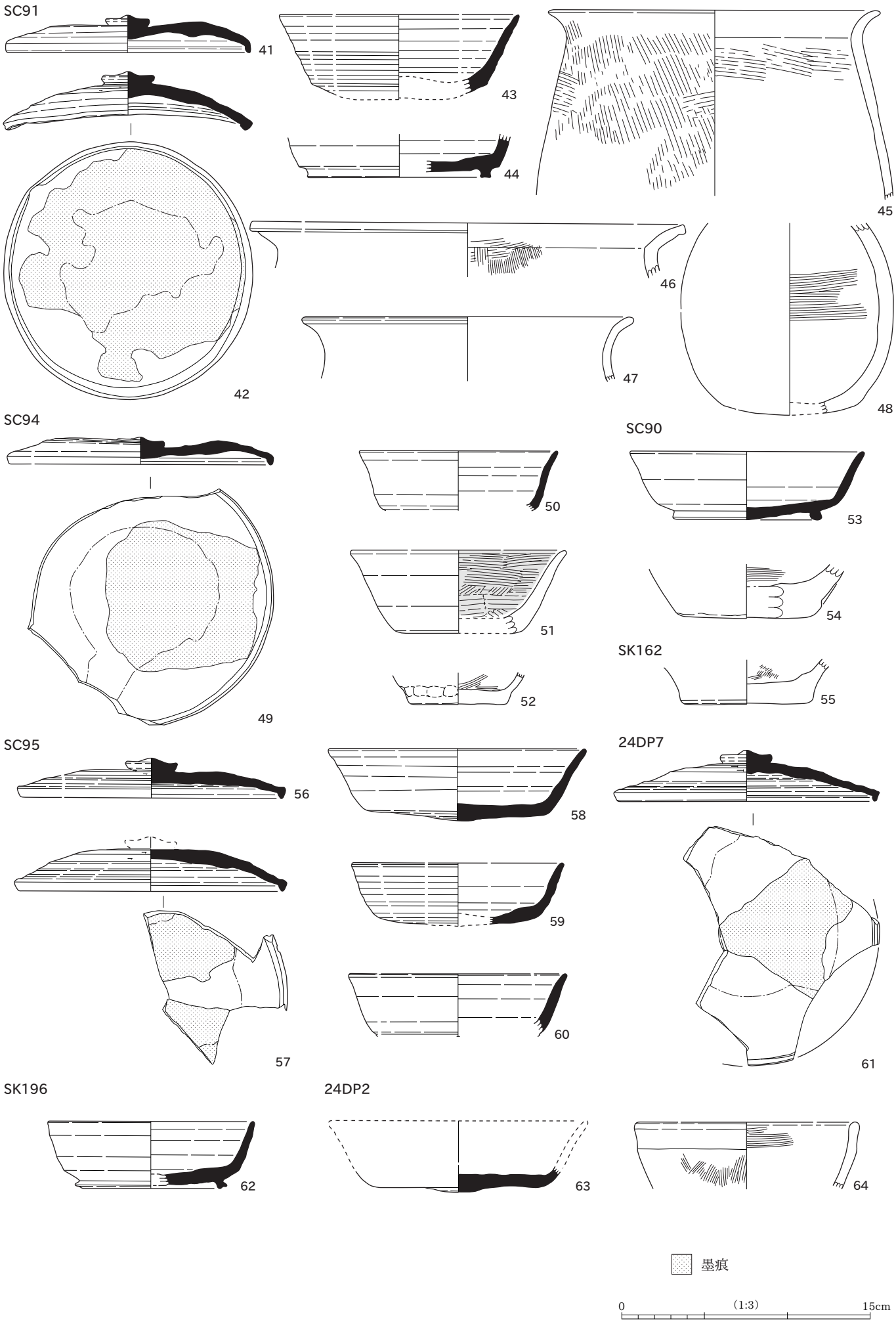
I　耕作土
II　暗灰色粘土

Cトレンチ土層断面図（1/40）

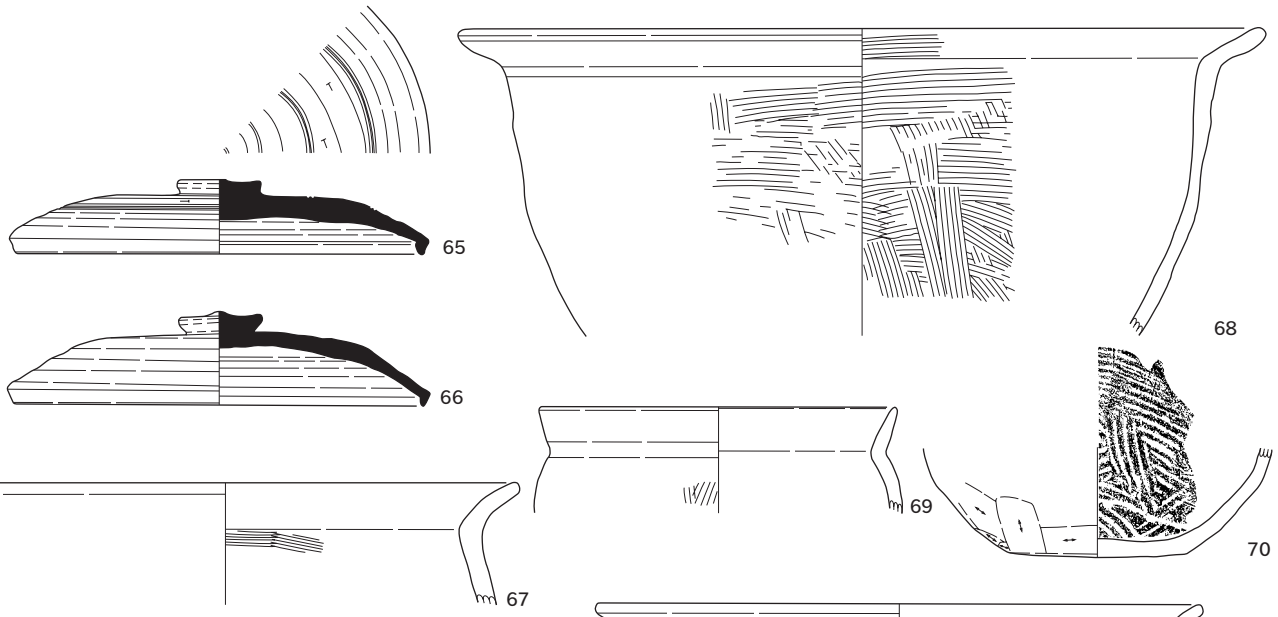
0　平面図（1：100）　5m

0　土層断面図（1：40）　2m

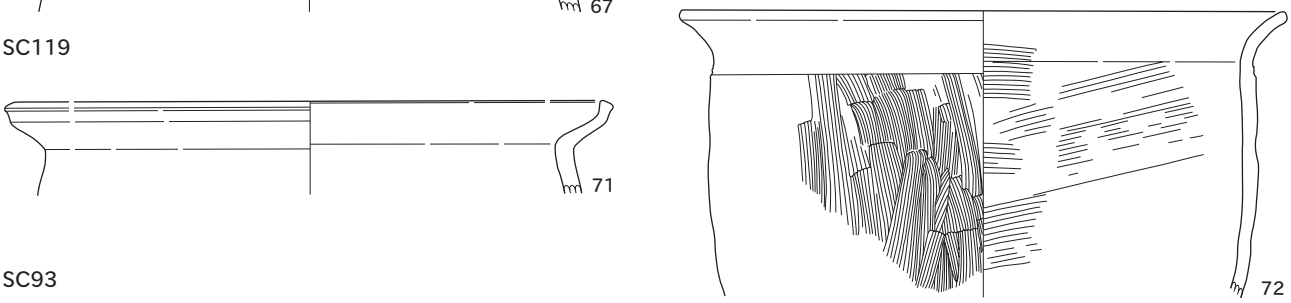

SD113
1
2
墨痕
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
漆状付着物
15
16
17
18
19
20
21
22
23
SD117
24
25
SD114
26
SD141
27
SD170
28
29
SD158
34
SD629
35
SD606
36
SD172
38
39
30
31
32
33
SD601
37
40
0
(1:3)
15cm


SC91
41
43
44
45
42
46
47
48
SC94
49
50
51
52
SC90
53
54
SK162
55
SC95
56
57
58
59
60
24DP7
61
SK196
62
24DP2
63
64
墨痕
0
(1:3)
15cm

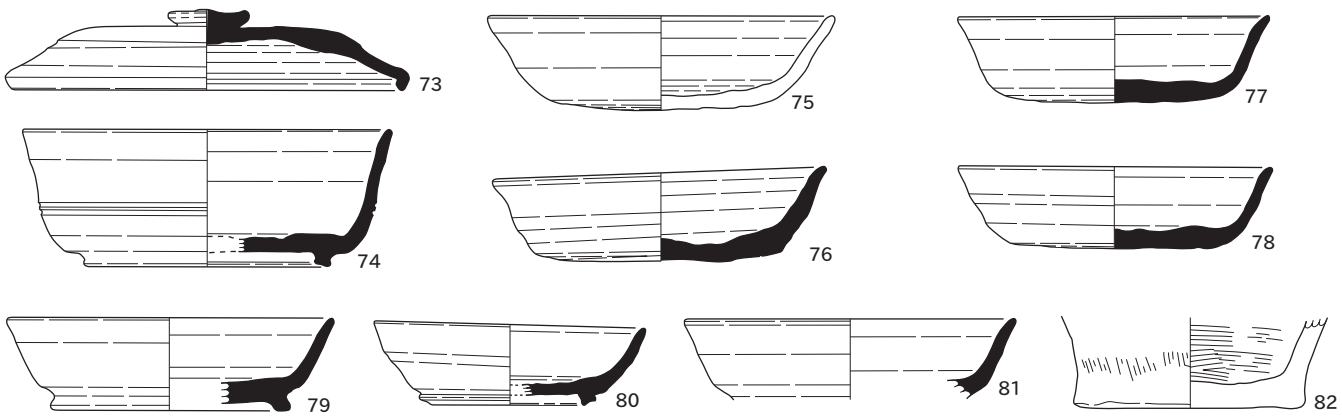
SC49

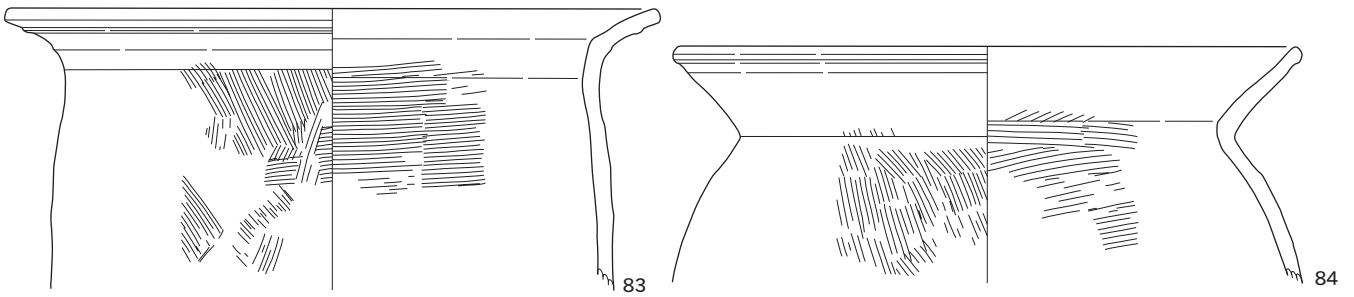


SC119

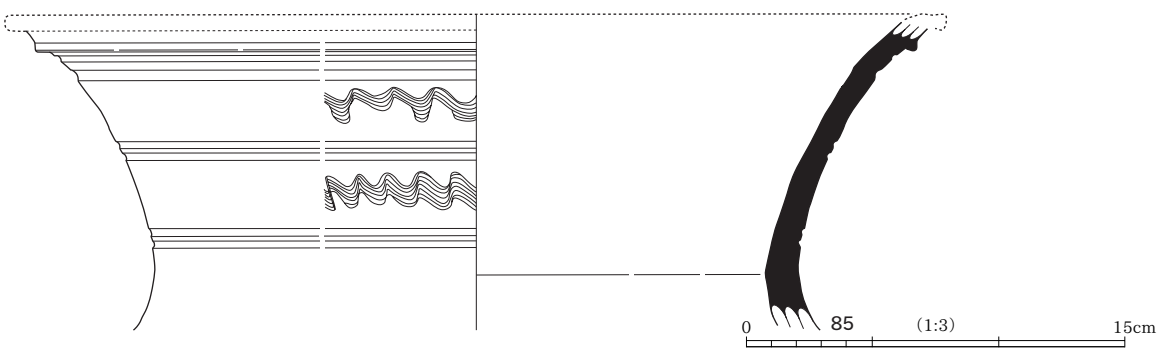


SC93

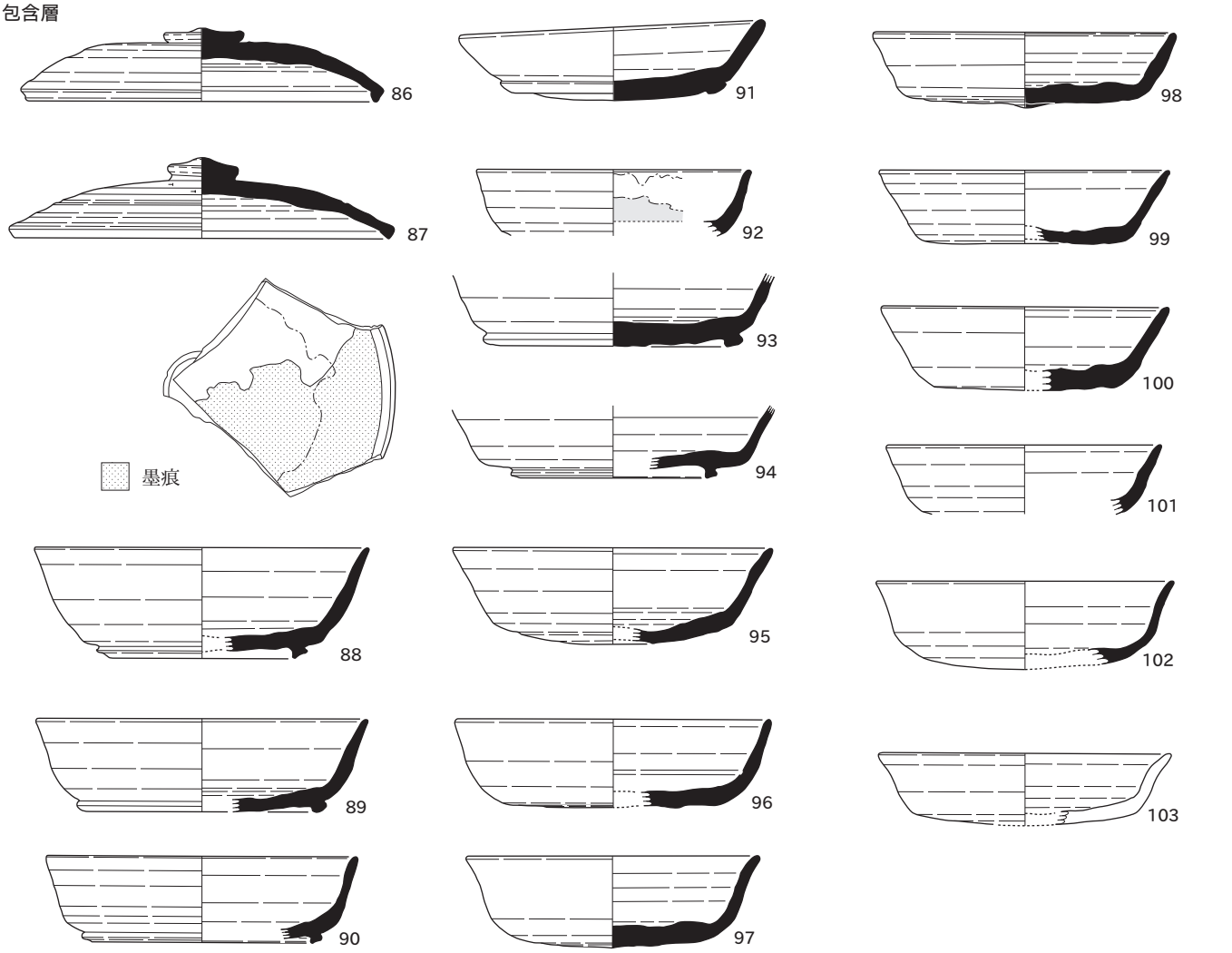




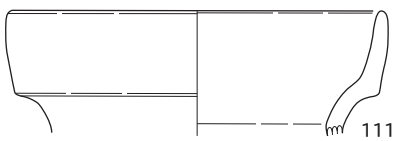
包含層



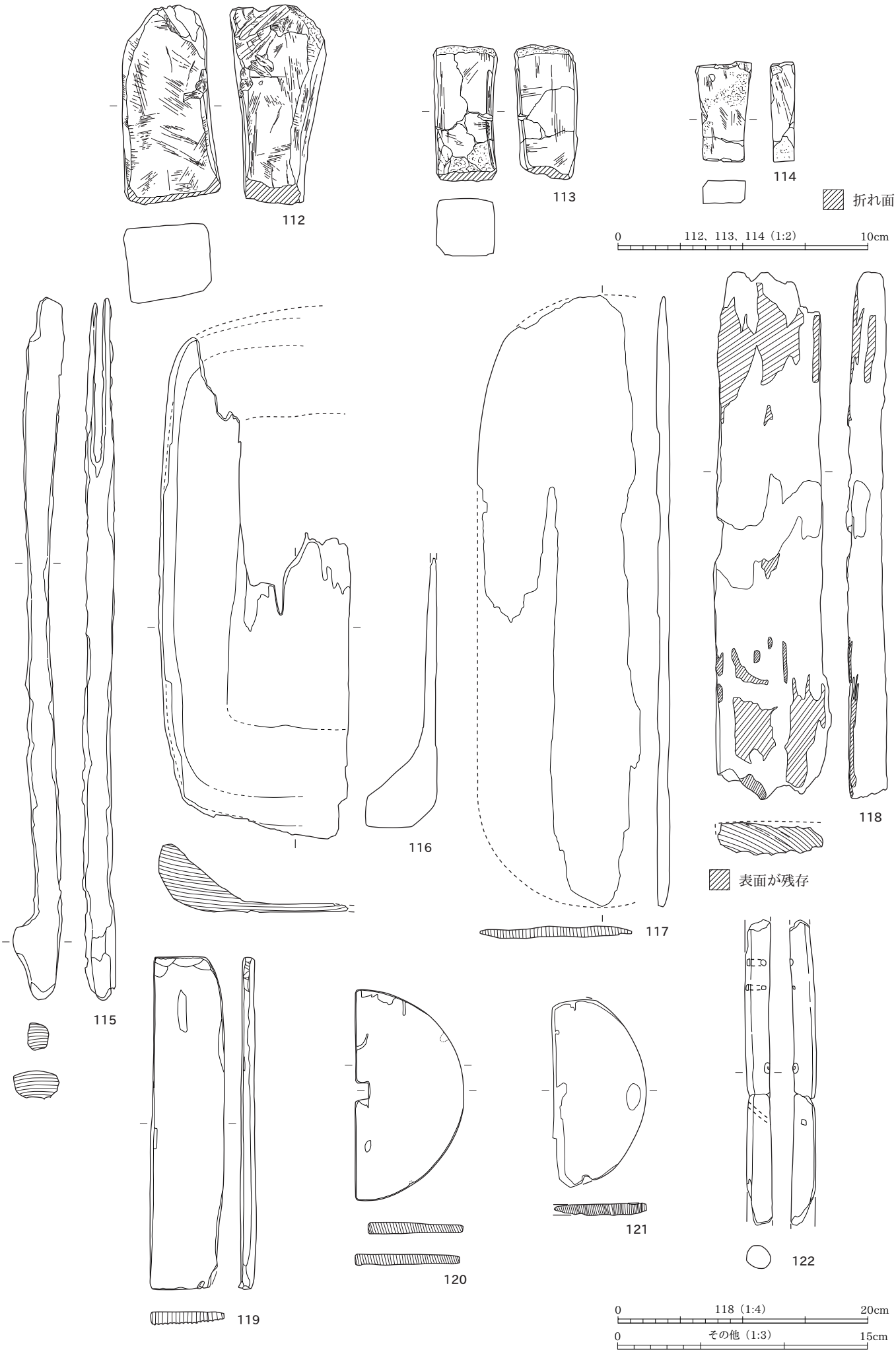
包含層

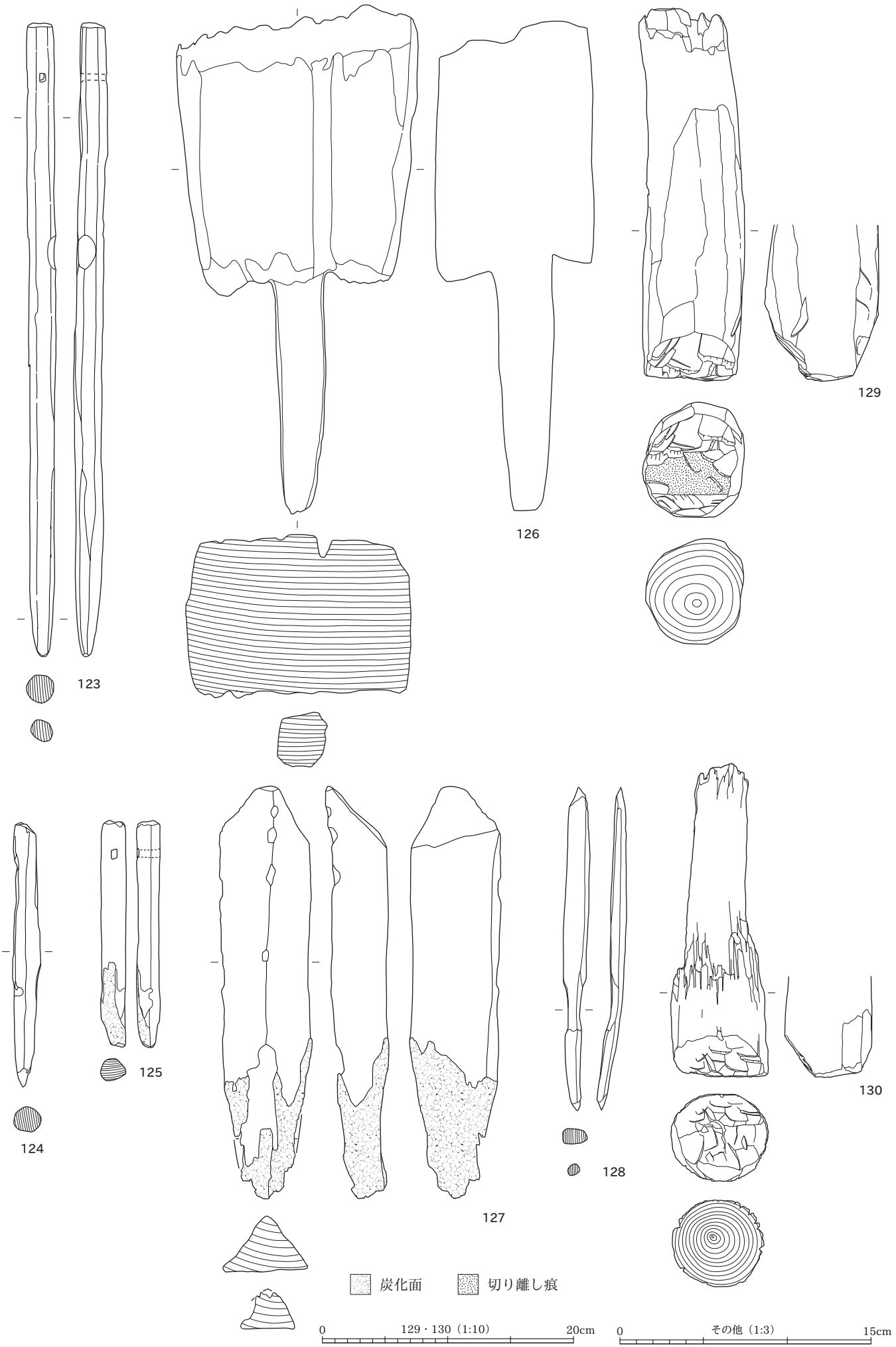


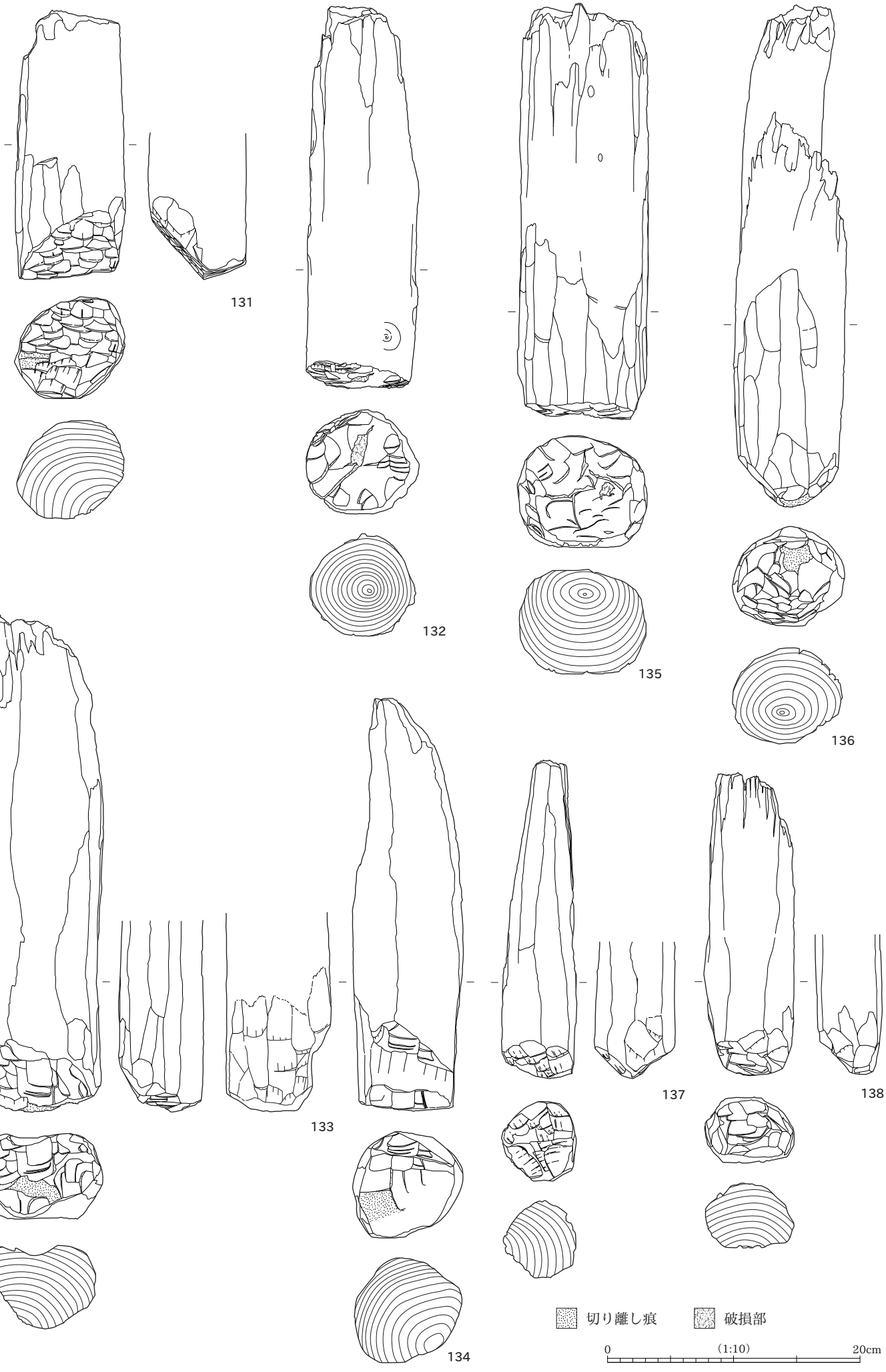
下層出土の古式土師器

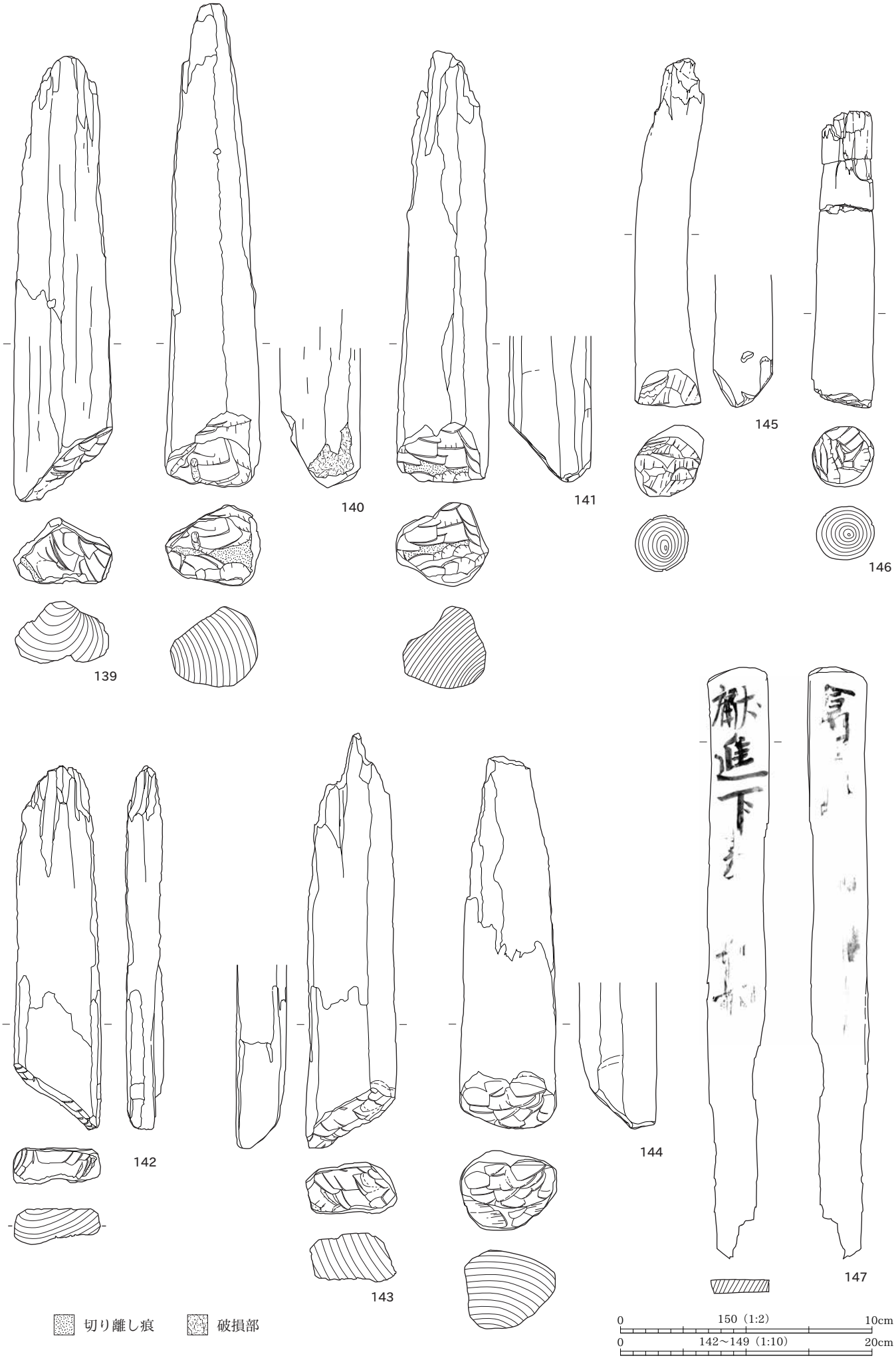


0　(1:3)　15cm

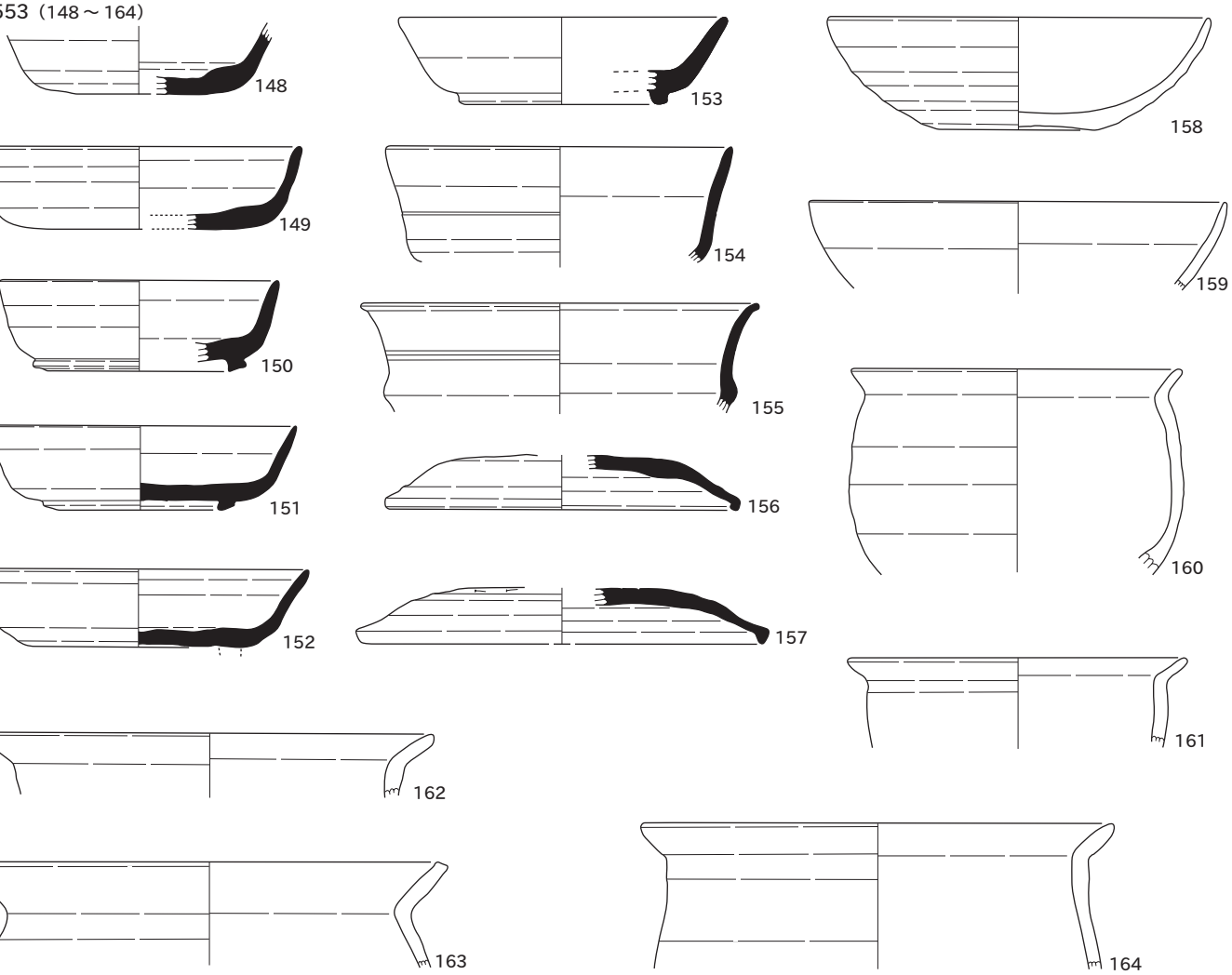

112
113
114
折れ面
0　112、113、114（1:2）　10cm
115
116
117
118
表面が残存
119
120
121
122
0　118（1:4）　20cm
0　その他（1:3）　15cm


123
124
125
126
127
128
129
130
炭化面
切り離し痕
0
129・130（1:10）
20cm
0
その他（1:3）
15cm

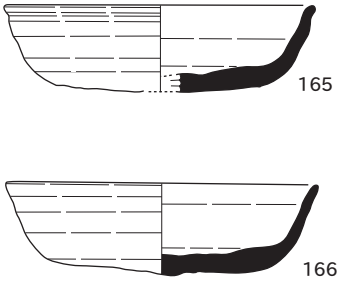

131
132
133
134
135
136
137
138
切り離し痕
破損部
0
(1:10)
20cm


139
140
141
142
143
144
145
146
147
切り離し痕
破損部
0　150（1:2）　10cm
0　142～149（1:10）　20cm

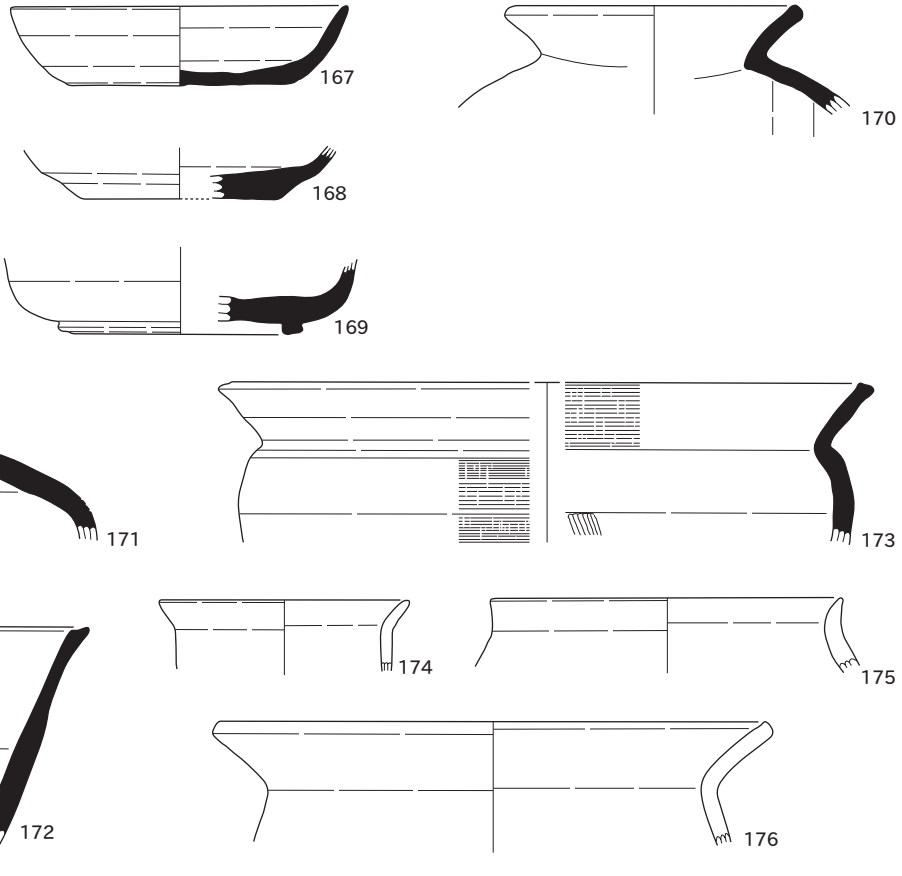
SK553（148～164）



SK554（165・166）

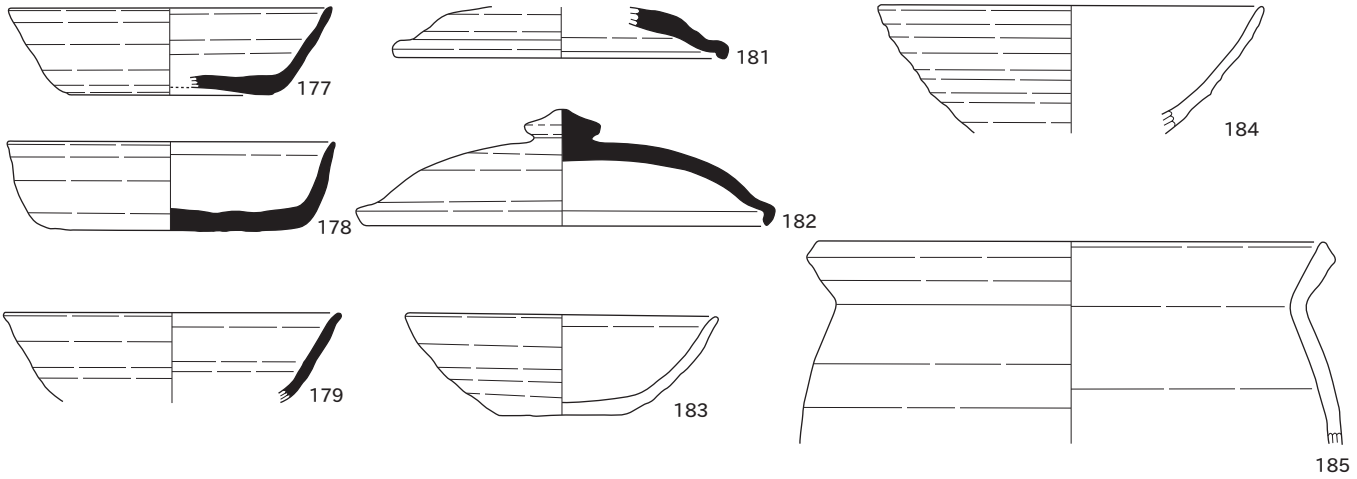


SK553・554　1層（167～176）

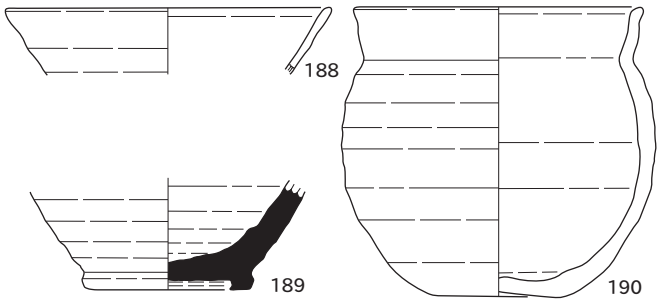


0　(1:3)　15cm

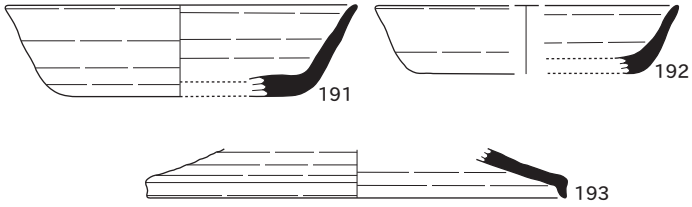
SK47（177～187）



SK55（188～190）

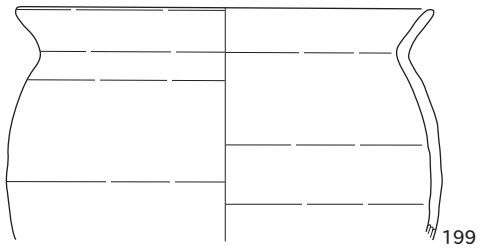


SK77（191～193）

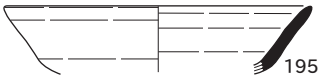


SK453

SK438

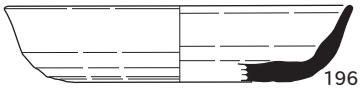


SK108

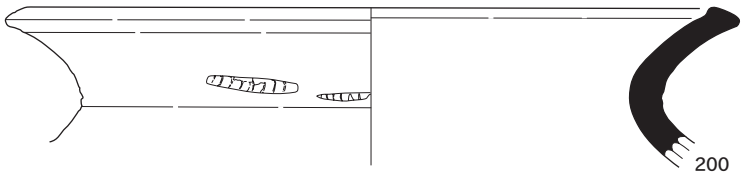


SD68（198・199）

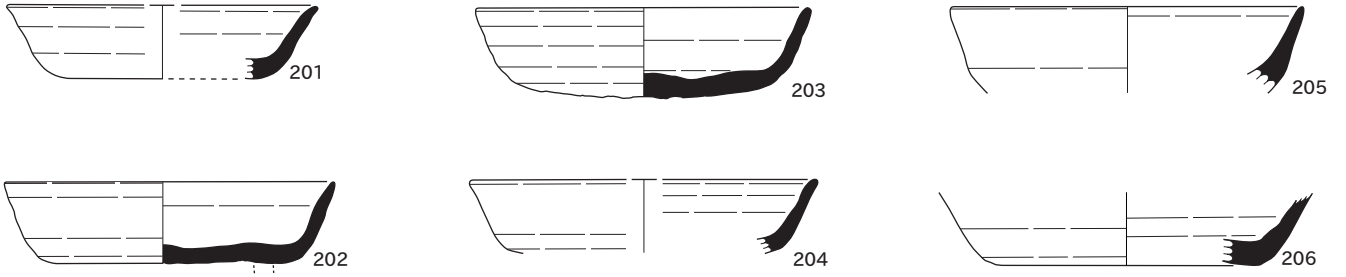
SD109



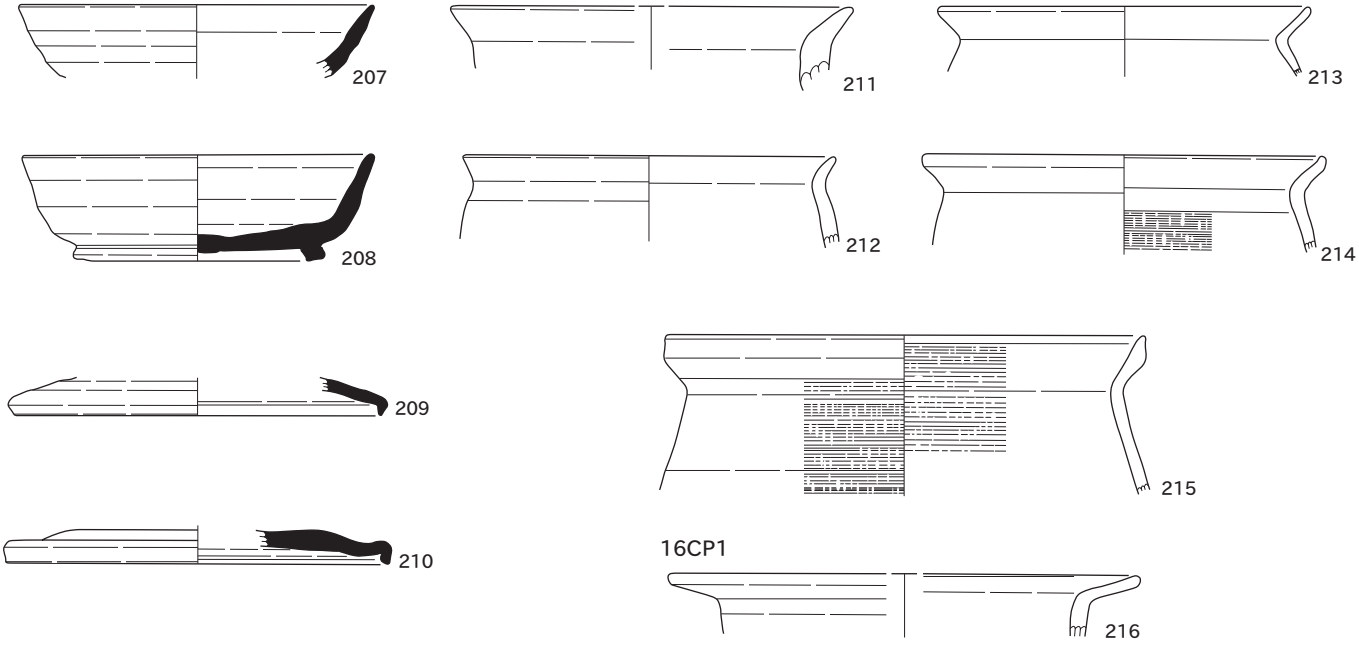
SD27



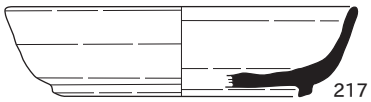
畑跡（201～206）



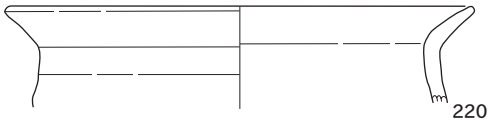
畑跡（207～215）



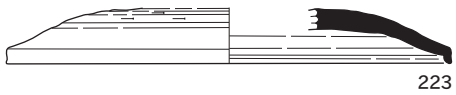
25AP3



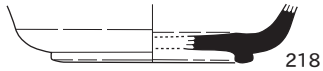
SD66



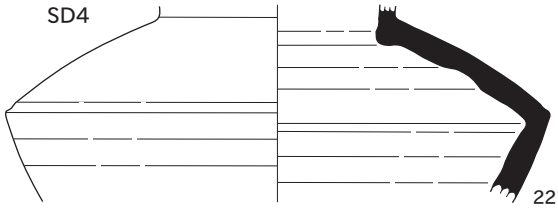
暗渠掘削出土土器（223～225）



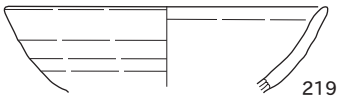
SD60



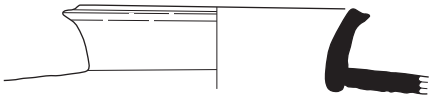
SD4



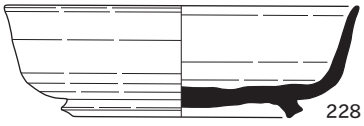
SD9

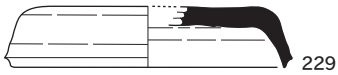


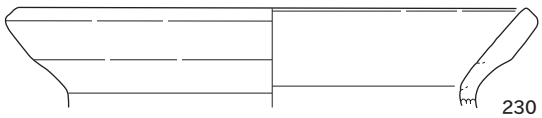
SD146



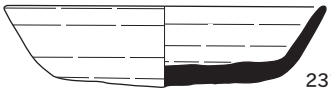
C区上層（226～230）

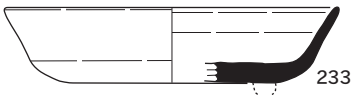


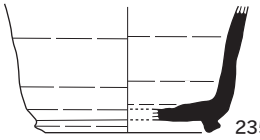


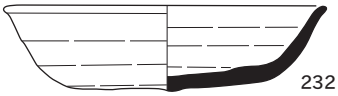


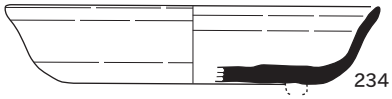
B区16列以東（231～236）

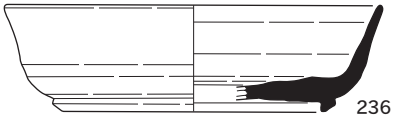






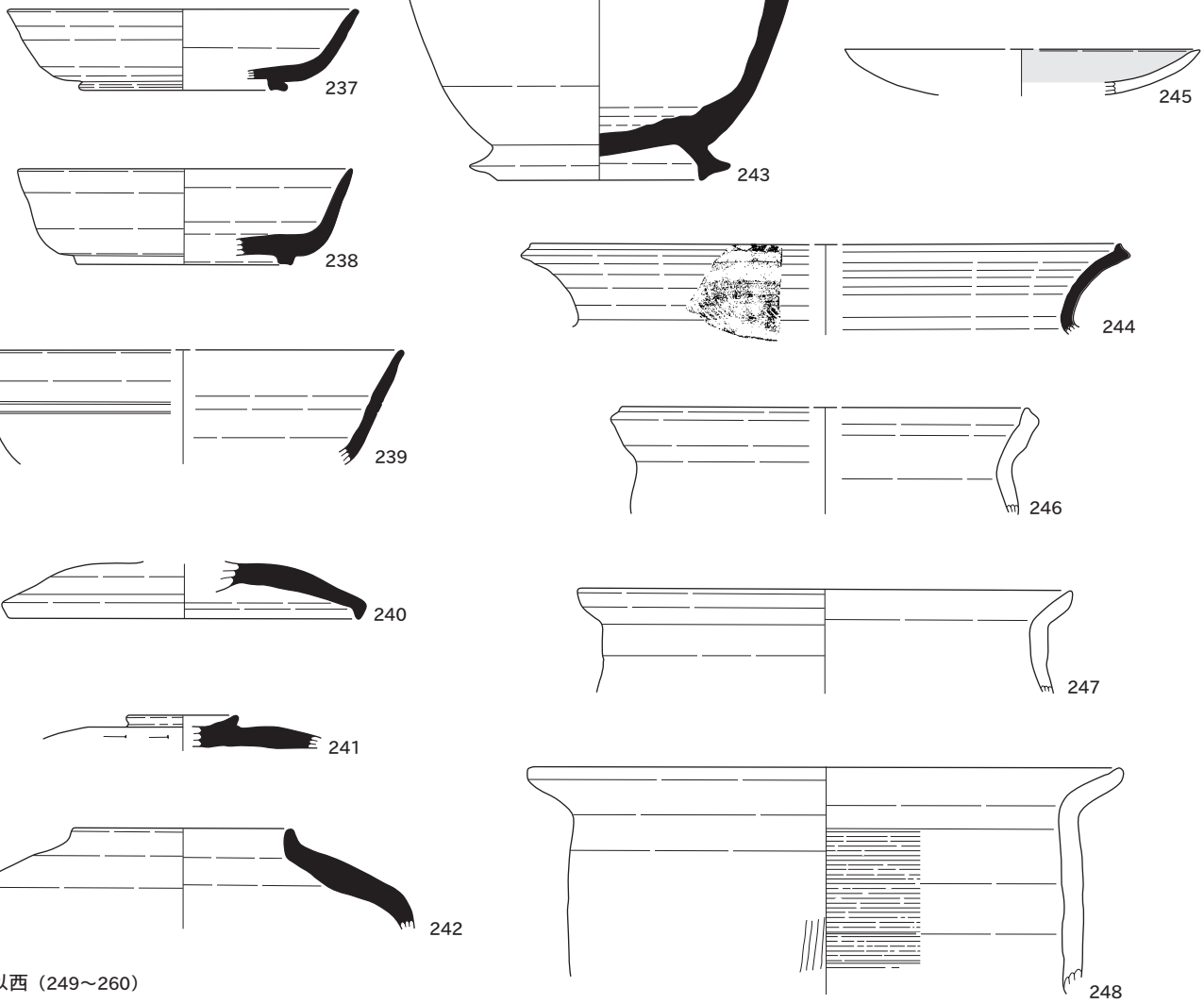




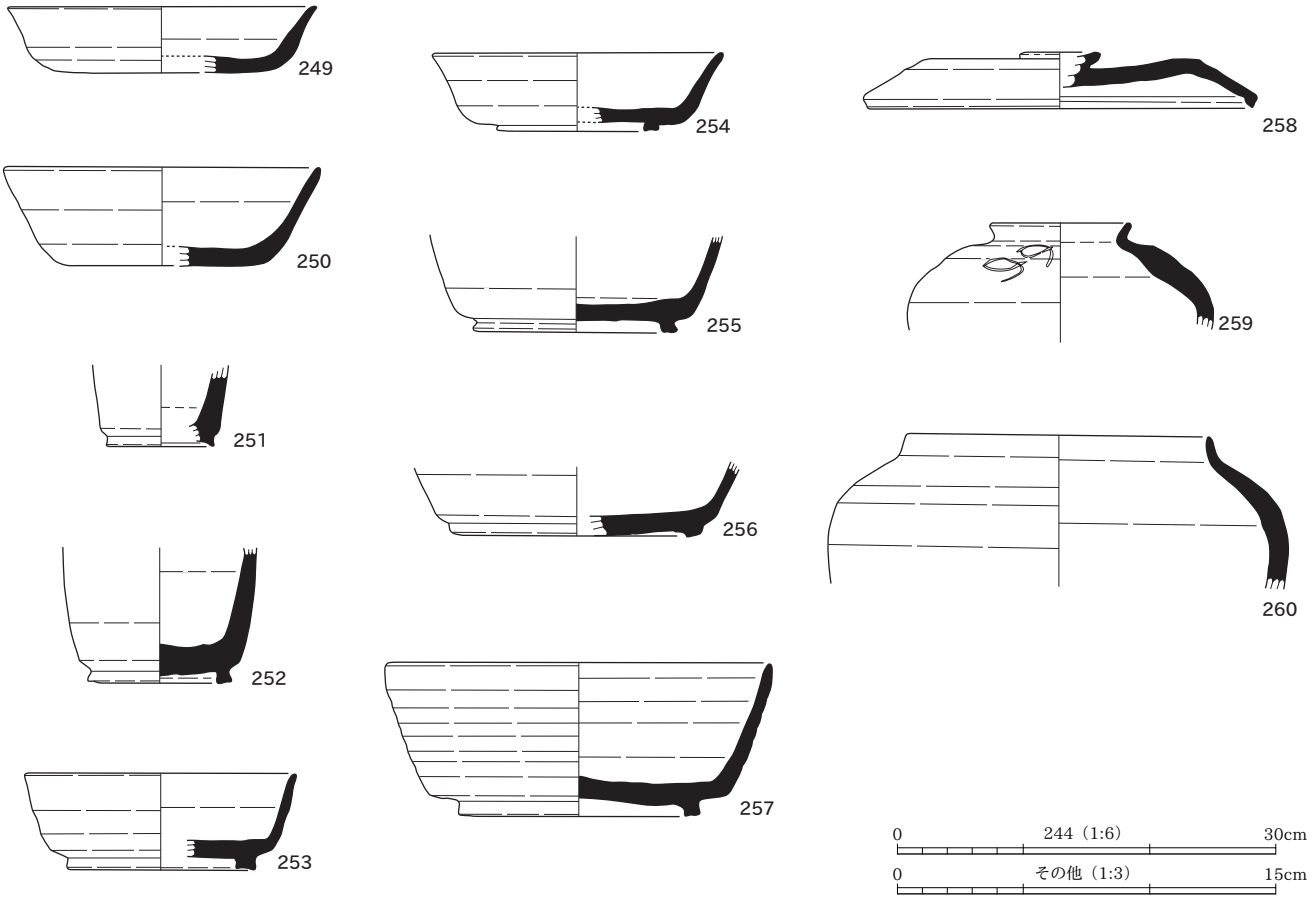


0　(1:3)　15cm

B区16列以東（237～248）



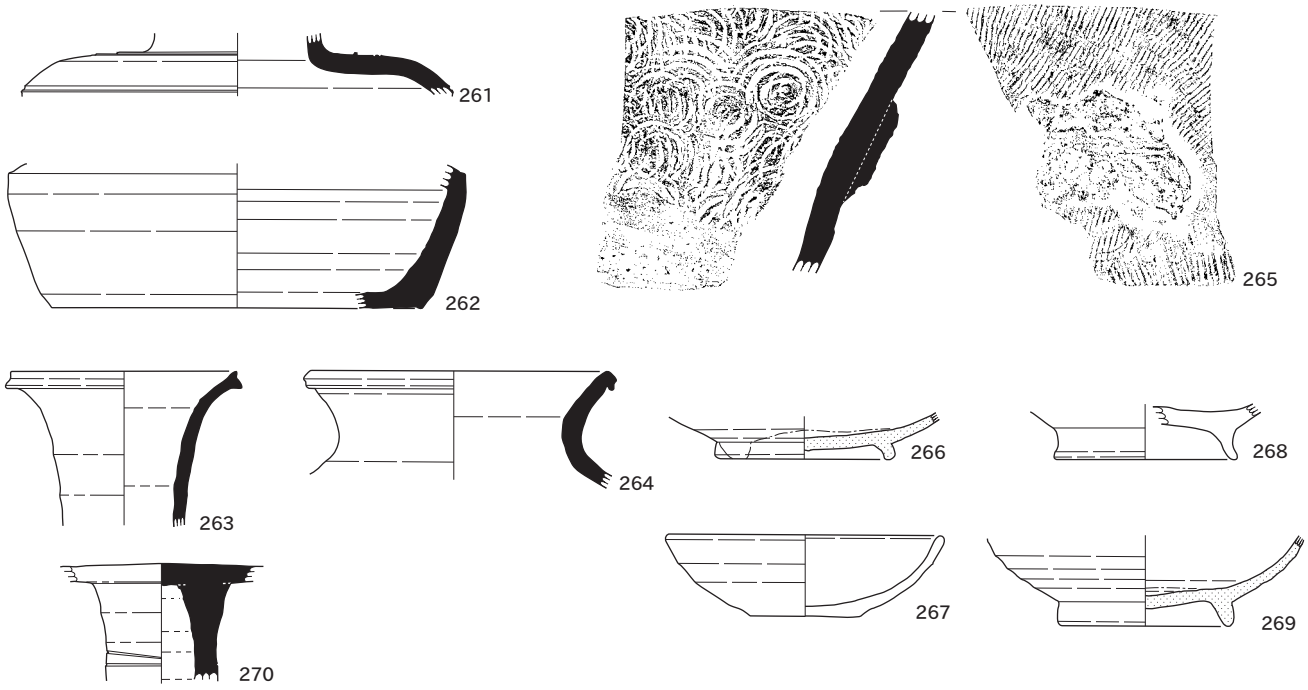
16列以西（249～260）



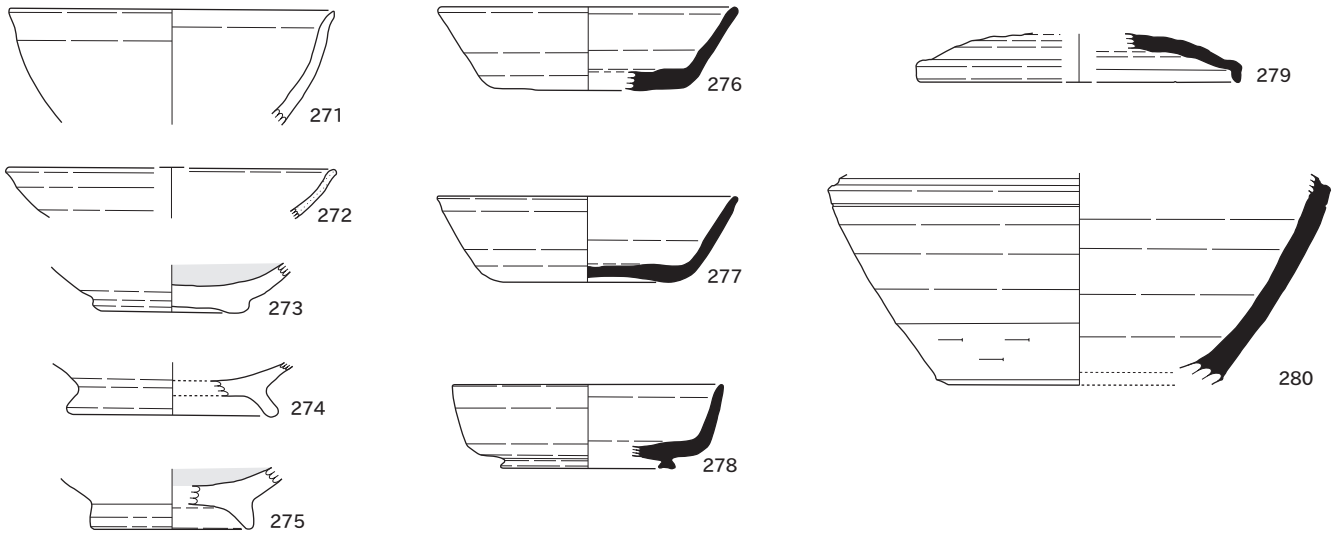
0　244（1:6）　30cm

0　その他（1:3）　15cm

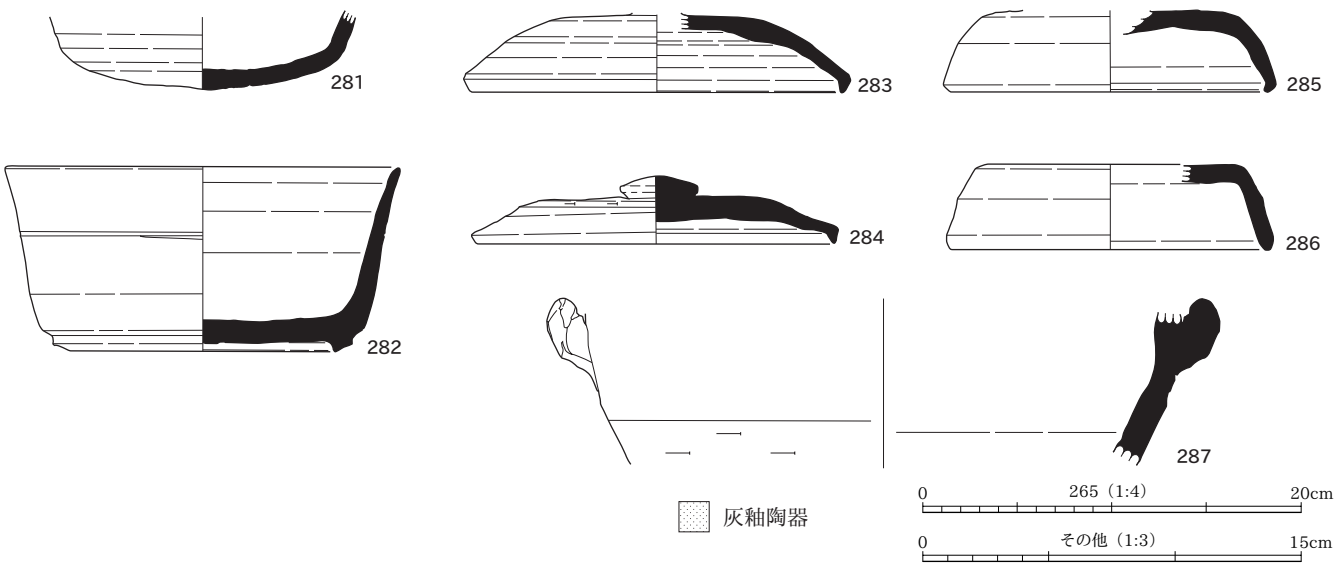
16列以西（261～267）



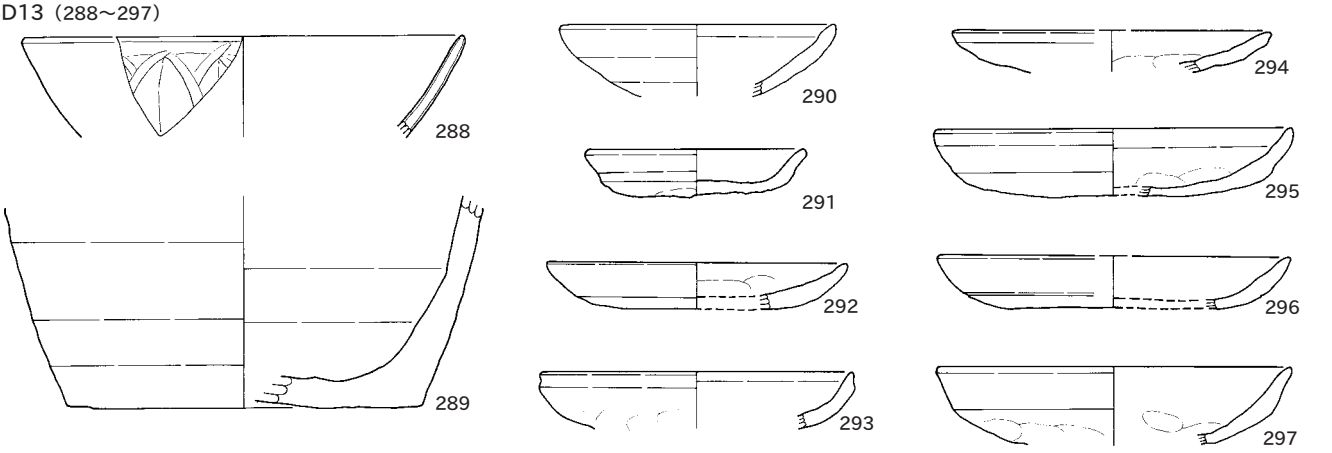
中世以降の遺構出土土器（268～280）



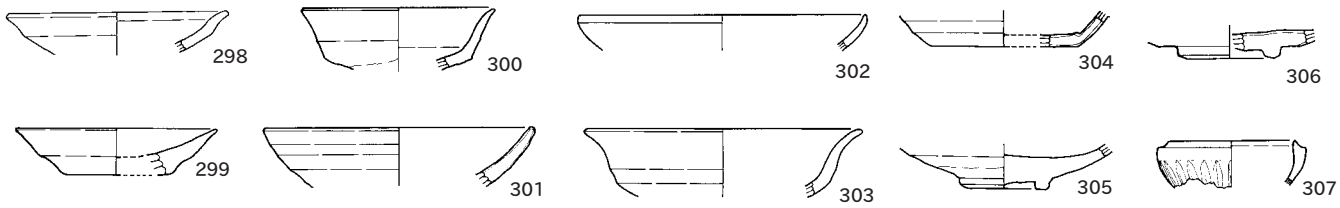
河川跡試掘トレンチ(281～287)

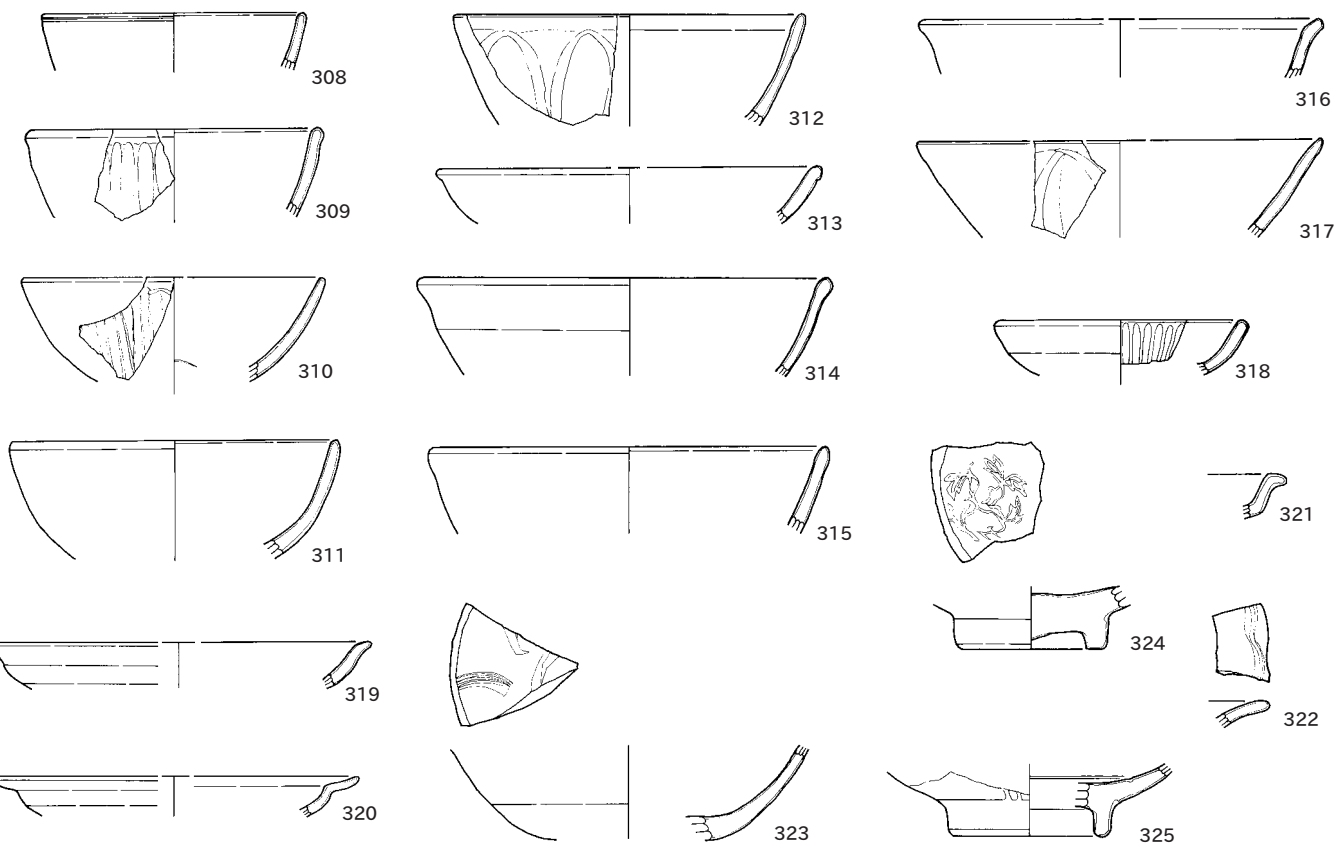


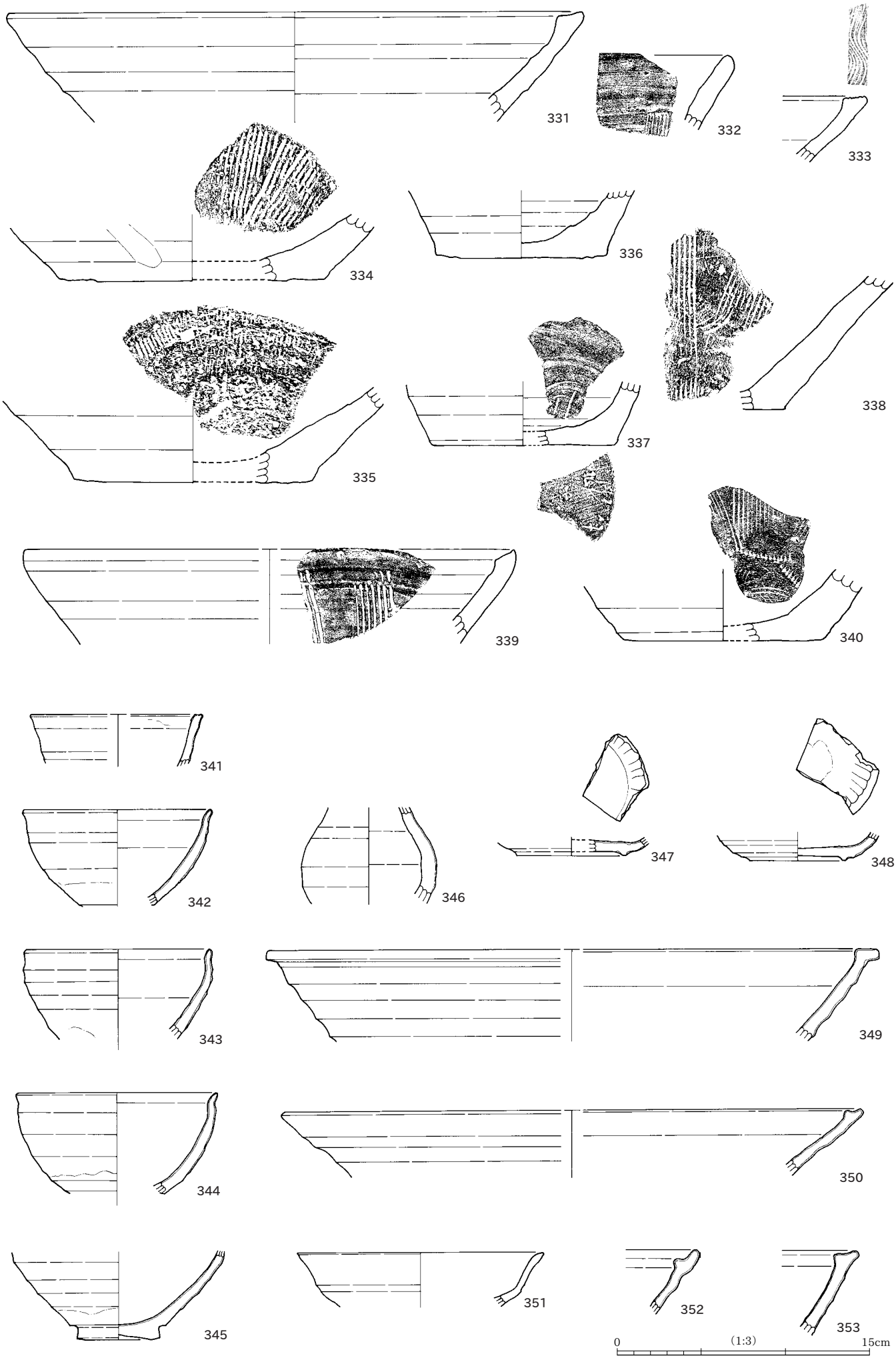
SD13（288～297）

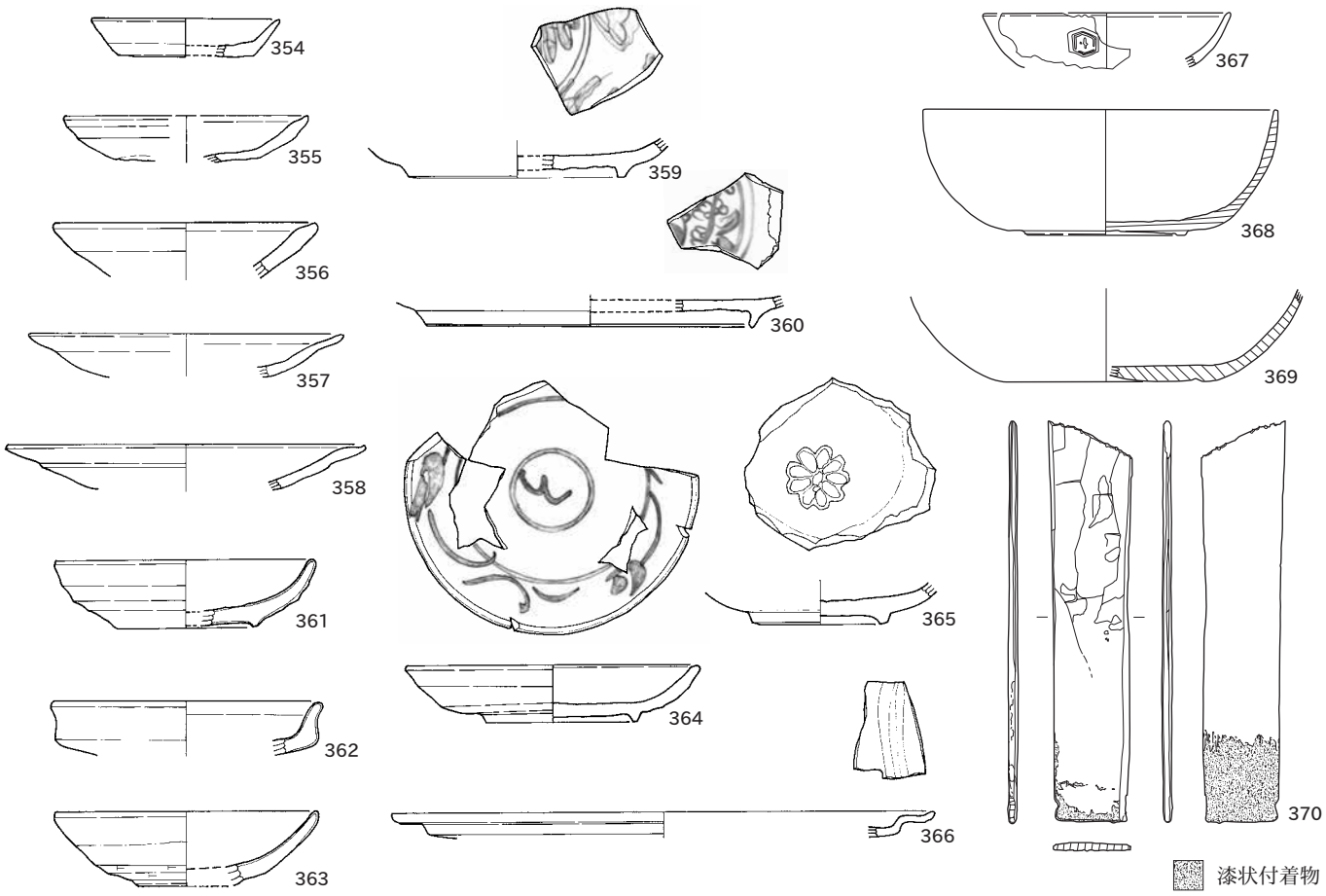


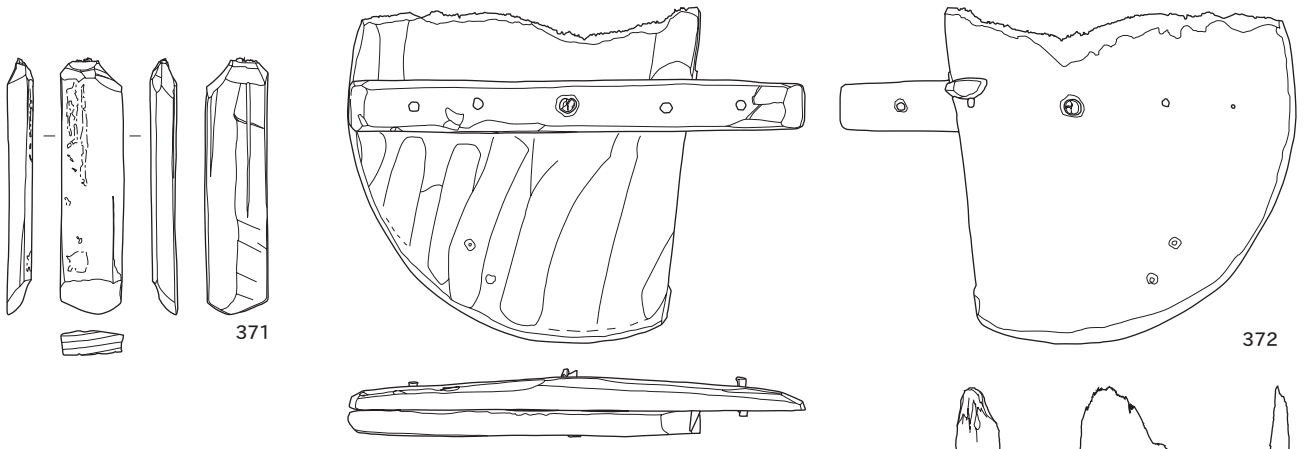
SD14（298・299）

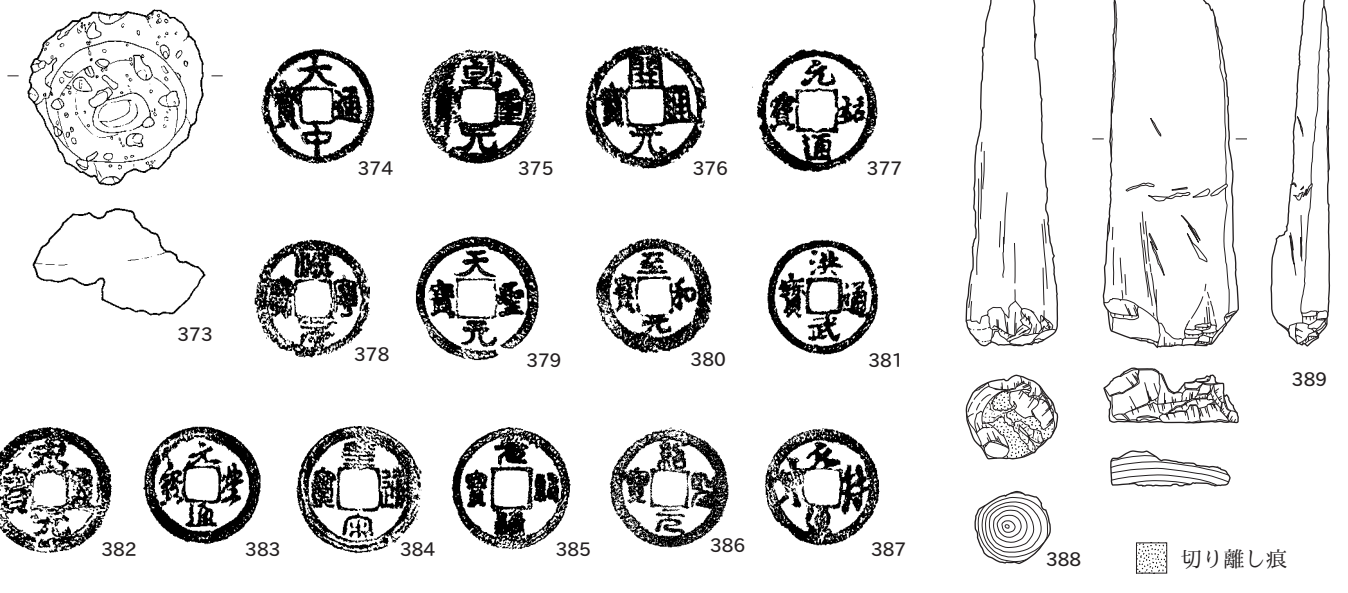





331
332
333
334
336
338
335
337
339
340
341
342
346
347
348
343
349
344
350
345
351
352
353
0
(1:3)
15cm

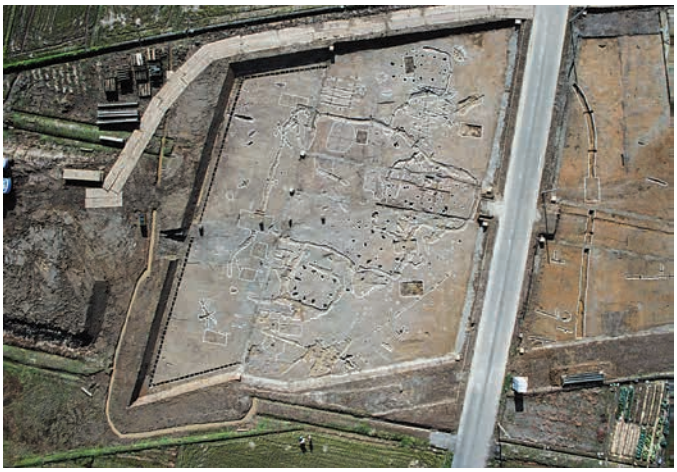






0　374～387（2:3）　7.5cm　　0　その他（1:3）　15cm

調査区全景（背景は高田・南葉山） 北東から



C区下層遺構全景 上空から

C区25B杭基本層序 西から

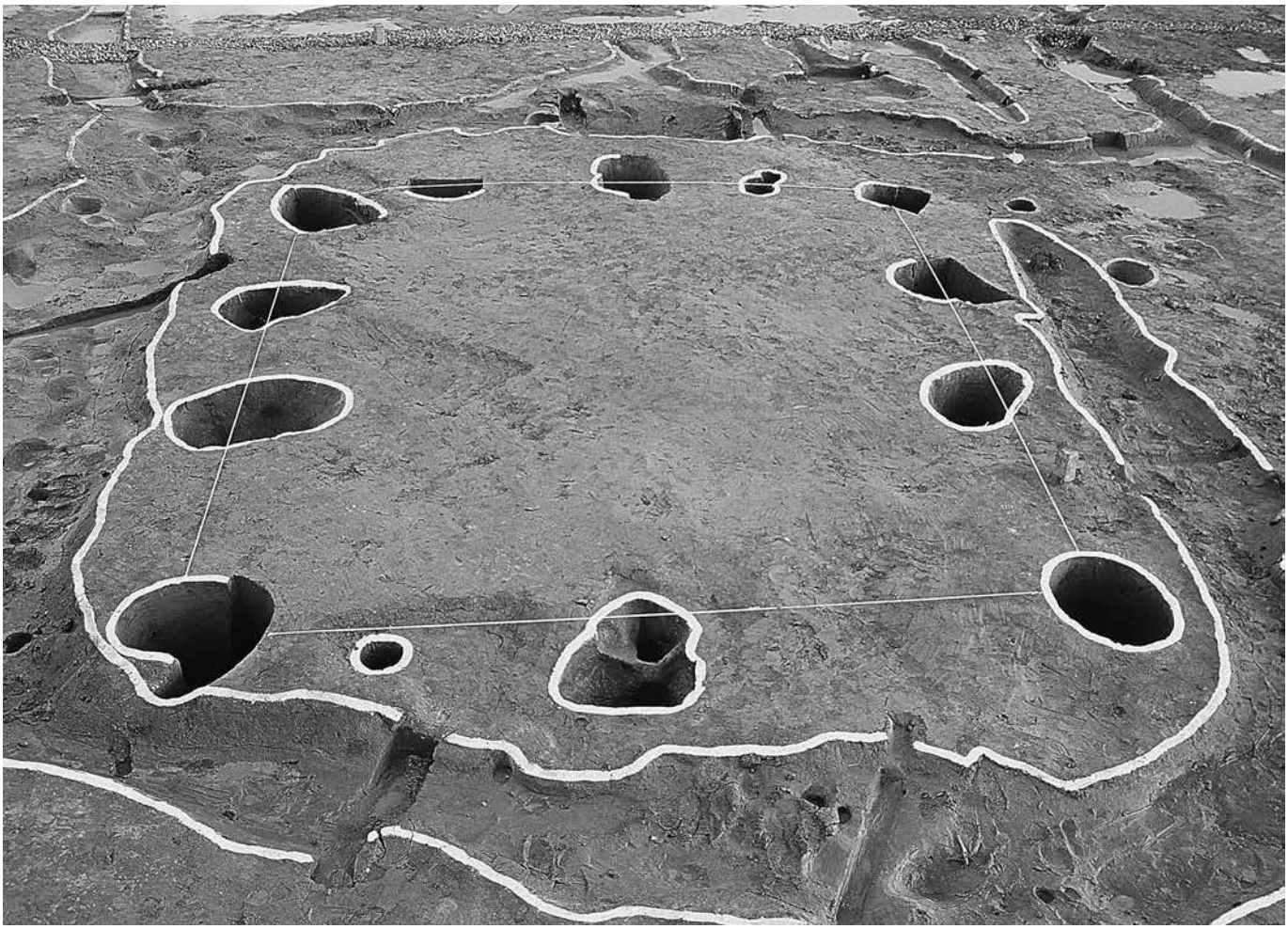
B区畑跡17ライン土層断面SD206～208 西から

B区畑跡土層断面SD261・SD469・16CP10 南から

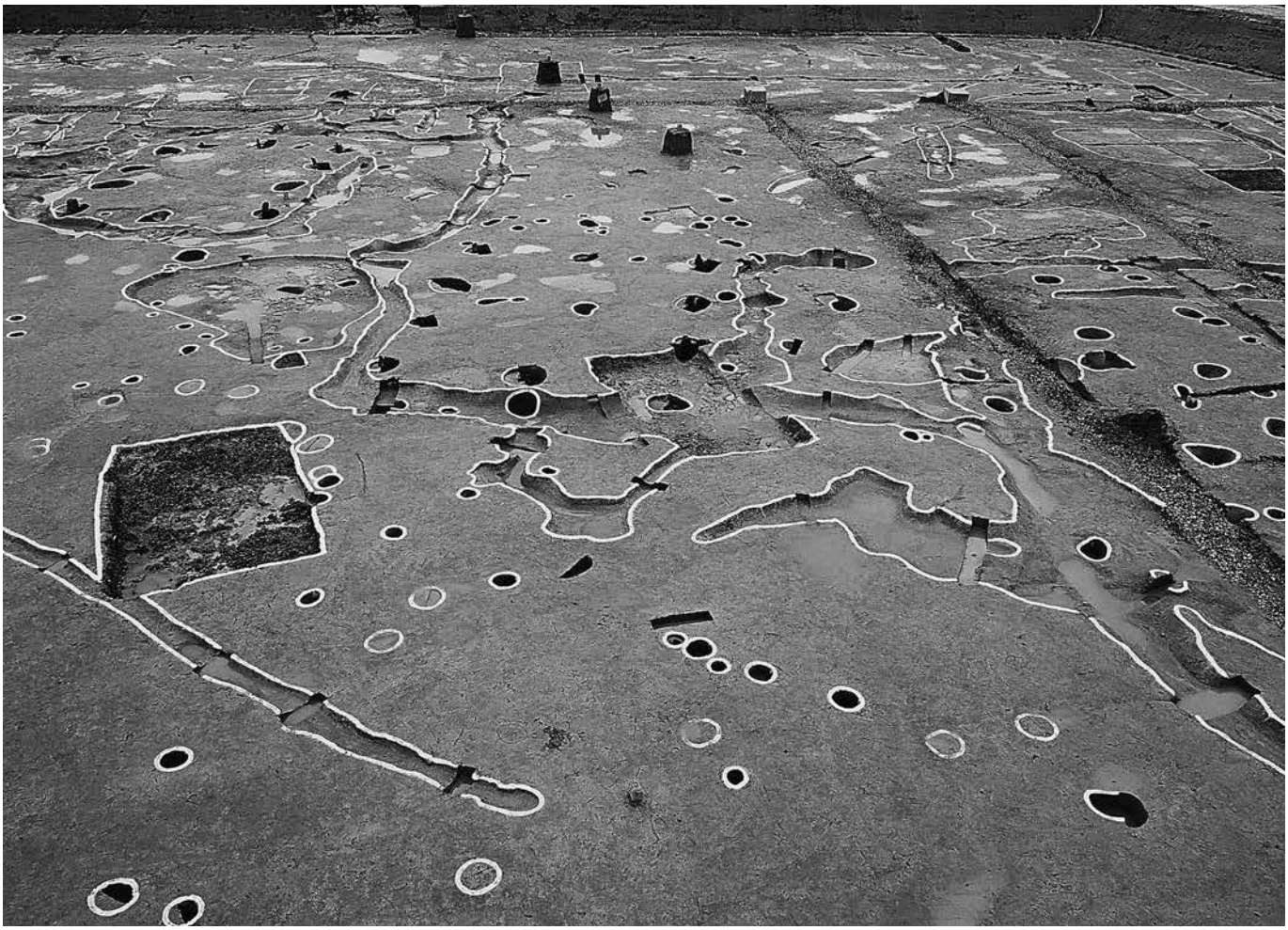
調査区全景（背景は春日山） 東から

調査区全景（背景の林は飯田川） 西から

C区下層掘立柱建物跡SB3・SB4全景 上空から



SB4　完掘　西から



C区下層SB3・SB4全景　西から

C区下層SB5・SB6全景　西から

B区全景　上空から

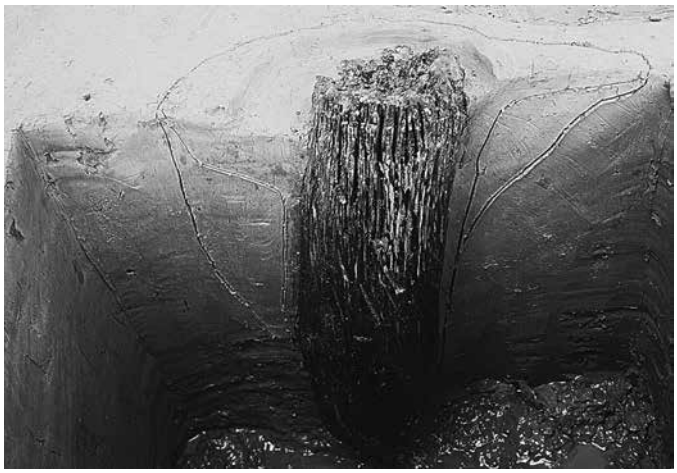
B区畑跡３全景　上空から

図 版 61

SB3　完掘　東から

SB3（手前）・SK631（左中）・SB4（奥）完掘　西から

SB3、24CP1　土層断面　南西から



SB3、25CP12　土層断面　南から

SB3、25CP25　土層断面　南から

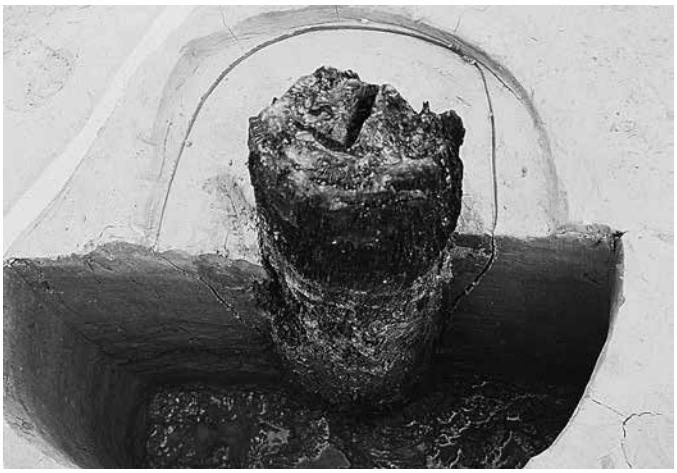
SB3、24CP40　土層断面　南から

SB3、24CP41　土層断面　西から

SB3、25CP26　土層断面　南西から

SB4・SC91・SC92　検出状況　東から

SC91　遺物出土状況　西から



SB4、26BP7　土層断面　南から

SB4、26CP4・P8　土層断面　南から

SB4、25BP6　土層断面　南から

SB4、26CP6　土層断面　南から

SB4、26BP4　完掘　西から

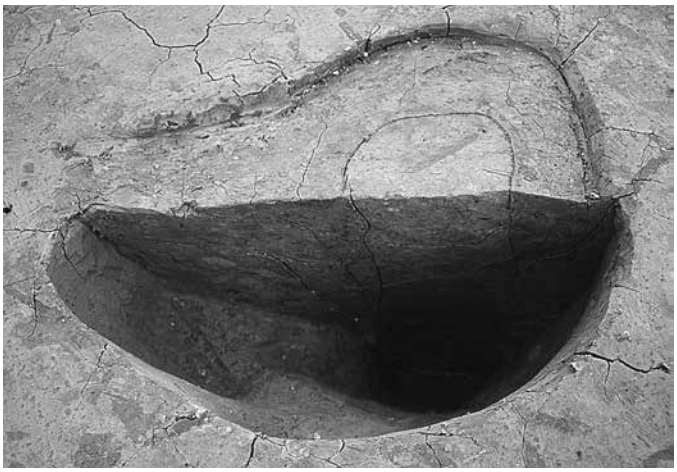
SB4、26BP6　完掘　北から

SB5　完掘　南から

SB6　完掘　南から

SB5、P3　土層断面　西から

SB5、P4　土層断面　西から



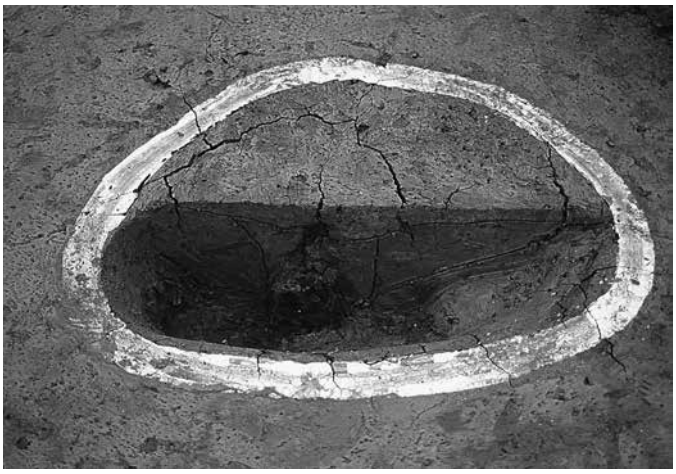
SB5、P6　土層断面　北から

SB6、25FP1　土層断面　東から

SD117（SB5）　遺物出土状況　南から

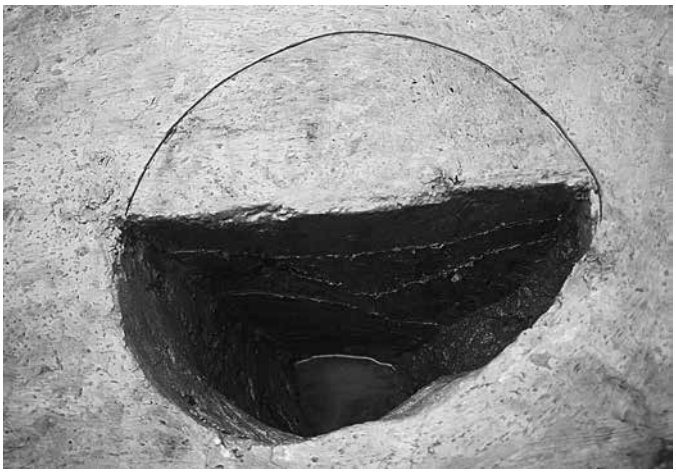
SB5、P1　木簡出土状況　北から

24 ・ 25D グリッド柱穴群　完掘　東から



24DP11　土層断面　北東から

24DP12 ・ P13　土層断面　南から



24DP4　土層断面　北から

24DP6　土層断面　南から

SD170　土層断面　南から

SC49　遺物出土状況　南から

SC49　遺物出土状況　南から

SC119　遺物出土状況　南から

SC93　遺物出土状況　南から

SD113　完掘　東から

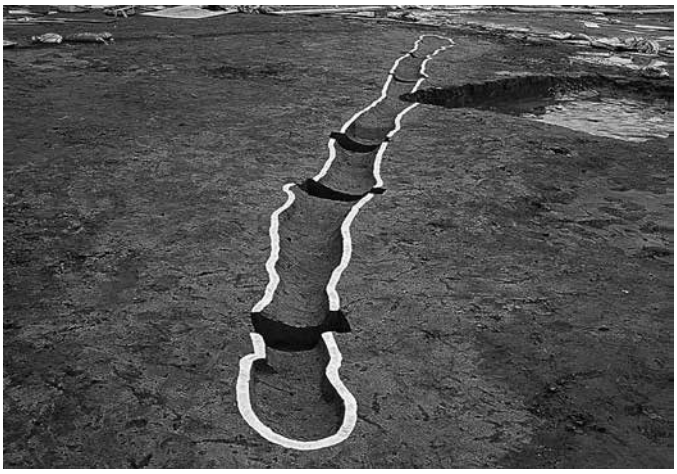
SD113　土層断面　西から

SD113　遺物出土状況　東から

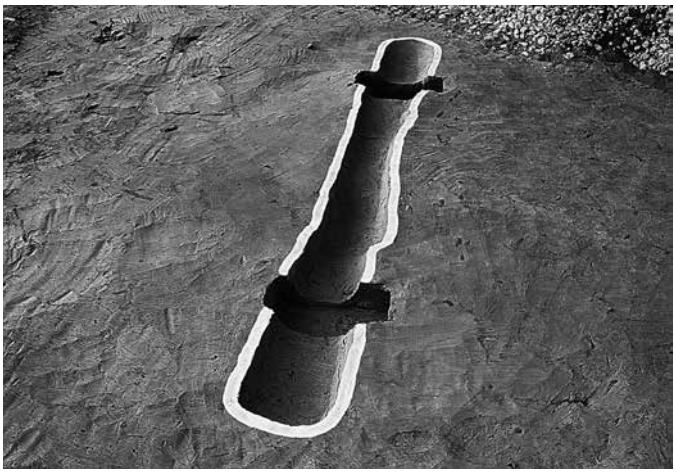
SD113　土器出土状況　西から

SD113　槽出土状況　南から

SD113 上面　鎌柄出土状況　南から

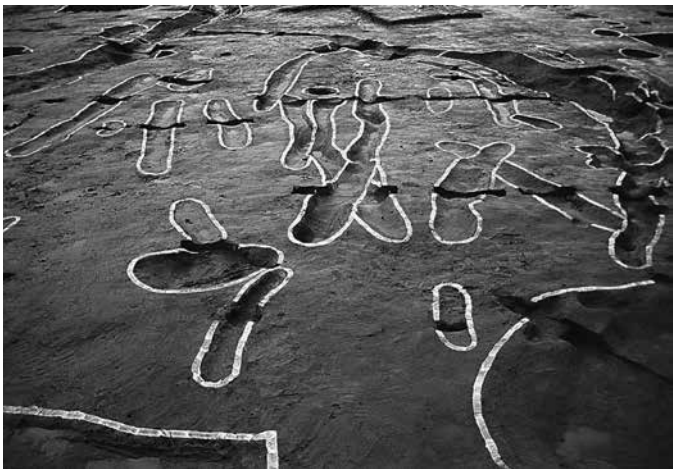


SD615　完掘　北西から



SD614　完掘　南東から

畑跡１　完掘　東から

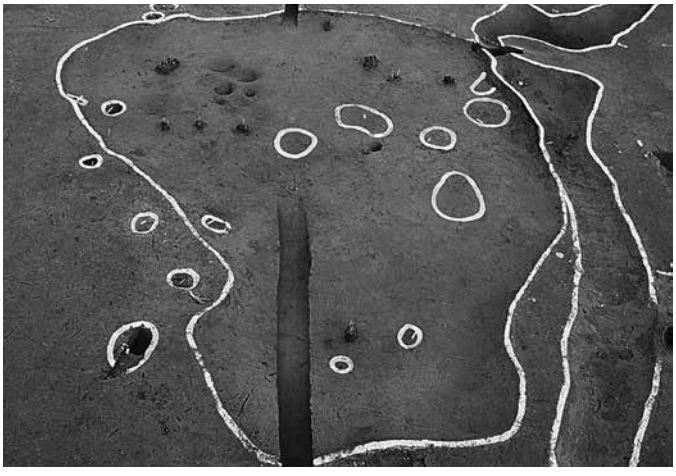


畑跡２　完掘　西から

SC95　遺物出土状況　南から

SC94　遺物出土状況　南から

SD170　遺物出土状況　北から

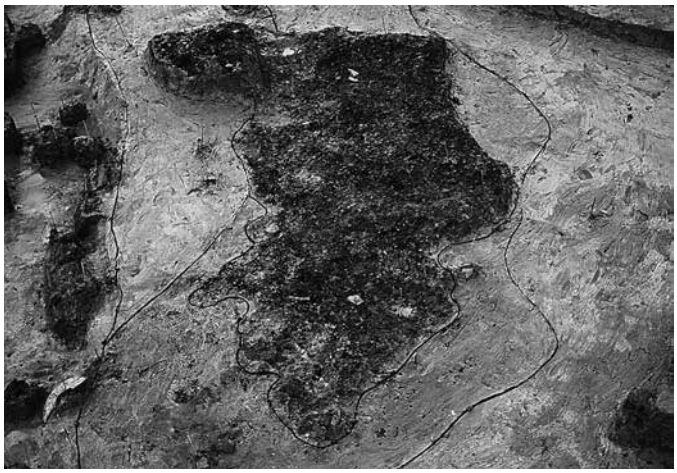


SK631　完掘　西から

SK118　完掘　北東から

SC90　検出状況　西から

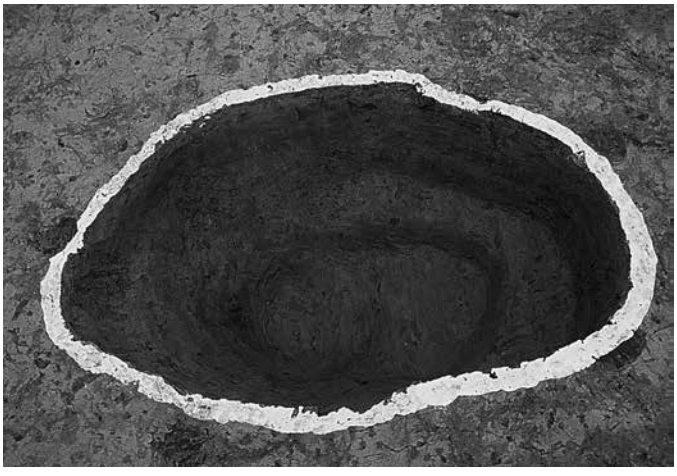
SC90　土層断面　北から



SC120　検出状況　南から

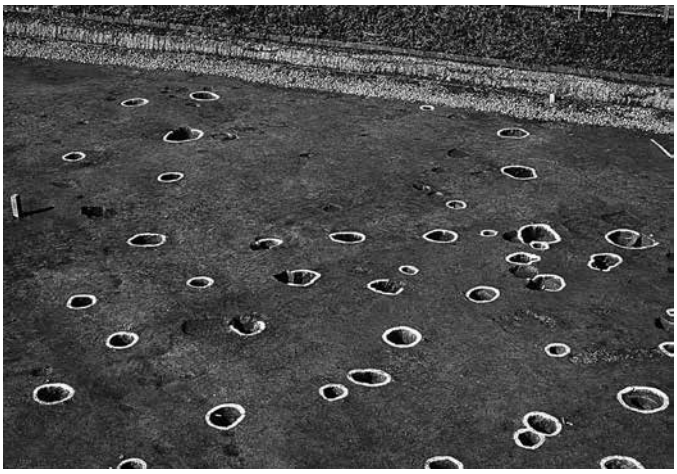
調査風景　南西から

C区上層全景　南から

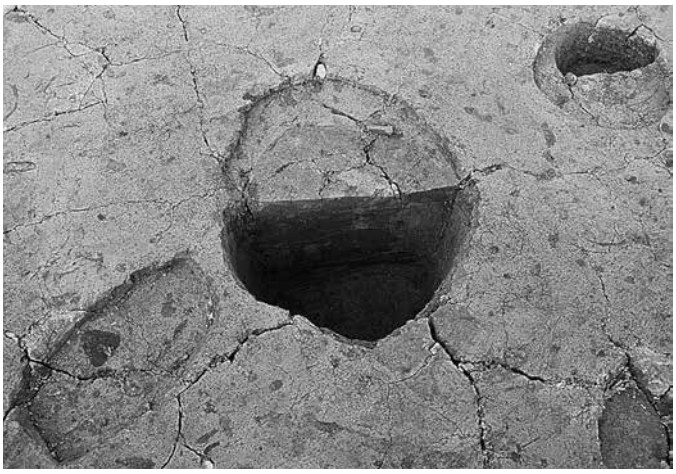


C区上層25CP1　完掘　北から

C区上層SD1　完掘　南西から

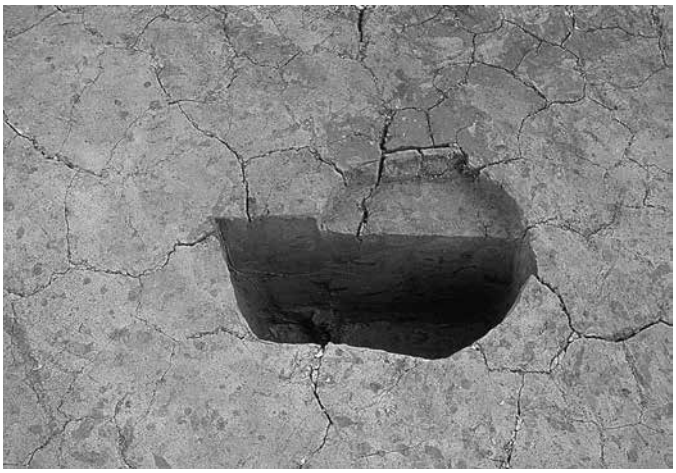


SB1　完掘　東から

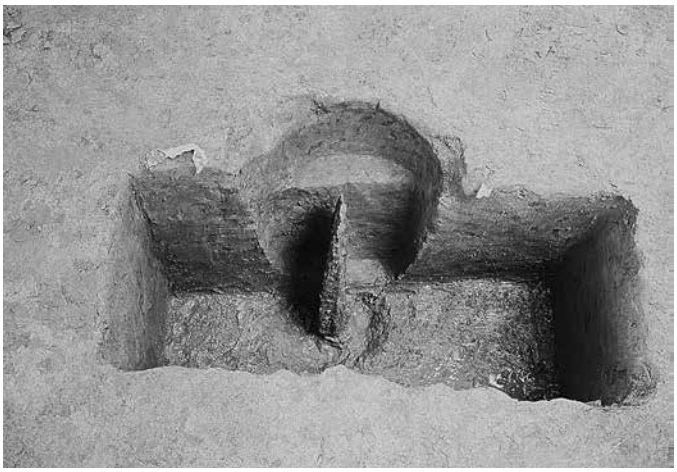


SB1、12CP3　土層断面　南西から

SB1、12CP4　土層断面　南西から



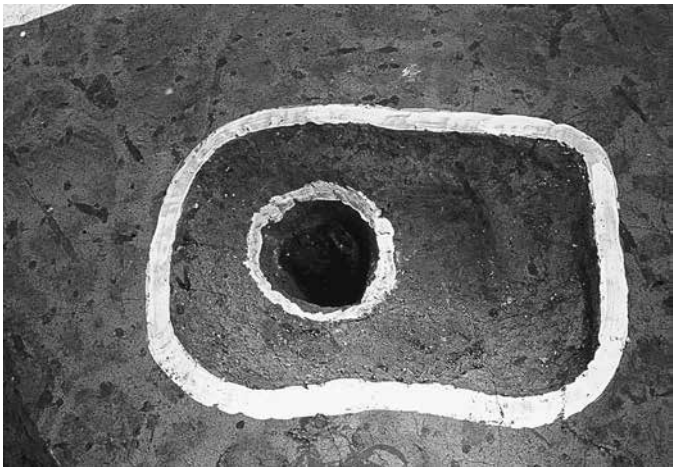
SB1、13CP4　土層断面　北東から



SB1、13CP9　土層断面　西から

SB1、13CP10　土層断面

SB7　完掘　西から

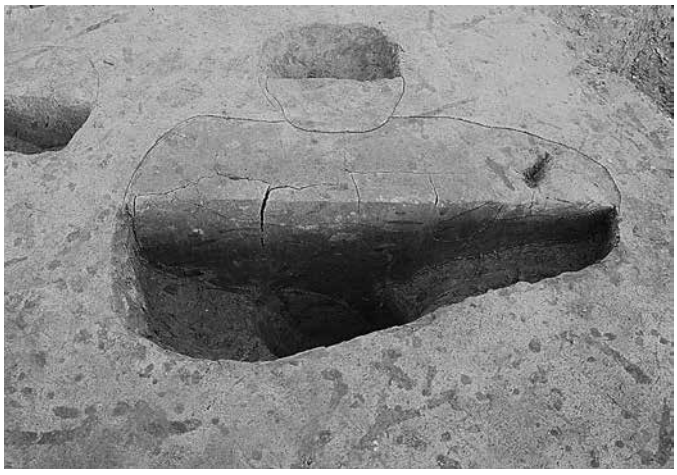


SB7、9BP8　完掘　北から

SB7、10BP1　検出状況　西から

SB7、10BP1　土層断面　南から

SB7、9AP1　検出状況　北から

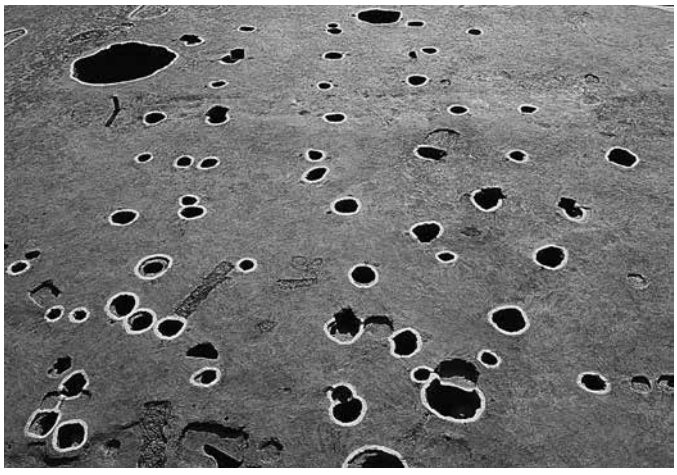


SB7、9BP5　土層断面　南から

SB7、9BP15　完掘　南から

SB7、9BP9　土層断面　南から

SB1・SB2・SB8・SB9　完掘　南から



SB2　完掘　北から

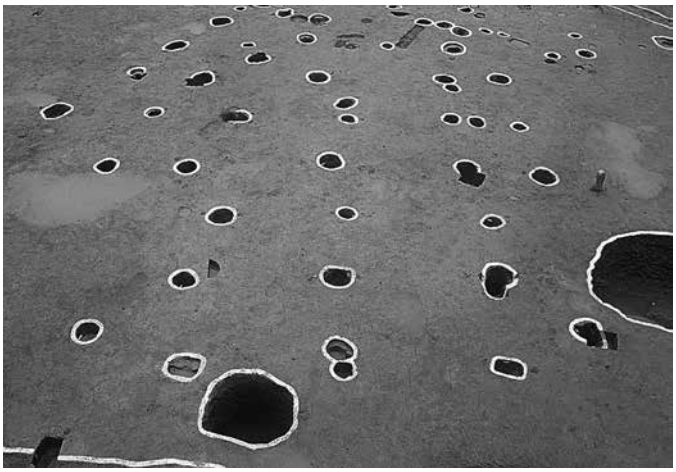
SB2、13CP22　土層断面　北から

SB2、13CP41　土層断面　南西から

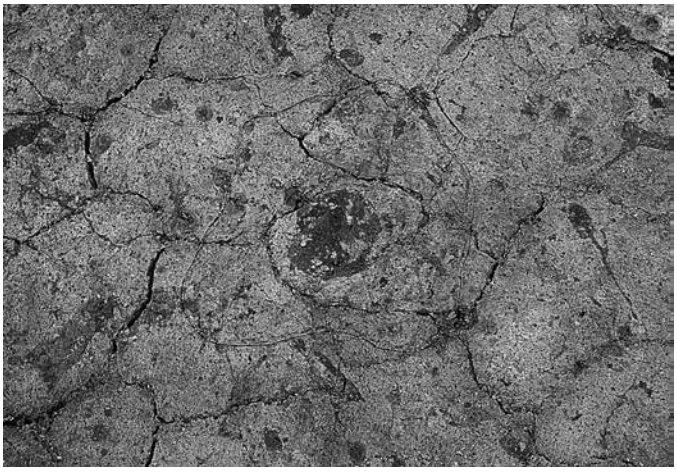
SB2、13CP41　完掘　南西から

SB2、13CP43　土層断面　南から

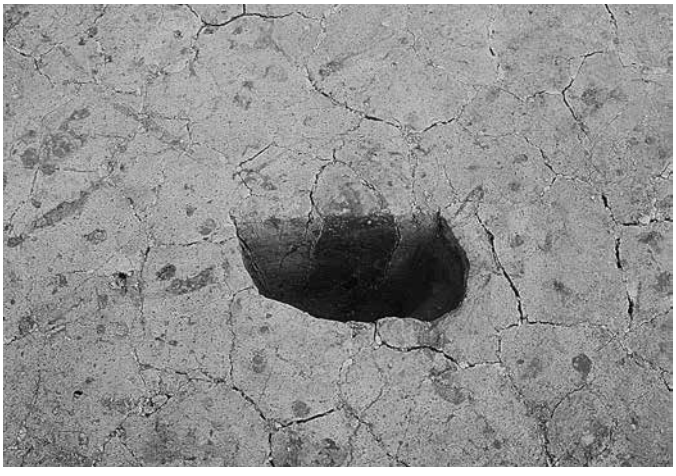
SB2、13DP4　土層断面　南東から



SB8　完掘　南から



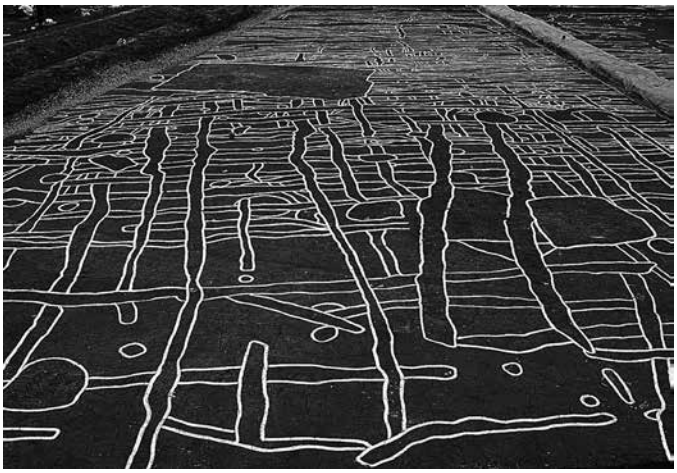
SB8、13CP40　検出状況　東から



SB8、13CP40　土層断面　南から

B区畑跡3　完掘　南から

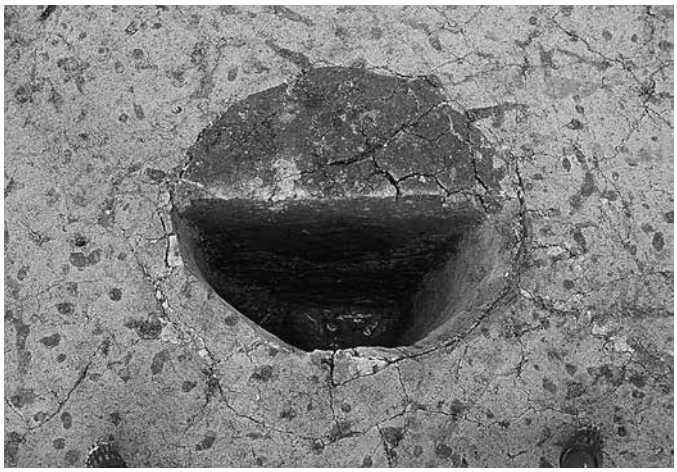
B区畑跡3　完掘　東から



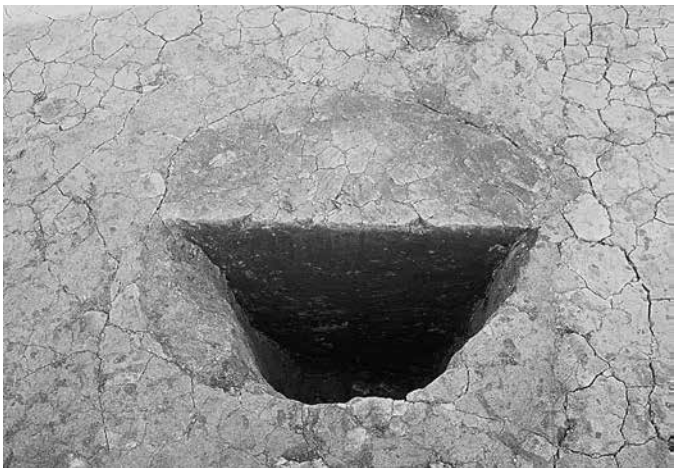
B区畑跡3　検出状況　西から

B区畑跡3、SD279・281・287・290、Dライン　土層断面　南から

SK22　土層断面　南から

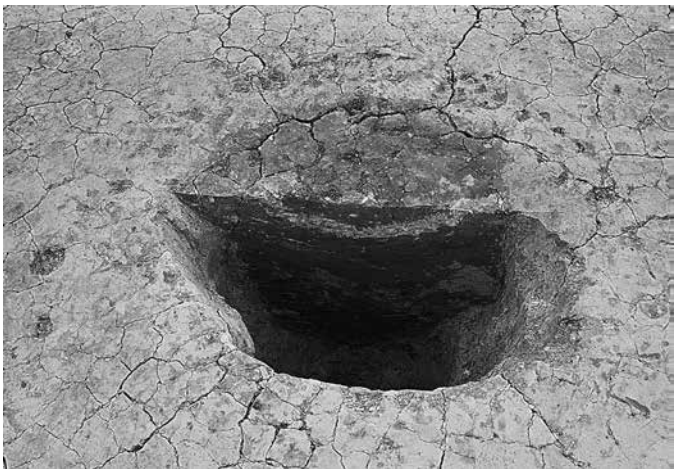


SK37　土層断面　南から

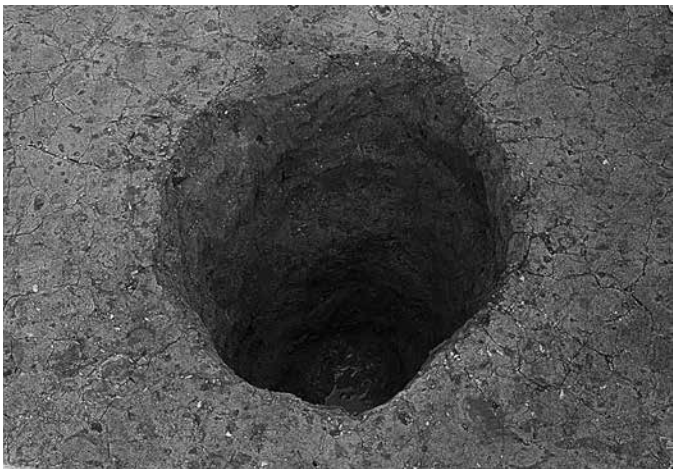


SK29　土層断面　西から

SK29　完掘　南から



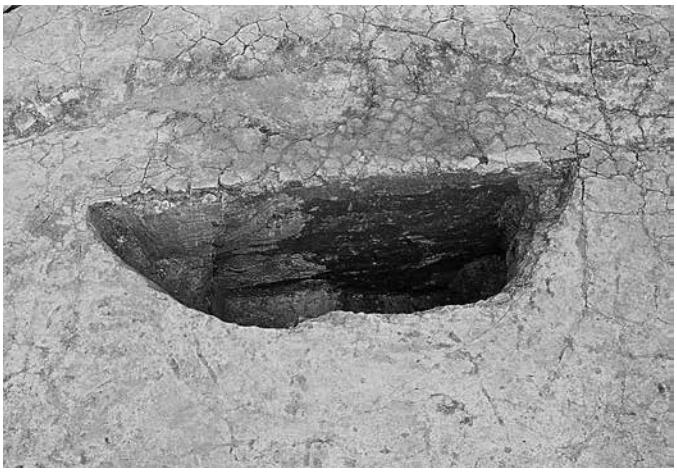
SK30　土層断面　東から



SK30　完掘　南から

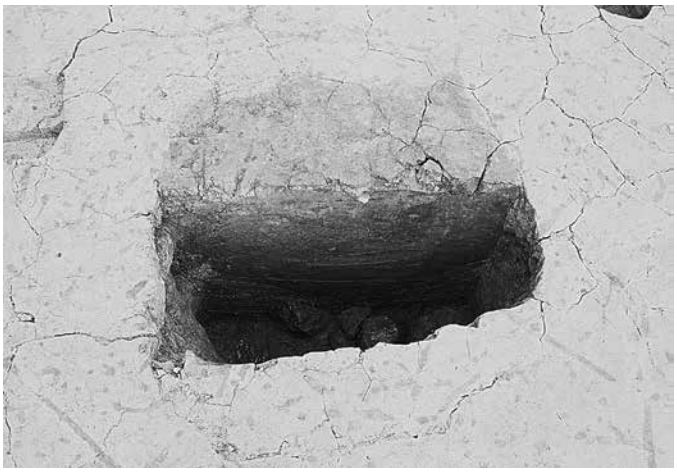
SK47　土層断面　北から

SK47　完掘　北から

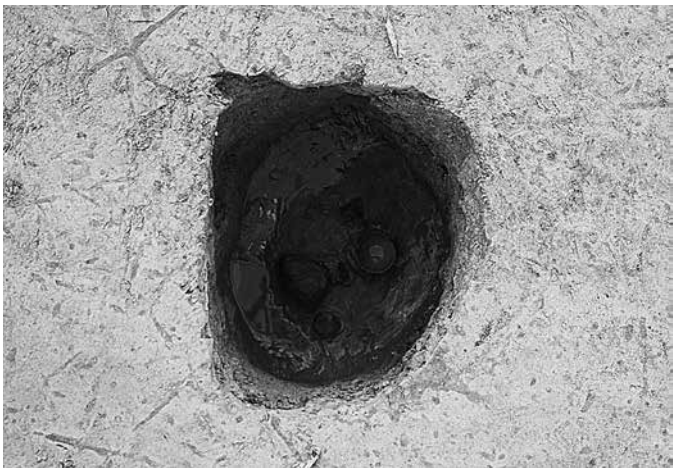


SK54　土層断面　南から

SK54　完掘　南から



SK55　土層断面　南から



SK55　完掘　東から

SK56　土層断面　南から

SK56　完掘　南から

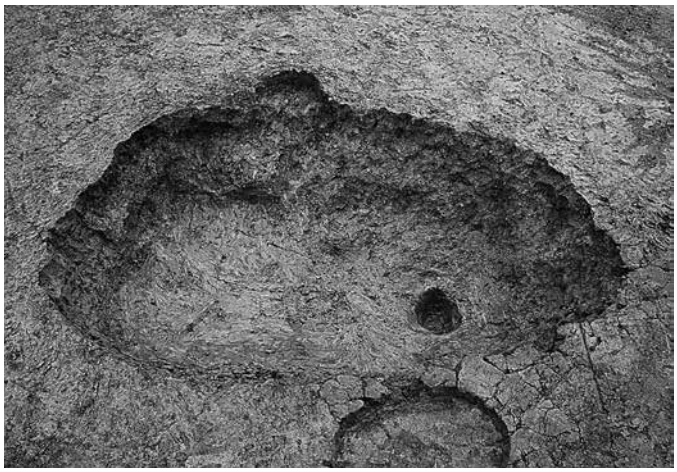
SK553　土層断面北半　西から

SK553　土層断面南半　西から

SK554　土層断面　西から

SK553・SK554　完掘　北から

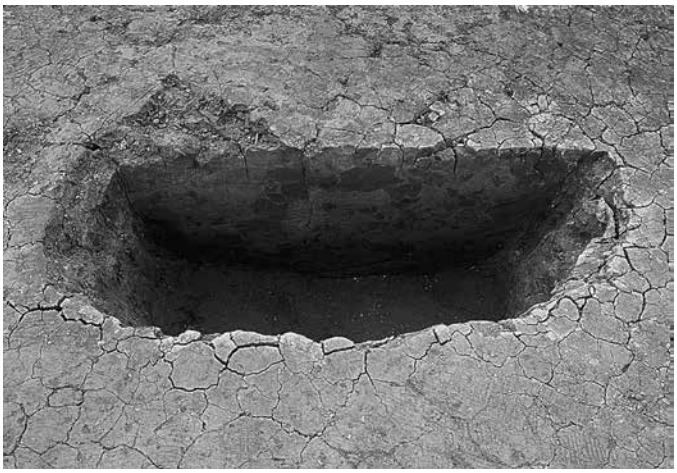
SK44　土層断面　北から



SK44　完掘　北から

SK45　土層断面　南から

SK45　完掘　南から



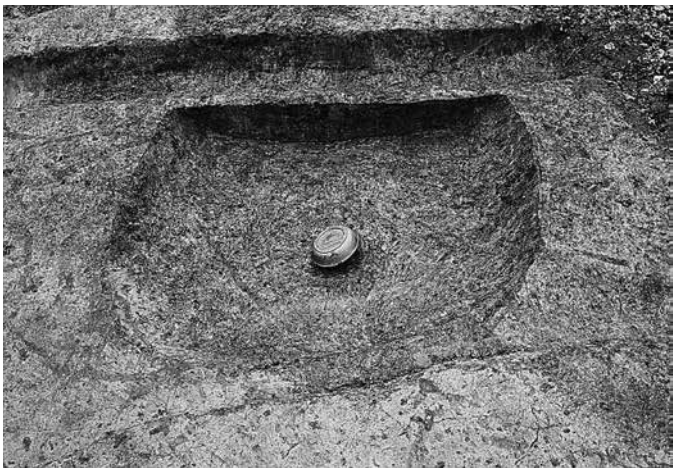
SK71　土層断面　東から

SK71　完掘　西から

SK47・1～3層　遺物出土状況　南から

SK553・SK554　遺物出土状況　北西から

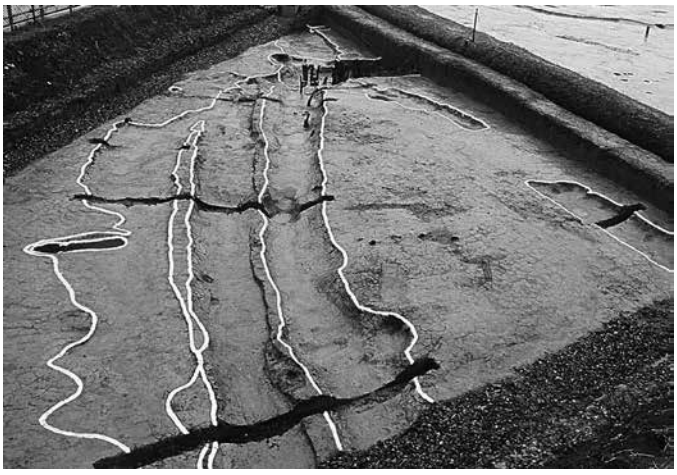
SK554　遺物出土状況　北西から



SK483　遺物出土状況　東から

SD6・SD13　完掘　南から

SD13北ベルト　土層断面　北から



B区8・9列　完掘　南から

SD68　土層断面　北から

SD18　完掘　南から

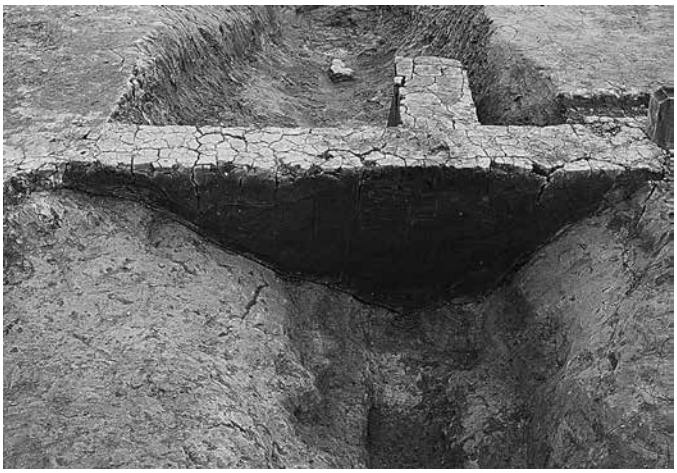
河川跡1T岸　検出　南東から

河川跡2T岸　検出　南東から

河川跡4T　土層断面

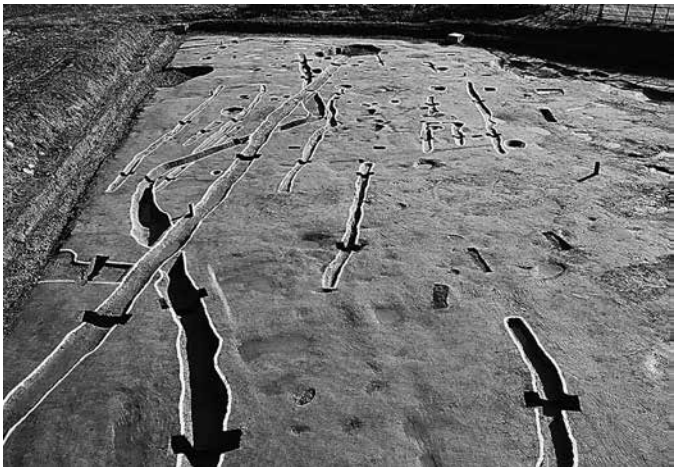
SD58　完掘　東から

SD58　完掘　西から



SD58・SD61　土層断面　西から

SD58　椀出土状況　東から



A区　完掘　西から

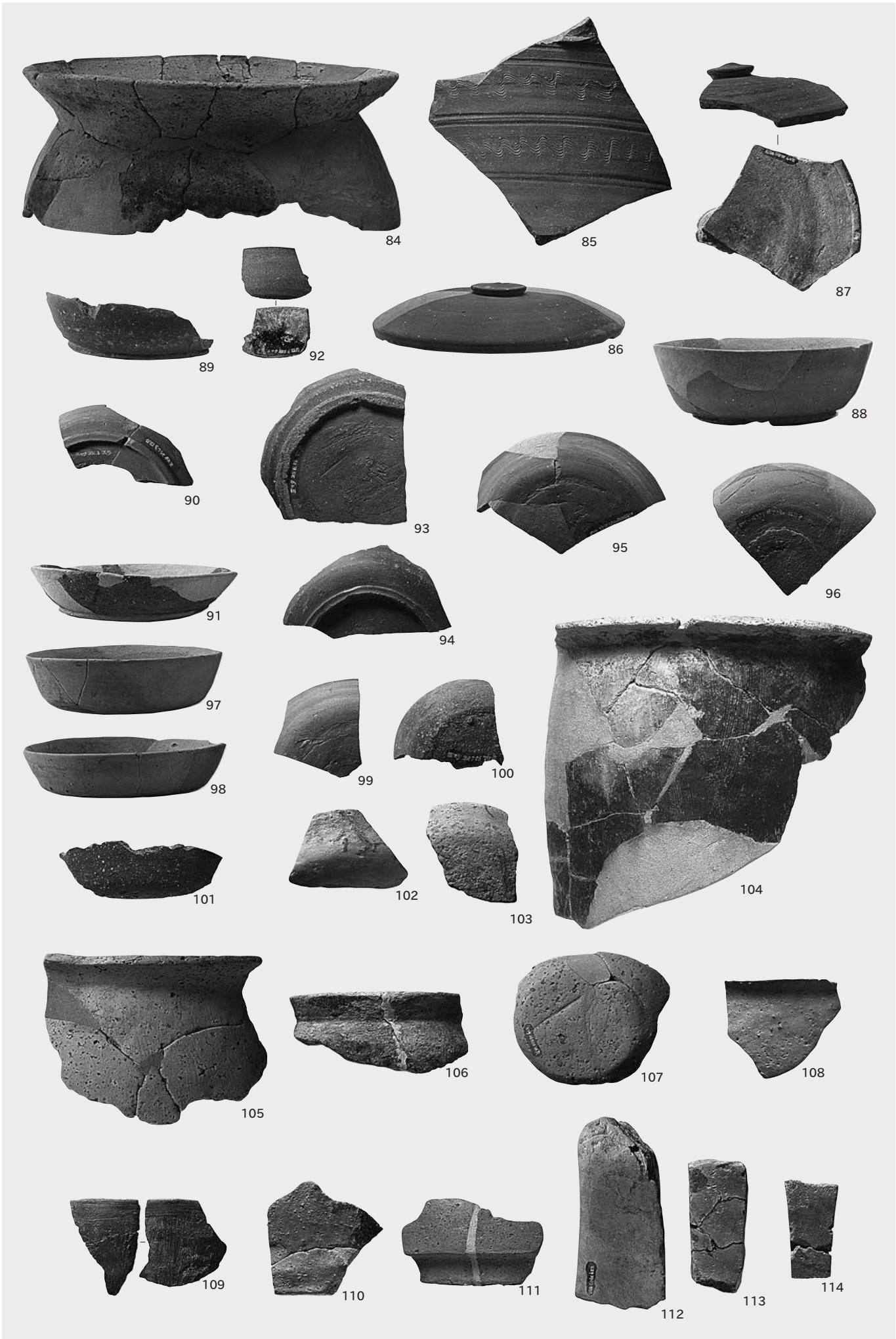
A区　完掘　東から

B区　調査風景

B区　調査風景

1
3
7
13
8
4
9
2
5
10
15
6
11
12
17
24
27
18
20
29
14
25
19
21
26
16
22
28
30
31
23
41
34
43
39
40
44
35
32
36
46
33
37
38
42
47

45
51
52
53
49
54
55
50
48
57
59
60
56
58
69
61
62
67
79
63
65
68
64
71
66
70
75
72
76
80
82
77
73
78
74
81
83


84
85
87
89
92
86
88
90
93
95
96
91
94
97
99
100
98
104
101
102
103
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114

115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134

135

136

139

140

141

145

146

137

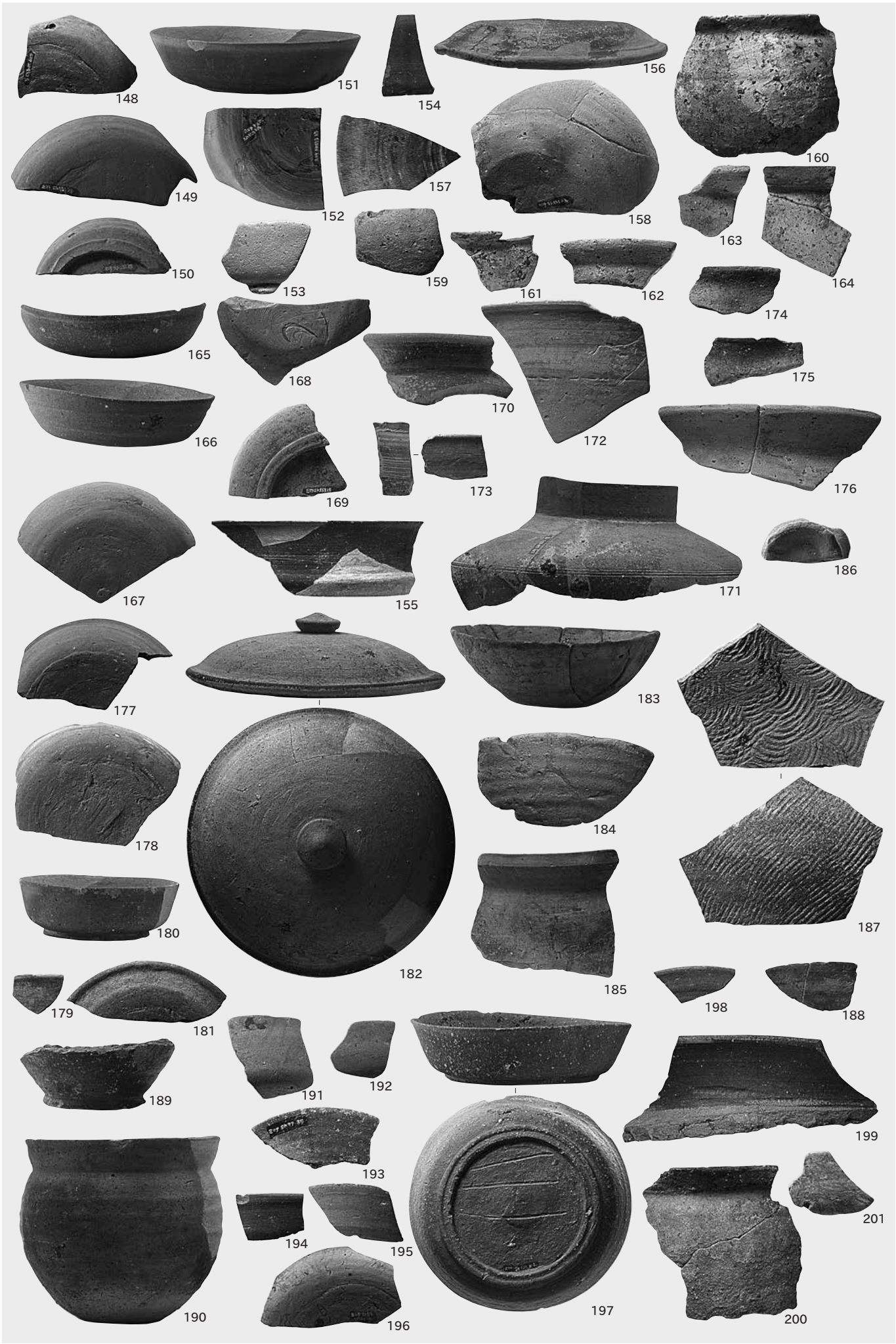
138

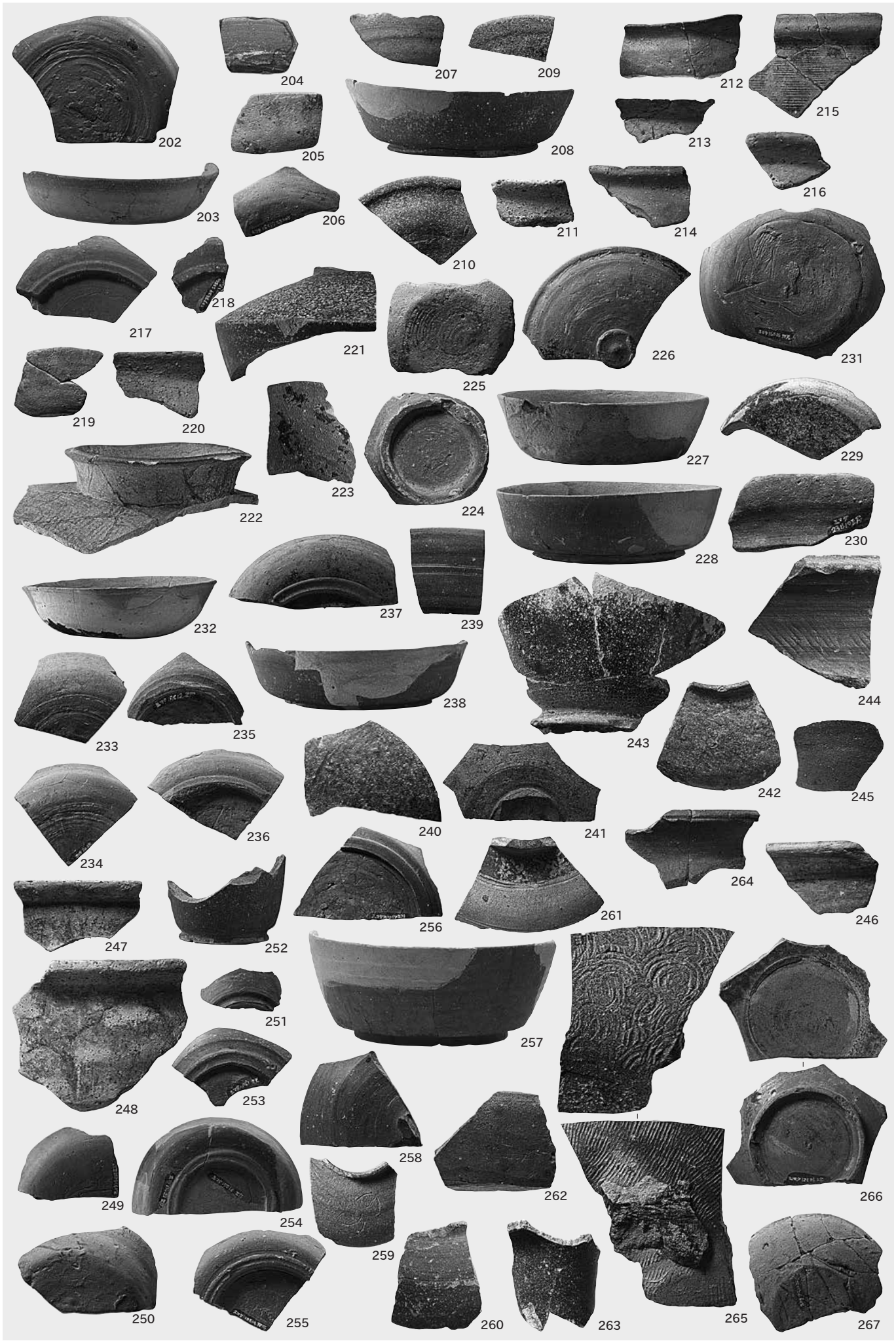
142

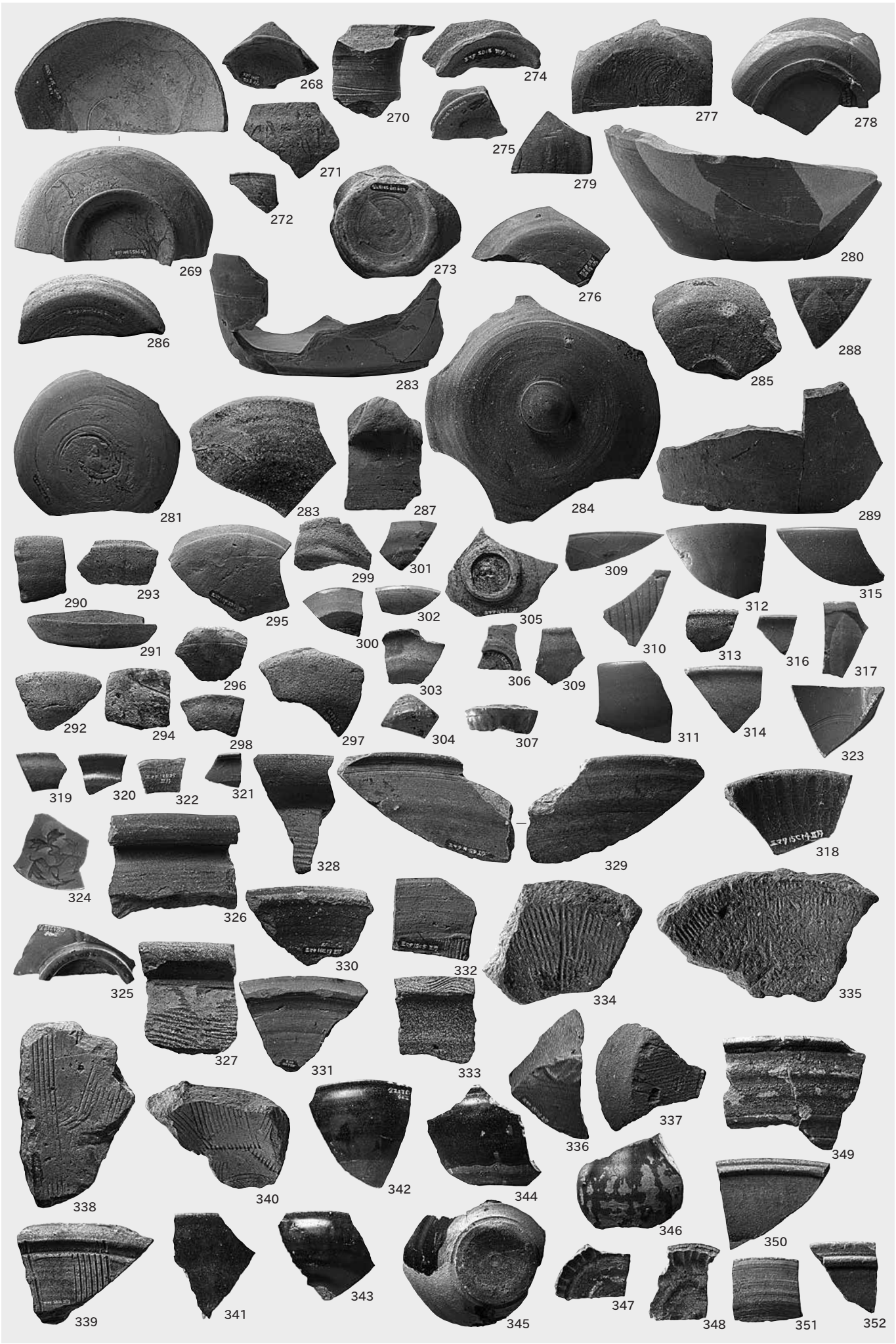
147

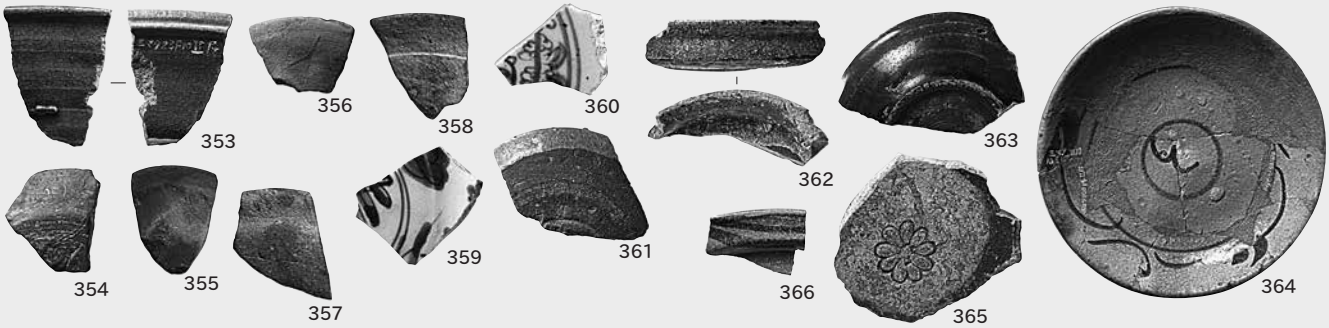
143

144


148
151
154
156
160
149
152
157
158
163
164
150
153
159
161
162
174
165
168
170
172
175
166
169
173
176
167
155
171
186
177
183
178
182
184
187
180
185
179
181
198
188
189
191
192
199
193
201
194
195
190
197
200
196


202
204
207
209
212
215
205
208
213
216
203
206
210
211
214
217
218
221
225
226
231
219
220
223
224
227
229
222
228
230
232
237
239
238
244
233
235
243
242
245
234
236
240
241
264
247
252
256
261
246
251
257
248
253
258
262
266
249
254
259
265
250
255
260
263
267


268
270
274
277
278
271
275
279
272
273
280
269
276
286
283
288
285
281
283
287
284
289
290
293
295
299
301
309
312
315
291
300
302
305
310
313
316
317
296
303
306
309
292
294
298
297
304
307
311
314
323
319
320
322
321
328
329
318
324
326
330
332
334
335
325
327
331
333
336
337
349
338
340
342
344
346
350
339
341
343
345
347
348
351
352


353

356

358

360

362

363

364

354

355

357

359

361

366

365

367

368

369

370

371

372

373

374

375

376

377

378

379

380

381

382

383

384

385

386

387

388

389

報 告 書 抄 録

ふ り が な	みつまたいせき
書　　名	三角田遺跡
副 書 名	一般国道253号線上越三和道路関係発掘調査報告書
巻　　次	Ⅲ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第154集
編 著 者 名	沢田敦・細井佳浩・大島通夫・小菅敏彦・奥村伸男・矢部英夫
編 集 機 関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
所 在 地	〒956-0845　新潟県新潟市金津93番地1　　TEL 0250（25）3981
発行年月日	西暦2006（平成18）年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
三角田遺跡（みつまたいせき）	新潟県上越市下野田字三角田（にいがたけんじょうえつしし　のたあざみつまた）161番地1ほか	152221	288	37度 07分 41秒	138度 17分 24秒	試掘確認調査 20030506～ 0617、0715、 1218、1219、 本発掘調査 20040414～ 1217	14,800	道路（上越三和道路）建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三角田遺跡	集落	下層（古代）	掘立柱建物跡4、ピット群1、土坑8、畑跡2、土器・炭化物集中遺構8、溝、ピット	須恵器、土師器、砥石、木器（鎌の柄・槽・ヤス・棒状木製品・建築部材など）、木簡	洪水層に覆われた8世紀前半の集落
		上層（古代～近世）	掘立柱建物跡5、土坑26、井戸跡10、畑跡1、溝、ピット	須恵器、土師器、中・近世陶磁器（白磁・青磁・青白磁・染付・珠洲焼・土師質土器・瀬戸美濃焼・唐津・伊万里）、木器、銭貨	8世紀中葉～近世まで断続的に居住・利用された遺跡

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第154集

一般国道253号線上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅲ

三　角　田　遺　跡

平成18年3月30日印刷
平成18年3月31日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市新光町4番地1
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新潟市金津93番地1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　北越印刷株式会社
〒940-0034 新潟県長岡市福住1丁目6番27号
電話　0258（33）0306